概要　２号土坑と共に、形状が不整で土坑とは言い難い点もある。何らかの遺構の痕跡とも考えられる。As－Ｃ軽石を含む黒褐色土を覆土とし、Ｓ字状口縁台付甕の胴部片を出土させている。

4号土坑

位置　畦畔状の広い高まり部中央端にあり、Ｘ＝35.752、Ｙ＝－67.784に位置する。

規模　円形を呈し、径1.15m、深さ35cmほどを測る。

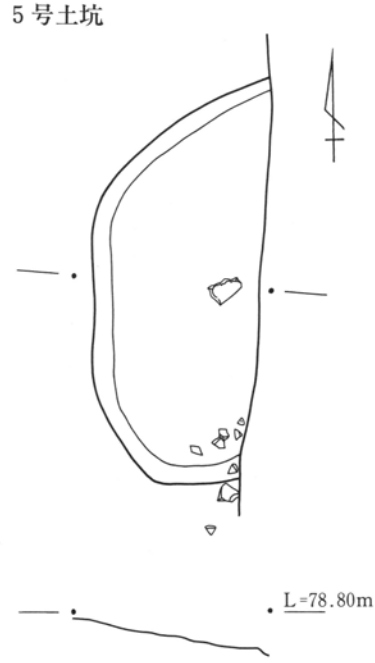
概要　As－Ｃ軽石を含む黒褐色土および灰暗褐色土を覆土とし、土坑中央からＳ字状口縁台付甕の脚部を含む胴下半を欠く完形個体が出土している。

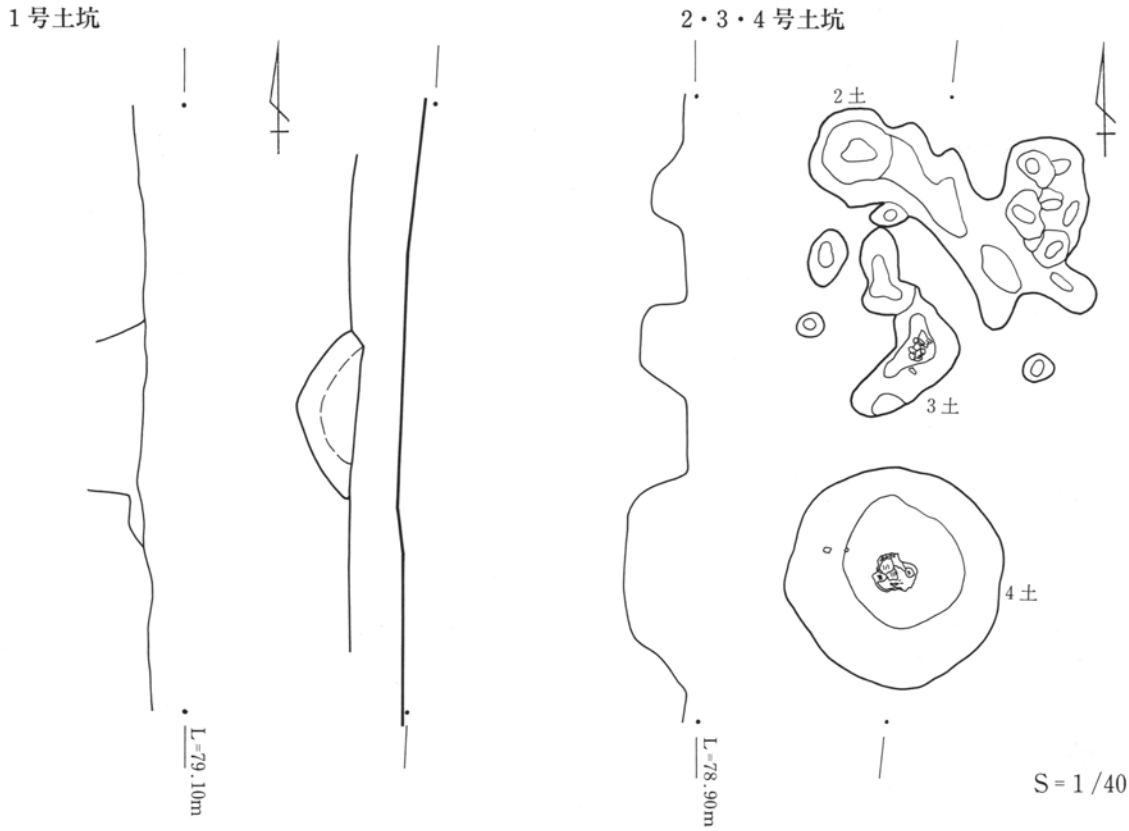
5号土坑

位置　畦畔状の広い高まり部よりやや北側の東壁際にあり、Ｘ＝35.757、Ｙ＝－67.782に位置する。

規模　楕円形に近く、底面は擂り鉢状となる。南北方向での長さは２ｍを測り、深さ15cmを測る。

概要　As－Ｃ軽石を含む褐色土を覆土とし、Ｓ字状口縁台付甕等の胴部片を出土させている。なお、本土坑の全体を明らかにできなかったが、土坑ではなく、水田耕土の窪みとも考えられ、遺物は混入と思われる。





第183図　Ｃ区取り付け道　土坑

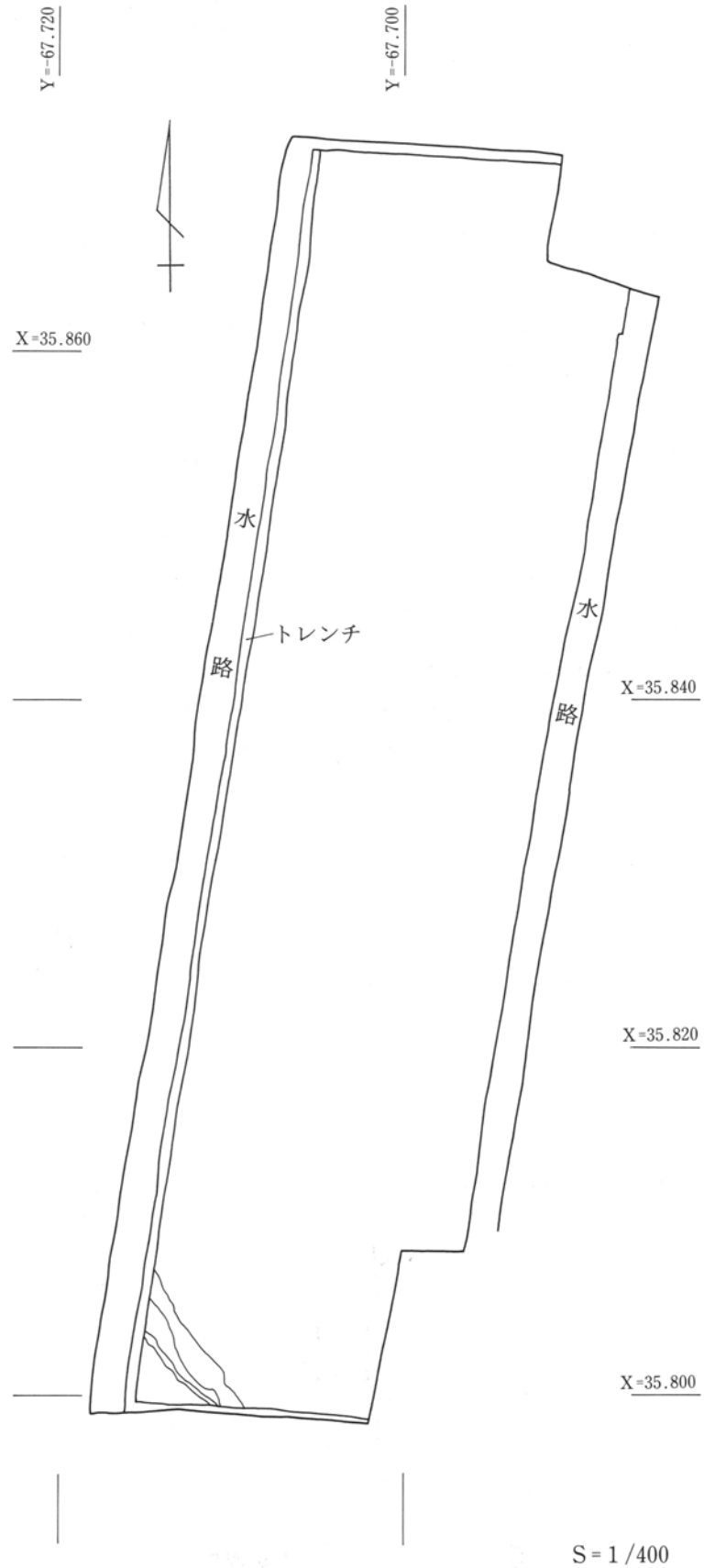
D区

D区で検出された遺構は、溝2条のみである。調査区内の地形は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第7面と同様で、北側ほど高位となっている。

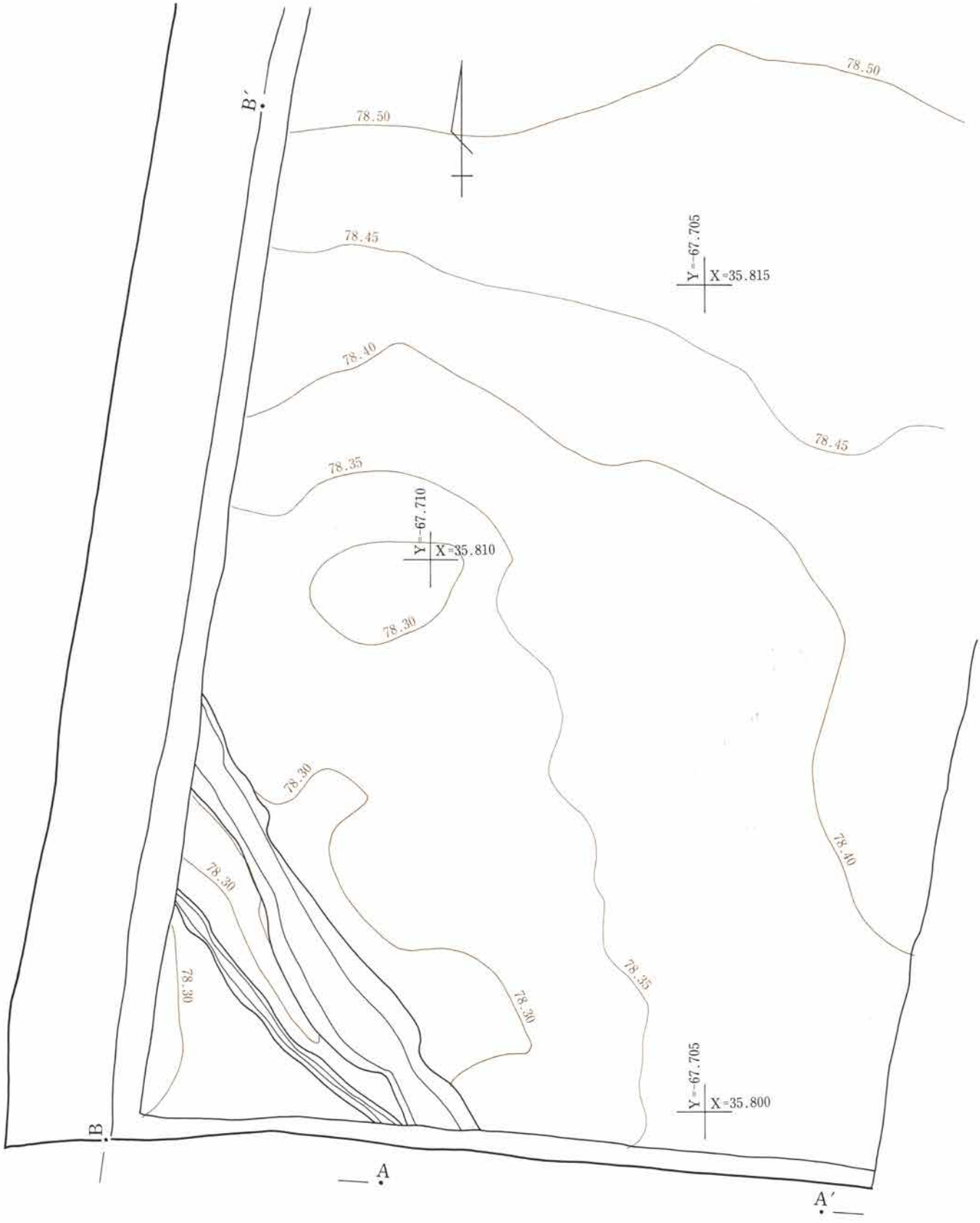
本調査区内での第8面の調査は、先の第7面の水田耕作土であるAs－C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした。その結果、As－C軽石を含む黒灰色粘質土を覆土とする溝が検出された。先のC区で検出された「疑似畦畔」状の遺構は、確認されていない。

ここで、堆積する土層について確認しておきたい。調査区の南壁土層断面（第120図）でみると、17層上面に第7面水田面が存在し、As－C混土層となる17・18層がその耕作土となる。18層はAs－C軽石の混入量が多いことから、17層と分層した。この17・18層の下に、粘質の強い黒色粘質土の19層、シルト層となる灰色粘質土の20層が堆積し、17層上面が本面の遺構面となる。また、西壁土層断面（第186図）からは、北側ほどAs－C混土層の堆積が薄くなり、下位層上面が徐々に高位となる状況が解る。

検出された溝は、調査区の南西隅に位置し、西壁から南東方向に延びる2条である。また、この溝の方向性と位置は、第7面での畦等とほぼ同じ位置であることから、C区の「疑似水田・畦畔」と関連する遺構である可能性を窺わせる。

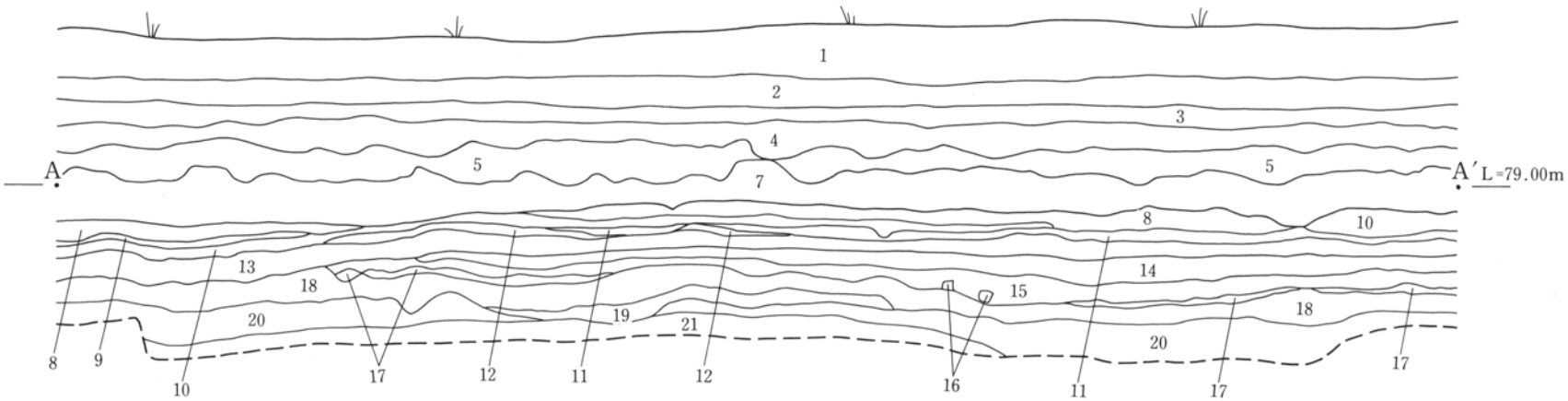


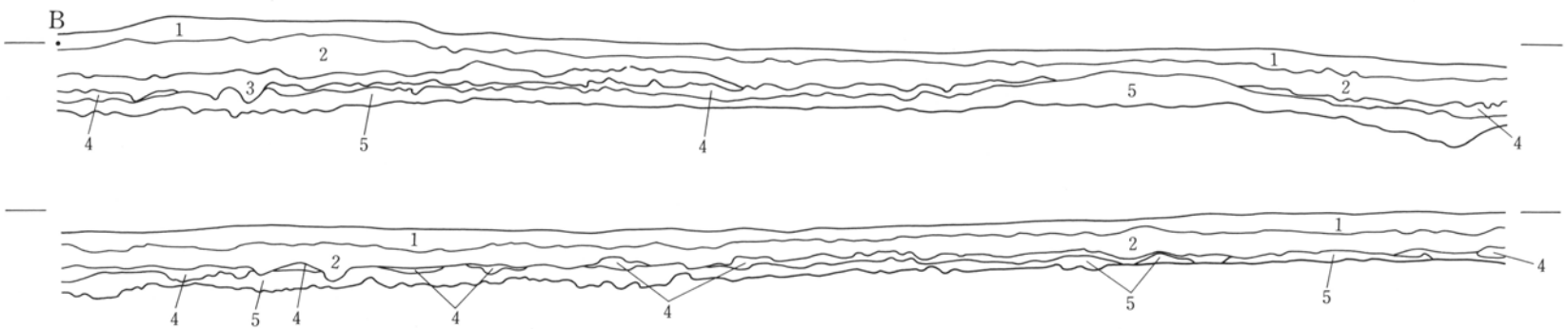
第184図　D区の遺構配置図（本線）



S=1/100

第185図　D区　検出された溝





1層　明灰色粘質土　第6面の水田耕作土で粘質。酸化をうけている。
2層　明褐色土　粘性をもち黒色土を少量ブロック状に含む。洪水層とみられる。斑状の酸化もみられる。
3層　灰色土　軽石状の砂を含み、黒色土をブロック状に含む。洪水層とみられる。やや粘質。
4層　黒色粘質土　粘性が非常に強く、水のよどんだ形跡とみられる。洪水層とみられる。
5層　黒灰色粘質土　上面が第7面、下面が第8面の遺構確認面となる。As－C混土層である。

S＝1/40

第186図　D区　南・西壁土層断面

D区取り付け道

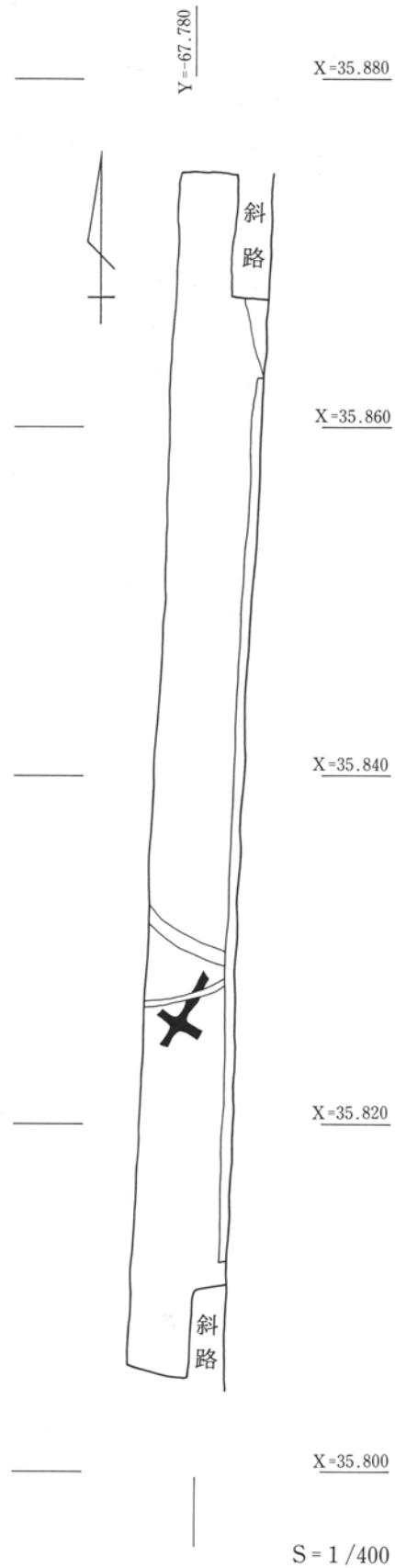
D区取り付け道で検出された遺構は、水田の痕跡であろう畦畔状の遺構と、溝である。調査区内の地形は、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第7面と同様である。

本調査区内での第8面の調査は、先の第7面の水田耕作土であるAs－C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした。その結果、As－C軽石を全く含まない黒色粘質土の帯状に延びる畦畔状の盛り上がりが一部に検出され、先のC区の状況と同じ様相を確認した。また、黒色粘質土の範囲内では、黒色粘質土上面に多くの凹凸が存在することも確認された。この凹凸の状況は、第7面等にみられた水田面に残る凹凸と同様であり、あたかも水田面を思わせる感もある。溝も、この部分から検出された。

このような遺構のあり方は、C区で述べたように、上面の水田形状がプリントされた「疑似水田・畦畔」と考えられる。その上面水田とは、第7面水田ではなく、第7面よりも古い時期のプリントである可能性が高い。このことは、本調査区での第7面水田の畦の方向性やその位置が、本面で検出されたものと大きく異なる点が上げられる。

検出された水田の痕跡であろう「疑似水田・畦畔」遺構は、C区の「疑似畦畔」に比べると、その残存状態はやや劣る。この「疑似水田・畦畔」遺構が検出された範囲は、かなり粘質な黒色粘質土の形成されている調査区南半の一部であり、それ以外の黒色粘質土の形成されていない灰褐色粘質土（シルト層）部分では検出されていない。また、検出された溝は2条であるが、畦畔状の遺構とのあり方から、畦畔状の遺構に伴うか、或いは近い時期の遺構と考えられる。（第187図）

ここで「疑似畦畔」の検出された付近の土層について、東壁土層断面で確認しておきたい。第189図に示した土層断面をみると、13・14層とした洪水層と考えられる灰色砂質土が第7面水田面を覆い、15・16層上面が第7面水田面となる。この16層がAs－C軽石を混在させるAs－C混土層であり、黒褐色粘質土の第7面水田耕作土となる。続く17層がかなり粘質な黒色粘質土であり、部分的に形成されている。全体的には、17層が形成されるのは僅かで、16層下には灰褐色粘質土のシルト層が堆積する。本面の遺構検出面は、17層上面ないし灰褐色粘質土のシルト層上面ということになる。



第187図
D区の遺構配置図（取り付け道）

溝

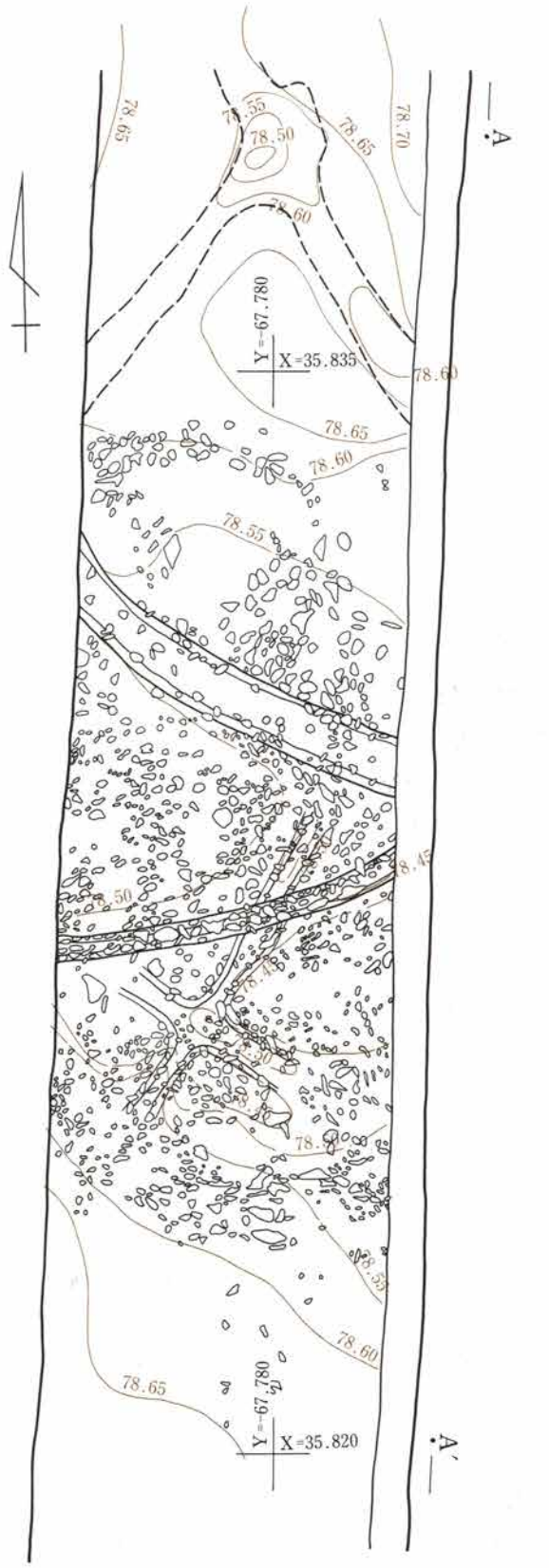
調査区の南半で、西壁から南東方向に延びるやや太い溝と、その南に東西方向に延びる細い溝とがある。前者の太い溝は10cmほどの深さをもつが、後者の細い溝は極めて浅い。両者の溝からは、共に遺物の出土はなく、時期は不明である。検出した状況からは、後者の細い溝は「疑似畦畔」よりも新しく、前者の太い溝が「疑似畦畔」等に伴う可能性があろう。

水田　（第188・189図）

水田の痕跡であろう「疑似畦畔」遺構は、調査区の南半の一部に検出された。先にも述べたように、C区での「疑似畦畔」に比べると残存状態は良くないが、小区画を区画する十字状の畦の交差部が検出された。畦の高さは低いが、周囲よりは明瞭に盛り上がっている。

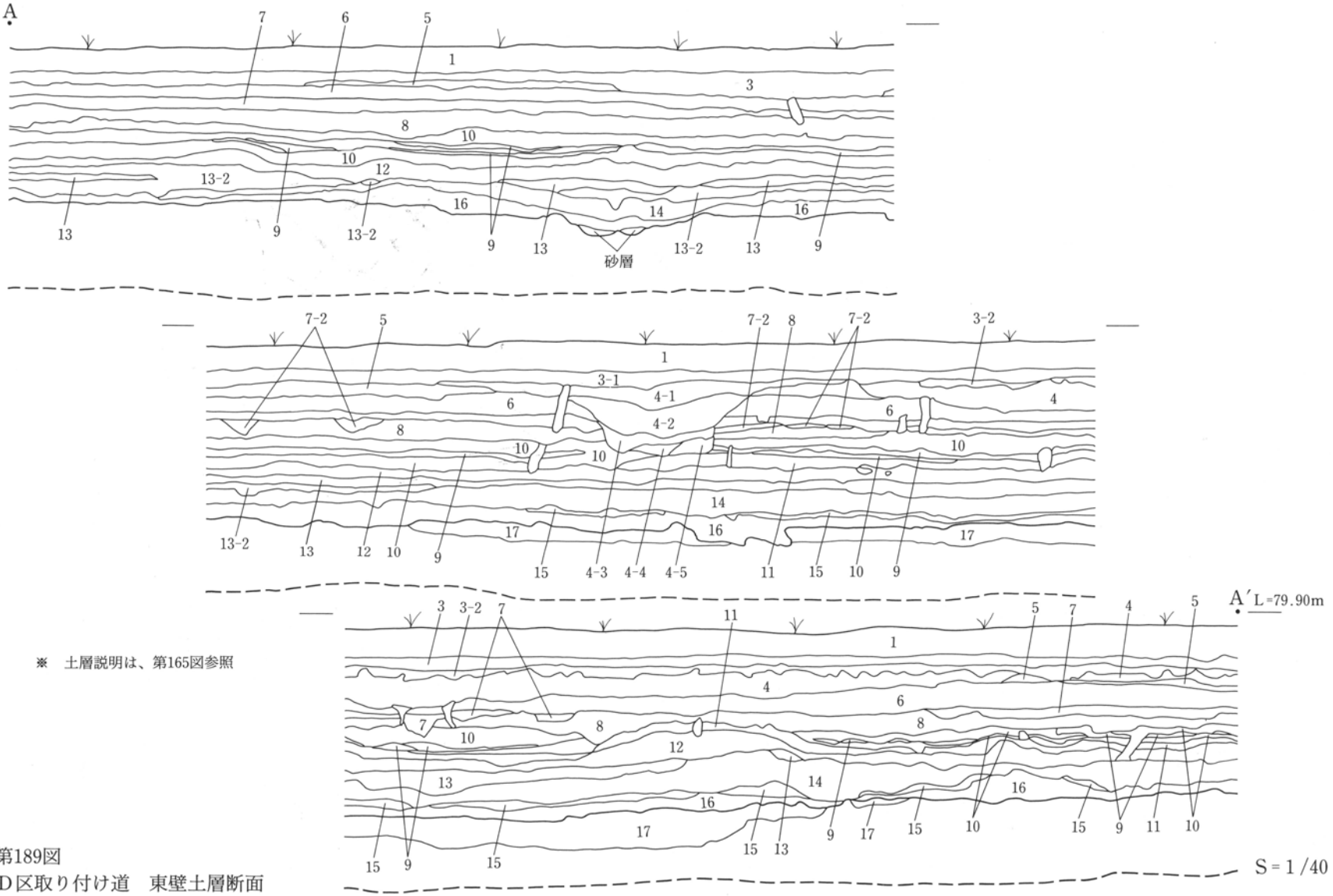
また、確認面に残る凹凸は、第7面等にみられた水田面に残る凹凸と同様であり、あたかも水田面を思わせる感もある。しかし、第7面水田耕作による耕作痕とも考えることもでき、不明な点がある。

本調査区で検出された「疑似畦畔」遺構は、遺構確認面や残存する遺構の状況からして、C区の「疑似畦畔」遺構の状況と同じであると言える。つまり、第7面以前でAs－C軽石降下以降の間の段階における水田のプリントされた「疑似水田・畦畔」と考えることができ、水田開削期のプリントされた遺構面として捉えることができよう。



S＝1/100

第188図
D区取り付け道　検出された畦と水田面



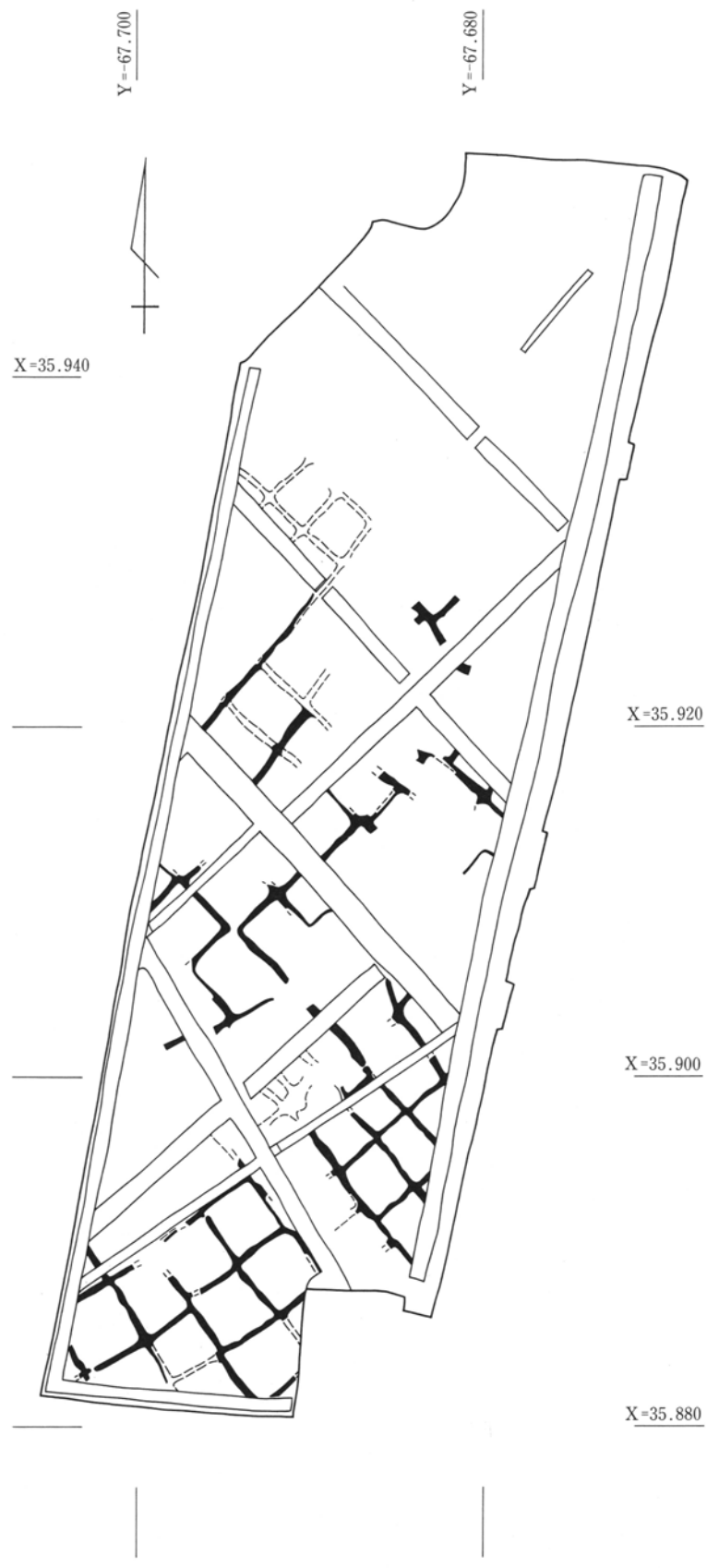
第189図
D区取り付け道　東壁土層断面

E区

E区で検出された遺構は、水田の痕跡であろう「疑似水田・畦畔」遺構である。調査区内の地形は、北側にF区に跨る微高地があることから高位となり、全体的に北西側から南東側への微傾斜で、第7面と同様である。

本調査区内での第8面の調査は、先の第7面調査とほぼ同時進行的に調査が進められた。これは、第7面調査時において、他調査区で鍵層となる砂質土の堆積が認められなかったことと、明瞭なAs－C混土層の把握ができなかったことにより、土層確認のためのベルトを方眼状に設けていた。その結果、第7面で扱った溝と本第8面の遺構が、ほぼ同一面で検出されるに至った経緯をもつ。よって、遺構確認面は、As－C混土層をも耕作土として攪拌してしまった第6面水田耕作土下面とした。As－C軽石が含まれない層であり、灰色粘質土のシルト層上面ということである。

検出された溝については、その覆土が他調査区での第7面を覆う砂質土に近似することと、調査時の所見から、先の第7面の遺構として扱った。一方、同時に検出された遺構は、水田区画状に僅かに薄くAs－C軽石を含む部分と、畦状にAs－C軽石を含まない部分とが、面状に広がることを確認した。この状況が、先のC区で「疑似水田・畦畔」遺構と類似するも



第190図　E区の遺構配置図(本線)

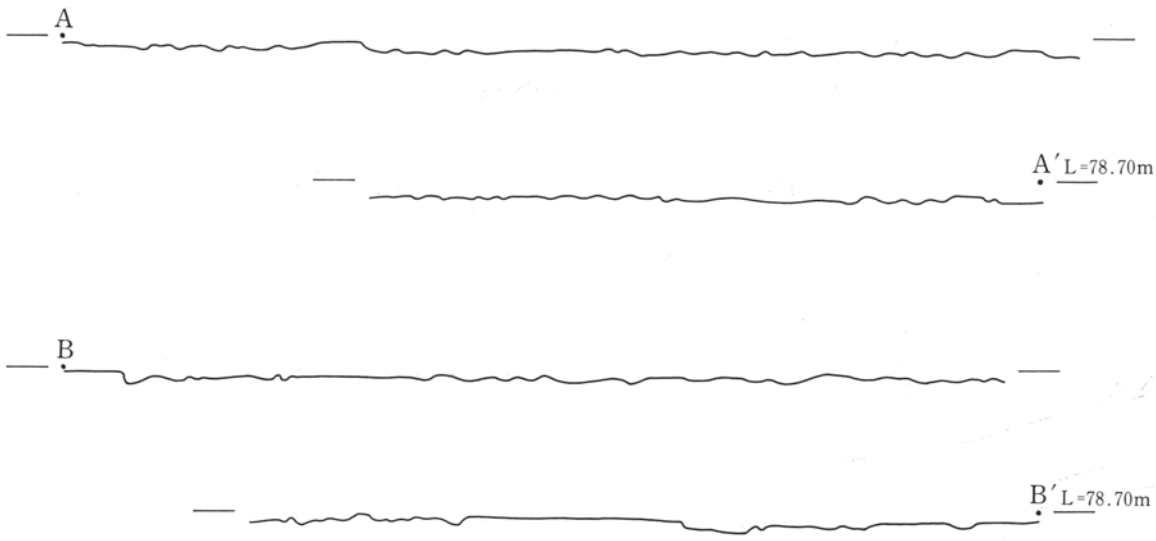
のとして、本面で扱うこととした。(第190図)

水田　(第191・192図)

水田の痕跡であろう「疑似畦畔」の遺構は、微高地を有する北側を除く調査区の中央付近から南半にかけて検出された。畦状にAs－C軽石を含まない部分は、僅かに高まりをもち、C区での「疑似畦畔」にあたる部分と考えられる。また、僅かに薄くAs－C軽石を含む部分は、方形の形状を成し、As－C軽石を含まない「疑似畦畔」によって区画されていることから、耕作部分と考えられる。区画のあり方は、「疑似畦畔」が南東方向に規則的に延びるのに対し、直交するもう一方が北東方向に規則的に延びる状況を呈している。一区画当たりの規模は、一辺が3～3.5mを測り、一区画の面積が12㎡前後となるものが多くみられる。本調査区でのこうしたあり方は、先のC区のあり方と比較すると、ある程度の整然性をもっていると言えよう。また、この区画のあり方は、上面となる第6面水田での極小区画水田とは異なるやや大き目の小区画水田であり、第6面水田のプリントされた「疑似水田・畦畔」ではないことは、一目瞭然であることが理解できよう。

本調査区で検出された「疑似畦畔」遺構は、残存する遺構の状況からして、C区の「疑似畦畔」遺構の状況と極めて近似していると言えよう。本調査区での第7面水田は検出されてはいないものの、それ以前でAs－C軽石降下以降の間の段階における水田のプリントされた「疑似水田・畦畔」と考えることができ、水田開削期のプリントされた遺構面として捉えることができよう。さらに、こうした状況は、東側に隣接する北関調査分でも確認されており、同様の遺構が微高地部を除く範囲に検出されている。

なお、「疑似畦畔」遺構下に、南東方向に延びる3条の細い溝が検出されている。明褐色砂質土を覆土とする溝であり、第8面よりも古い時期の遺構の可能性もあるが不明。



S=1/40

第191図　E区　畦の断面

第192図　E区　検出された畦(南側)

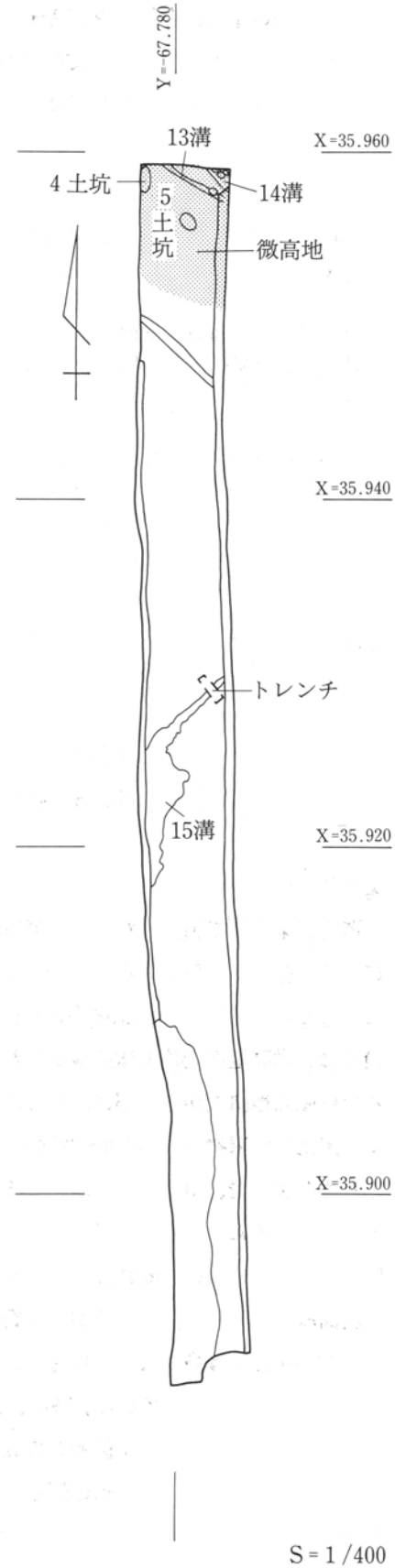
E区取り付け道

E区取り付け道で検出された遺構は、土坑2基とピット、溝、遺物集中箇所である。C区等の調査区で検出された、上面の水田形状がプリントされた「疑似畦畔」は確認できなかった。調査区内の地形は、北端にF区取り付け道へ跨る微高地が存在し、全体的に北西側から南東側への微傾斜となっており、第7面と同様である。

本調査区内での第8面の調査は、先の第7面の水田耕作土であるAs－C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした。その結果、微高地より南側では、As－C軽石を全く含まない灰色粘質土のシルト層上面での遺構確認となった。調査区の中央部から、北東方向に延びる溝が1条検出されたが、明褐色砂質土を覆土とする溝であり、他調査区で検出された溝等の覆土とは異なるものであった。このことより、第8面で扱っている遺構よりも古い時期の遺構の可能性もある。一方、調査区の北側部分は、微高地の南斜面部となり、微高地上部と下部とに分けられる。この微高地部に対しても、As－C軽石を全く含まない黒色土を遺構確認面として調査を行った。微高地上部では、溝とピットが検出され、斜面部から下部にかけて2基の土坑が、そして下部では遺物が多量に集中して出土している。(第193図)

ここで微高地部分の土層について説明しておく。第5・6面で検出された1・2号溝以南では、各時期の水田が検出されていたのに対し、溝以北では水田の検出はみられなかった。この1・2号溝以北に当たる微高地部での土層堆積は、微高地斜面部の途中までHr－FA層が堆積し、斜面上部では薄くHr－FP泥流層が堆積する。微高地上部にも、僅かにHr－FA層の堆積が認められるが、上部全体を覆う状態ではない。これらの榛名火山起因土層下には、暗灰色土が僅かに堆積し、その下層に第7面検出の鍵層となる洪水起因の明褐色砂質土が微高地下部に堆積する。さらに下層には、微高地全体を覆うようにAs－C軽石を混在させる黒色土が堆積し、続いてAs－C軽石を含まない黒色土が堆積している。

なお、微高地上部と下部との比高差は、50cm前後である。



第193図
E区の遺構配置図(取り付け道)

溝

調査区の北端で、微高地上部の南縁に併走する13・14号溝が検出されている。共にAs－C軽石を混在させる黒色土を覆土としており、第8面の時期に伴う遺構と考えられる。この13・14号溝か

らは、小型の平口縁台付甕や、高坏といった土器が出土している。また、調査区の中央付近には、明褐色砂質土を覆土とする15号溝が北東方向に延びる。この15号溝の位置と延びる方向は、第７面で検出された大畦と同一であるが、検出された層位および覆土の違いから、第８面よりも古い時期の遺構の可能性もある。

土坑・ピット　（第194図）

検出された２基の土坑は、微高地の南斜面部から下部にかけてであり、ピットは微高地上部からである。ピットについては、性格不明。土坑は、集中して出土した遺物を取り上げた後に検出された。

４号土坑

位置　調査区の北端で西壁際にあり、Ｘ＝35.959、Ｙ＝－67.781付近に位置する。

規模　円形と考えられる。西壁での長さは1.45ｍを測り、深さは15cmを測る。

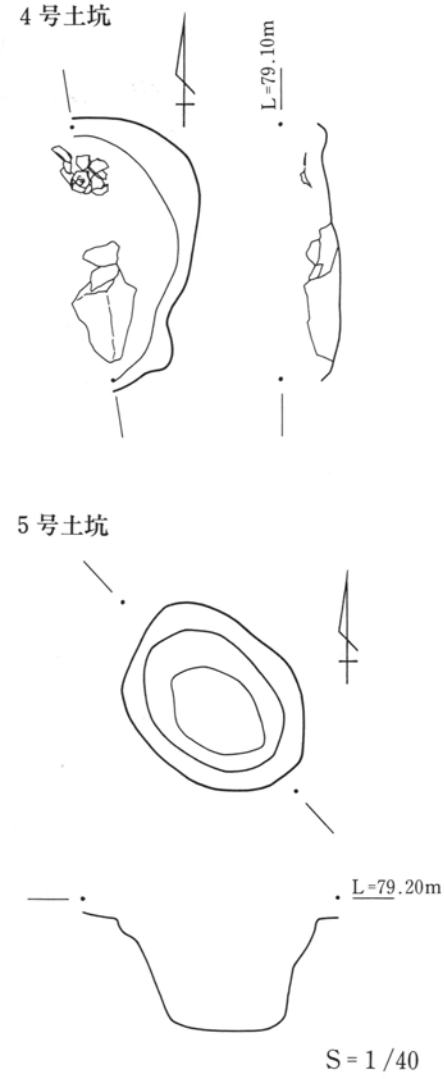
概要　調査区際であったため、全体を明らかにできなかった。As－Ｃ軽石を含む黒色土を覆土とする。出土した遺物には、平口縁台付甕、平底甕が有り、土坑底面からは大型の礫も出土している。

５号土坑

位置　調査区北側の微高地斜面から下部にかかる当たりにあり、Ｘ＝35.956、Ｙ＝－67.779に位置する。

規模　楕円形を呈する。長軸方向は北西で、長軸1.05ｍ、短軸80cmを測り、深さは60cmを測る。

概要　As－Ｃ軽石を含む黒褐色土と黒褐色粘質土を覆土とする。出土した遺物には、Ｓ字状口縁台付甕等がある。

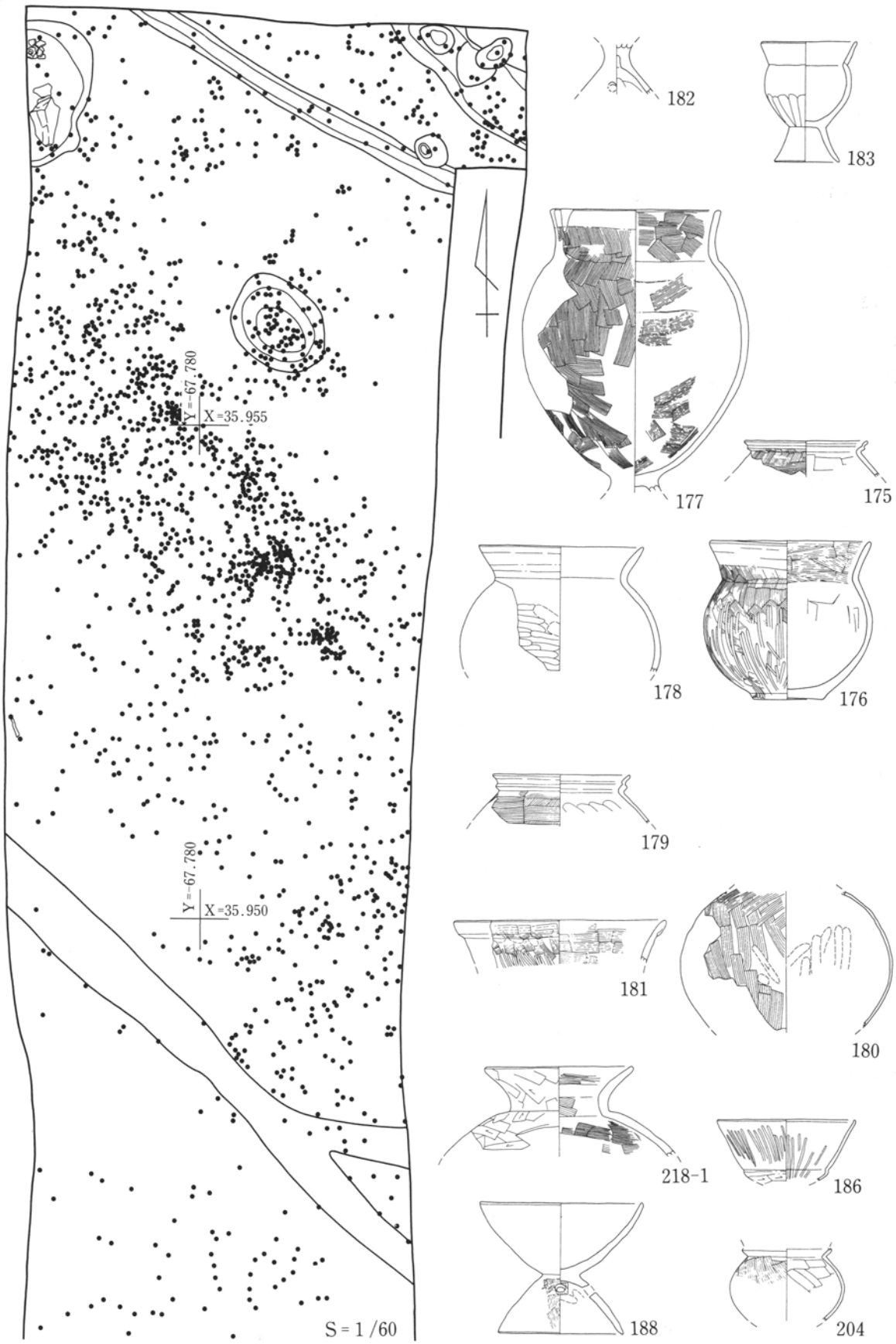


第194図　Ｅ区取り付け道　土坑

遺物集中箇所

遺物が集中して出土したのは、第195図に示した微高地の下部に最も集中する。第６面水田調査時点では、遺物の存在は知ることはできなく、As－Ｃ混土層中より検出された。遺物の分布する範囲は、微高地部全体と微高地より南側にも及ぶが、最も集中するのは微高地斜面から下部にかけての４・５号土坑南側からである。出土した遺物は、第218～221図に示したＳ字状口縁台付甕をはじめとする壺、坩、高坏等からなる。また、この集中箇所から出土したものに、Ｃ区取り付け道より出土した底部に孔を有する皿状の特異な器形の土器に接合した破片が出土している。

斜面廃棄とも考えられようが、他調査区での微高地斜面における遺物の出土量は多くないのに対し、本微高地部での出土量は多く、他とは様相を違えている。特に、遺物の接合という点からは、Ｃ区取り付け道の遺物集中箇所との関係を深くしている。そういう意味から、Ｃ区取り付け道の例と同様に、水田農耕に関わる祭祀の行われた場として考えることもできるのではなかろうか。



第195図　E区取り付け道　遺物出土分布(遺物集中箇所)

F区

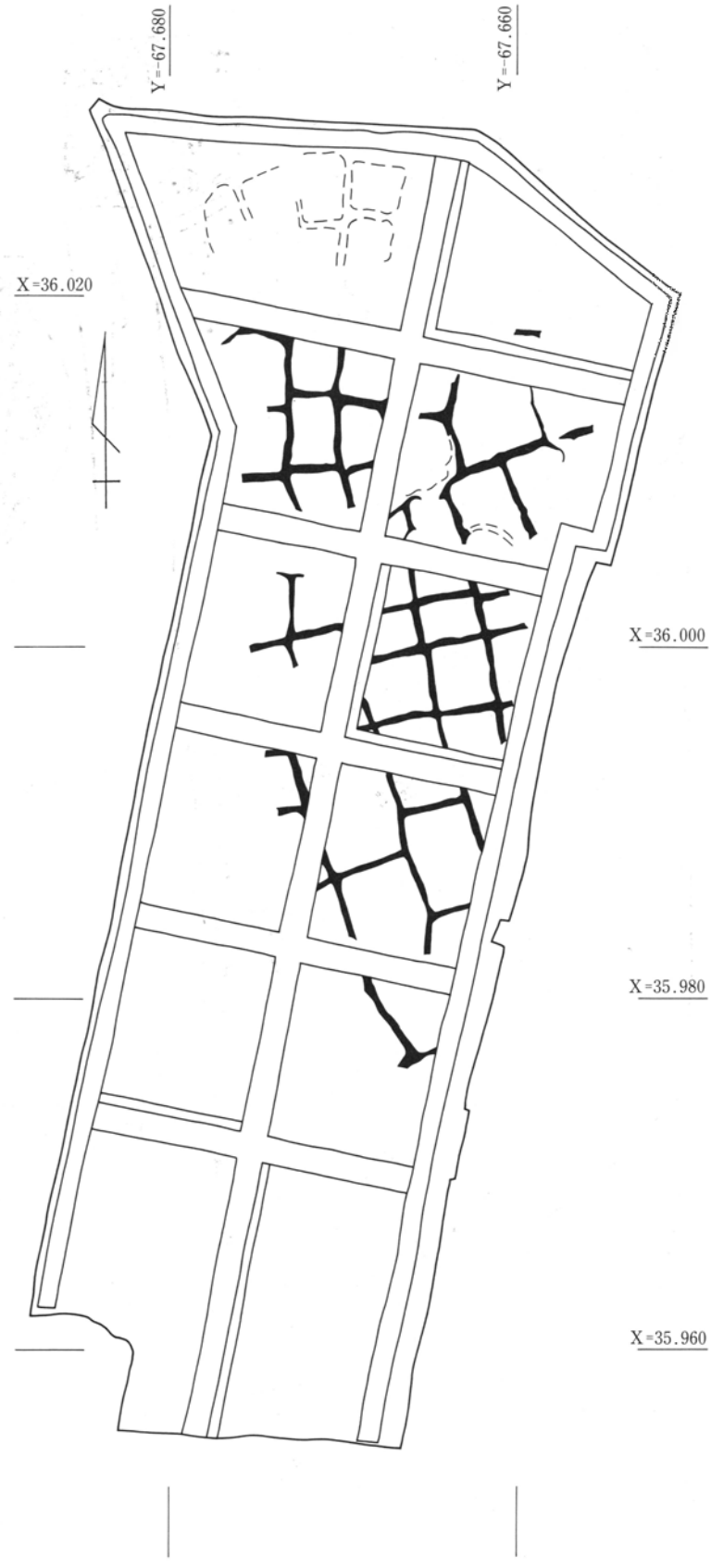
F区で検出された遺構は、水田の痕跡であろう「疑似水田・畦畔」遺構である。調査区内の地形は、南端と北西隅が高位（微高地）となり、全体的に西側から南東側への微傾斜で、第7面と同様である。

本調査区内での第8面の調査は、先のE区と共に第7面調査とほぼ同時進行的に調査が進められた。これは、第7面調査時において、他調査区で鍵層となる砂質土の堆積が認められなかったことと、明瞭なAs－C混土層の把握ができなかったことにより、土層確認のためのベルトを方眼状に設けた。その結果、第7面とした溝と第8面の遺構が、ほぼ同一面で検出されるに至った経緯をもつ。よって、遺構確認面は、As－C軽石が含まれない層であり、灰色粘質土のシルト層上面ということである。

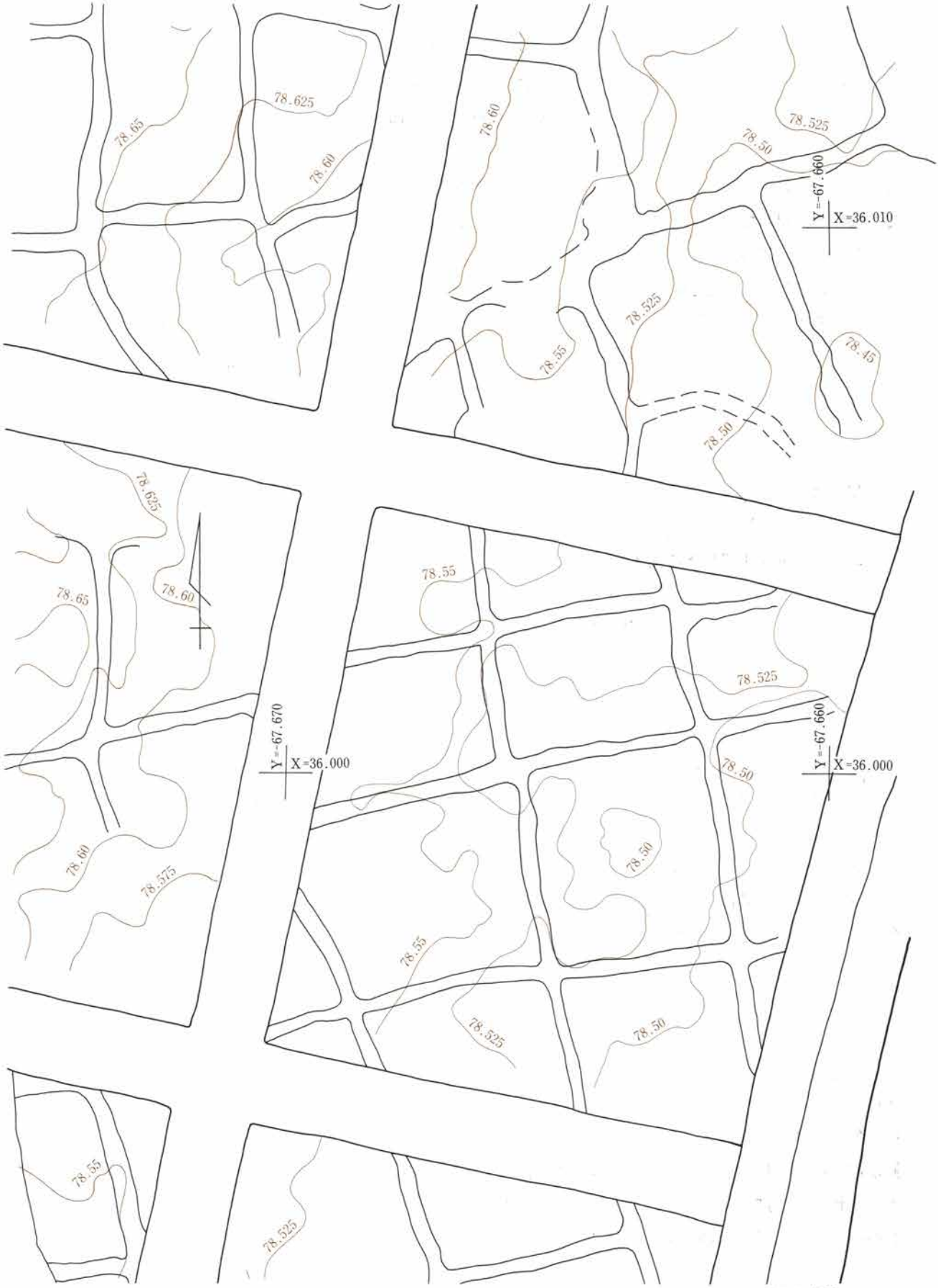
第7面で扱った溝以外の遺構は、水田区画状に僅かに薄くAs－C軽石を含む部分と、畦状にAs－C軽石を含まない部分とが、面状に広がることを確認した。この状況は、先のE区と全く同様である。（第196図）

水田　（第197図）

水田の痕跡であろう「疑似畦畔」の遺構は、微高地を除く調査区の中央付近から北半にかけて検出された。畦状にAs－C軽石を含まない部分は、僅かに高まりをもち、



第196図　F区の遺構配置図（本線）



第197図　F区　検出された畦

S=1/100

C区での「疑似畦畔」にあたる部分と考えられる。また、僅かに薄くAs－C軽石を含む部分は、方形の形状を成し、As－C軽石を含まない「疑似畦畔」によって区画されていることから、耕作部分と考えられる。区画のあり方は、「疑似畦畔」が南東方向に規則的に延びるのに対し、直交するもう一方が北東方向に規則的に延びる状況を呈している。一区画当たりの規模は、一辺が3～4mを測り、一区画の面積が12㎡前後となるものが多い。本調査区でのこうしたあり方は、先のE区のあり方と全く同じ状況であり、上面となる第6面水田の極小区画水田とは異なる小区画水田で、第6面水田のプリントされた「疑似水田・畦畔」ではない。

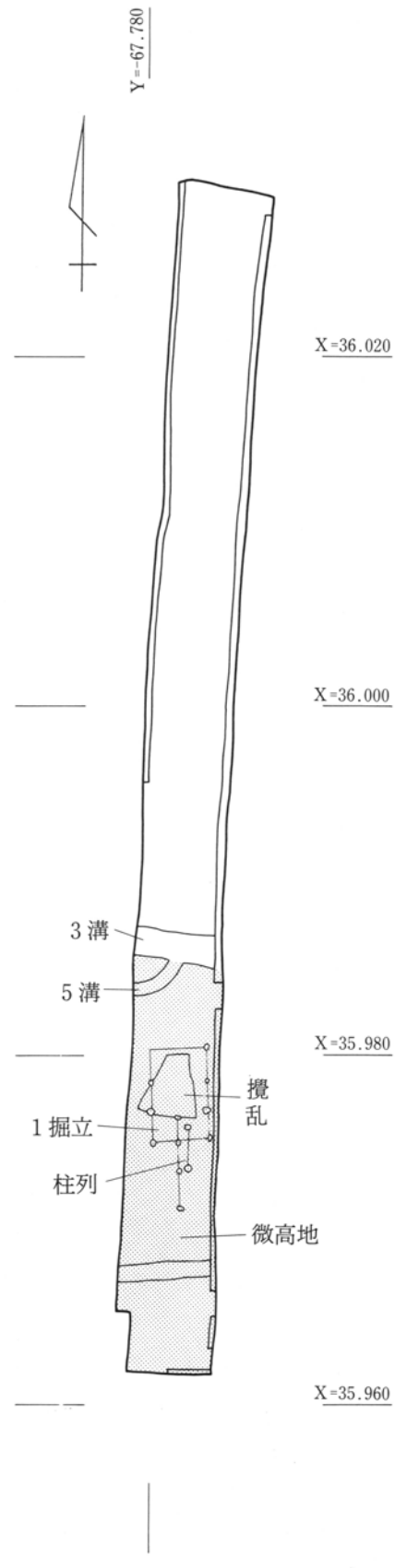
本調査区で検出された「疑似畦畔」遺構は、C・E区の「疑似畦畔」遺構と同時期の痕跡であり、本遺跡地での水田開削期のプリントされた遺構面として捉えることができよう。さらに、こうした状況は、東側に隣接する北関調査分でも確認されており、同様の遺構が微高地部を除く範囲に検出されている。

なお、「疑似畦畔」遺構下に、調査区の北壁東寄りから中央付近東壁へ南下するように蛇行して延びる幅5m程の自然流路が検出されている。この自然流路は、東側の北関調査分でも確認されている。第8面よりは古い時期のものである。

F区取り付け道

F区取り付け道で検出された遺構は、床状の硬化面、掘立柱建物、溝である。C区等の調査区で検出された、上面の水田形状がプリントされた「疑似畦畔」は確認できなかった。調査区内の地形は、南半にE区取り付け道へ跨る微高地が存在し、微高地の北側は全体的に北西側から南東側への微傾斜する低地となっている。

本調査区内での第8面の調査は、As－C混土層を取り除いた面を遺構確認面とした。微高地より北側では、As－C軽石を全く含まない灰色粘質土のシルト層上面での遺構確認となり、第6面水田耕作土中にAs－C混土層が攪拌されることによりAs－C混土層が存在せず（第6面水田耕作がシルト層まで達していたものと考えられる）、第7面および第8面に帰属する遺構の検出はできなかった。一方、調査区の南半の微高地は、頂部の平坦面から緩やかな北斜面となり低地部へと続く。この微高地部は、中世以降の溝により数カ所分断されるが、微高地全体にS字状口縁台付甕



S＝1／400

第198図
F区の遺構配置図（取り付け道）

をはじめとする遺物が散布する。また、微高地平坦面からは、床状に硬化した面がある程度の範囲をもって検出され、その北側からは掘立柱建物や柱穴列が検出されている。さらに、微高地と低地部との変換部付近には、溝が１条検出された。(第198図)

ここで微高地部分の土層について説明しておく。微高地部での土層堆積は、全体をHr－FP泥流層が高位ほど薄く堆積し、平坦面の一部にHr－FA層が僅かに確認された。さらに下層には、微高地全体を覆うようにAs－Ｃ軽石を混在させる黒色土（粘性の弱いAs－Ｃ混土層）が堆積し、続いてAs－Ｃ軽石を含まない黒色土が堆積している。遺物の出土は、As－Ｃ混土層中からであり、下層の黒色土層からは出土していない。

１号掘立柱建物　(第199図)

位置　微高地頂部平坦面の北寄りにあり、Ｘ＝35.978、Ｙ＝－67.778付近に位置する。

規模　３間（5.1m）×１間（3.2m）となる長方形の建物で、桁行方向を南北にとる。

概要　検出された建物の柱穴は、東側の列で４穴、西側の列で３穴で、北西角の柱穴は検出されていない。それぞれの列の柱間は、1.7m前後を測り規則的である。各柱穴内は、As－Ｃ軽石を含む黒色土を覆土としていることから、第８面に伴う遺構と考えられる。遺物の出土はない。

柱穴列　(第200図)

微高地頂部の平坦面に、２列の柱穴列が検出されている。この他にも、数基のピットが柱穴列周辺で検出されているが、直線上に組み合うものはない。

位置　微高地頂部平坦面のやや北寄りにあり、Ｘ＝35.975、Ｙ＝－67.778付近に位置する。

規模　４穴が列をなすものと、２穴のものとの２列である。４穴の列は、列方向を南北にとり、長さは5.2mを測る。２穴の列も列方向を南北にとり、長さは2.3mを測る。

概要　４穴の列は、規模的にも１号掘立柱建物と同様であることから、掘立柱建物となる可能性が高く、列の東側へ建物本体がくるものと想定できる。その際、１号掘立柱建物と重複することとなるが、その新旧関係は不明。また、２穴の列は、掘立柱建物になる可能性もあるが、不明な点も多い。

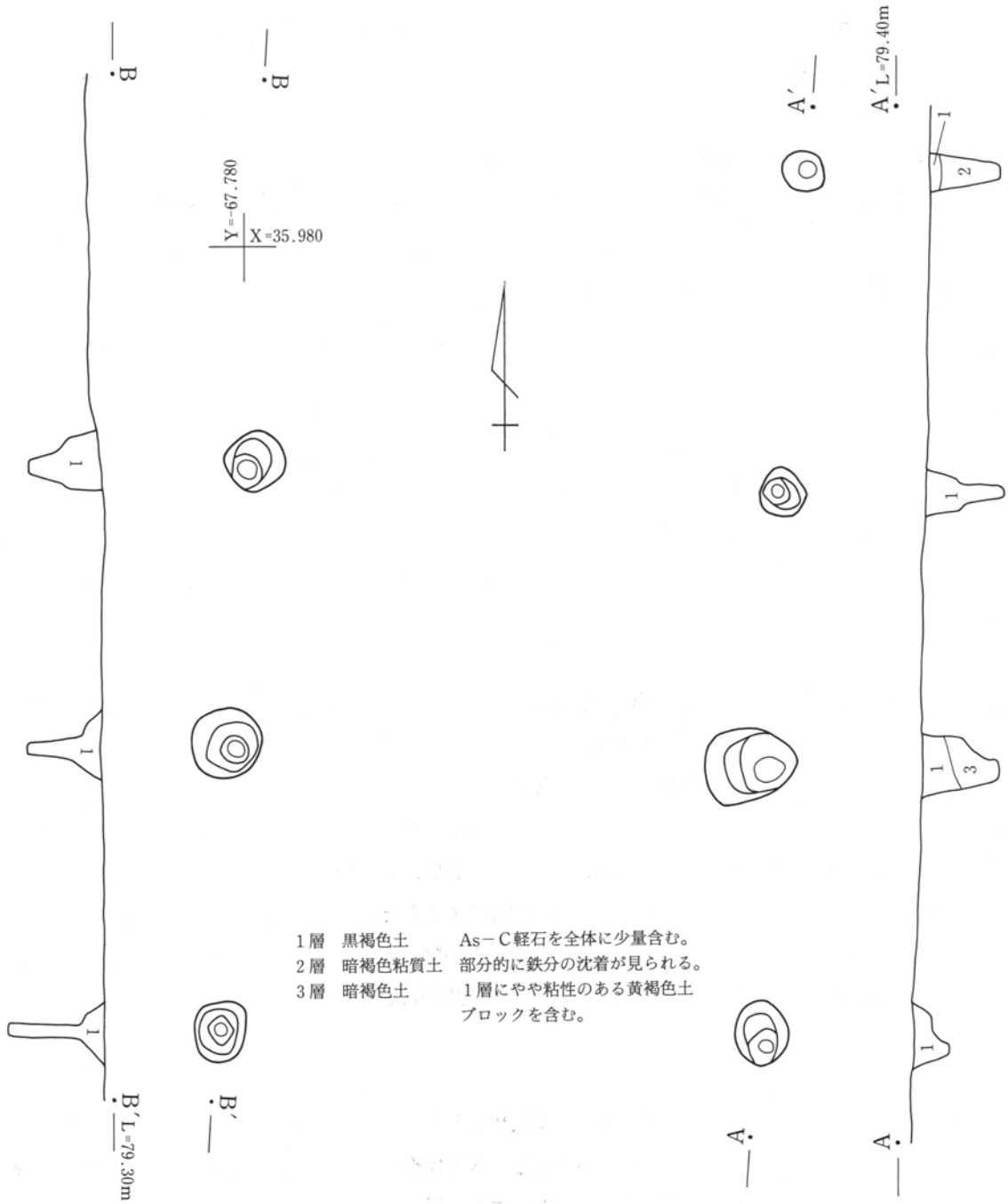
溝　(第202図)

微高地と低地部との変換部付近に、３号溝が１条検出された。この３号溝は、西壁から北側へ湾曲するように延びるが、中世以降の溝である３号溝によって延びる先は不明。As－Ｃ軽石を混在させる黒色土を覆土としており、第８面の時期に伴う遺構と考えられる。また、溝内からは、Ｓ字状口縁台付甕等をはじめとする遺物が出土している。

床状の硬化面　(第201・202図)

微高地中央の平坦面からは、床状に硬化した面がある程度の範囲をもって検出された。この硬化面は、As－Ｃ軽石を含まない黒色土面にあり、中心部ほど堅く硬化し、周辺部がやや硬化度合いが弱い。その硬化範囲は、第201図のスクリーン範囲であり、南北方向４m、東西方向3.5m程の広がりをみせる。硬化範囲の中央部を、大きく中世以降の溝で壊されているため、内部の詳細は不明であるが、住居等の遺構であった可能性もある。この付近の遺物分布をみると、硬化範囲の当たりの出土量が少ないことが解る。

なお、微高地平坦面からの出土遺物は、大半がAs－Ｃ混土の黒色土中からであり、第223～225図に示した



第199図　F区取り付け道　1号掘立柱建物　　S＝1/40

S字状口縁台付甕をはじめとする平口縁の甕、壺、坩、高坏、器台、片口土器等の遺物が出土している。こうした遺物からも、第8面として扱った微高地上の遺構は、4世紀代の古墳時代初頭期に位置づけられるものと考えられる。

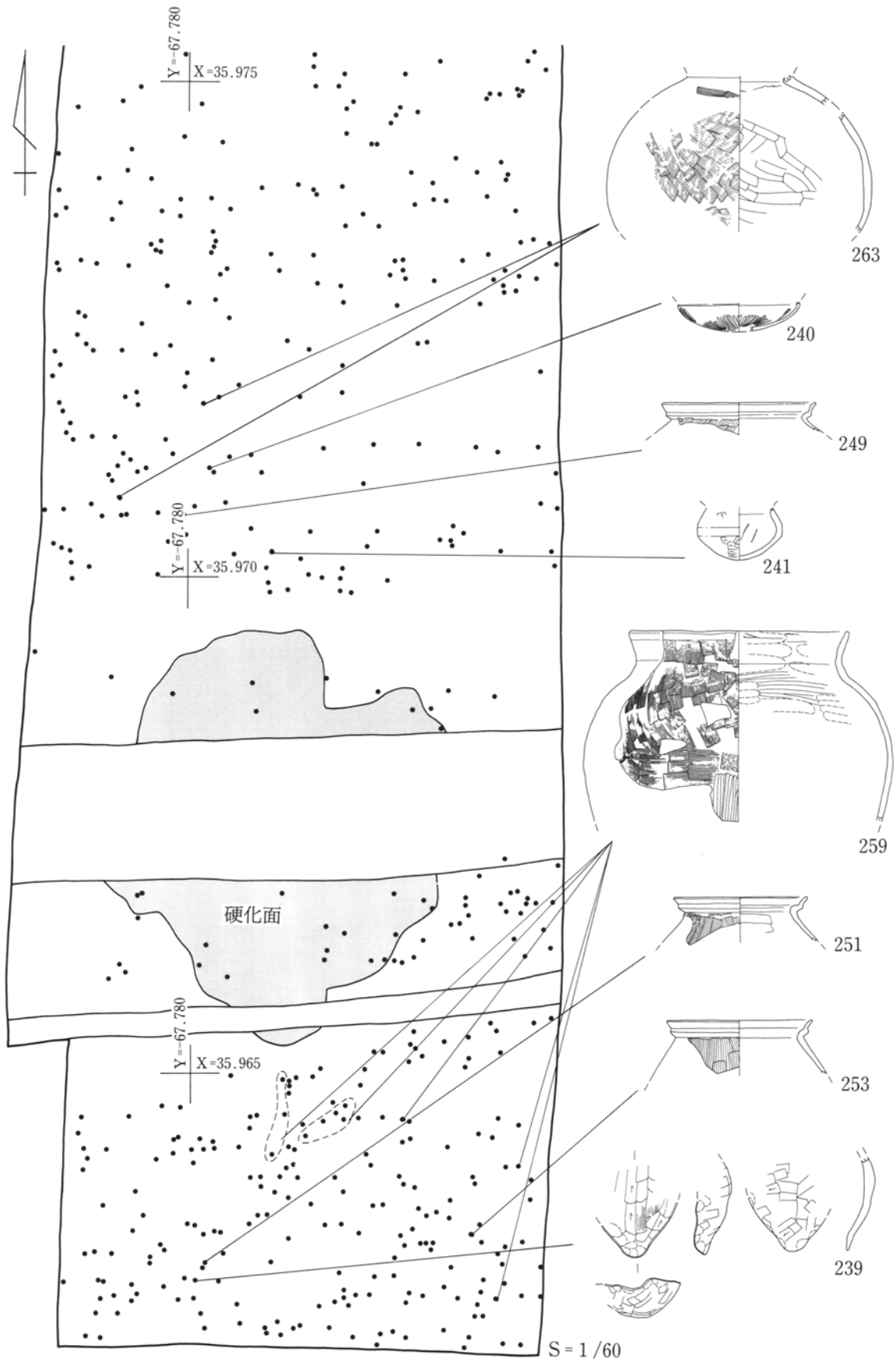
以上、本調査区の微高地上での遺構について述べてきたが、他調査区で検出された水田開削期のプリントされた痕跡遺構「疑似畦畔」とを考え合わせると、明確な検証には至らないが、これらの遺構はほぼ同時期

S＝1／40

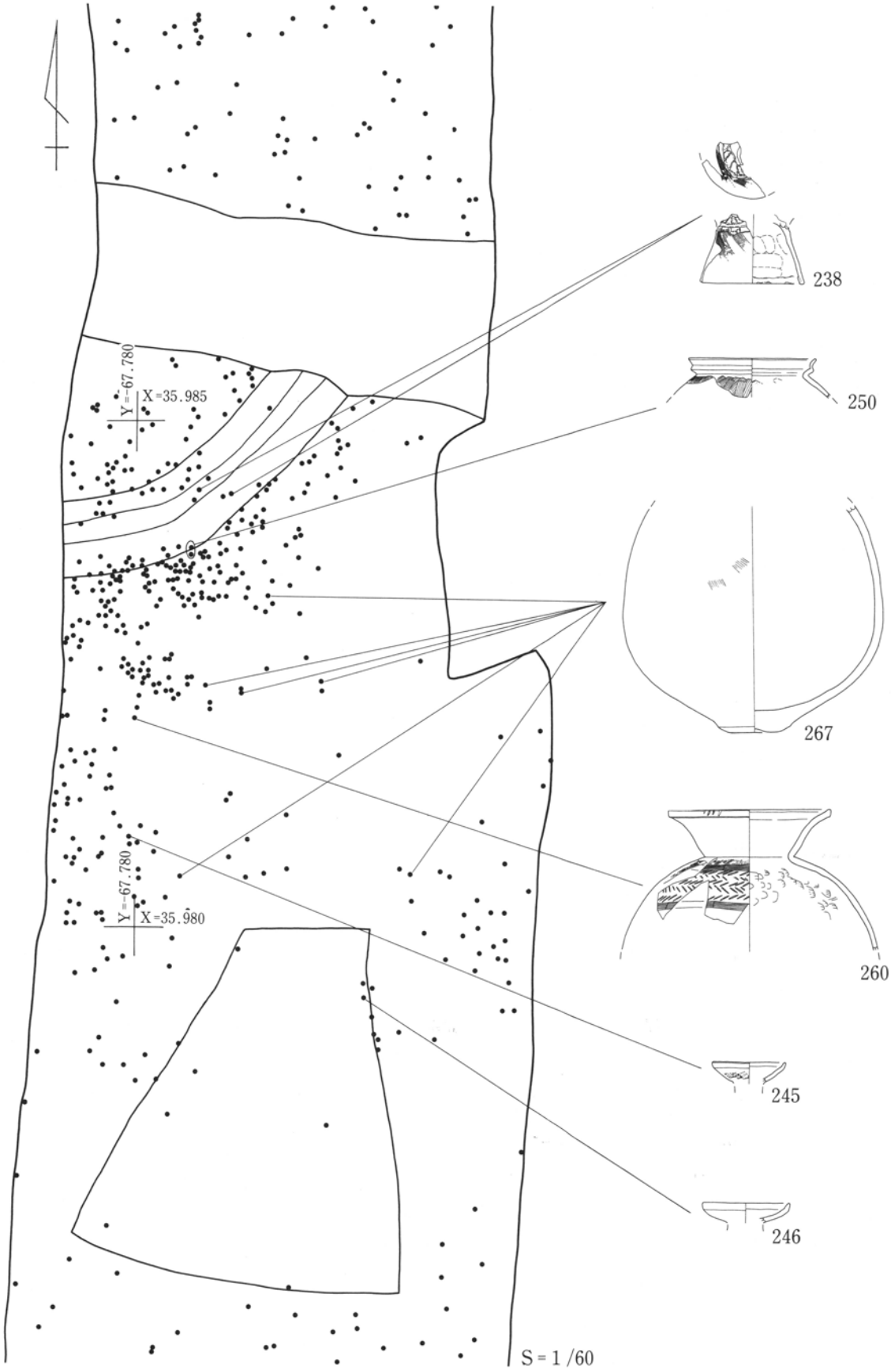
第200図　F区取り付け道　柱穴列

に存在した可能性が高く、本遺跡地での水田開削期がこの時期であった可能性が極めて高いものと考えられよう。

また、本調査対象地に隣接した北関東自動車道の調査報告をも合わせた遺跡の理解が必要であり、本遺跡地での水田開発・経営の変遷については、今後の検討課題となる。



第201図　F区取り付け道　硬化面と遺物出土分布



第202図　F区取り付け道　遺物出土分布

第10節　出土遺物

本調査で出土した遺物は、検出された遺構の性格から、各時期を通して余り量の多い状況ではなかったが、第４面に関連する遺構出土資料と、第８面に関連する遺物集中箇所から資料が主体を占める。また、第６面Ｃ区の大溝からは、木器が多く出土しているが、ここでは製品類を中心に掲載している。こうした出土遺物について、以下に土器・石器・木器に分けて、各調査区・遺構ごとに説明していく。

土器類

Ａ区　25号土坑　（第203図１・２）

１は、手捏ね土器である。口径7.6cm、底径3.8cm、器高4.6cmを計測し、口縁部の内外面は横撫で。体部および内面には指頭痕が残る。２は、土師器の甕の底部である。底径6.0cm、器高（2.5）cmを計測し、胎土に細砂および小石を含む。底部はやや上げ底気味となり、外面は篦削りで、内面は篦撫でによる。

Ａ区　34号土坑　（第203図３～10）

３～８は、土師器の坏であり、３・４は完形である。これらの胎土は細砂を含み緻密で、口縁部は横撫で、体部および底部は篦削り、内面は横撫でとなる。４は器形がやや歪み、５は３・４に比べ底径が小さく、体部から口縁部にかけて直線的に開く。６の口縁部には、油煙が付着する。また、５・６の体部下半には、篦削り後に撫でが施される。３は口径11.9cm、底径9.3cm、器高3.2cmを測り、４は口径11.9cm、底径8.7cm、器高3.2cm、５は口径11.0cm、底径3.0cm、器高3.2cm、６は口径12.0cm、器高3.6cm、７は口径10.7cm、底径8.0cm、器高3.1cm、８は口径12.0cm、底径4.0cm、器高2.8cmを計測する。９は、須恵器の坏である。口径12.8cm、底径6.5cm、器高4.0cmを計測し、胎土に砂粒を含む。ロクロによる成形で、底面には回転糸切り痕を残す。10は、須恵器の碗の底部片である。胎土に細砂を含み、ロクロによる成形で、回転糸切り離し後に付け高台をもち、底面には回転糸切り痕を残す。

Ａ区　35号土坑　（第203図11～15）

11・12はＳ字状口縁台付甕の口縁部であり、11の口縁部は櫛目を施した後の横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には口縁から斜位の櫛目を施す。12の口縁部は２段目が長く開き気味となるが、内面に顕著な屈曲線がある。口縁部は横撫で、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施されている。11・12共に、肩部の内面には指頭痕が残る。11の口縁部は口径（13.2）cmを測る。13は台付甕の脚部で、脚径8.9cmを測る。脚部の上半には櫛工具による斜位の櫛目を施すが、下半は撫で、内面には指頭痕が残る。14は土師器の壺の口縁部片である。口径28.3cmを測る。胎土に細砂を多く含む。内外面共に頸部との堺に大きく稜をもつ。器面は摩耗しているが、外面および口縁部内面は撫でで、頸部内面は櫛状工具による横位の櫛目が施される。15は土師器の坏である。口径12.2cm、底径7.0cm、器高3.2cmを測る。胎土に細砂を含み緻密。口縁部は横撫でで、体部は篦削り後に撫で。底部は篦削りとし、内面は丁寧な横撫でである。

Ａ区　58号土坑　（第204図16）

16は、土師器の坏の完形で、口径12.2cm、底径8.4cm、器高3.6cmを測る。口縁部から体部にかけて横撫でで、底部は篦削り。内面は横撫でである。全体にやや歪み、器面が粗い。

A区　59号土坑　（第204・205図17～44）

17～42は土師器の坏であり、34～42は墨書である。概ね、胎土は細砂を含み緻密で、口縁部は横撫で、体部および底部は篦削り、内面は横撫でである。また、作りも丁寧である。27・28の器体は、やや歪んでいる。17の口縁部の内外面の一部には、油煙が付着している。34～41は底面に墨書を有するが、42は底部内面に墨書を有する。何れの墨書も、文字は不明。17は口径11.8cm、底径9.0cm、器高3.3cmを測り、18は口径13.4cm、丸底、器高2.9cm、19は口径12.5cm、丸底、器高2.9cm、20は口径11.9cm、器高2.9cm、21は口径12.6cm、丸底、器高（3.0）cm、22は口径12.1cm、器高2.8cm、23は口径13.4cm、底径10.8cm、器高2.7cm、24は口径11.6cm、器高（2.5）cm、25は口径12.6cm、底径11.1cm、器高2.9cm、26は口径12.2cm、底径9.0cm、器高2.7cm、27は口径12.2cm、底径9.7cm、器高2.9cm、28は口径11.2cm、底径8.0cm、器高3.4cm、29は口径14.1cm、器高（2.4）cm、30は口径11.4cm、器高2.9cm、31は口径12.0cm、器高（2.6）cm、32は口径12.9cm、底径8.5cm、器高3.0cm、33は口径12.8cm、底径10.2cm、器高3.0cm、34は口径（11.8）cm、底径（7.9）cm、器高2.9cm、35は口径10.4cm、底径9.5cm、器高3.3cm、36は口径（11.4）cm、器高3.0cm、37は口径（12.1）cm、器高3.5cmを測る。38～42は底部片である。43は須恵器の大甕の口縁部であり、口径27.2cmを測る。胎土に小砂を含むが緻密で、焼成は良好。口縁部が大きく外反し、内外面ともに回転による撫でである。21号溝出土の破片と接合している。44は須恵器の長頸壺であり、口径8.9cm、胴部最大径19.2cm、器高（27.0）cmを測る。胎土に小砂を含むが緻密で、焼成は良好。遺物の残りは悪いが、口縁部から胴下半まで接合するが、底部は欠損。ロクロ成形により、作りは丁寧で、肩部に２本の横線がみられる。

A区　60号土坑　（第205図45～47）

45～47は土師器の坏であるが、45は口縁部横撫でで、口縁下に強い稜をもち、体部から底部は篦削りとなり、口径12.0cm、丸底、器高（2.7）cmを測る。46は強く開く口縁部が横撫でで、体部から底部は篦削りとなり、口径12.0cm、丸底、器高（2.9）cmを測る。47は短く立ち上がる口縁部が横撫でで、体部から底部は篦削りとなり、口径12.9cm、丸底、器高（2.5）cmを測る。

A区　16号溝　（第205図48・49）

48は片口鉢の口縁破片で、平坦な口舌部に片口部がみられる。49は羽口片であり、長さ（11.1）cm、幅6.1cm、孔径2.2cm、重さ310ｇを測る。表面には、斜方向の筋が幾条も付けられている。また、表面に酸化部と還元部があり、還元部には僅かではあるが発泡がみられる。

A区　21号溝　（第206図50・51）

50・51はロクロ成形による須恵器の坏であり、50の底面には回転糸切り痕を残す。50は口径13.0cm、底径5.4cm、器高4.3cm、51は口径13.6cm、器高4.3cmを測る。

A区　29号溝　（第206図52・53）

52・53は共に土師器の台付甕である。52は台付甕の胴部下半から底部にかけてであり、外面には縦位の櫛目をもち、脚部にも斜位の櫛目が施される。内面には篦撫で痕がみられ、脚部内面にも指頭痕が残る。53は台付甕の脚部であり、脚部にも斜位の櫛目が施され、内面には撫で痕がみられる。なお、脚部と体部との接合部は、菊花状の凹凸によって接合している状況がみてとれる。脚径は8.7cmを測る。

A区　遺構外出土土器　（第206図54～61）

54は第８面の黒色粘質面から出土した土師器の高坏の脚部片であり、上部の坏と脚との接合部は、坏の底部に突起を付け、この突起を脚部に差し込む作りとなっている。脚部の外面は篦撫で、内面は縦位の撫でによる。55は土師器の甕ないし壷の底部であり、胴部は篦削りで、底径6.5cmを測る。56は埴輪片であり、胎土に砂粒を多量に含み、外面に上下方向の刷毛目を施している。57は須恵器の高坏の脚部片であり、胎土は細砂を含み緻密で、脚部の３カ所に透孔を有する。58～60は土師器の坏であるが、58はロクロ成形による酸化焔焼成の坏で、赤黒褐色を呈し、口径11.7cm、器高3.3cmを測る。59の外面は摩耗気味であるが、口縁部は横撫で、体部から底部にかけて篦削りとなり、口径11.2cm、底径8.8cm、器高4.3cmを測る。60の口縁部は横撫でで、体部から底部にかけて篦削りとなり、内面は丁寧な横撫で。全体にやや歪み、口径11.9cm、底径9.2cm、器高3.3cmを測る。61は須恵器の甕の底部片であり、底部付近は篦削りで、底部は篦撫でである。

B区　１号土坑　（第207図62～64）

62は産地不明であるが、明治期以降の型紙摺りによる皿であり、外面底面に焼継ぎ時の記号を有する。63・64は擂鉢片であり、63は内面に目の細かな掻き目を有し、64は内面に７本歯の掻き目を有する。

B区　１号溝　（第207・208図65～74）

65は須恵器の大甕の口縁部片であり、口縁部を数段の横位線で区画し、区画内に櫛歯工具による波状文および簾止め状の文様を描く。66は18世紀後半の波佐見産の皿で、内面に蛇目釉剝離がみられ、中央に五弁花コンニャク版をもつ。67は19世紀中頃の瀬戸・美濃産の碗で、内外面に染め付けをもつ。68は明治期以降の瀬戸・美濃産の鉢（磁器）で、内面に色絵（赤・緑）が認められるが剝離している。69は近世の肥前産の青磁香炉である。70は近世（17・18世紀）の瀬戸・美濃産の水入れであり、鉄絵具による型紙摺り絵で、底部外縁がアメ釉となる。71～73は擂鉢で、71は内面に10本歯の掻き目を有し、72は内面全体に掻き目を、73は内面に17本歯の掻き目を有する。74は器高5.5cmの器高の浅い内耳鍋であり、口舌部はやや平坦気味となる。

B区　２号溝　（第208図75～77）

75は器高の浅い内耳鍋で、内面の口縁下から底部にかけて橋状の耳がつけられている。外面には炭化物が多く付着し、底面は粗く砂目が残る。76は近世（17世紀後半）の瀬戸・美濃産の輪禿皿で、内面から高台際までが灰釉で、底部内面を輪状に釉を削り取る。また、底部内面には菊花状のスタンプをもつ。77は近世（17世紀）の瀬戸・美濃産の鉢で、内面に鉄絵をもち、目跡が１カ所認められる。

B区　７号溝　（第209図78～82）

78は埴輪片で、胎土に砂粒を多量に含み、外面には突帯が巡る。79は須恵器の大甕の頸部片で、頸部以下の胴部に、外面は平行叩き目が、内面は同心円状あて目がつく。80は近世（17世紀）の肥前産の皿（磁器）で、内面に染め付けがある。81は近世（18世紀中）の波佐見産の碗（磁器）で、内面底面に五弁花のコンニャク版をもち、高台内に渦福の崩れ銘がある。82は近世の瀬戸・美濃産の水入れで、内外面に灰釉を施釉する。

B区　12号溝　（第209図83）

83は布目瓦の破片である。

B区　13号溝　（第209図84）

84は平底となる内耳鍋の底部片であり、外面には炭化物が付着している。

B区　31号溝　（第209図85）

85は埴輪片で、外面には突帯が巡り、内外面に刷毛目が施されている。

B区　42号溝　（第209図86・87）

86・87は土師質の碗である。ロクロ成形による酸化焔焼成で、底面に回転糸切り痕を残し、高台が付けられた痕跡が認められる。86は口径13.6cm、底径6.8cm、器高4.5cmを測る。

B区　52号溝　（第210図88～91）

88は土師器の丸底となる鉢で、口径13.2cm、器高5.5cmを測る。口縁部は横撫でで、体部から底部にかけては篦削りによる。内面には細い研磨痕が顕著にみられ、全体に丁寧な作り。なお、口縁部内面は熱を受けたためか荒れている。89は台付甕の脚部片であり、外面に櫛工具による櫛歯が施されている。90は近世（17世紀）の瀬戸・美濃産の皿で、内面から外面高台際まで灰釉を施釉する。底部内面に、輪状の重ね焼き痕がある。91は擂鉢であり、内面に７本歯の掻き目を有する。

B区　58号溝　（第210図92）

92は縄文土器（中期）で、器面はかなり摩耗し、口縁部を欠くが、口縁部文様に隆帯で楕円状の文様を描いている。

B区　63号溝　（第210図93）

93は土師器の丸底となる鉢で、口径11.4cm、器高4.7cmを測る。口縁部が短く僅かに外反し横撫でで、体部から底部にかけては篦削りとなり、内面は撫でである。

B区　遺構外出土土器　（第210図94～97）

94は産地不明の皿で、内面に文様をもつ。95は近世の美濃産の瓶で、アメ釉。96・97は擂鉢の口縁部片であり、96の内面には掻き目を有し、97の内面には７本歯の掻き目を有する。なお、97は第１面の１区画より出土している。

C区　29号溝　（第211図98）

98は土師器の坏で、口径11.8cm、丸底、器高（3.8）cmを測る。胎土に細砂を含み緻密で、全体に摩耗しているが、口縁部は横撫でで、体部以下は篦削りとなる。

C区　第６面大溝　（第211図99～108）

大溝から出土した多量の土器は、そのほとんどが摩滅した状況にあり、その中でも比較的良好な土器を掲載した。99は土師器の器台の体部で、口径7.2cmを測り、内外面共に上下方向の丁寧な篦磨きが施されている。100～105は土師器の高坏の脚部である。100は脚径7.5cmを測り、脚端部が広がらずに僅かに内反気味と

なる。全体に丁寧な作りで、外面は研磨され、脚部内面は篦削りによる。101は脚径7.2cmを測り、胎土に大粒の砂粒を多量に含み、脚端部が僅かに広がる。上部の坏と脚との接合部は、坏の底部に棒状の突起を付け、この突起を脚部に差し込む作りとなっている。脚部の外面は篦撫でで、内面は篦削りによる。102～105は裾広がりとなる脚部で、内外面共に篦撫でが施されており、103の内面には輪積み痕が残る。106は土師器の壺の口縁部で、折返し口縁となる口縁部に網目状撚糸文を施し、以下の頸部に刷毛状工具による刷毛目をもつ。107は土師器の甕の口縁部で、口径18.0cmを測り、口縁部は横撫でで、頸部以下は縦位の篦削りとなり、内面は撫でによる。108は埴輪片で、外面に突帯が巡り、刷毛目が施されている。

C区　遺構外出土土器　（第211・212図109～125）

109は第8面から出土した土師器の直口壺で、口縁部および底部を欠損し、胴部が大きく張る壺の器形を呈する。胎土は細砂を含み緻密で、頸部下から肩部にかけての胴部上半には篦状の研磨痕がみられ、下半には横位の撫でがみられる。また、内面にも撫で痕がみられる。110・111は第6面から出土した土器で、110は口径15.8cmを測る土師器の甕であり、胴部下半を欠損する。口縁部は横撫でで、胴部は篦削りとなり、内面は篦撫でである。器厚が厚く、全体に雑な作り。111は口径14.1cmを測る単口縁となる壺であるが、直線的に開く口縁部の途中に一段の稜をもち、口舌部は平坦に面取りが成され、口縁部全体を横撫でである。球胴形となる胴部は斜位方向の篦撫でが施され、内面も撫でが丁寧に施されている。112・113は第4面から出土している。112は土師器の坏で、口径12.0cm、丸底、器高4.0cmを測り、口縁部は横撫でで、体部以下には篦削りとなり、内面は撫でである。113は須恵器の蓋で、径14.2cm、器高3.1cm、摘み径4.2cmを測り、焼成が甘く、灰橙色である。ロクロ成形で、口端部は短く折れ、摘み部は大きく、中央が窪む。114～125はAs－B軽石混土層中から出土した土器である。114～118は須恵器の大甕の胴部片で、外面に平行叩き目が、内面に青海波の当て目がみられる。この内、114・116・117は同一個体と思われる。119は瓦片である。120～122は擂鉢で、120の内面には太く粗い掻き目を有する。121の底部内面には円状の掻き目を有し、外面に回転糸切り痕がみられる。122の内面に縦位方向の掻き目をもち、底部内面に円状の掻き目を有する。123は近世（17世紀後半）の瀬戸・美濃産の輪禿皿で、内外面に長石釉を施釉し、内面底部に輪状の削り取りがある。124は近世（18世紀前半）の瀬戸・美濃産の輪禿皿で、内外面に灰釉を施釉し、内面底部に輪状の削り取りがあり、この輪状の高まりが123よりも低い。125は近世（18世紀）の瀬戸・美濃産の片口で、内外面に灰釉を施釉している。

C区取り付け道　3号土坑　（第213図126）

126は土師器の丸底となる坩で、口径11.4cm、器高6.0cmを測り、ほぼ完形である。胎土に細砂を含むが緻密で、全体に器厚が薄く、丁寧な作り。内外面共に撫でであるが、口縁部の一部に篦磨きが施されている。

C区取り付け道　4号土坑　（第213図128）

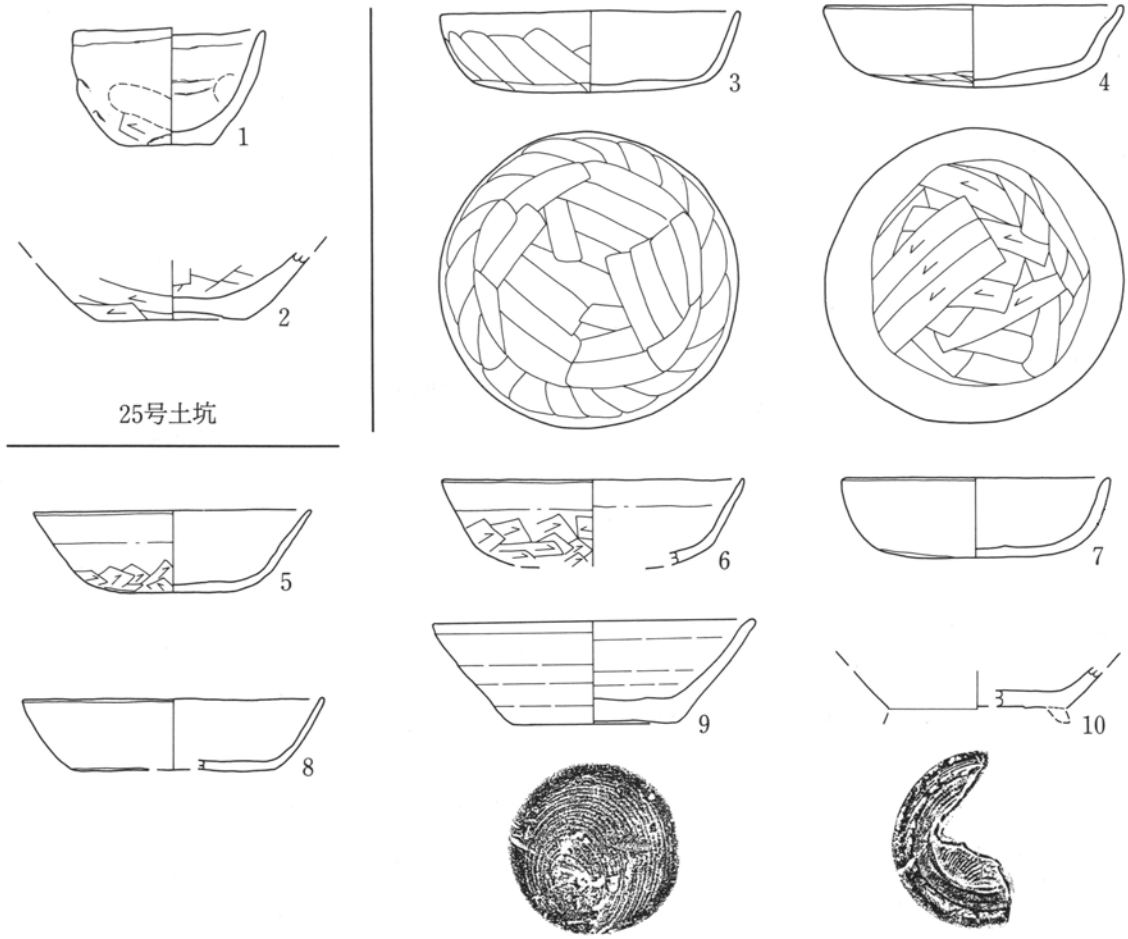
128はS字状口縁台付甕で、底部および脚部を欠損し、口径13.1cmを測る。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部からやや左下がりの斜位の櫛目を施す。胴部中半では右下がりの斜位の櫛目を施し、胴部下半では底部側の下から上方向へ縦位の櫛目を施している。また、内面には横位の篦撫で痕がみられ、肩部の内面には指頭痕が残る。なお、土坑から出土した遺物は、この1個体のみで、土坑中央より出土している。

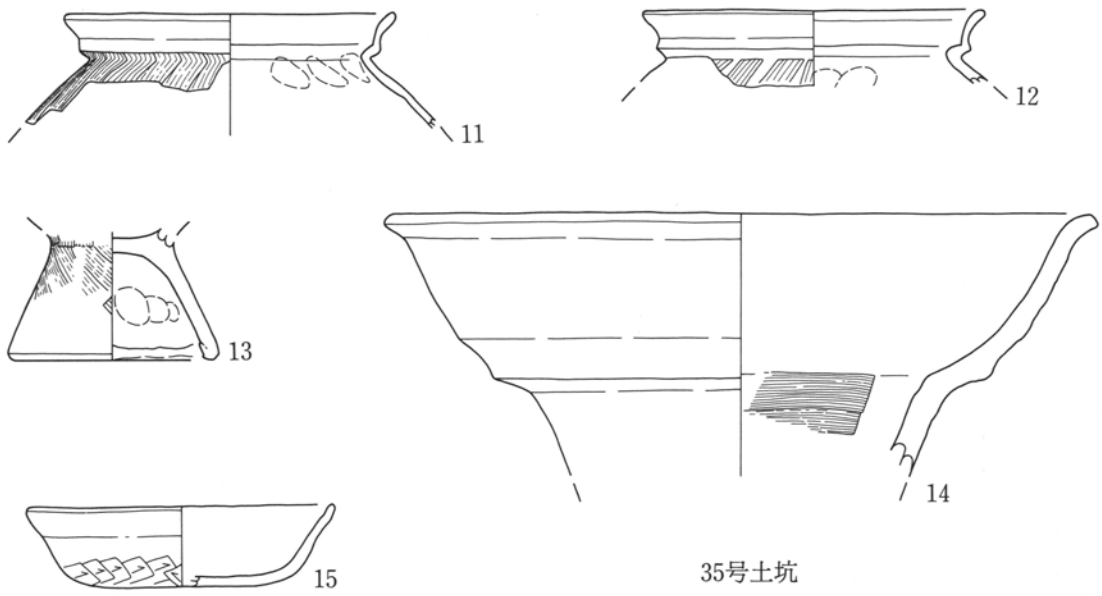
C区取り付け道　5号土坑　（第213図127）

127は球胴形となる壺の胴部上半である。器面は内外面共に荒れているが、外面の一部に研磨痕が残る。

C区取り付け道　遺物集中箇所　（第213・214図129～147）

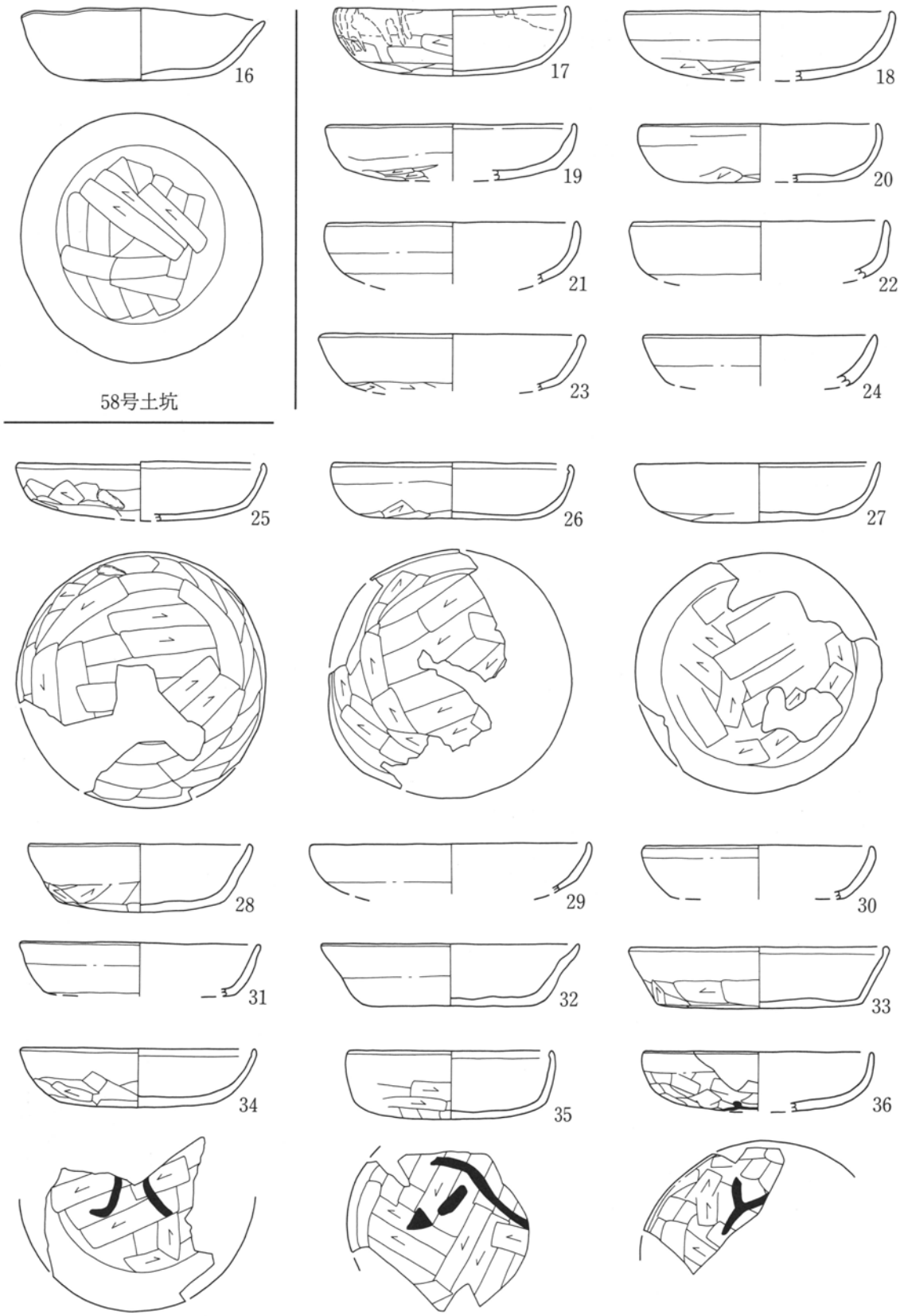
129～138はS字状口縁台付甕である。129は口径12.3cm、脚径9.1cm、器高28.4cmを測り、胎土に細砂を含むが緻密である。口縁部は最終段階で横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から斜位の櫛目を施す。胴部は底部側の下から上方向へ、やや曲線的に櫛目を施す。脚部には屈曲部から斜位の櫛目を施した後、縦位の磨り消し帯をもつ。また、底部付近には、指頭痕が数カ所にみられる。内面は丁寧な撫でとなるが、底面にはやや砂目が残る。さらに、肩部の内面には指頭痕が残り、脚部内面にも撫で痕が残っている。130は口径11.8cm、脚径8.7cm、器高25.6cmを測り、胎土に細砂を含むが緻密である。口縁部は最終段階で横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から斜位の櫛目を施す。胴部は底部側の下から上方向へ、櫛目を施す。脚部にも屈曲部から斜位の櫛目を施すが、下半は撫で。内面は丁寧な撫でとなるが、底面にはやや砂目が残る。また、撫で痕が残る部分もある。131は口径11.9cm、脚径8.9cm、器高20.6cmを測り、胎土に細砂を含むが緻密である。口縁部は最終段階で横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から斜位の櫛目を施す。胴部は底部側の下から上方向へ、櫛目を施す。脚部には屈曲部から端部へ篦削りを施した後、端部を横撫で。内面は丁寧な撫でが施されるが、撫で痕が残る部分もある。132の口縁部は2段目が開き気味となり、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施され、肩部内面は篦撫でによる。133の口縁部は直立気味となり、口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施され、肩部の内面には指頭痕が残る。134は口径10.6cmを測り、底部および脚部を欠損する。口縁部は最終段階で横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から斜位の目の粗い櫛目を施す。胴部は底部側の下から上方向へ櫛目を施し、内面は篦撫でである。135～138は台付甕の胴部下半で、胴部には、底部側の下から上方向へ目の粗い櫛目が施されている。脚部には、屈曲部から斜位の櫛目を施した後、縦位の磨り消し帯をもつ。また、脚部内面にも撫で痕が残る。なお、135の内面は丁寧な撫でとなるが、外面の櫛目とは異なる細かな櫛目が残る。136の内面底面にはやや砂目が残り、底部から上下方向の篦撫で痕が残る。137の脚部と体部との接合部は、菊花状の凹凸によって接合している状況がみてとれる。139～142は胴部が球胴状に張る壺であり、140を除く3点は小型の壺となる。139は胴部上半に斜位の櫛目が施された後、頸部下に横位の撫でを加える。胴部中位では、櫛目を残す横位部分と、その下を撫でを加える部分とがある。胴下部では篦削りが施され、内面には撫で痕が残る。140はやや厚手の壺で、頸部以下の胴部全体に斜位および横位の櫛目を施した後、撫でないし研磨を粗くおこなう。内面は撫でによる。141は口縁部が短い小型の壺で、器厚が薄く、丁寧な作りである。口縁部は横撫でで、頸部下の球胴形となる胴部は篦削りとなるが、一部に櫛目がみられる。口縁部内面は横撫で、胴部内面は篦撫でである。142は胴部外面は撫でで、内面は篦撫でによる。143は口径よりも脚径が大きく、中央に貫通する孔を有した器台で、口径9.6cm、脚径11.4cm、器高10.2cmを測る。体部には稜を有し、脚部は3カ所に孔を有する。体部の内外面は、共に撫でで、脚部の外面には篦研磨が施され、内面は撫でによる。144は口縁部を欠損するが、高坏の体部から脚部にかけてである。脚部は3カ所に孔を有し、端部が裾広がりとなる。内外面共に丁寧な撫でが施されるが、体部内面に米粒大状の刺突をもつ。145・146は丸底となる坩である。145は全体に器厚が薄く、丁寧な作りで、口径14.6cm、器高5.9cmを測る。口縁部の上半部は横撫であるが、下半部から体部および底部にかけては篦磨きが施されている。内面は口縁部は篦磨きで、体部から底面は撫でである。146も全体に器厚が薄く、丁寧な作りで、口径16.5



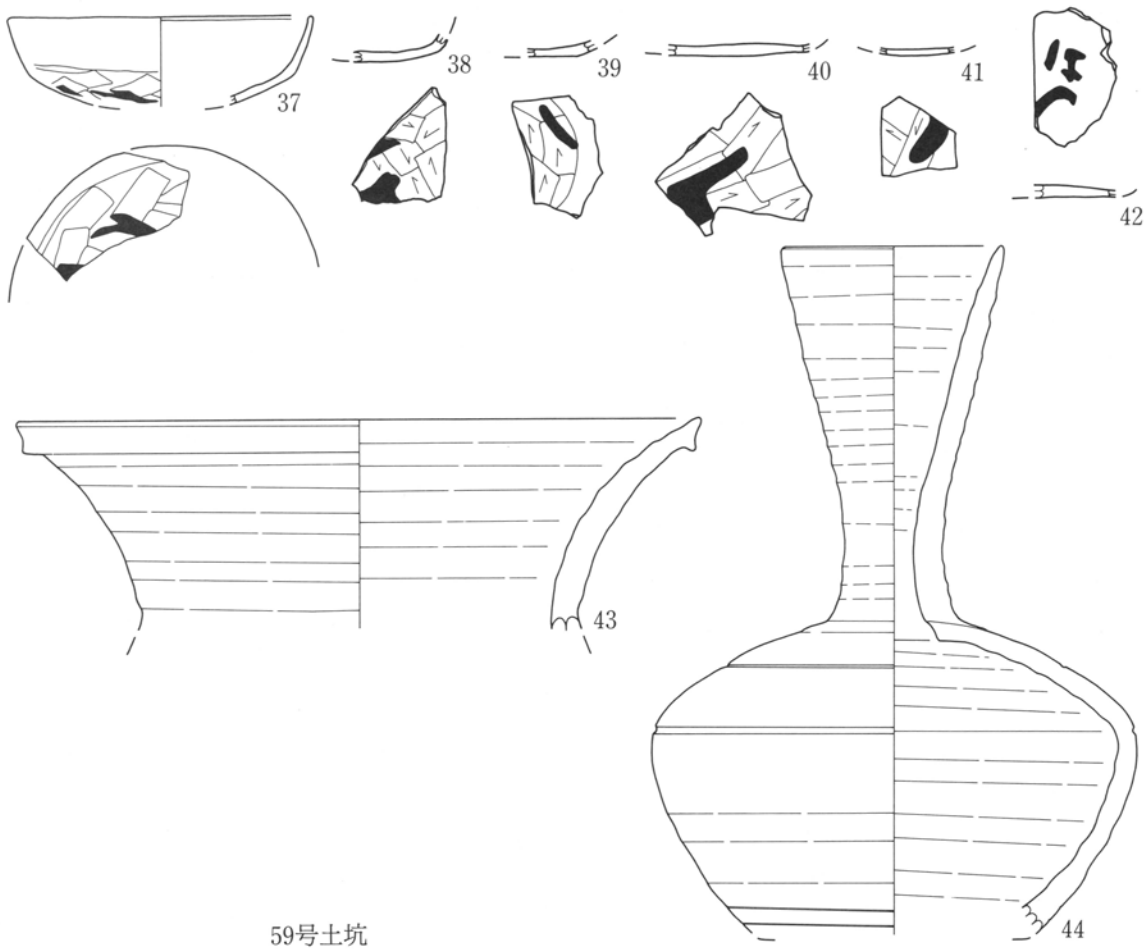


S＝1／3

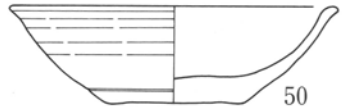
第203図　A区　出土土器（1）

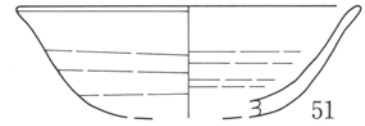


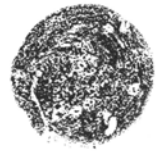
第204図　A区　出土土器(2)



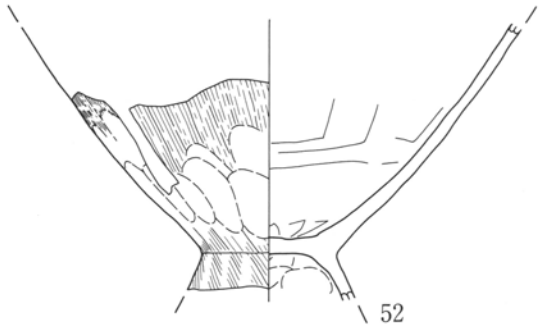
第205図　A区　出土土器(3)

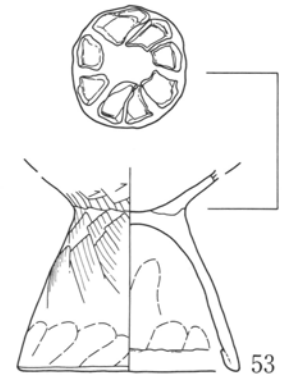




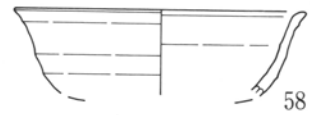


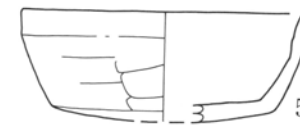
21号溝

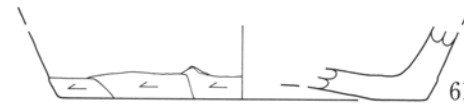




29号溝



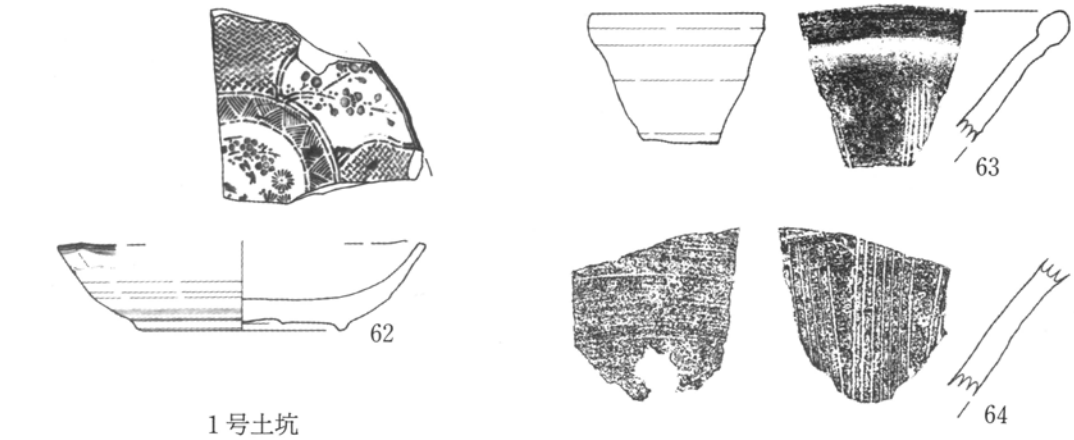




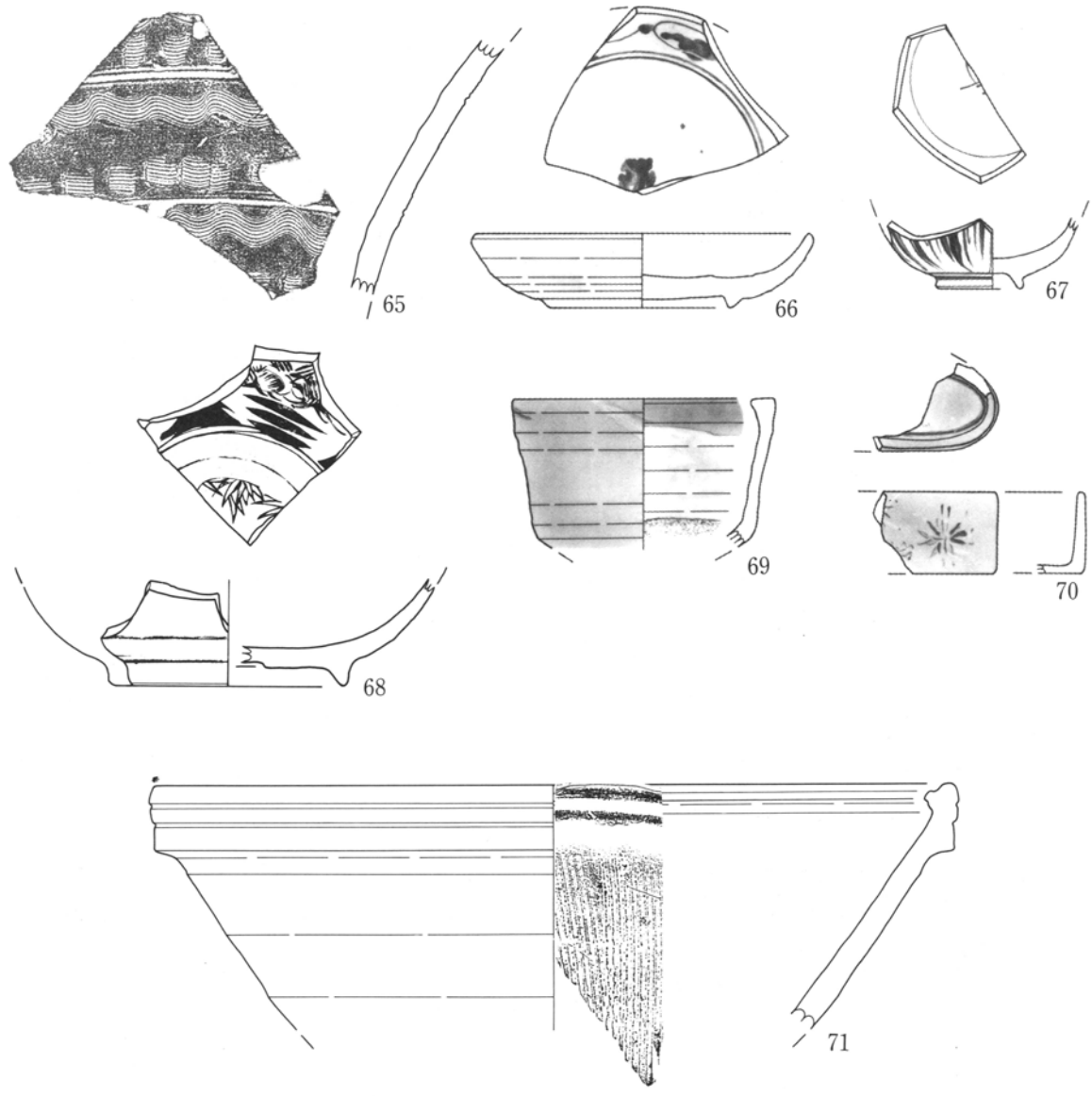
遺構外

S=1/3

第206図　A区　出土土器(4)



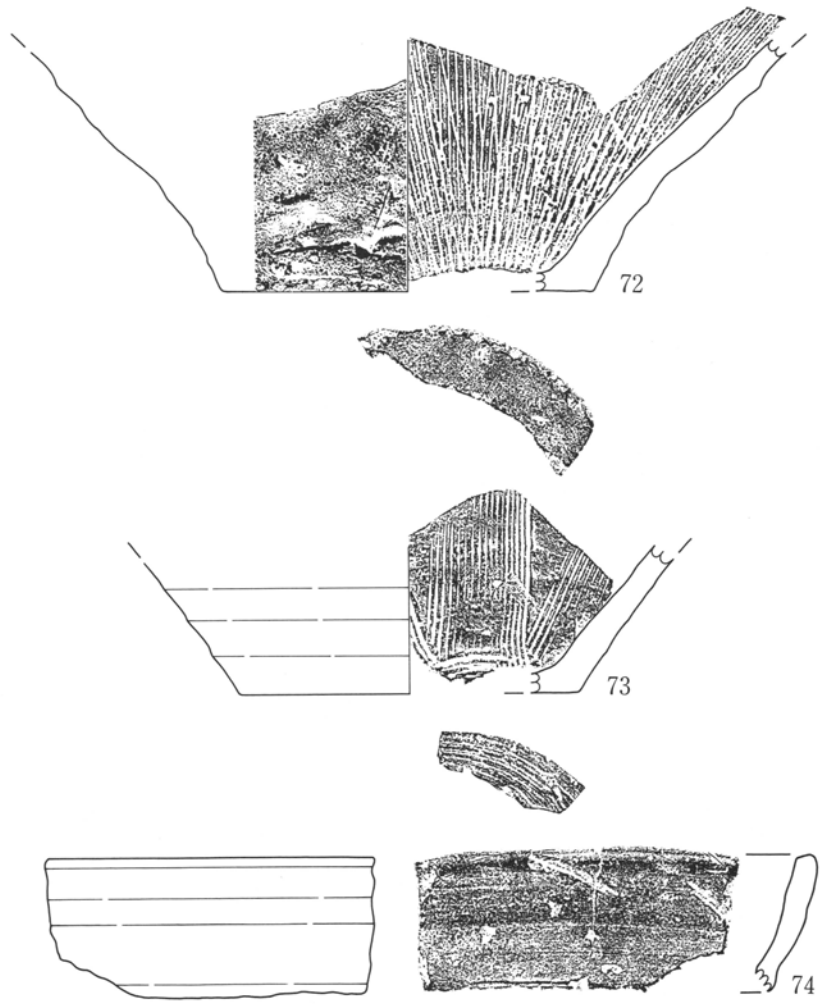
1号土坑



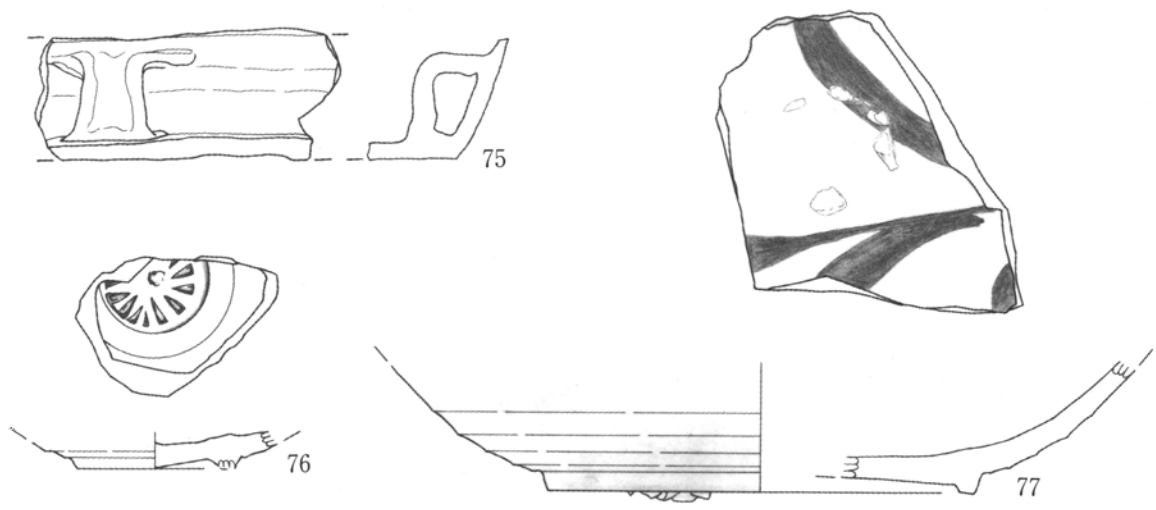
1号溝

S=1/3

第207図　B区　出土土器(1)



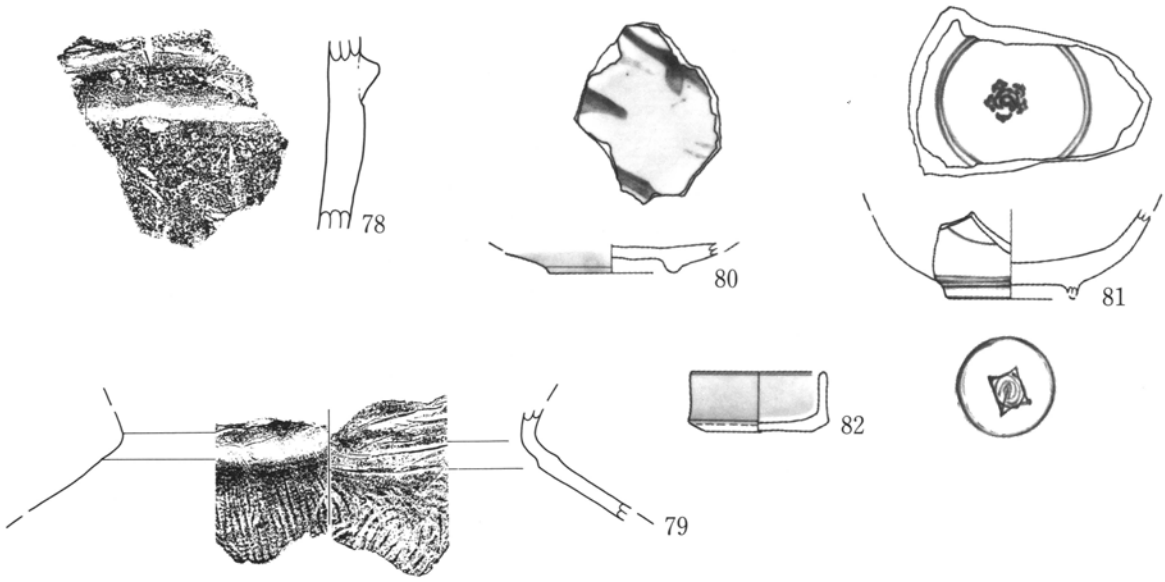
1号溝



2号溝

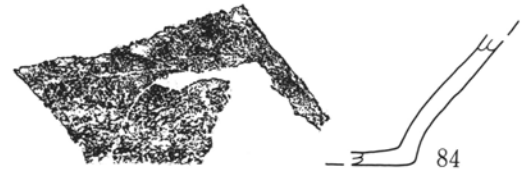
S=1/3

第208図　B区　出土土器(2)



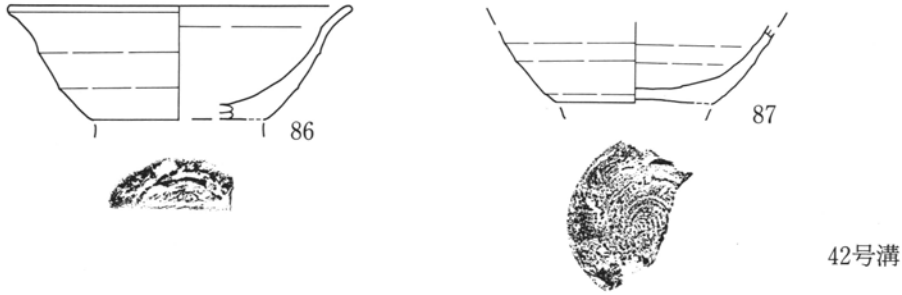
7号溝

12号溝



13号溝

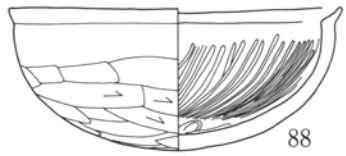
31号溝

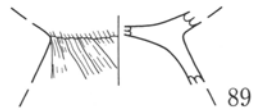


42号溝

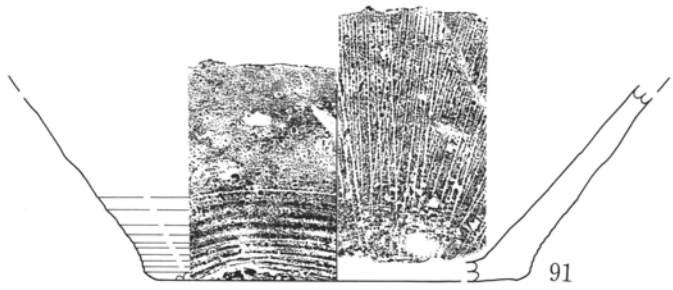
S=1/3

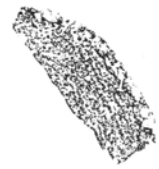
第209図　B区　出土土器(3)


88


89

90

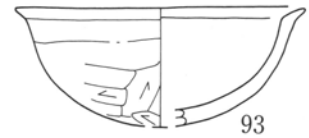

91



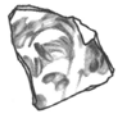
52号溝

92

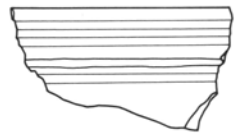
58号溝

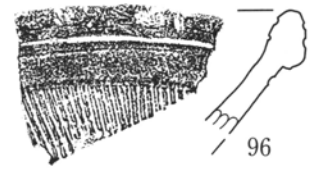

93

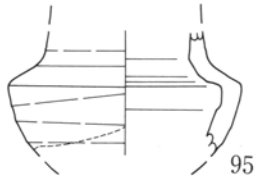
63号溝

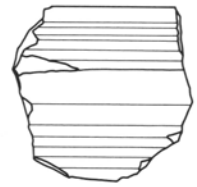


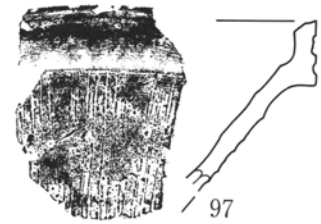
94




96


95

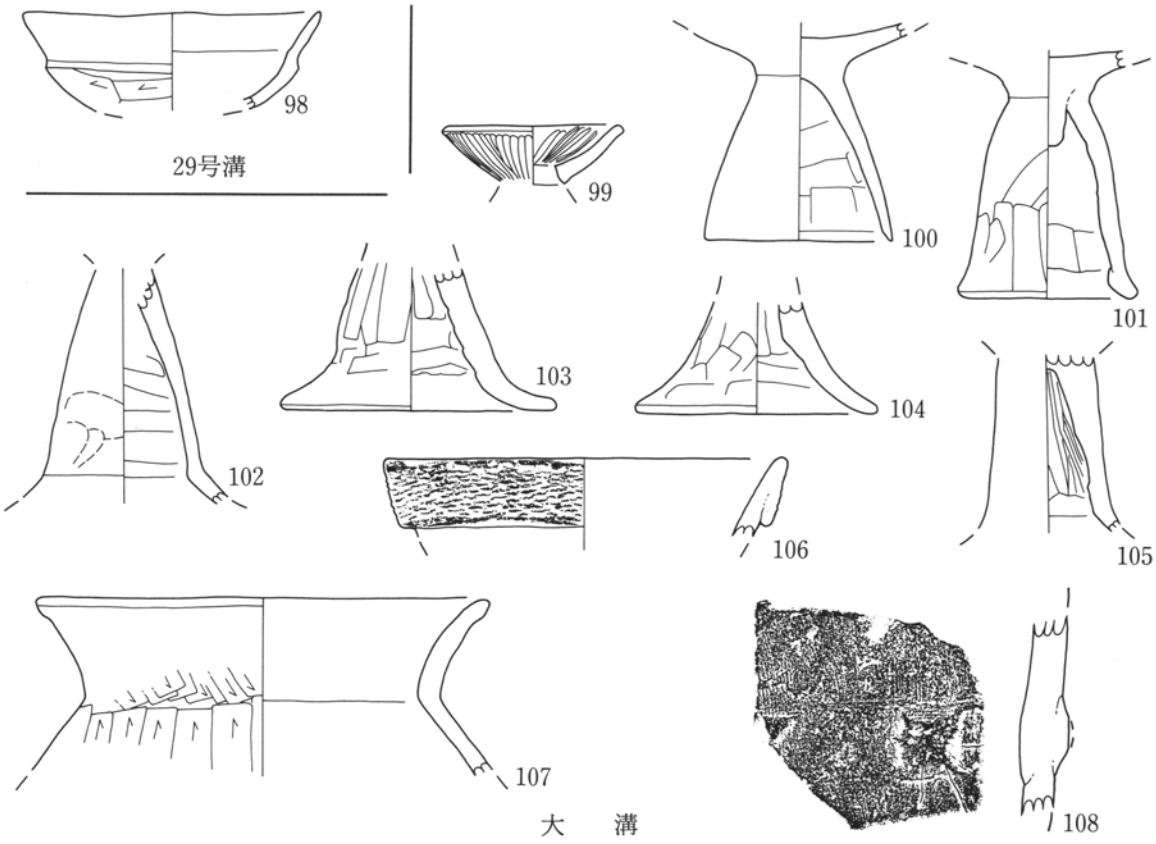


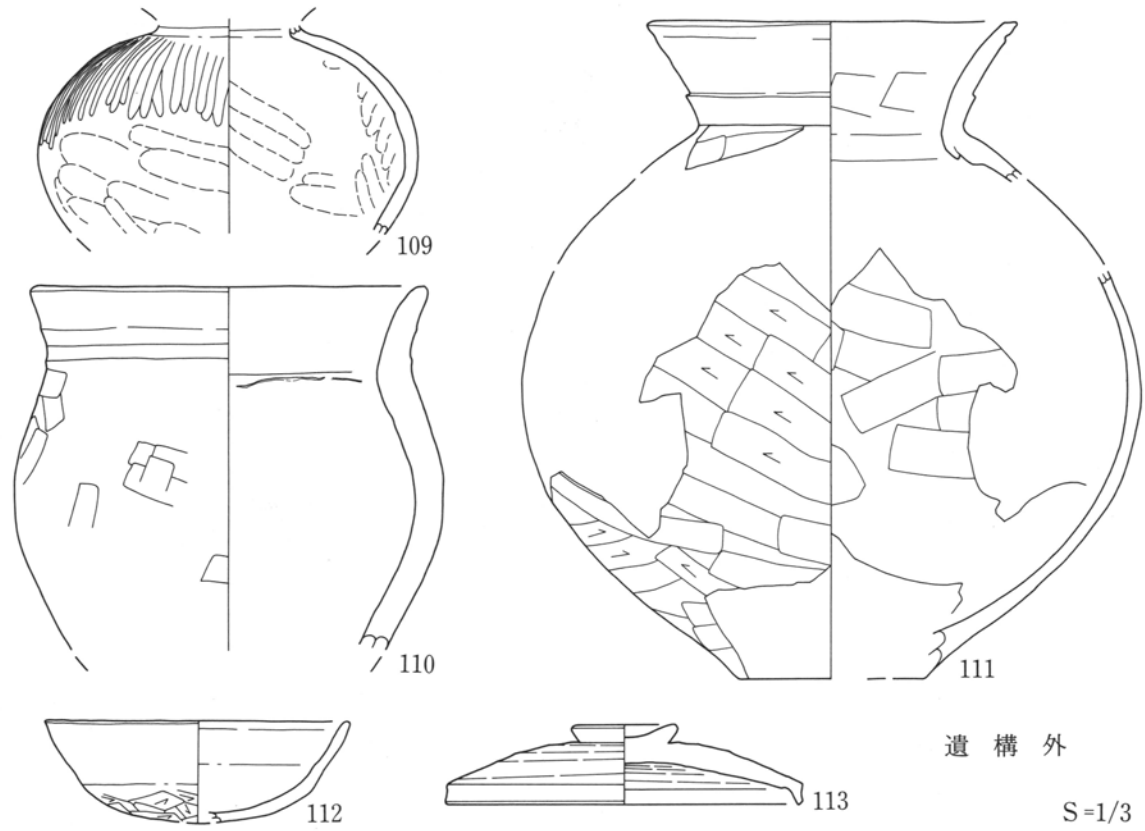

97

遺　構　外

S=1/3

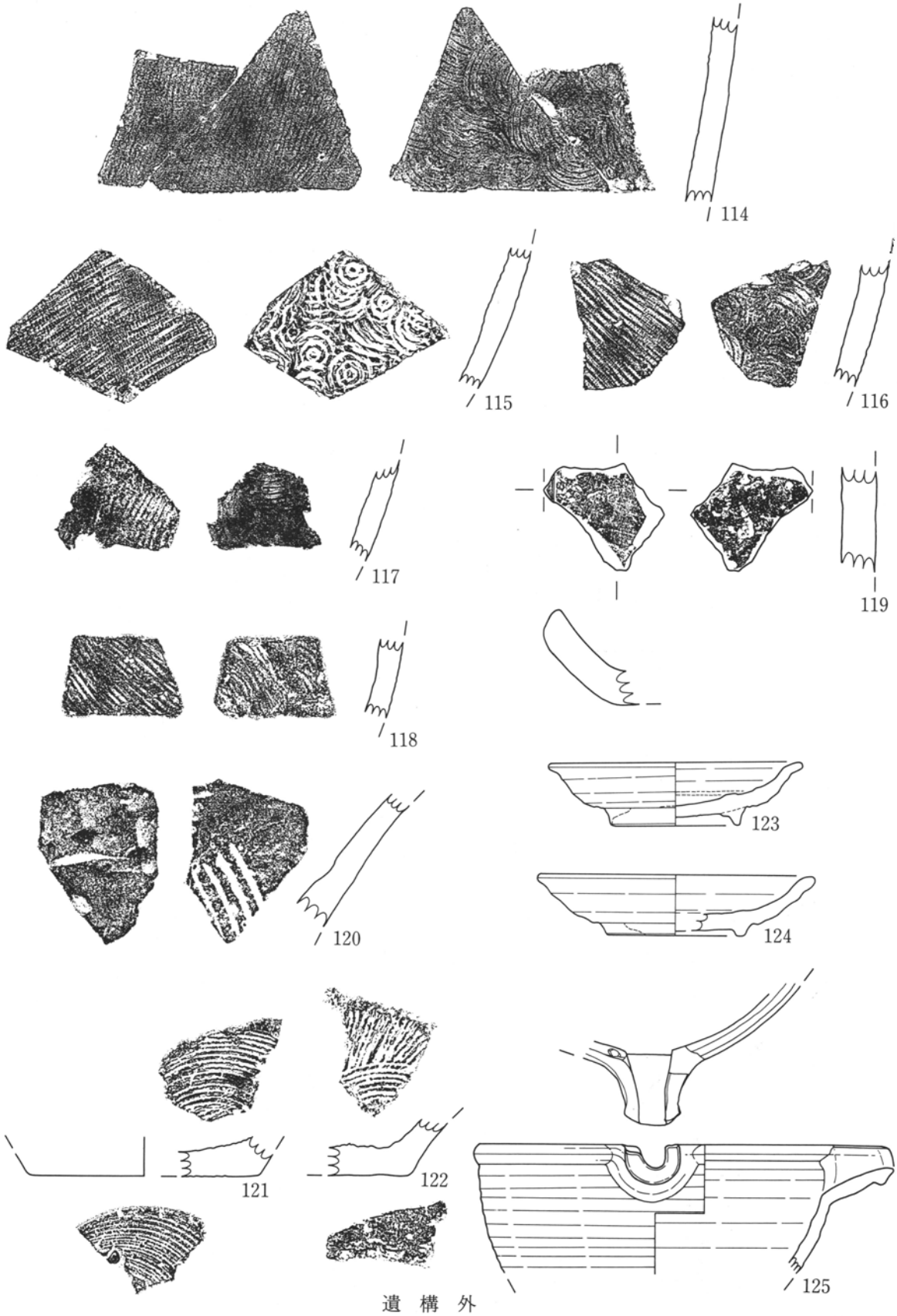
第210図　B区　出土土器(4)





S=1/3

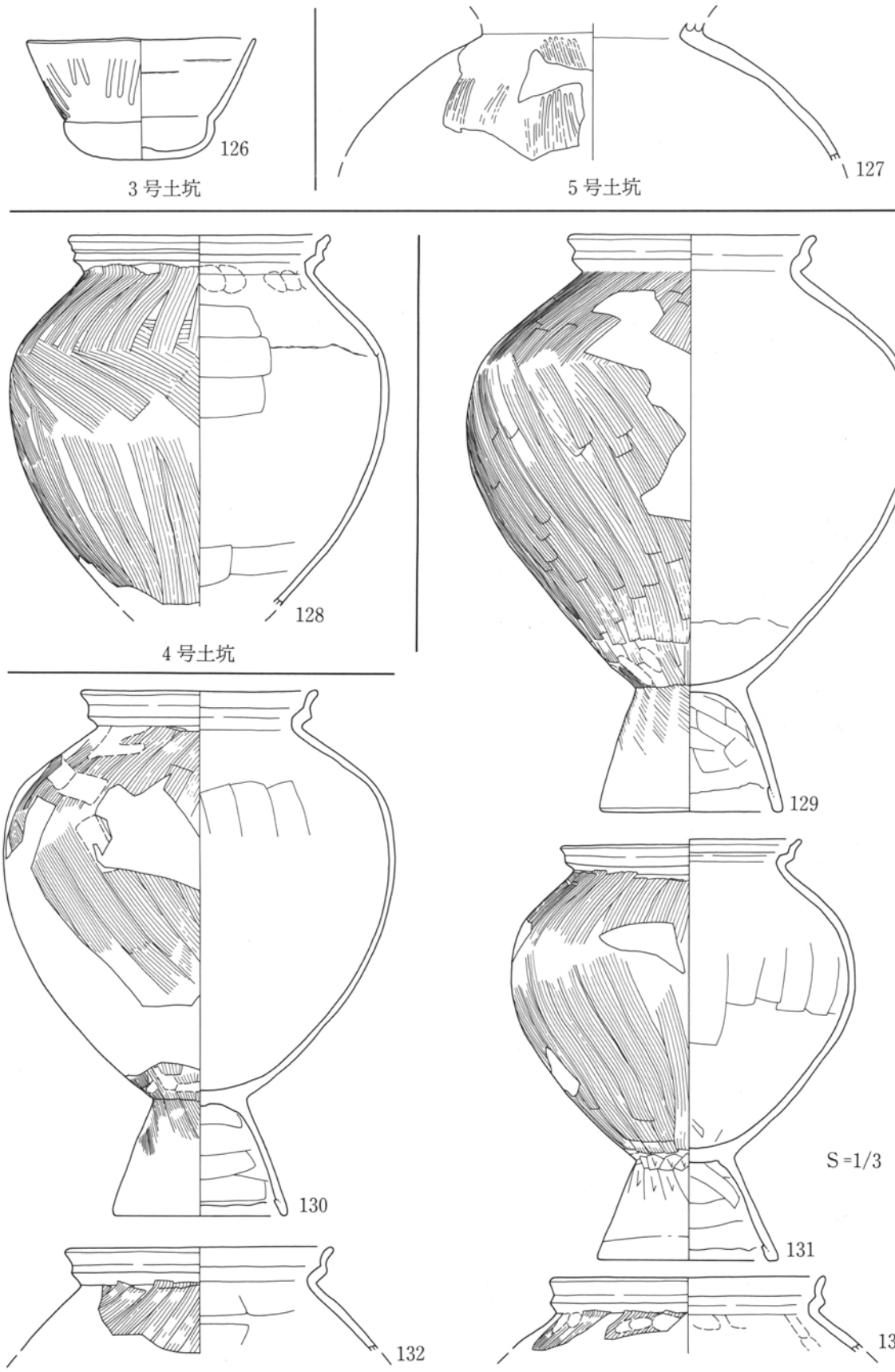
第211図　C区　出土土器(1)



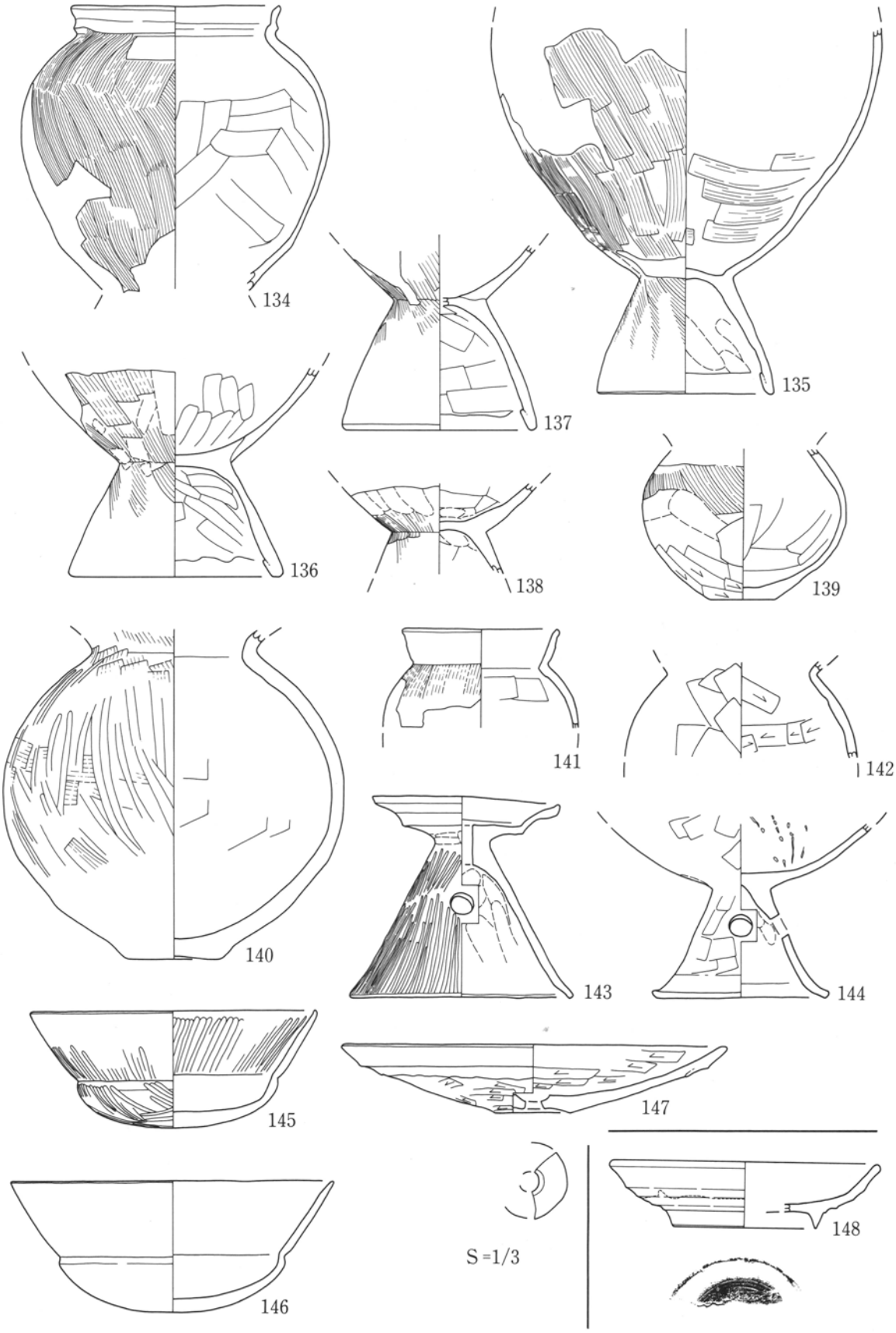
遺　構　外

S=1/3

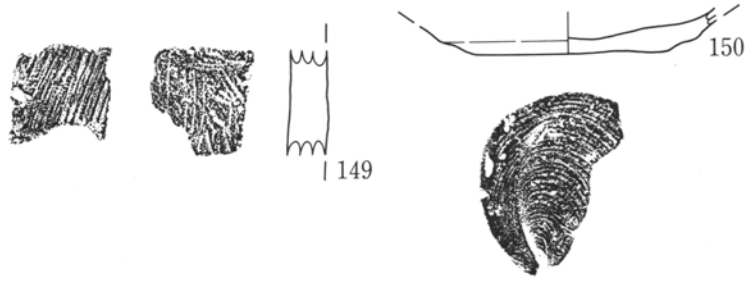
第212図　C区　出土土器(2)

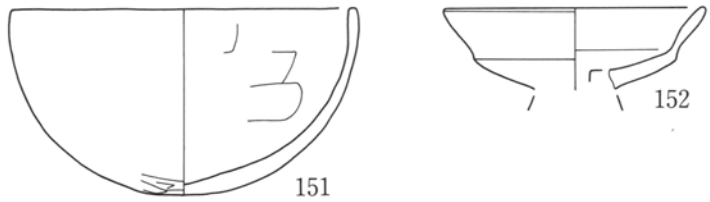


第213図　C区取り付け道　出土土器（1）



第214図　C区取り付け道　出土土器(2)





S=1/3

第215図　D区　出土土器

cm、器高6.6cmを測る。内外面共に丁寧な撫でによる。147は胎土に小砂を多く含み、底部から口縁部にかけて直線的に大きく開く皿状の器形を呈し、底部には焼成前の孔を有する。外面の口縁下の幅1cmほどが横撫で、以下の体部は篦撫でとなる。内面も篦撫で。口端部も含めて、全体に作りは丁寧である。また、この土器の破片の多くは本遺物集中箇所から出土しているが、E区取り付け道の遺物集中箇所出土の破片も接合している。なお、底部に孔を有するこの器形の土器は、管見する中では見あたらず、その器種・用途は不明である。器形からは蓋の可能性もあるが、孔を有する点では甑、器台とする見方もできる。しかし、甑とするには器形が浅すぎること等、多くの疑問がある。

C区取り付け道　遺構外出土土器　（第214図148）

148は近世（17世紀）の瀬戸・美濃産の皿で、内面から外面高台際まで灰釉を施釉する。

D区　11号溝　（第215図149・150）

149は埴輪片で、胎土に砂粒を多く含み、外面に刷毛目が施されている。150は土師質の坏の底部で、摩耗が著しく、ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を残す。

D区　遺構外出土土器　（第215図151・152）

151は胎土に砂粒を多く含む土師器の鉢で、口径13.7cm、器高7.3cmを測る。球形な丸底を呈し、口縁以下の体部および内面は横撫であるが、底部付近は篦削りが施される。152は脚部を欠く土師器の器台で、口径10.4cmを測る。体部と口縁部の堺に強い稜をもつ。内外面ともに撫でによる。

E区　1号住居　（第216図153～159）

153は二重口縁壺の口縁部で、朝顔状に大きく開く口縁部の内外面に、刷毛状工具による刷毛目が施され

ている。154～156は土師器の坏で、口縁部は横撫でで、体部および底部は篦削りを施し、内面は横撫でによる。154は完形で、口径11.1cm、器高3.6cmを測る。157は須恵器の碗の底部で、ロクロ成形で、付け高台をもち、底面には回転糸切り痕が残る。158は須恵器の鉢の底部で、底径8.6cmを測る。底部が大きく突出する形状を呈し、体部の成形は回転による撫でで、底面は篦削りによる。159は土師器のミニチュア（手捏ね）である。

E区　5号土坑　（第216図160）

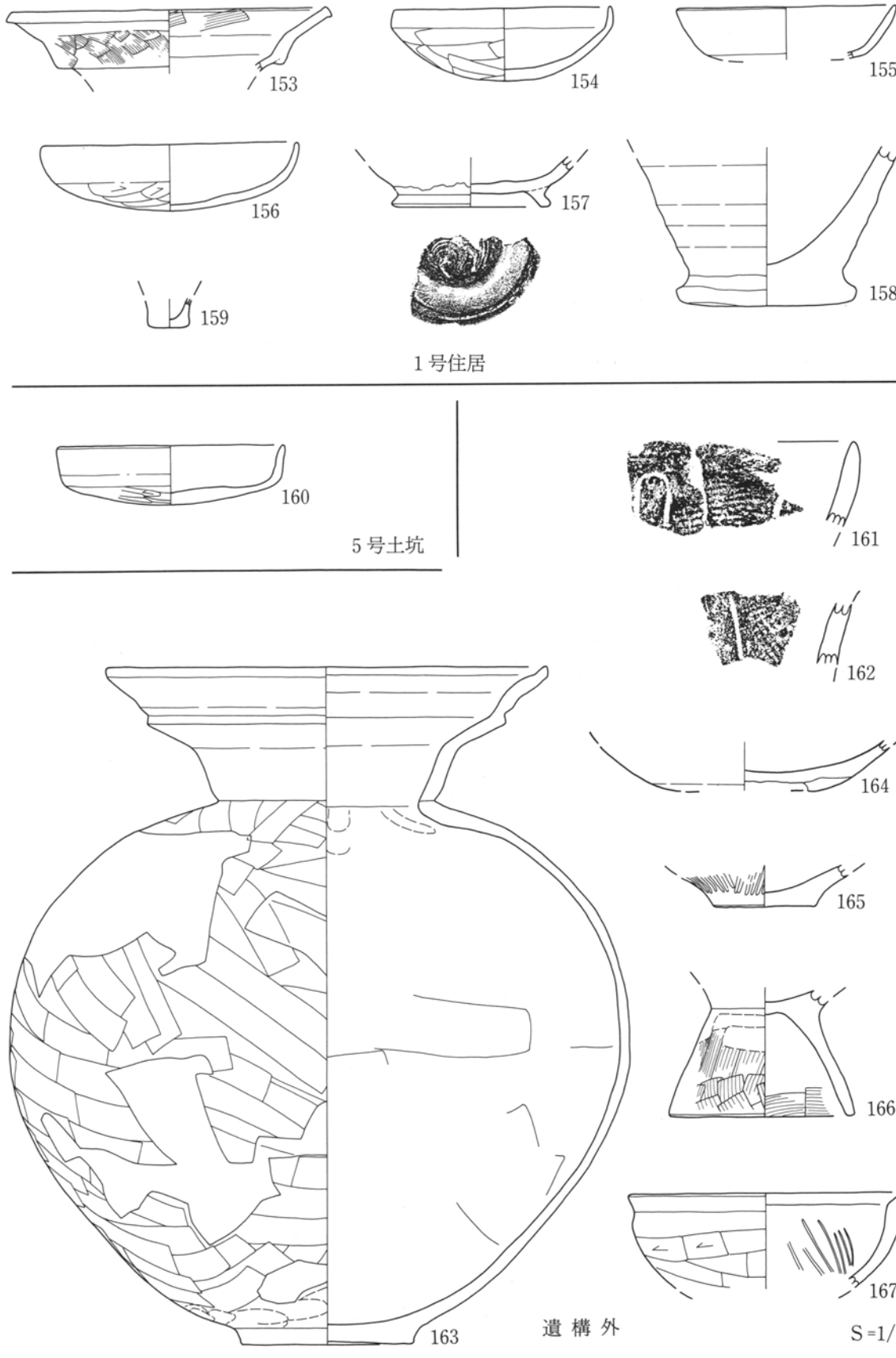
160は土師器の坏で、口径11.4cm、器高2.9cmを測る。胎土に砂粒を含み、口縁部は横撫でで、体部および底部は篦削りとなり、内面は横撫でである。

E区　遺構外出土土器　（第216・217図161～174）

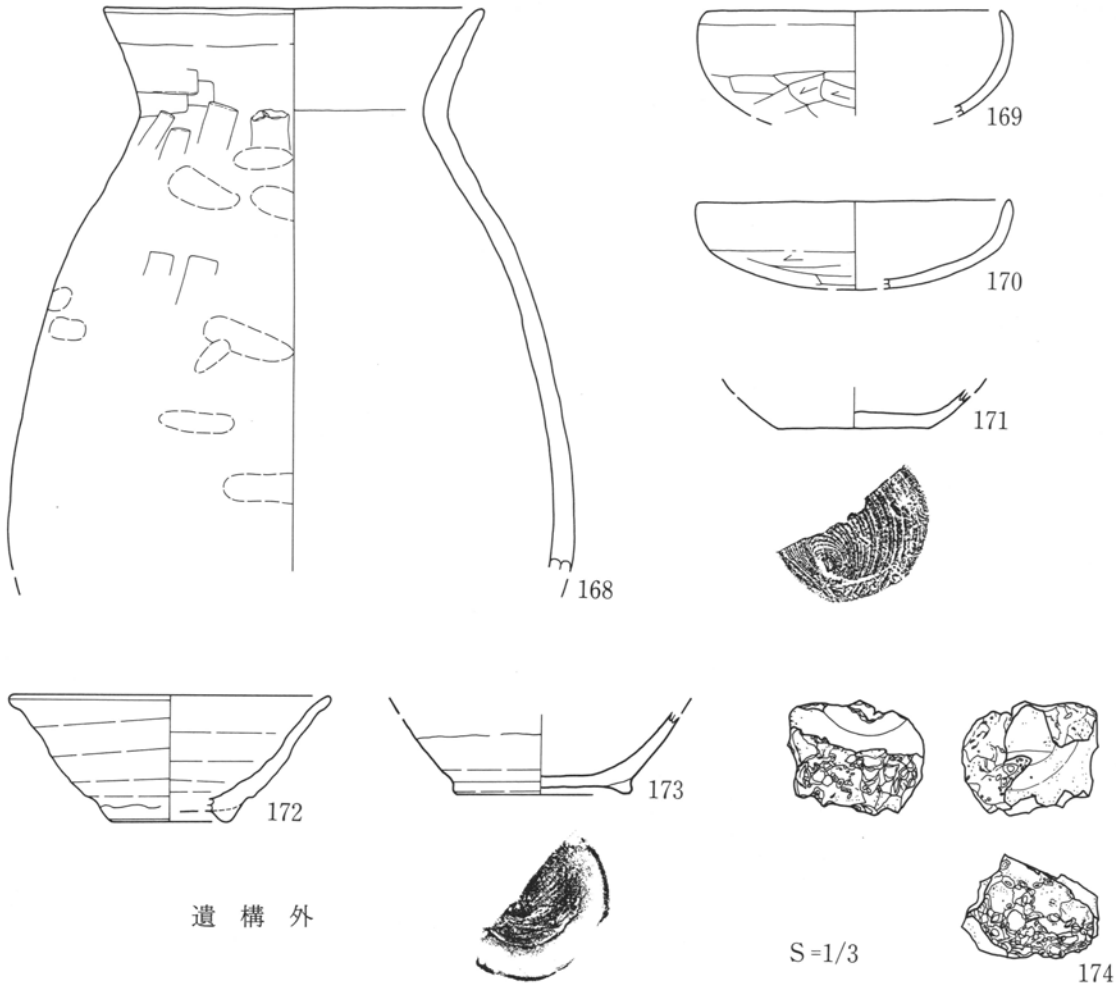
161・162は縄文土器で、161のやや内反気味となる口縁部には、沈線で縦長の楕円文様を描き、縦位回転による縄文が施されている。162の胴部には、沈線による懸垂文をもち、縦位回転の縄文が施されている。163は土師器の壺で、164・165は壺の底部である。163は口縁形状が二重口縁となり、胴部は大きく張るように球胴形を呈し、口径22.2cm、胴部最大径31.2cm、底径8.7cm、器高33.5cmを測る。口縁部は撫でで、頸部以下の胴部には斜位方向の篦削りが全面に施されている。内面には指頭痕が残り、篦撫でもみられる。全体に丁寧な作りである。なお、この163は、As－C軽石を混在させる第6面水田耕作土中より出土した。164は器面の摩耗が著しく、165の外面には研磨痕がみられる。166は台付甕の脚部であり、外面には縦位の櫛目をもち、内面には横位の櫛目が施されている。167は土師器の鉢で、第6面水田耕作土中より出土した。口縁部は短く外反し横撫でで、体部および底部は篦削りとなり、内面は横撫でであるが、研磨痕がみられる。168は土師器の甕で、口径7.6cmを測る。口縁部は横撫でで、頸部下に縦位の篦削りを施し、胴部全体に撫でとなる。部分的に指頭痕が残り、内面は撫でによる。169・170は土師器の坏で、169の口縁部はやや内反気味となり横撫でで、体部および底部は篦削りとなり、内面は横撫でによる。170の口縁部は横撫でで、体部および底部は篦削りとなり、内面は横撫でによる。171は須恵器の坏であり、ロクロ成形で、底面に回転糸切り痕を残す。172・173は須恵器の碗で、ロクロ成形で、付け高台をもち、173の底面には回転糸切り痕を残す。174は羽口片であり、表面の還元部には発泡がみられる。

E区取り付け道　4号土坑　（第218図175～178）

175はS字状口縁台付甕の口縁部で、口縁の2段目が開き気味となり、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施され、さらに横位の櫛目が施されている。177はやや厚手の単口縁となる台付甕で、脚部を欠損している。口縁部上半は刷毛目調整後に横撫でで、口縁以下は全体に刷毛目を施すが、胴部上半から口縁部にかけては下から上方向へ、胴部下半は横位・斜位・上下方向と様々である。口縁部内面には横位の刷毛目がみられるが、胴部内面は丁寧な撫でによる。176・178はやや厚手の単口縁となる甕である。176は口径16.6cm、底径7.3cm、器高15.9cmを測り、口縁部上半は刷毛目調整後に横撫でで、口縁以下は全体に刷毛目を施すが、胴部上半から口縁部にかけては縦方向、胴部下半は斜位方向である。また、下半部には篦状の研磨痕がみられる。口縁部内面には横位の刷毛目が施され、胴部内面は撫でによる。178は口径17.0cmを測り、全体に丁寧な作りで、内外面共に篦撫でによる。口縁から頸部にかけては上下方向の撫で後に横位の撫でで、胴部は横位の撫でを主体とする。



第216図　E区　出土土器(1)



第217図　E区　出土土器(2)

E区取り付け道　5号土坑　(第218図179～181)

179はS字状口縁台付甕の口縁部で、口縁の2段目がやや開き気味となり、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でであるが、撫で以前の刷毛目工具痕が部分的に残る。屈曲する頸部以下の肩部には、屈曲部から斜位の刷毛目を施し、その後横線を施すが、均等に施されているわけではない。なお、肩部の内面には指頭痕が残る。180はS字状口縁台付甕の胴部で、胴部の上から下方向への櫛目が施され、その後頸部から肩部にかけての斜位の櫛目が施されている。また、胴部内面には上下方向の指撫で痕がみられる。181は僅かに折返し口縁状となる甕の口縁部である。口縁部には横位の刷毛目が施され、以下の頸部には縦位の刷毛目、頸部以下の胴部には研磨が施されるようである。内面には横位の刷毛目が施されている。

E区取り付け道　1号溝　(第218図182)

182は高坏の脚部と思われるが、器台の可能性もある。脚部には孔を有し、器面は摩耗が著しく不明である。口縁部から胴部上半にかけては横位の撫でで、胴下半から脚部にかけては縦位の篦撫でが施されている。

E区取り付け道　2号溝　(第218図183)

胎土に、細砂を含む。口縁形状が単口縁となる小型の台付甕で、口径9.8cm、脚径6.7cm、器高12.1cmを測る。口縁部から胴部上半にかけては横位の撫で、胴下半から脚部にかけては縦位の箆撫でが施されている。

E区取り付け道　4号溝　（第219図184）

184は口縁部が大きく外反し、平底となる甕で、口径23.0cmを測る。胎土に1～3㎜ほどの粗い砂を多量に含み、片岩も含まれている。口縁部は横撫でであるが、頸部から胴部上半は下から上方への箆撫でで、頸部には箆撫で末端部の盛り上がりが顕著である。内面にも撫でが施されている。

E区取り付け道　遺物集中箇所　（第219～221図185～223）

185は完形の小型の鉢で、口径10.5cm、底径4.0cm、器高4.4cmを測り、内外面に赤色塗彩が施されている。口縁以下の外面に口縁から体部へ刷毛目が施され、その後口縁下に横位の刷毛目が施されている。内面にも僅かに刷毛目がみられる。186・187は坩で、186は口径14.2cmを測り、丸底となる体部が浅く、頸部が僅かにくびれ、口縁部が直線的に開く器形を呈する。全体に薄く丁寧な作りで、体部から底部には箆削りが施され、口縁部は横撫でと研磨が加えられる。内面にも研磨がみられる。187は口径15.2cmを測り、全体に丁寧な作りである。直線的に開く口縁部の内外面共に、横撫でと研磨が加えられる。188～197は高坏およびその脚部である。188は口径16.9cm、脚径13.0cm、器高13.3cmを測り、全体に丁寧な作りで、内外面共に撫で調整が施される。脚部端部がやや窄まり気味となり、脚部には3カ所に孔を有し、僅かに刷毛目の痕跡や工具の充て痕がみられる。189は坏部の底部付近で一段の稜をもち、全体に丁寧に撫でが施され、内外面共に赤彩されている。190は脚部に3カ所の孔を有し、内外面ともに撫でによる。191は脚部に3カ所の孔を有し、外面は縦位の櫛目で、内面は撫でによる。192は脚部に3カ所の孔を有し、脚上端は凹状の接合面となる。外面は縦位の箆磨きであるが、僅かに刷毛目が残り、内面は箆撫でによる。193は脚部に孔を有し、外面には刷毛目の痕跡が残る部分もみられるが、丁寧な撫でと赤彩により、内面は箆撫でとなる。194・195は脚上部がかなり細く、外面は縦位の箆磨きが施され、内面には指頭痕が残る。196は脚部上端の接合部が凹状となり、外面は縦位の箆撫でで、内面は撫でによる。197は薄く丁寧な作りで、端部が裾広がりとなる脚部の外面には研磨が施され、内面は撫でによる。198～215はS字状口縁台付甕の口縁部および脚部である。198は口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には目の広い櫛目が上から下方向へ施され、肩部には同工具による横線が施されている。内面は撫でによる。199は口縁部の2段目が開き気味となり、口舌部は内側に面取りされ、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施され、肩部の中間に横位の櫛目が巡らされている。また、口縁部内面は横撫でであるが横位の櫛目の痕跡が残り、肩部内面には横位の櫛目がみられる。200は口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から下方向へ櫛目が施され、内面には箆撫で痕がみられる。201は口縁部の2段目が開き、内面の屈曲線は不明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から櫛目が施されている。202は口縁部の2段目が直立気味となり、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施されている。203は口縁部が横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から下方向へ櫛目が施され、内面には箆撫で痕がみられる。204は口端部を欠き、口縁部は横撫でであるが、頸部以下には櫛工具による櫛目が加えられ、その後撫でを施す。頸部から肩部にかけて刷毛目痕が残り、内面は撫でによる。205は口縁部が横撫でで、屈曲する頸部以下の肩部には屈曲部から下方向へ刷毛目が施され、内面には箆撫で痕がみられる。206は口縁部の2段目がかなり開くが、内面の屈曲線をもつ。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には

屈曲部から櫛目が施されている。207は胴部の外面に櫛目をもち、脚部上半にも櫛目を施す。底部内面に砂目が粗く残り、篦状の充て痕もみられる。脚部内面には放射状の指撫で痕が残り、折返痕をもつ。208～211は外面には櫛目をもち、底部内面に砂目が粗く残り、脚部内面には放射状の指撫で痕が残る。212は胴部外面に櫛目をもち、脚部には縦に帯状となる斜位の櫛目を施している。底部内面に砂目が粗く残り、脚部内面には折返痕をもつ。213は脚部上半に斜位の櫛目をもち、内面には指撫で痕が残り、端部に折返をもつ。214は脚部外面が丁寧な撫でで、内面は撫でおよび指頭痕をもち、端部には折返し痕がみられる。215は脚部上半に斜位の櫛目をもち、内面の端部に折返をもつ。216は単口縁となる甕で、口縁部は横撫でであるが、頸部以下には櫛目が加えられる。頸部から胴部上半は斜位ないし縦方向で、以下は横位方向に刷毛目を施している。内面は横位ないし斜位の撫でによる。217はやや厚手の台付甕の胴部下半で、底部と脚部は抜け落ちるように欠損する。外面に上下方向の櫛目が施され、内面は撫でによる。218は壺で、口縁部は頸部から外反するように開き、胴部は球胴形となるが欠損し、底部は平底となる。外面は口縁部以下を篦撫でを主とし、口縁部内面では横位の篦磨きが主となり、頸部から肩部にかけての内面では刷毛状工具による刷毛目、底部内面では木口状篦工具による篦撫でが施されている。219は壺の胴部上半で、球胴状となる胴部上半には縦位の篦磨きが施され、内面は篦撫でとなる。220は壷の底部で、胴部下半の外面に篦撫でと一部に研磨痕がみられ、内面は篦撫でによる。221は甕の底部で、内外面を篦撫でによる。222は台付甕の脚部で、外面には粗い磨きを上下方向に施し、脚部内面は横位方向の磨きを施している。223は壺の底部で、胴部下半の内外面は共に篦撫でによる。

E区取り付け道　遺構外出土遺物　(第221図224～231)

224は縄文土器の口縁部片で、波状口縁の波頂部から隆帯と沈線を垂下させるように曲線的な文様を描く。225・227～229は土師器の坏の底部で、ロクロ成形により、底面に回転糸切り痕が残る。226は須恵器の広口壷で、口径12.8cm、底径6.3cm、器高6.4cmを測り、焼成は良好で、丁寧な作りである。頸部が緩く大きく屈曲し、広口で口縁が長く、口縁部および内面は回転による撫でで、体部および底部は回転による篦調整による。230は須恵器の碗で、ロクロ成形で、付け高台をもち、底面に僅かに回転糸切り痕が残る。231は産地不明の鉢で、内外面に灰釉を施釉している。

F区　4号溝　(第222図232)

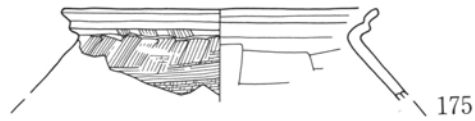
232は折返し口縁となる壺の口縁部で、口縁部には刷毛状工具による横位の刷毛目がみられ、頸部および内面は撫でによる。

F区　5号溝　(第222図233)

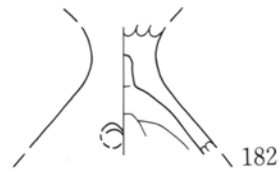
233はS字状口縁台付甕の底部片で、外面には櫛目をもち、底部・脚部内面に砂目が粗く残る。

F区　遺構外出土遺物　(第222図234～237)

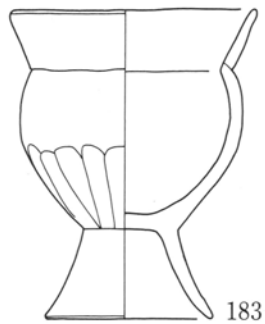
234は球胴形で頸部が大きく窄まる直口壺と思われ、口縁部は頸部との接合部で剝落するように欠損している。胴部外面には研磨痕がみられ、内面には縦位の指撫で痕が残る。235は土師器の甕で、口縁から頸部にかけての内外面は横撫でとなるが、頸部以下は不明瞭である。236は土師器の甕で、口縁から頸部にかけての内外面は横撫でであり、頸部以下は篦削りで、内面は篦撫でによる。237は土師器の鉢で、口縁部は短



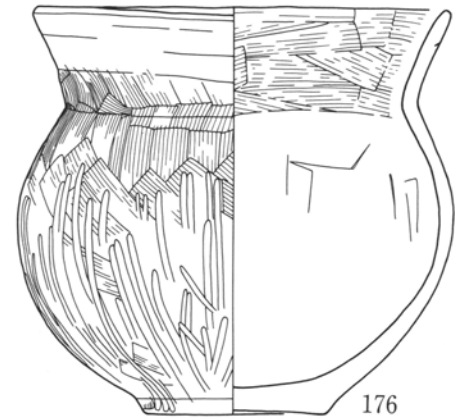
4 号土坑

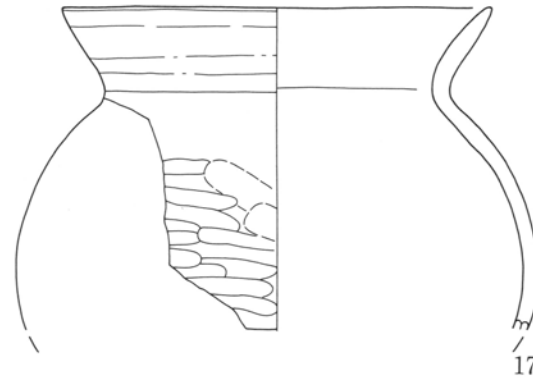


1 号溝

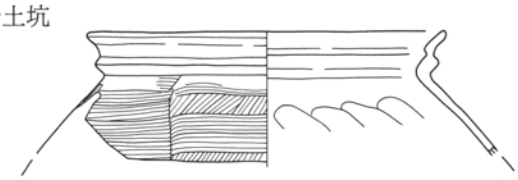


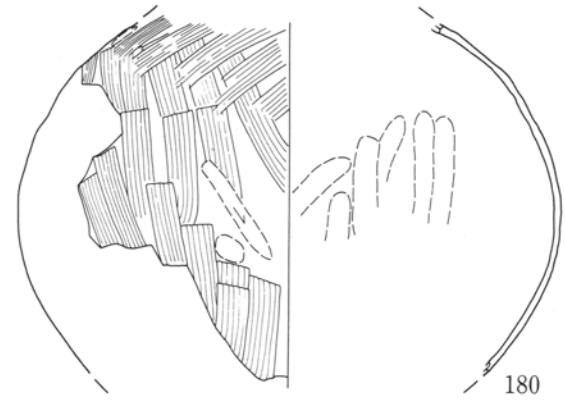
2 号溝

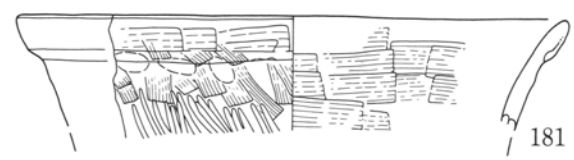




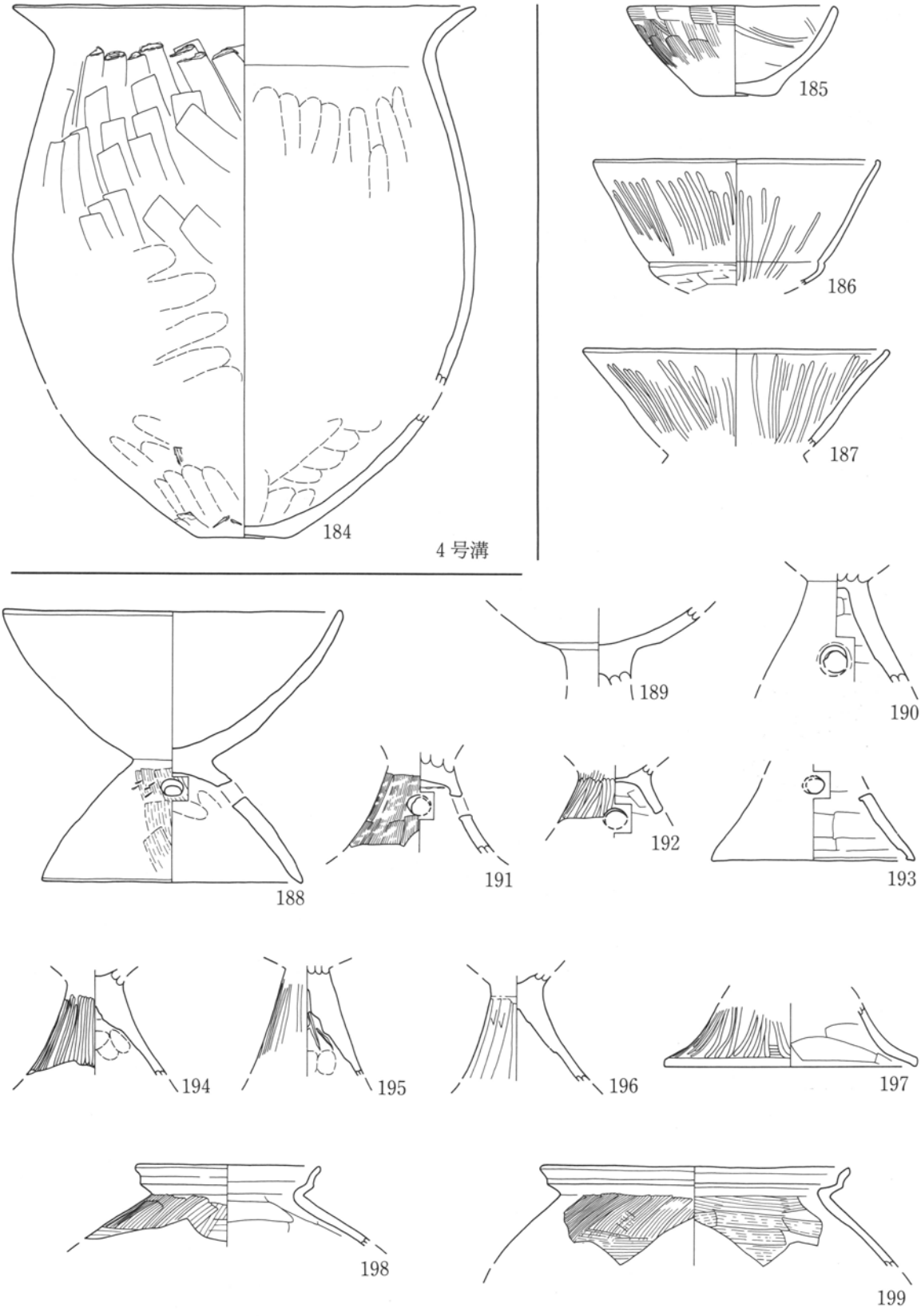
5 号土坑





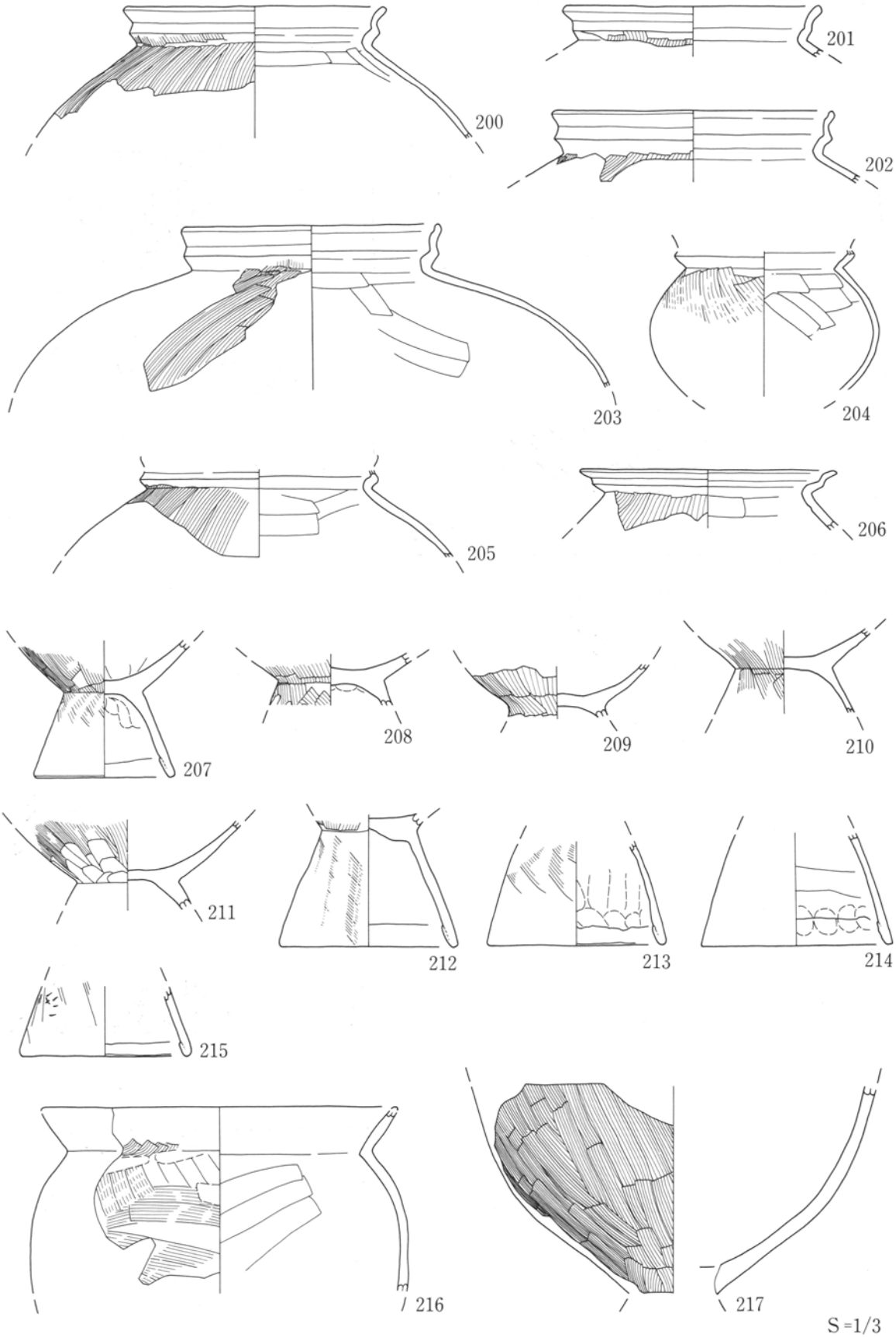


第218図　E区取り付け道　出土土器(1)　　S=1/3



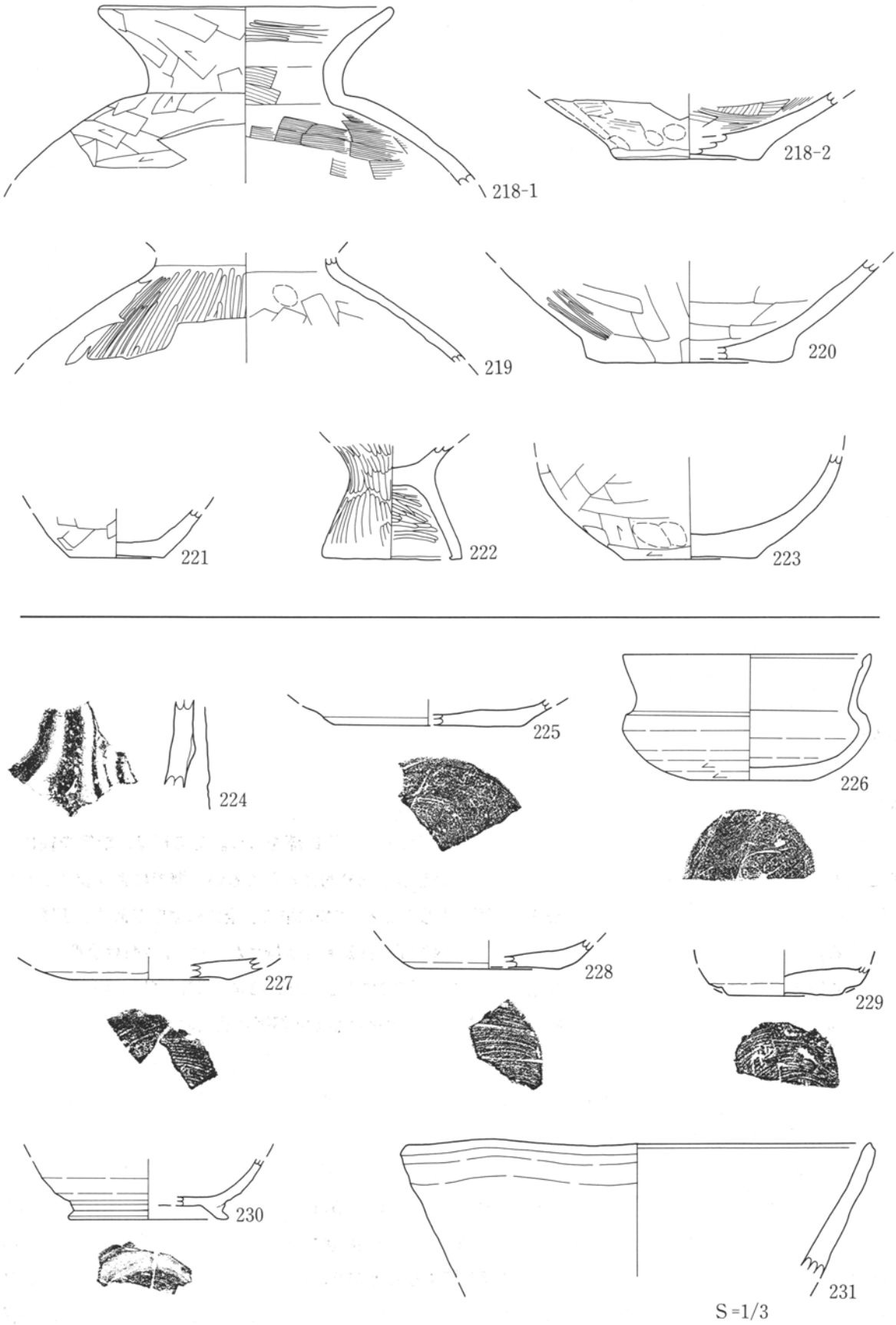
S=1/3

第219図　E区取り付け道　出土土器(2)

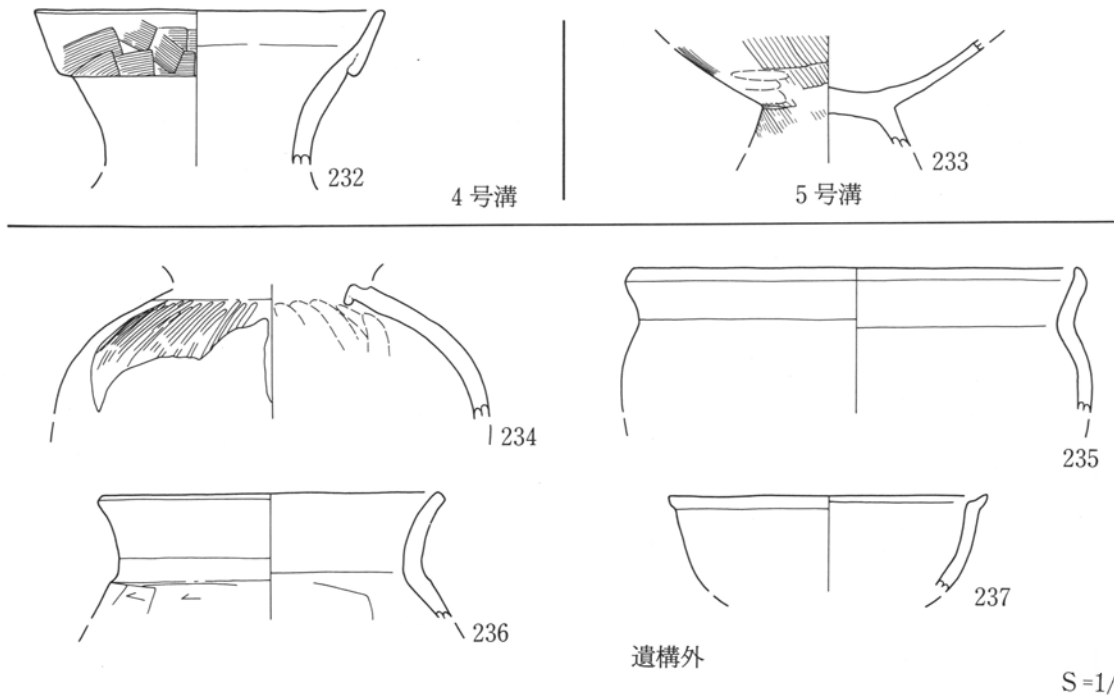


S=1/3

第220図　E区取り付け道　出土土器(3)



第221図　E区取り付け道　出土土器(4)



第222図　F区　出土土器

く外反し、横撫でにより、体部は篦削りと思われるが摩耗が著しい。内面は横撫でによる。

F区取り付け道　5号溝　(第223図238)

238はS字状口縁台付甕の脚部で、外面に斜位の櫛目が施され、内面には指頭による撫で痕と端部に折返し痕が残る。脚部と体部との接合部は、菊花状の凹凸によって接合している状況がみてとれる。

F区取り付け道　微高地出土遺物　(第223～225図239～267)

239は小型の片口土器で、丸底の楕円状となる浅鉢器形の一方に片口部をもつ。その形は、瓢箪を縦に半裁した形にも似ている。内外面共に刷毛状工具による刷毛目も部分的にみられるが、撫でにより成形されており、口端部および片口部には指頭痕が残る。内面は赤彩となる。240は坩で、全体に器厚が薄く、丁寧な作りである。口縁部を欠くが、体部から底部にかけての内外面には篦磨きが施されている。241は小型の坩で、体部から底部にかけての外面は篦削り後に撫でで、内面は撫でによる。242～244・257は高坏の坏部と脚部である。242は坏部の底部付近で一段の稜をもち、坏部と脚部の接合部は坏部側に凸状の出っ張りを有し、この出っ張りを脚部側に差し込む接合法であることが窺える。坏部の内外面は部分的に刷毛目を残すが、全体に丁寧に撫でが施され、赤彩されている。243は脚部に3カ所の孔を有し、上部の坏と脚との接合部は坏の底部に凸状の突起を付け、この突起を脚部に差し込む作りとなっている。脚部の外面は撫でによる。244の脚部の坏と脚との接合部は、坏の底部に棒状の突起を付け、この突起を脚部に差し込む作りとなっている。脚部の外面は篦撫でによる。257は脚部の外面に刷毛目の痕跡がみられ、坏部の内面は赤彩されている。245～247は器台の体部である。245は全体に丁寧な作りで、内外面共に撫でであるが、外面の一部には刷毛目の痕跡が残る。内外面共に赤彩となる。246は口端部が短く立ち上がり、内外面共に丁寧な撫でによる。247はやや厚手であるが、内外面共に丁寧な撫でによる。248は小型の甕であり、台付となる可能性もある。口縁部から頸部にかけては撫でで、胴部は篦削りとなり、内面は撫でによる。249～256・258はS字状口縁台付

甕の口縁部と脚部である。249の口縁部は2段目が開き気味となり、口舌部は内側に面取りされ、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施される。250の口縁部は2段目が直立気味となり、内面の屈曲線が明瞭である。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施される。251の口縁部は横撫でであるが、頸部以下の櫛目成形後である。屈曲する頸部以下には、先端が細くやや密な工具による櫛目が上から下方向へ施されている。内面には篦撫で痕が残る。252の口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には櫛目が施される。253の口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には先端が細い工具による刷毛目が上から下方向へ施されている。254の口縁部は2段目が開き気味となり、頸部内面は面取りが成されている。口縁部は横撫でで、屈曲する頸部以下には屈曲部から斜位の櫛目が施されている。255は胴部上半となる肩部全体に、左下がりとなる斜位の櫛目と、横位の櫛目を巡らせている。256は胴部上半となる肩部に、左下がりとなる斜位の櫛目と、横位の櫛目を間隔をあけて数段巡らせている。258は脚の外面上半に櫛状工具による櫛目がみられ、内面は撫でで、端部に折返し痕がある。259は単口縁となる甕であり、全体に丁寧な作りで、目の細かな刷毛目を施す。口縁から胴部上半にかけては、下から上方向への刷毛目を施し、その後口縁直下に横位に施す。胴部の中位以下には横位の刷毛目が施され、その後さらに縦位の研磨が施される。内面は僅かに刷毛目痕を残すのみで、全体に横位の撫でによる。260・261・263は壺である。260の口縁部は頸部から外反するように開き、胴部は球胴形を呈し、口舌部には細かな櫛状工具による縦位の刺突が施され、口縁部は撫でによる。肩部には細かな櫛状工具による横位線が2段巡らされ、頸部の括れ部から横位線の1段目までは同工具による縦位の撫でで、横位線の1段目と2段目の間には同工具による斜位の刺突が5段施され、その様は羽状となる。肩部の内面には、指頭痕とは異なる指頭大の充て痕が顕著にみられる。261の口縁部から頸部にかけては比較的に短く、外面は刷毛目状工具による刷毛目成形後に篦磨きが施され、内面では横位の篦磨きが施されている。263は胴部の外面に刷毛状工具による斜位の刷毛目がみられ、内面は篦撫でである。262は有孔鉢（甑）の底部であり、底部の中央に径8㎜ほどの焼成前の穿孔を有する。外面は篦削りで、内面は篦撫でである。264は壺の底部で、全体に丁寧な作りとなり、内外面共に篦撫でによる。265は甕の底部で、胴部下半は縦位の篦撫でによる。266は壺の胴部下半で、外面には粗く篦磨きが施され、内面は篦撫でによる。267は壺の胴部下半で、胴部下半に最大径をもち、底部は比較的に小さい。全体に撫で調整が施されているが、部分的に刷毛目の痕跡を残す。なお、260・267については5号溝内から出土した土器片が接合している。

F区取り付け道　遺構外出土遺物　（第225図268・269）

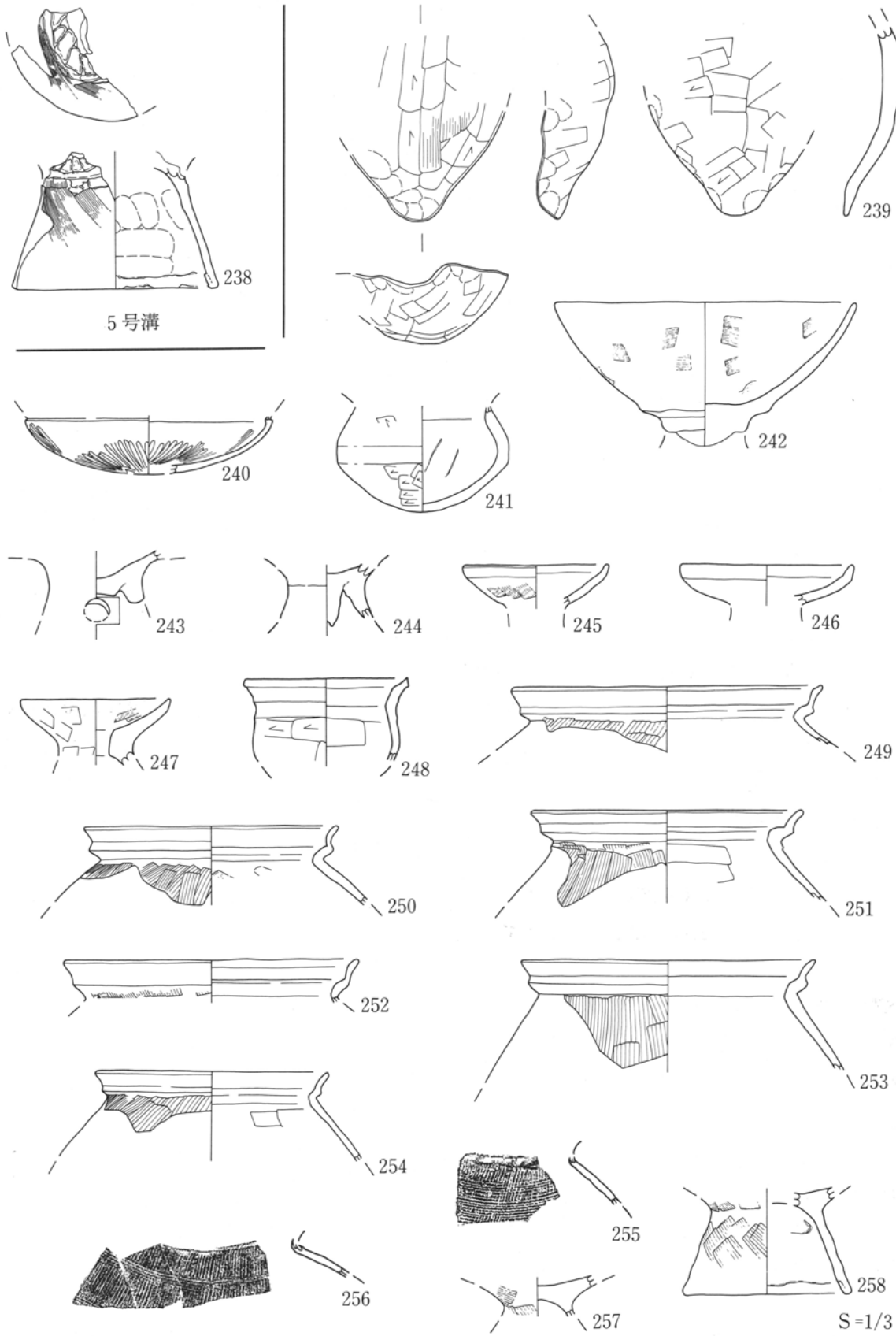
268は器高の浅い焙烙鍋であり、内面に内耳が付いていたと考えられる。269は縄文土器で、胴部に縦に垂下する太い沈線と、縦の細沈線が幾条も施文されている。

石器・石製品類

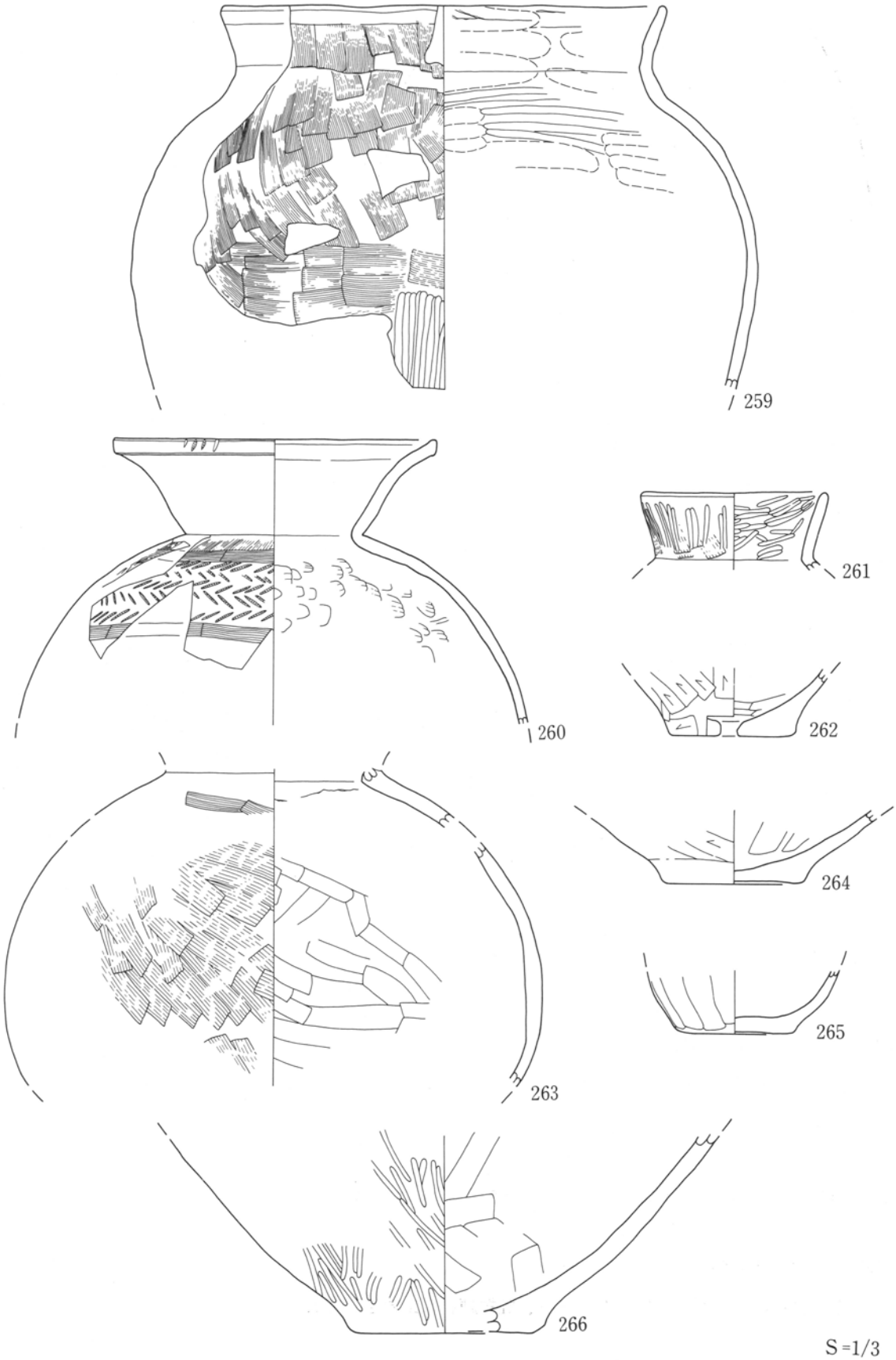
出土した石器・石製品には、石鏃やスクレイパー類をはじめとする縄文時代の石器があり、板碑や砥石・石臼等の中世以降の遺物がある。また、管玉や小玉等の玉類も出土している。

石鏃　（第226図1～4）

出土した石鏃のうち、1～3は二股となる無茎のもので、珪質頁岩・黒曜石・玉随を石材としている。ま

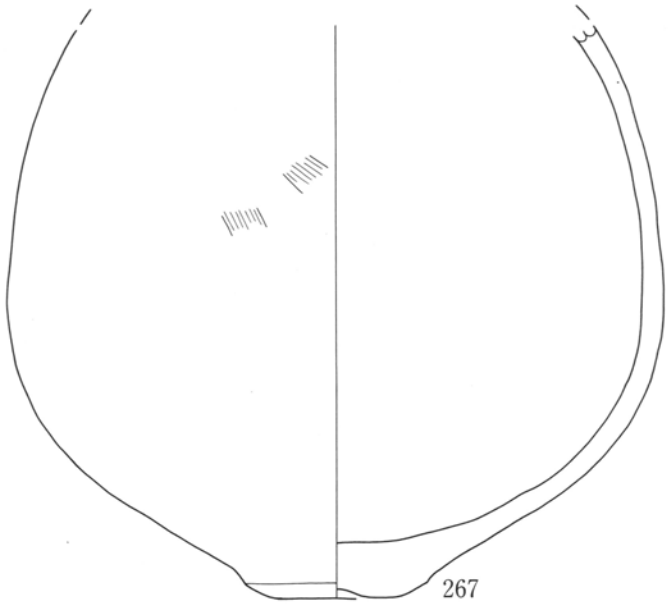


第223図　F区取り付け道　出土土器(1)



S=1/3

第224図　F区取り付け道　出土土器(2)



S=1/3

第225図　F区取り付け道　出土土器(3)

た、4は有茎となる石鏃であり、チャートを石材としている。これらの石鏃は、出土した遺構面とは異なる縄文時代の遺物である。

スクレイパー　(第226図5・6)

2点ともF区取り付け道第8面から出土しており、珪質頁岩・硬質泥岩を石材としている。

石核　(第226図7)

C区取り付け道第6面から出土しており、黒色頁岩を石材としている。

打製石斧　(第226図8)

E区取り付け道第8面から出土しており、細粒輝石安山岩を石材としている。

敲き石　(第226図9)

F区第6面から出土し、黒色片岩を石材とした敲き石で、上端に敲打痕、下端には磨き痕が顕著である。

磨り石　（第226図10）

E区第4面の1号住居跡から出土し、粗粒輝石安山岩を石材とした磨り石で縄文時代の遺物と考えられる。

板碑　（第226図11・12）

2点の板碑が出土しているが、何れも破片であり、銘等は不明。11はE区第2面となる中世面の8号溝から出土している。12はA区第1面からである。

砥石　（第226・227図13～15）

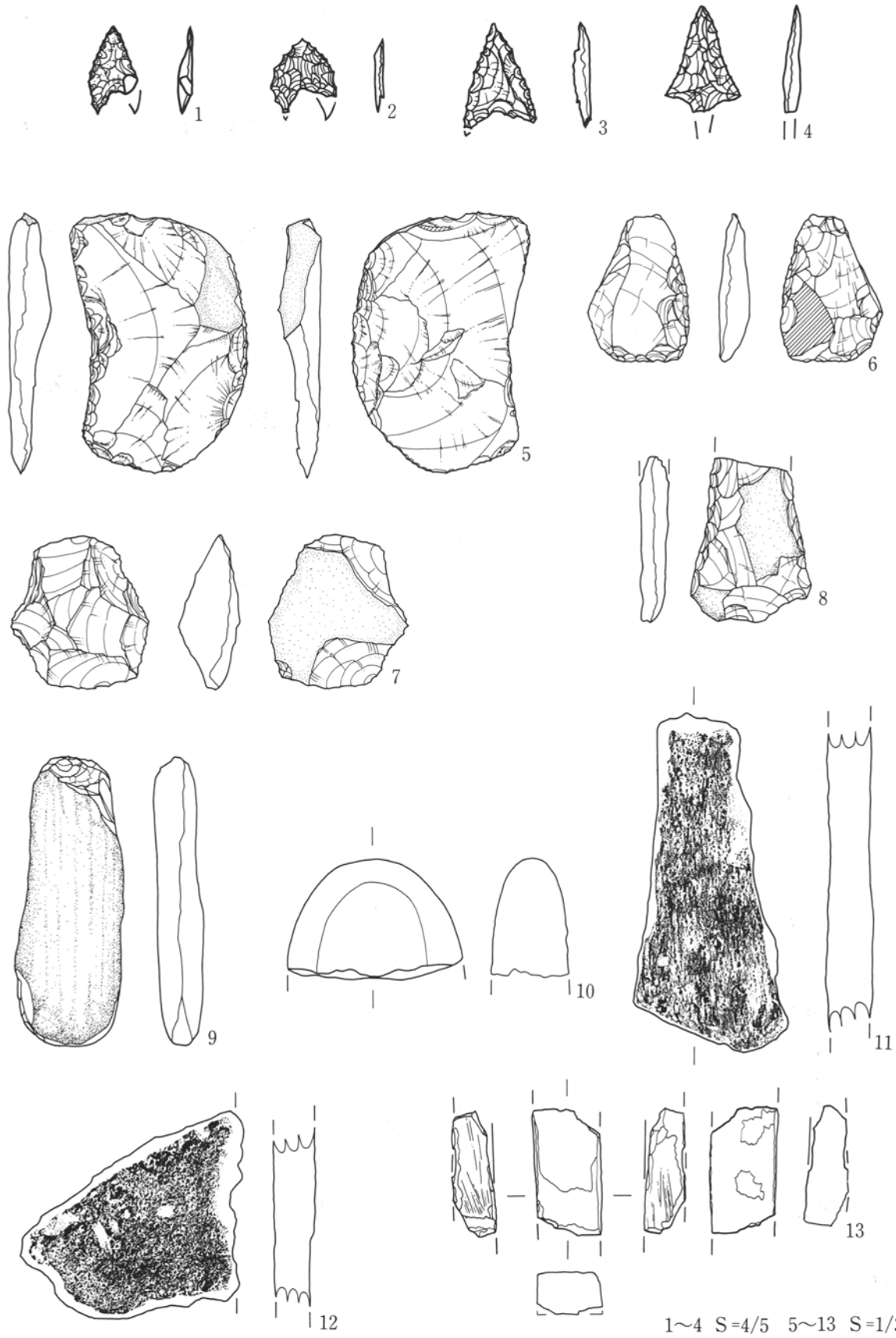
3点の砥石は何れも第1面からであり、15がB区1号溝から出土している。これらの石材には、流紋岩・砂岩・砥沢石が使用されている。14の側面には、砥石を切り出した際の痕跡が顕著である。

石臼（第227図16）

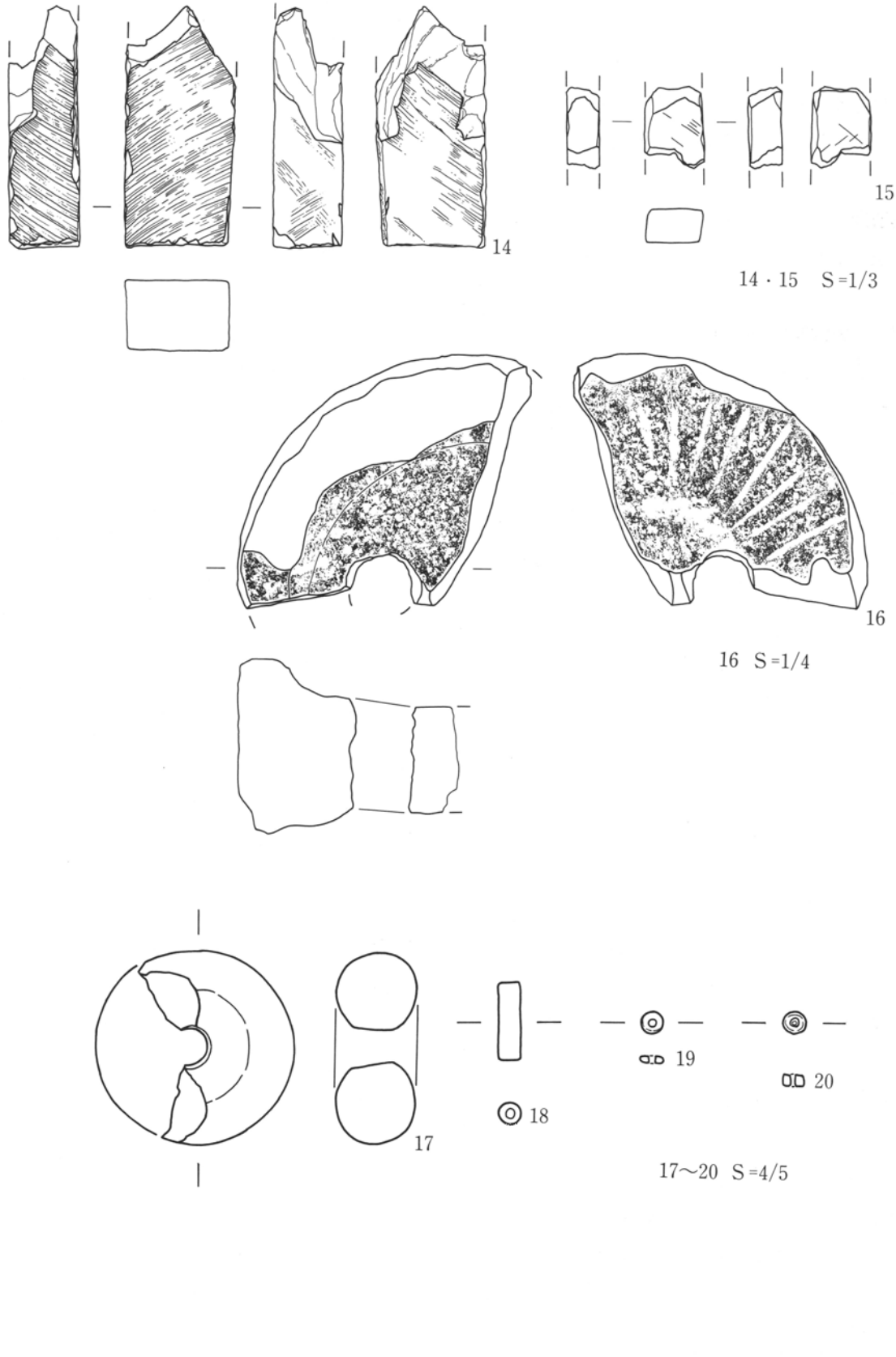
B区第1面の1号溝より出土している。粗粒輝石安山岩を石材とした上臼の一部であり、下面に目が残る。

表2　石器計測表

遺物No.	器種	出土位置	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	石鏃	A区第1面	珪質頁岩	2.2	1.3	0.4	0.59
2	石鏃	C区第2面	黒曜石	(1.9)	2.7	0.2	0.64
3	石鏃	E区第8面	玉随	(2.7)	1.9	0.4	1.72
4	石鏃	D区第8面	チャート	(2.7)	2.0	0.4	1.44
5	スクレイパー	F区取り付け道第8面	珪質頁岩	13.2	9.1	2.1	225.4
6	スクレイパー	F区取り付け道第8面	硬質泥岩	7.4	5.1	1.6	66.2
7	石核	C区取り付け道第6面	黒色頁岩	7.8	7.1	3.1	164.1
8	打製石斧	E区取り付け道第8面	細粒輝石安山岩	(8.3)	6.1	1.4	90.1
9	敲き石	F区第6面	黒色片岩	14.6	5.6	2.6	264.2
10	磨り石	E区第4面1号住居跡	粗粒輝石安山岩	(6.1)	(8.9)	(4.0)	264.6
11	板碑	E区第1面8号溝	緑色片岩	(17.4)	(7.9)	2.4	451.2
12	板碑	A区	緑色片岩	(10.4)	(11.4)	2.1	321.5
13	砥石	B区第1面	流紋岩	(6.4)	3.5	2.2	57.4
14	砥石	A区	砂岩	11.8	5.4	3.5	350.9
15	砥石	B区第1面1号溝	砥沢石	(4.0)	2.9	1.6	27.8
16	石臼	B区第1面1号溝	粗粒輝石安山岩	径 27.0		10.4	3327.0
17	飾り玉	B区第1面1号溝	流紋岩	径 4.8		2.0	31.2
18	管玉	C区取り付け道第8面	蛇紋岩	1.9	0.6	0.2	1.0
19	臼玉	E区第4面1号住居跡	滑石	径 0.5		0.2	0.08
20	臼玉	E区第4面1号住居跡	滑石	径 0.5		0.3	0.14



第226図　出土石器類（1）



第227図　出土石器類(2)

玉類　（第227図17～20）

17はＢ区第１面の１号溝より出土しており、流紋岩による石製品であるが、用途不明。18はＣ区取り付け道第８面の遺物集中箇所から出土した管玉で、蛇紋岩を石材とする。遺物集中箇所から出土した土器と同じ時期に伴うと考えられ、古墳時代初頭期に位置づけられよう。19・20はＥ区第４面の１号住居跡から出土した臼玉で、共に滑石を石材としている。

金属器類

出土した金属器類には、刀子等の鉄器、耳環、キセル、蹄鉄、古銭がある。

鉄器　（第228図１～３）

１・２はＤ区からの表採資料である。１は刀子で、先端が欠損している。２はＬ字状の鉄器で、両端が欠損している。３はＣ区第２面から出土した鉄器で、鎌の可能性が高い。

耳環　（第228図４）

Ｆ区第６面から出土しており、外径2.5cm、内径1.5cmを測るが、僅かに歪んでいる。表面の一部に金箔が残っていることから、全面に金箔が覆っていたものと考えられる。

キセル　（第228図５～８）

５はＡ区第１面、６はＤ区第２面、７はＢ区第１面１号溝、８はＥ区から出土したものである。

蹄鉄　（第228図９）

ほぼ完形の蹄鉄で、先端部が上方へ折れるようになり、両側に５カ所の釘穴を有している。この釘穴に、釘が残存する箇所もある。明治以降の所産と考えられる。

古銭　（第228図10～14）

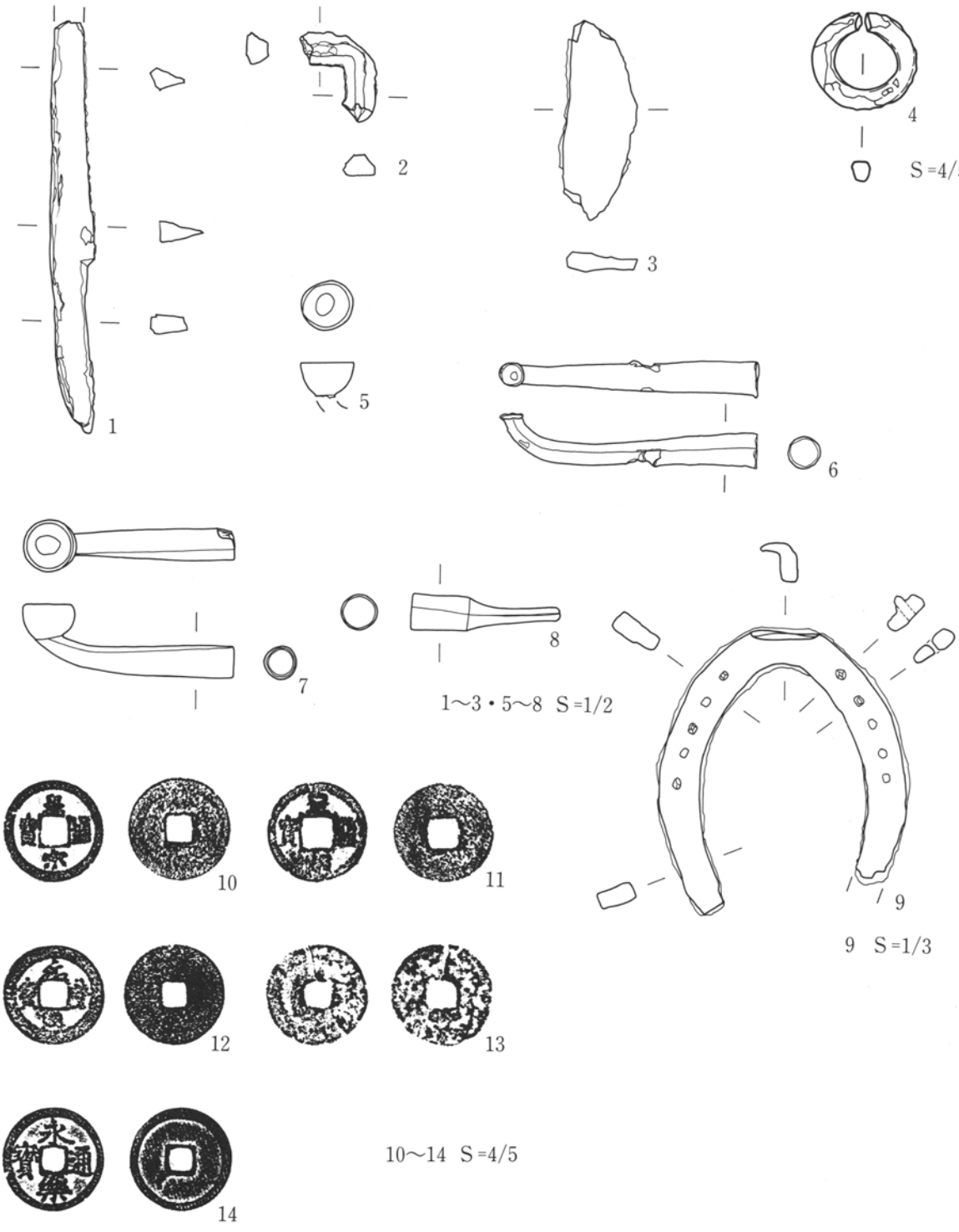
５枚の古銭が出土している。何れの外径も、2.4cmを測る。10はＣ区取り付け道の第３面からで、銭銘は「皇宋通寶」（北宋1038）である。11も「皇宋通寶」（北宋1038）で、Ｃ区第２面からである。12はＤ区取り付け道の第２面からで、銭銘は「元豊通寶」（北宋1078）である。13はＡ区からであるが、銭銘は不明。14はＢ区２号溝から出土し、銭銘は「永楽通寶」である。

木製品類

出土した木製品類には、杵や板類、杭をはじめとする多くの出土をみたが、自然木等については掲載を省いた。また、出土した多くは、Ｃ区第６面で検出された大溝からの遺物である。

杵　（第229図１）

Ｃ区第６面の大溝から出土している。上部を欠損するが、中央が細く、下部が太くなり、全体にかなり丁寧な作りである。また、端部は平坦である。コナラ属コナラ節。



第228図　出土金属器類

板類　（第231図12～16）

これらも、C区第6面の大溝から出土している。12はかなり薄い平坦な板状を呈し、一線状に孔を有している。13は内湾する板状のもの。14は平坦な板状のもの。15は平坦な板状を呈し、側縁が緩やかな曲線側と直線的な側となり、二股鍬の可能性をもつ。カバノキ属。16はやや厚手の長い板状のもので、面取りが成されている。コナラ属コナラ節。

杭　（第230図2～5）

これらも、C区第6面の大溝から出土している。2・3は溝底面から並んで出土した。2は表面に樹皮はなく、全体に加工が施されている。特に、先端部は6から7面に削り取られ尖る。アカガシ亜属。3は樹皮を付けたままの丸材である。先端部は不明。コナラ属コナラ節。4は樹皮を付けたままの丸材で、先端部は4面に削り取られ尖る。アカガシ亜属。5は樹皮を付けたままの丸材で、先端部は削り取られた杭状の加工痕がある。コナラ属コナラ節。

その他の木材　（第230図6～11）

7がB区第7面の52号溝からの出土で、それ以外はC区第6面の大溝から出土している。6は両端部が丸味を帯び、全体にやや弓状の形のもので、内湾側に2カ所の大きく抉ったような加工痕が施されている。コナラ属コナラ節。7は樹皮の付かない棒状のもの。コナラ属コナラ節。8～10は樹皮の付かない棒状の丸材で、8・9はアカガシ亜属、10はクマシデ属イヌシデ節。11は太い丸材を縦に四分割したもので、一面は平坦となり、加工が施された可能性をもつ。ブナ属。

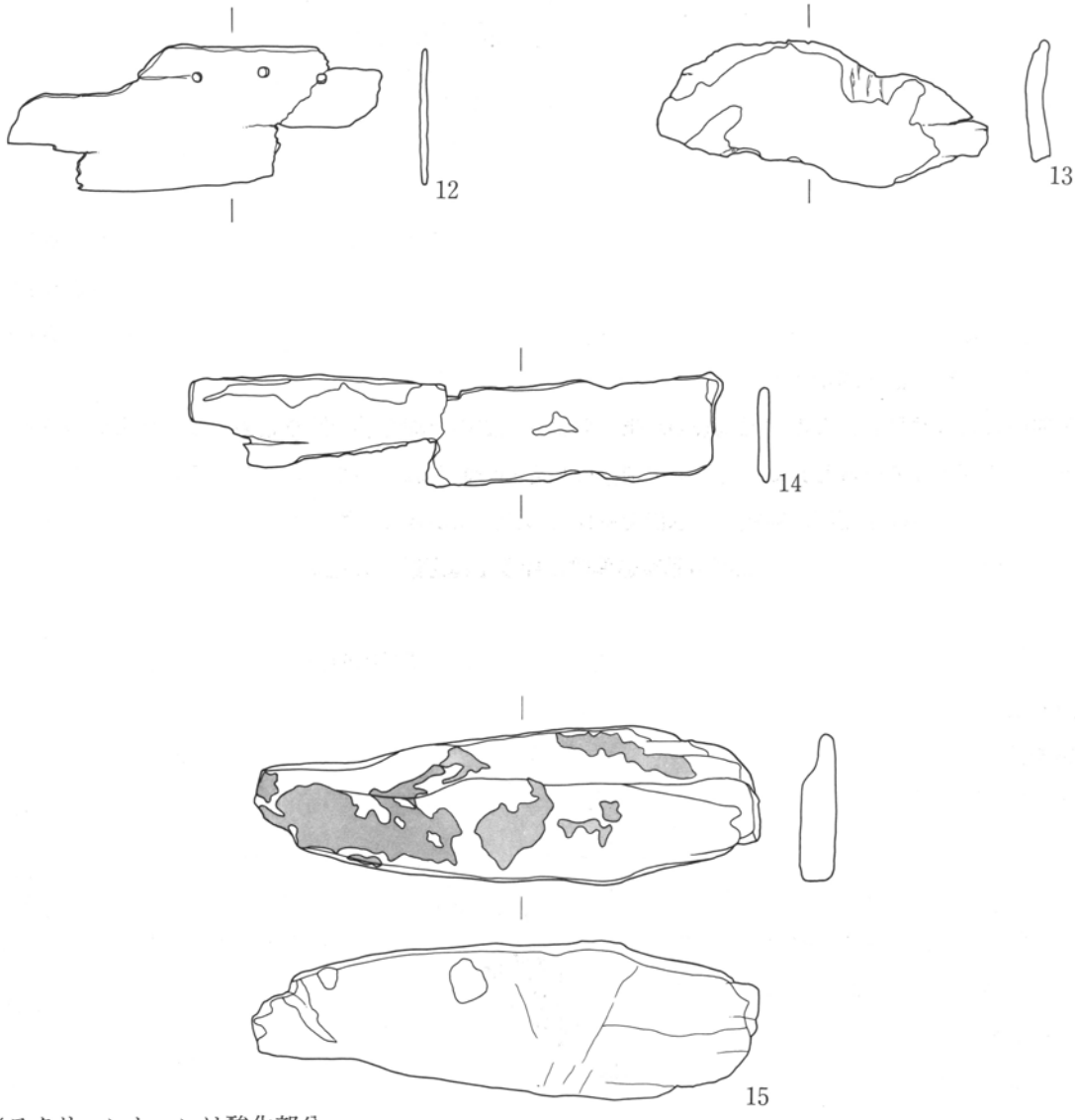
S=1/4

第229図　出土木製品類（1）

※スクリーントーンは炭化部分

2～7・11　S=1/6
8～10　S=1/4

第230図　出土木製品類(2)



※スクリーントーンは酸化部分

S=1/3

第231図　出土木製品類(3)

第4章　上滝II遺跡

第1節　上滝II遺跡の調査概要

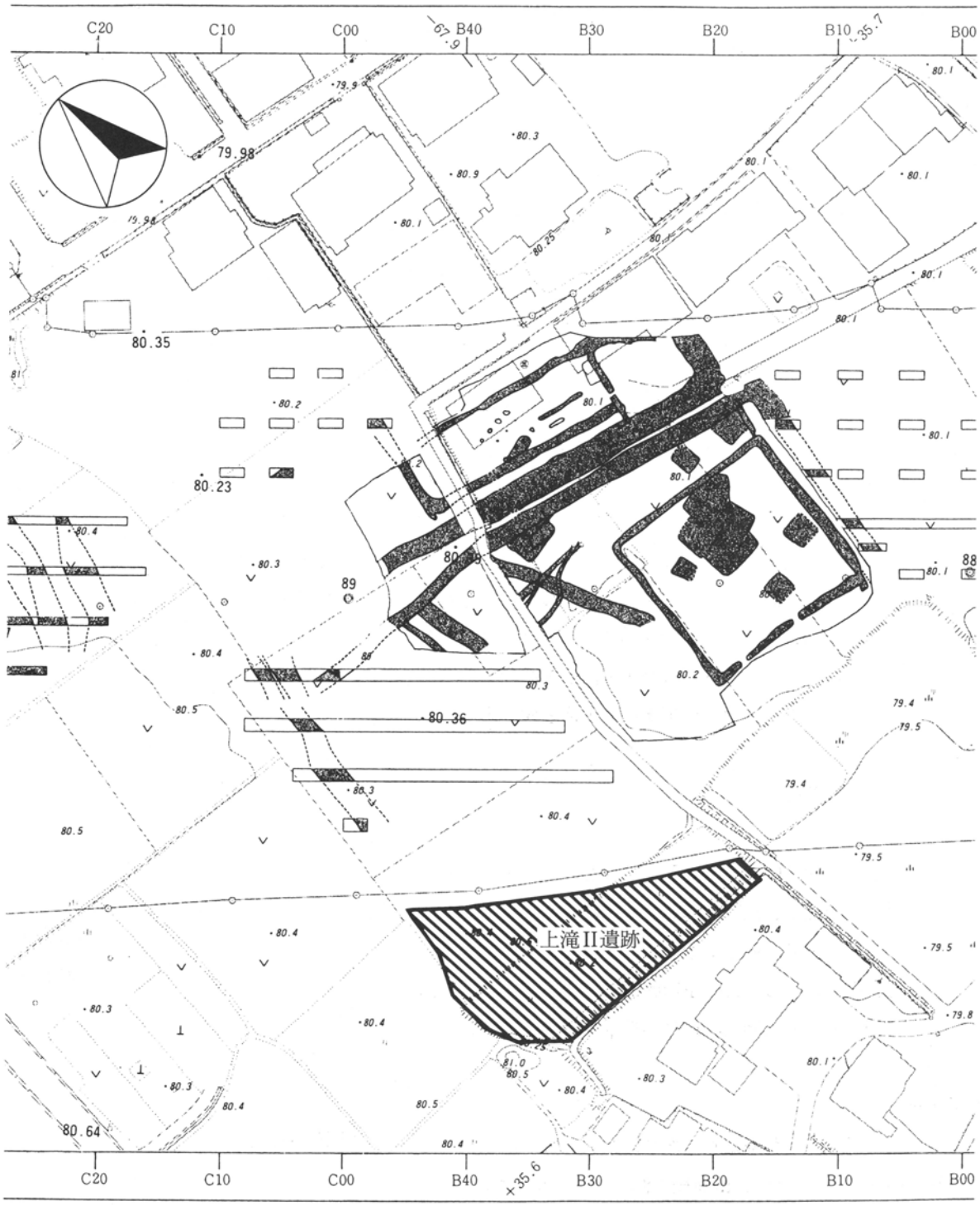
本調査の対象となったのは、関越自動車道と北関東自動車道とのジャンクション建設に伴う関越自動車道の西側道の付け替え工事によるものであった。このため、調査地は前橋長瀞線バイパスの路線より西側に位置する。また、調査地は関越自動車道建設に伴って調査された上滝遺跡に隣接することから、上滝II遺跡として扱った。調査は1999年4月から6月までの3ヶ月間を要した。

事前の県教育委員会による試掘調査の結果、および過去の上滝遺跡の調査結果から、火山灰層や洪水層等の堆積が確認されていると共に、各面での遺構の状態が予測されていた。こうしたことから、本調査においても、複数面の遺構確認面の存在と、水田を主体とした遺構がほぼ全面に展開するであろうことが予測されていた状況がある。第232図は、関越自動車道建設に伴う上滝遺跡での遺構配置図に、本調査範囲を合成させた図である。

調査は重機による表土（盛土）除去の後、歴史時代の遺構を榛名山の噴火に伴う噴出物に起因する泥流層上面で確認した結果、全面に遺構が点在して検出された。これらの遺構には、中世を主体とした近世までの溝18条、土坑8基、井戸2基、竪穴1基、柵列、ピットの遺構がある。奈良・平安時代とされる遺構には溝3条と畦が存在するものの、6世紀中葉の榛名山を給源とするHr－FP（榛名―二ッ岳軽石）に伴う降灰層下でのHr－FP下面での古墳時代の水田跡の上に確認した。このHr－FP下面では、ほぼ全面より古墳時代の水田跡と溝2条を検出することができた。続いて、6世紀初頭とされるHr－FA（榛名―二ッ岳火山灰）に伴う降灰層下でのHr－FA下面で確認した結果、部分的ではあるが古墳時代の水田跡と足跡痕、溝6条を検出することができた。これらの古墳時代の水田は、大畦によって区画された大区画内を、小畦で極小区画に区画される水田である。さらに、調査の最終面として、基盤層となるシルト層上面での確認を行った結果、溝2条が検出されている。

同じ地域である先の上滝榎町北遺跡との土層堆積を比較すると、本遺跡での上層部には現代の盛り土が厚く堆積し、盛り土下に僅かにAs－B軽石の混土層が堆積する。そして、As－B軽石の純層の堆積はなく、As－B軽石混土層下が榛名山起因の泥流層上面となる。Hr－FP層とHr－FA層の堆積状況と、それに覆われて検出された古墳時代の水田跡の状況は、上滝榎町北遺跡とは若干異なる様子が窺える。また、As－C軽石混土層の明瞭な堆積もみられず、Hr－FA下面水田の耕土下はシルト層上面となる。

以上、調査概要を述べたが、本報告をまとめるに当たり調査時の所見を最優先した。その結果、先の上滝榎町北遺跡での各面と、若干異なる点が生じている。特に、堆積土層の対比については、周辺遺跡全体で再度検討を要する重要な課題と言えよう。なお、Hr－FP下面での古墳時代の水田跡の上に確認した奈良・平安時代の遺構については、第2面として、第3面の古墳時代の遺構とは分別して記載した。



S=1/1000

第232図　上滝遺跡と上滝II遺跡の位置

第２節　第１面の遺構（中・近世面）

榛名山の噴火に伴う噴出物に起因する泥流層上面を遺構確認面として検出された遺構であり、この確認面の上層には直接As－Ｂ軽石混土層が堆積し、As－Ｂ軽石の純層の堆積は認められていない。

検出された遺構には、竪穴１基、土坑８基、井戸２基、柵列、ピット、溝18条の各遺構があり、これらの覆土にAs－Ａ軽石の混入やAs－Ｂ軽石混土であることから、中世を主体とした近世までの遺構であることが判別できる。なお、調査区の北側中央付近には動物の足跡痕が検出され、調査区の東側には遺構確認面上にAs－Ｂ軽石を多量に含む酸化気味の層が薄く堆積し、水田遺構の存在を窺わせていた。

以下、各遺構ごとに説明していく。

竪穴　（第235図）

１号竪穴

位置　調査区のほぼ中央にあり、Ｘ＝35.625、Ｙ＝－67.980に位置する。

規模　やや角丸で不整な長方形を呈し、長軸方向をほぼ南北にもち、長軸となる西辺で8.3m、東辺で6.9m、短軸4.8m、深さ28cm前後を測る。

概要　底面はほぼ平坦で、壁もしっかり立ち上がる。南壁中央には、スロープ状の高まり（土段）が有り、入り口施設の可能性がある。覆土は灰黄褐色土を主体とするが、３層上面が床状に硬化し、さらに４層上面には張り床が認められており、２時期の使用が考えられる。この１号竪穴は多くの遺構と重複している。竪穴の８号土坑との重複では本竪穴が新しく、９号溝との重複では本竪穴が古い。このことは、竪穴の土層断面図にも示されている。また、２・５・６・８・10号溝とも重複するが、その新旧関係は全て本竪穴が古い。さらに、東壁で重複するピットとは、やはり本竪穴の方が古い。なお、覆土中からは、土師質皿の小片と礫が出土している。

土坑　（第236・237図）

１号土坑

位置　調査区の西壁際にあり、Ｘ＝35.625、Ｙ＝－67.991に位置する。

規模　長方形を呈し、長軸方向を北北西にもち、長軸2.2m、短軸1.05m、深さ18cmを測る。

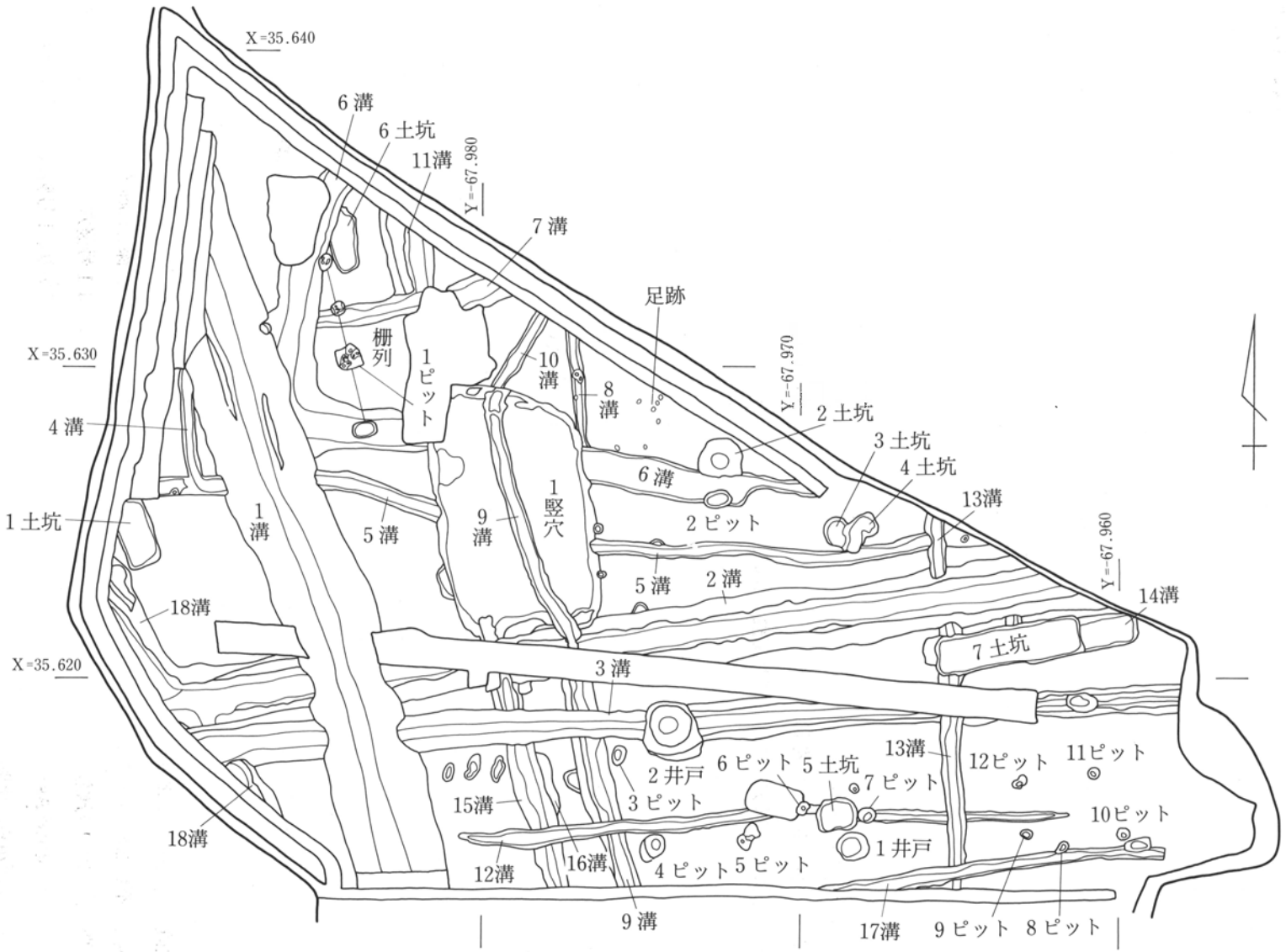
概要　底面は平坦で、壁も比較的にしっかりしている。覆土はAs－Ａ軽石やAs－Ｂ軽石を多く含む褐灰色土を主体とし、Hr－FP泥流ブロックを混在させる。遺物の出土はないが、覆土にAs－Ａ軽石を含むことから天明三年以降の遺構と考えられる。

２号土坑

位置　調査区の中央北壁寄りにあり、Ｘ＝35.627、Ｙ＝－67.972に位置する。

規模　円形を呈し、径1.4m前後を測り、深さ48cmを測る。

概要　６号溝と重複するが、新旧関係は本土坑の方が古い。底面は小さく、やや擂り鉢状となる。覆土はAs－Ｂ軽石を多く含む褐灰色土を主体とし、Hr－FP泥流ブロックを混在させる。遺物の出土はない。



第233図　第１面の遺構配置図

3号土坑

位置　調査区の中央西寄りの北壁近くにあり、X＝35.625、Y＝－67.969に位置する。

規模　楕円形と思われ、短軸80cmを測り、深さ17cmを測る。

概要　土坑の西半分を4号土坑と重複し、4号土坑の底面の方が深い。新旧関係は本土坑が古く、4号土坑が新しい。底面は比較的に平らである。遺物の出土はない。

4号土坑

位置　調査区の中央西寄りの北壁近くにあり、X＝35.625、Y＝－67.968に位置する。

規模　不整形な形状をとり、長軸方向を北東にもち、長軸1.5m、短軸55～75cm、深さ20cmを測る。

概要　土坑の東側では3号土坑と重複し、本土坑の底面の方が深い。また、南側では5号溝と重複する。新旧関係は3号土坑よりも本土坑が新しく、本土坑よりも5号溝が新しい。底面は凹凸である。遺物の出土はない。

5号土坑

位置　調査区の中央東寄りの南壁近くにあり、X＝35.616、Y＝－67.969に位置する。

規模　方形に近い形状をとり、長軸方向を東西にもち、長軸1.25m、短軸95cm、深さ15cmを測る。

概要　土坑の長軸方向に12号溝と重複するが、新旧関係は本土坑が古い。土坑底面は凹凸をもち、12号溝よりも深い。遺物には、礫が出土している。

6号土坑

位置　調査区の西寄りの北壁近くにあり、X＝35.634、Y＝－67.984に位置する。

規模　長楕円形を呈すると思われ、長軸方向を北北西にもち、長軸2.0m、短軸90cm、深さ10cmを測る。

概要　土坑の北西側を6号溝と重複するが、新旧関係は不明。底面はやや凹凸となる。遺物の出土はない。

7号土坑

位置　調査区の東側にあり、X＝35.621、Y＝－67.963に位置する。

規模　長方形を呈し、長軸方向を東北東にもち、長軸4.5m、短軸1.3m、深さ53cmを測る。

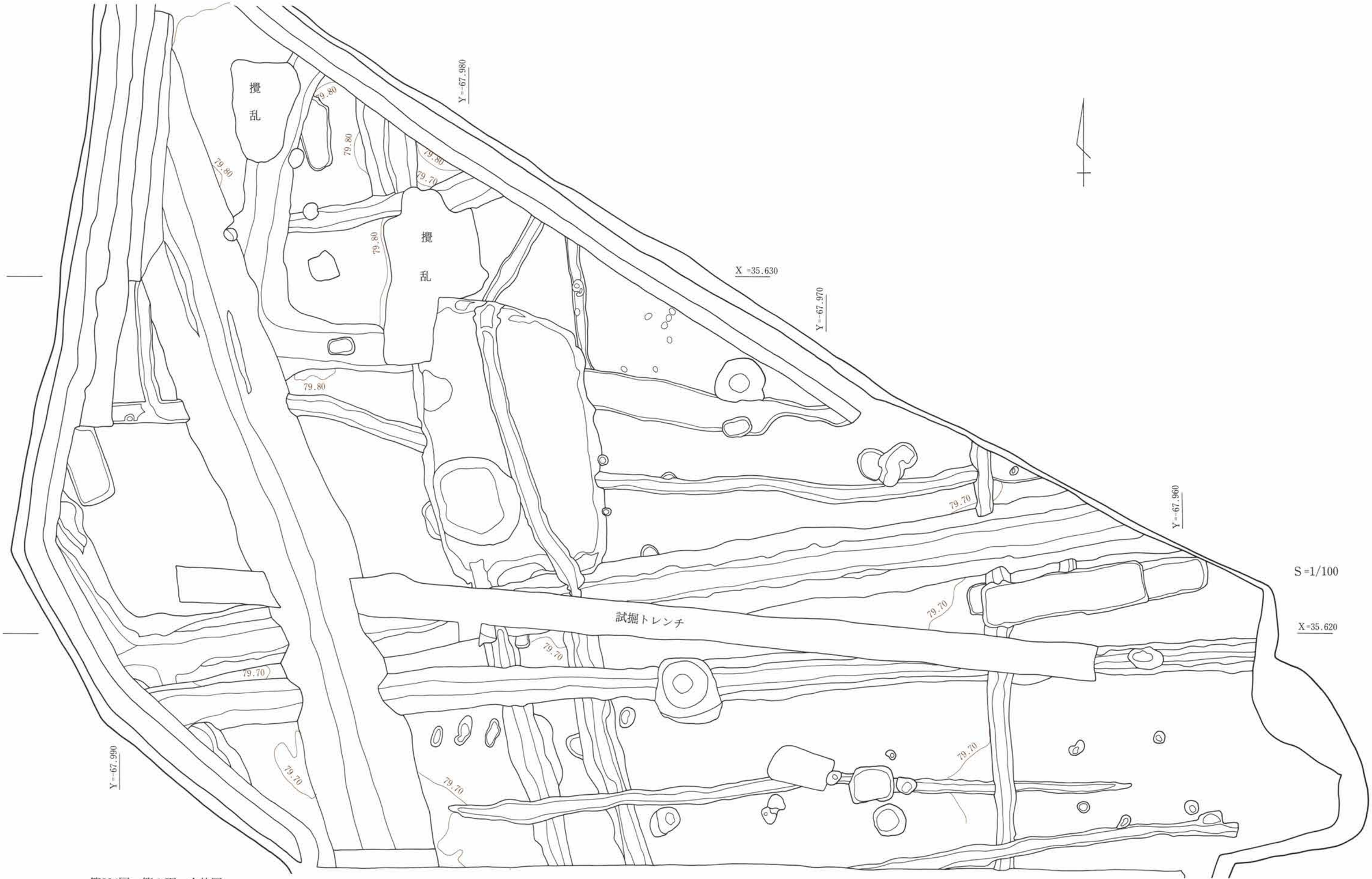
概要　土坑の西側を13号溝と重複し、東側で14号溝と重複する。覆土にはAs－B軽石を含むが、新旧関係は両溝よりも本土坑が新しい様相である。底面は比較的平坦となる。遺物の出土はない。

8号土坑

位置　調査区のほぼ中央付近にあり、X＝35.624、Y＝－67.980に位置する。

規模　不整な円形を呈し、長軸方向を北西にもち、長軸2.7m、短軸2.3m、深さ60cmを測る。

概要　土坑は1号竪穴と重複し、1号竪穴内の南西側にある。新旧関係は1号竪穴が新しく、本土坑が古い。覆土はAs－B軽石とFP泥流ブロックを多く含む灰黄褐色土であり、1号竪穴の床面下となる。底面から、土師質皿の小片と大型礫が6点出土している。



第234図　第１面　全体図

井戸　（第237図）

1号井戸

位置　調査区の中央東寄りの南壁近くにあり、5号土坑の南側になる。X＝35.615、Y＝－67.968に位置する。

規模　円形を呈し、径90cm前後を測り、深さ1.6mを測る。

概要　断面形状は比較的にストレートで、漏斗状ではない。上層に灰色粘性ブロックおよびＦＰ泥流ブロックを含む褐灰色土が厚く堆積し、その下にAs－B軽石を多量に含む黒褐色土、ＦＰ泥流ブロックを多く含む鈍い黄橙色土、灰黄褐色土が堆積する。遺物の出土はない。

2号井戸

位置　調査区の中央南寄りにあり、X＝35.619、Y＝－67.974に位置する。

規模　円形を呈するが、確認面では不整形である。確認面での南北方向では1.8mを測り、深さ1.75mを測る。

概要　断面形状は、底面径よりも口径が下張り広くなる漏斗状となる。井戸のほぼ中央を3号溝と重複するが、本井戸の方が古い。因みに、3号溝の覆土にはAs－A軽石を含むことから、天明三年以降の遺構と考えられる。遺物の出土はない。

柵列　（第238図）

位置　調査区の北西寄りにあり、X＝35.630、Y＝－67.984付近に位置する。

規模　径50～70cmほどの4本の柱穴（ピット）が、一線状に並ぶ。その長さは5.9mを測るが、柱間は南側が広くなる。

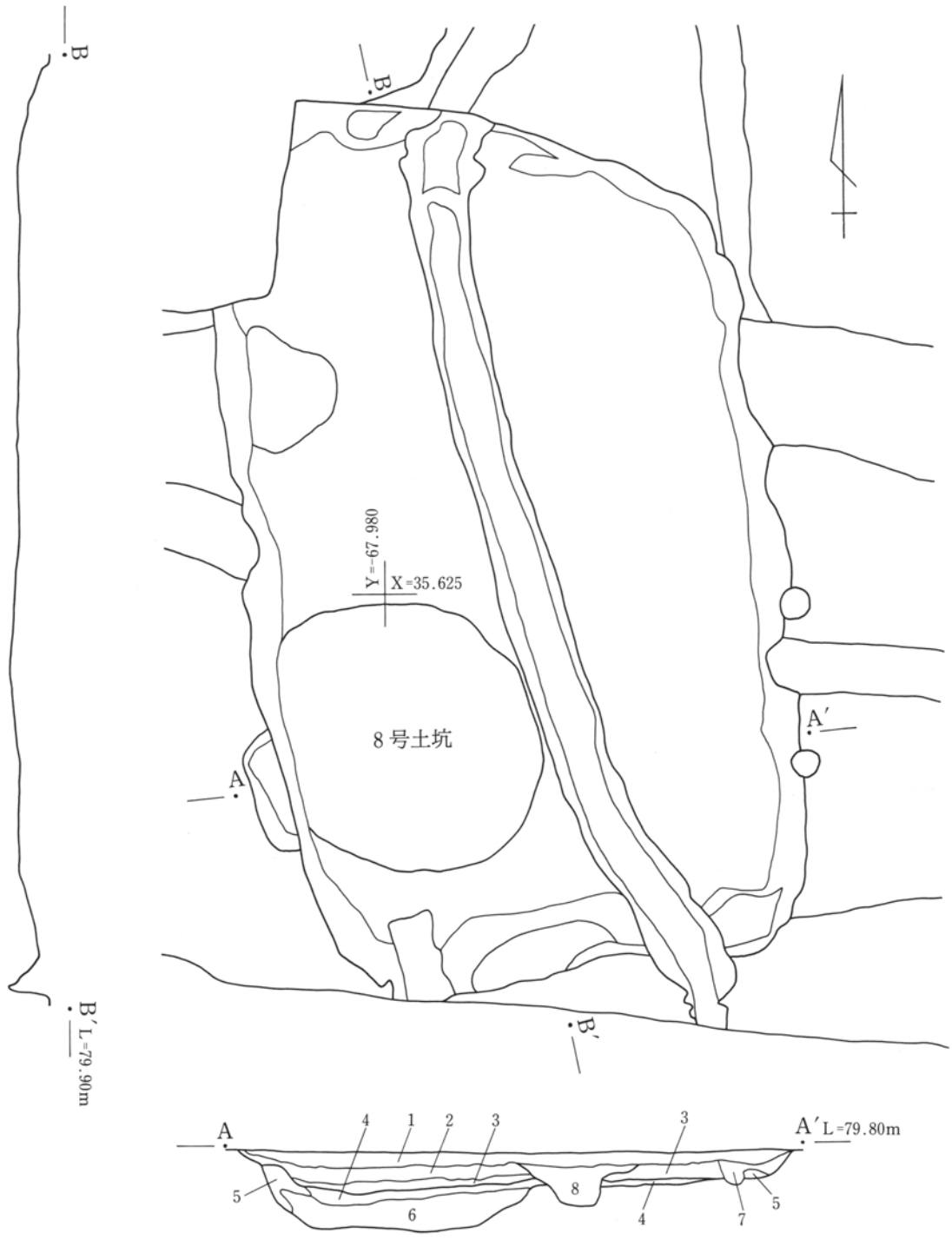
概要　掘立柱建物の一辺となるかは不明であり、現状では柵列として扱う。南側から2番目の柱穴は、調査時に1号ピットとしたものである。それぞれの柱穴は6・7号溝と重複するが、土層の堆積状況から本柱穴の方が古い。遺物の出土はない。

ピット　（第239図）

ピットとして図化したものの内、11基を掲載した。その多くは、調査区の南側に点在しており、ピット間の関連性は窺い難い。1号ピットとしたものが、柵列に組み込まれただけである。

溝　（第234図）

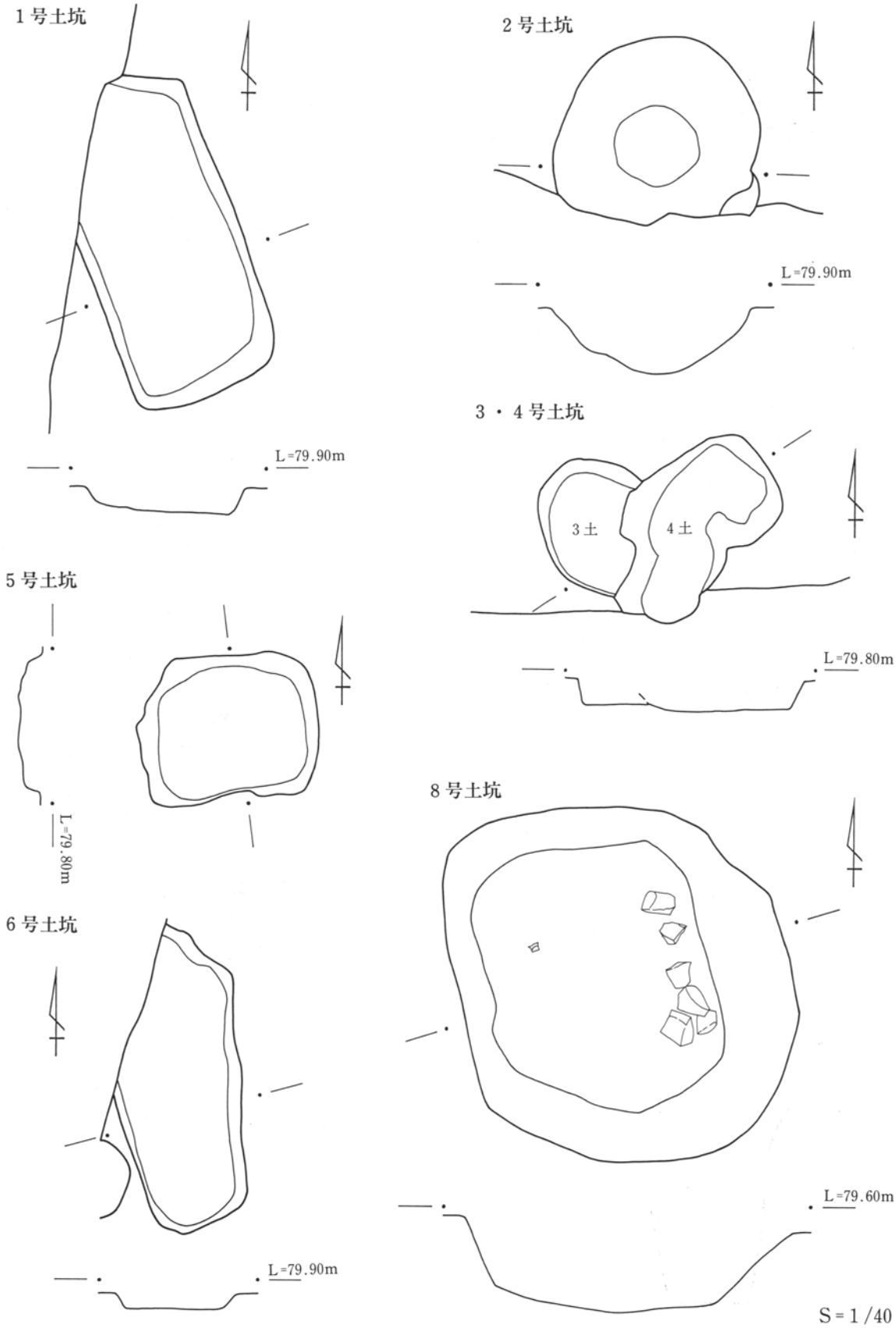
18条の溝が検出されている。調査区内で検出された最も大きい溝は1号溝であり、調査区の西側を北から南南東方向へ延びている。この1号溝の覆土には、As－A軽石を含むことから天明三年以降の溝であると考えられる。同様に、覆土にAs－A軽石を含む溝には、調査区の南側を東西方向に延びる3・12・17号溝がある。それ以外の溝は、中世から近世にかかる天明三年以前の溝ということになる。また、調査時の所見としては、2号溝と9号溝では2号溝が新しく、2号溝と15・16号溝とでは2号溝が新しい。



S=1/60

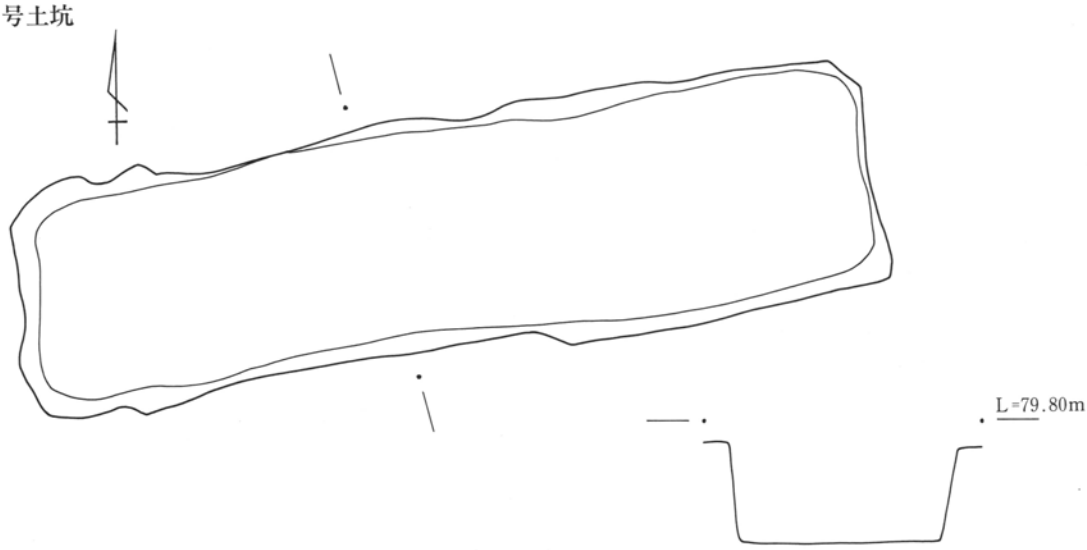
1層　灰黄褐色土　　白色の軽石を多く含む。
2層　灰黄褐色土　　軽石を多く含み、Hr－FP泥流の小ブロックを僅かに含む。
3層　灰黄褐色土　　2層と同じであるが、上面が硬化し、還元気味。
4層　灰黄褐色土　　2層と同じであるが、上面が硬化し床面となる。
5層　明黄褐色土　　Hr－FP泥流ブロックを主とする。
6層　灰黄褐色土　　Hr－FP泥流ブロックを多く含む。
7層　灰黄褐色土　　Hr－FP泥流ブロックを多く含み、粗い。
8層　灰黄褐色土　　軽石を多く含む。9号溝の覆土である。

第235図　1号竪穴

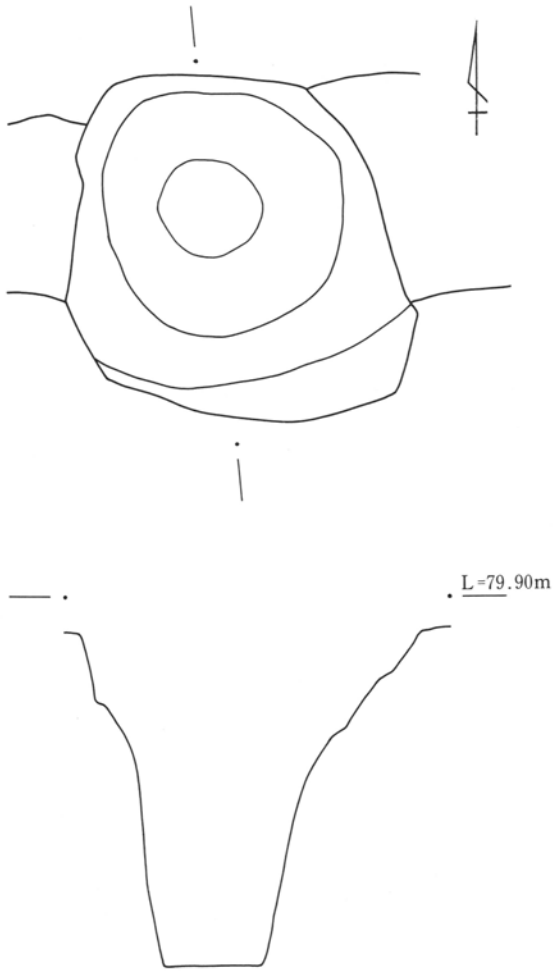

1号土坑
L=79.90m
2号土坑
L=79.90m
3・4号土坑
3土
4土
L=79.80m
5号土坑
L=79.80m
6号土坑
L=79.90m
8号土坑
L=79.60m
S=1/40

第236図　土坑

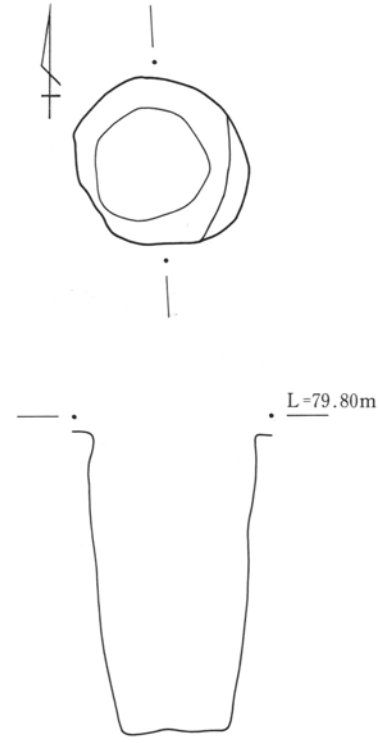
7号土坑



2号井戸



1号井戸



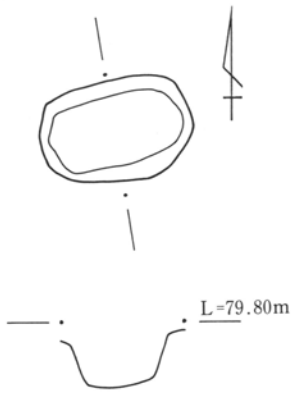
S=1/40

第237図　土坑・井戸

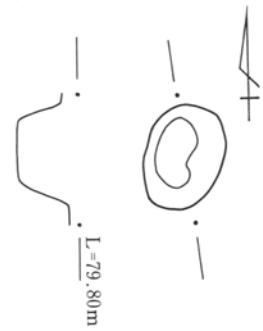
S＝1／40

第238図　柵列

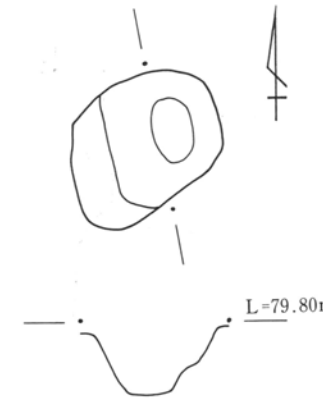
2号ピット



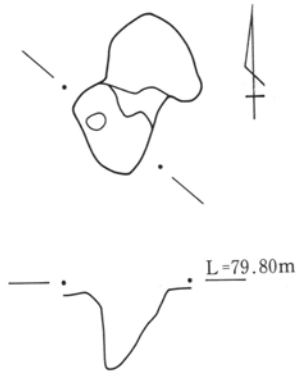
3号ピット



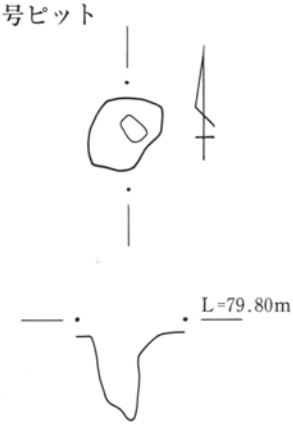
4号ピット



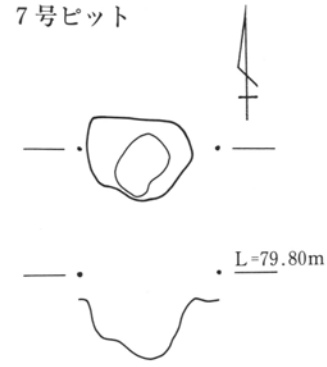
5号ピット



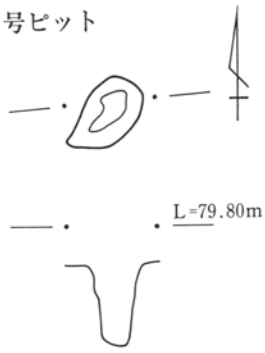
6号ピット



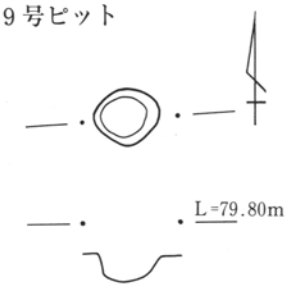
7号ピット



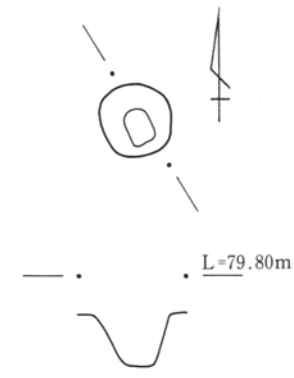
8号ピット



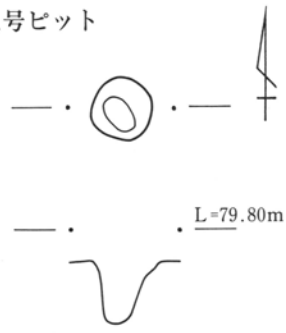
9号ピット



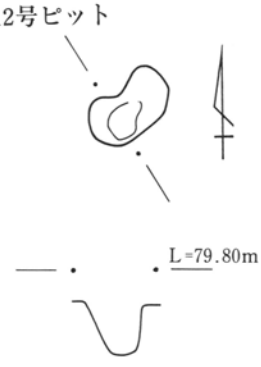
10号ピット



11号ピット



12号ピット



S=1/40

第239図　ピット

第3節　第2面の遺構（奈良・平安時代面）

後述する第3面のHr－FP下面における古墳時代の遺構検出の際に、古墳時代の遺構の上に検出された遺構である。このため、調査時の確認面とは別に、整理段階で想定した面である。

検出された遺構には、第240図に示すように溝と畦がある。遺構の残存状態は悪く、調査区の北半では検出されておらず、辛うじて検出できたのは南半からである。検出された溝3条の内、19号溝は調査区を南北方向に延びる溝であり、20号溝は南側から北西方向に延びながら、湾曲するように北へ延びるものと思われる。これらの溝は、比較的に浅く、細い溝である。また、調査区の東側では、畦と思われる帯状の高まりが東から北西方向に延びる。さらに、この畦状の高まりの直下は、同一方向に延びる溝（23号溝）となっている。しかも、この23号溝は、古墳時代の水田を壊している。

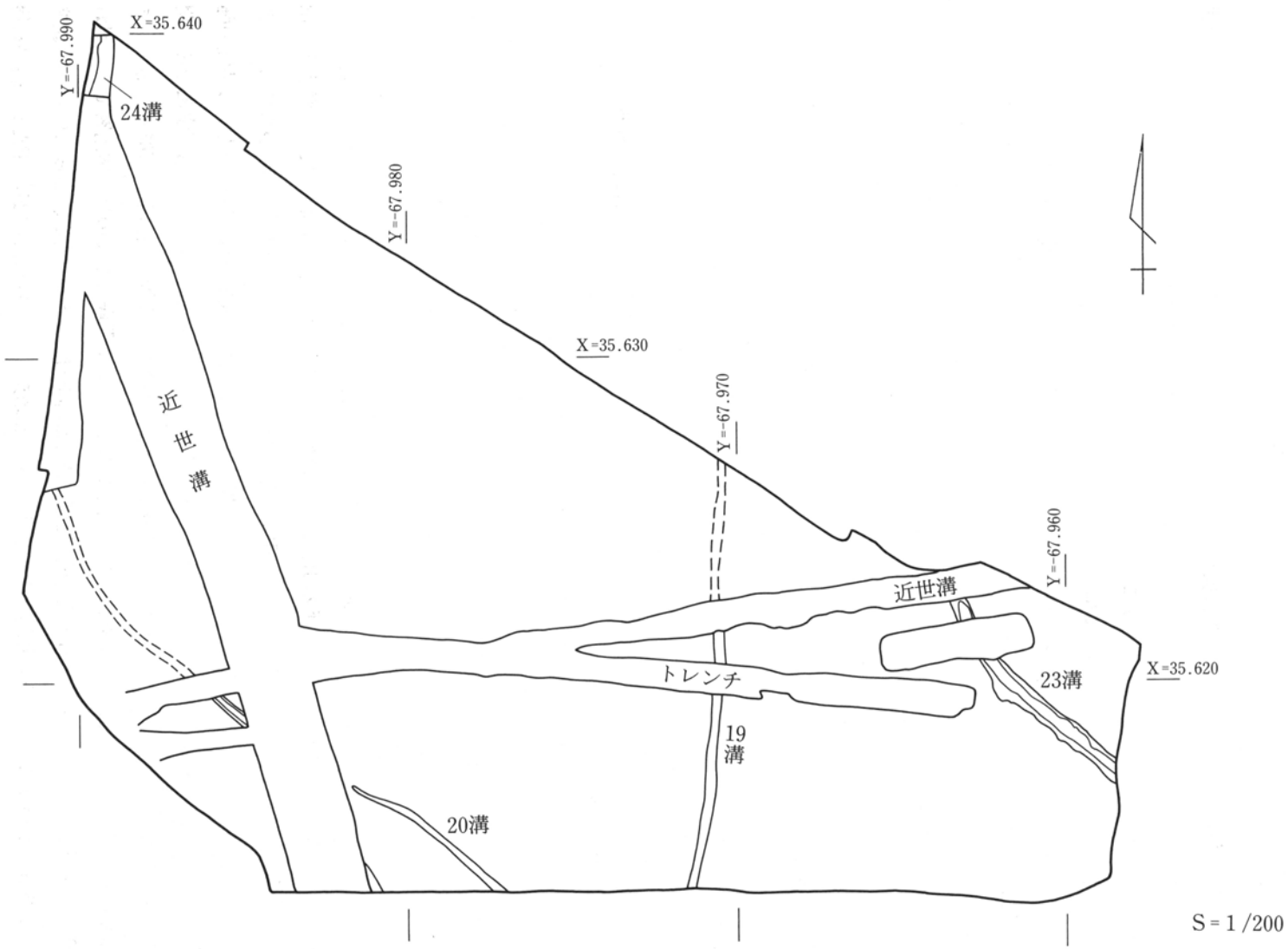
第4節　第3面の遺構（古墳時代Ⅰ、Hr－FP下面）

6世紀中葉の榛名山を給源とするHr－FP（榛名－二ッ岳軽石）に伴う降灰層下面（Hr－FP下面）を、遺構確認面として検出された遺構である。調査区の全面に、溝を伴う水田跡が検出されている。

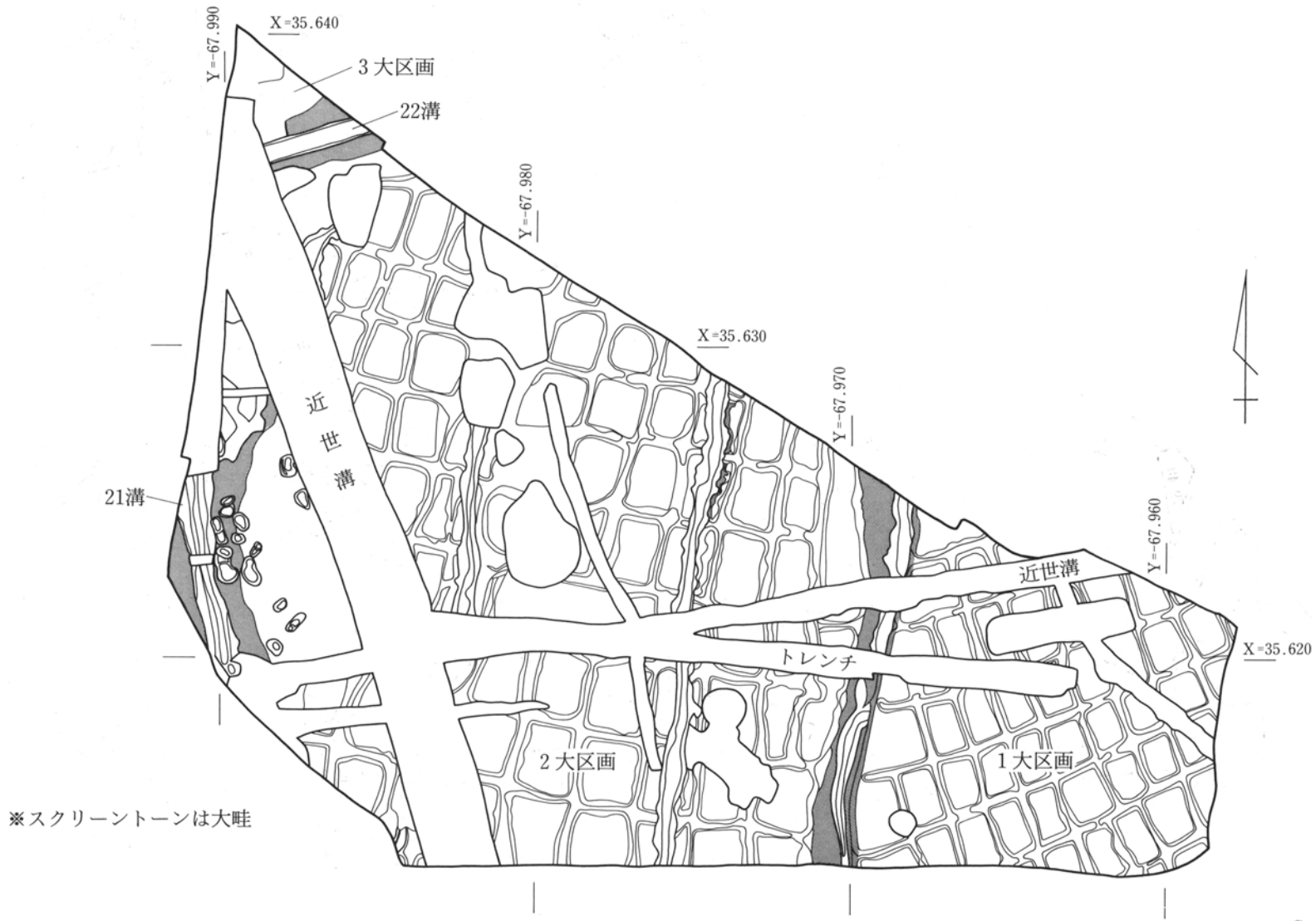
ここで調査時の所見として、土層の確認をしておく。第249図に示した南壁の土層断面図であるが、中・近世の遺構が検出された面は、4・5層とした鈍い黄橙色土のHr－FP泥流層上面であった。本水田跡が検出されたのは、7層としたHr－FP泥流層の最下層に当たる鈍い黄橙色土、8層とした粘性の強いシルト質な明黄褐色土の下面からであり、この水田耕作土が9層とした褐灰色土に当たるものと考えられる。後述する第4面のHr－FA下水田は、Hr－FP下水田耕作土の9層下面に僅かに堆積する10層とした砂質な黄褐色土をHr－FA泥流と考えた下面の遺構である。つまり、19層としたAs－C軽石を混在する褐灰色土の上面がHr－FA下水田とした面である。

前章での上滝榎町北遺跡での土層と遺構面を対比させると、上滝榎町北遺跡でも古墳時代の水田遺構は第5面のHr－FP下水田、第6面のHr－FA下水田、第7面のAs－C混土上水田、第8面のAs－C混土下水田の4面が検出されている。この内、Hr－FP下水田が明確に検出されたのはE区取り付け道からであり、他の調査区では検出されていない。むしろ、Hr－FA下水田が全調査区から検出され、明褐色土様の粘性の強いシルト質の火山灰土によって覆われた水田跡であった。この上滝榎町北遺跡でのHr－FA下水田を覆う明褐色火山灰土が、この地域全体に及んでいることが考えられ、本遺跡での8層に相当する可能性もある。また、検出された水田遺構の状況からしても、その可能性がある。ここで問題となるのは、本遺跡での8層および上滝榎町北遺跡でのHr－FA下水田を覆う明褐色火山灰土が同一層であるか否か、さらには如何なる成因の土層であるかということになる。現時点では、上滝榎町北遺跡での土壌分析からHr－FAとの結果を得ており、同一層に相当される宿横手三波川遺跡（岩崎2001）ではHr－FPとの結果が得られ、異なる結果となっている。遺構面を覆う鍵層としての土層の認定について、同一地域で進められている発掘調査および今後の調査で、再度の検討が重要な課題となっている。

以下、検出された遺構について説明する。



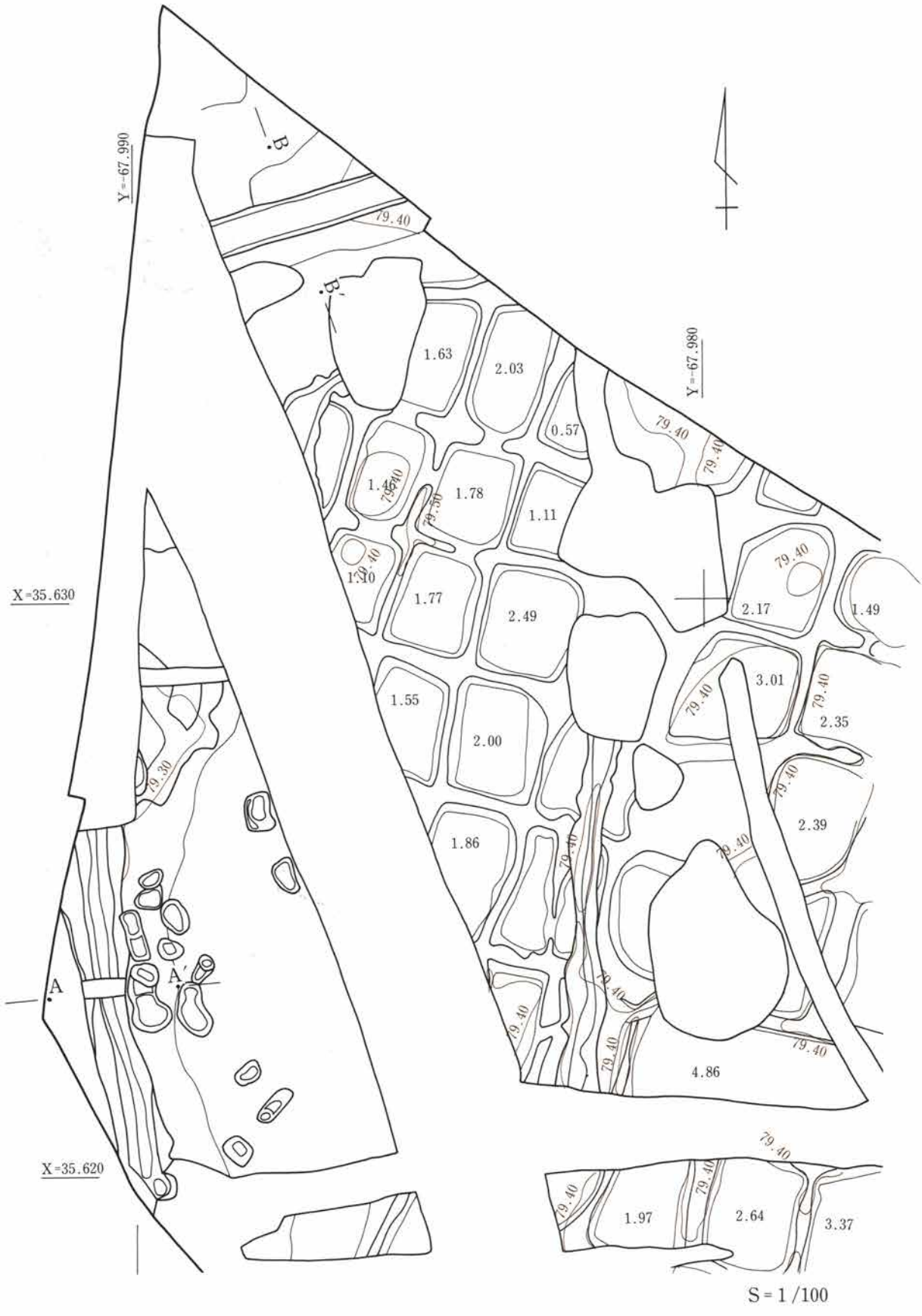
第240図　第2面の遺構配置図



※スクリーントーンは大畦

S=1/200

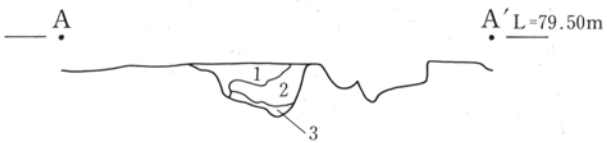
第241図　第3面の遺構配置図



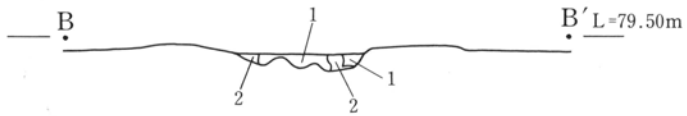
第242図　大畦と極小区画水田(西側)

S = 1 /100

第243図　大畦と極小区画水田(東側)



1層　黄灰色土　　細砂を主とし、還元気味。
2層　明黄褐色土　細砂・砂とシルトを混在する。
3層　黒褐色土　　As－C軽石混土の黒色ブロックと2層が混在。



1層　黄灰色土　　細砂を主とし、還元気味。
2層　黒褐色土　　As－C軽石混土の黒色ブロックと1層が混在。

S＝1／40

第244図　水田の断面

水田

検出された水田は、調査区全体に広がっている。所謂極小区画水田であるが、大畦によって大区画が区画され、大区画単位に極小区画水田が形成されている。畦等の依存状態は、比較的に良好と言えよう。便宜上、この大区画を、調査区の東側から１～３の３つの区画とした。以下、各大区画ごとに説明を加える。

１大区画

調査区の東端に位置する。大区画を区画する大畦は、区画の西側に緩やかに蛇行しながら南北方向に延びる大畦が検出されており、この大畦上には水路と考えられる溝を伴っている。他方向の大畦は不明。区画内を細かく区画する小畦の残存状況は比較的良く、北北西方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、59枚の極小区画水田を数える。極小区画水田の一枚当たりの規模は、1.5m×１m前後を測り、平均面積は1.5㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、極小区画の長軸方向となる北北西方向の畦（縦畦）が直線的に延び、短軸方向の畦（横畦）も同様に直線的であるが、部分的にやや食い違い気味となる。また、短軸方向の横畦には、水口となる畦の切れ間が数カ所で確認されている。このことから、調査区が南側への微傾斜地であることをも含め考えると、大区画内の用水が小区画の長軸方向（縦畦方向）となる南方向へと導かれた様子が理解できる。また、西側を区画する大畦の途中には、大畦上の水路と考えられる溝から本大区画内へ流入するような水口状の切れ間を有している。こうした点から、大畦上の溝は、水田への用水路と考えられる。

２大区画

調査区の中央から西側にかけての大部分である。大区画の南辺を区画する大畦は検出されていないが、東側に一大区画とを画する水路を伴う大畦があり、西側を区画する大畦が西壁に沿うように検出されている。この大畦上にも、水路と考えられる溝が伴っている。北側を区画する大畦は、調査区の北隅に東西方向に延び、３大区画とを画している。やはり、大畦上に水路と考えられる溝が伴っている。大区画内を細かく区画する小畦の状況は、１大区画よりもやや悪く、北側ほど浅く僅かで、西側の大畦付近では凹凸が多く小畦が判然としない。また、区画内には、南北方向に延びる溝が２条検出されている。この２条の溝は、共に区画内の極小区画を壊すように存在し、その溝の両側には若干の畦状の高まりをもつ。こうした点から、水田に伴う最も新しい時期の溝と考えられる。極小区画のあり方は、１大区画とは逆の北方向ないし北北東方向に長軸をもつ極小区画水田が整然と連なる。調査区内では、70枚の極小区画水田を数え、一枚当たりの規模は1.8m×1.3m前後を測り、平均面積は2.4㎡ほどとなっている。連続する小畦の状況は、極小区画の長軸方向となる北北西方向の畦（縦畦）が直線的に延び、短軸方向の畦（横畦）も同様に直線的であるが、部分的にやや食い違いをみせる。また、短軸方向の横畦には、水口となる畦の切れ間が数カ所で確認されている。よって、大区画内の用水が小区画の長軸方向（縦畦方向）となる南方向へと導かれた様子が理解できる。

３大区画

調査区の西北隅に位置する。大区画を区画する大畦は、区画の南側で東西方向に延びるように２大区画とを画する大畦が僅かに検出されている。この大畦上には、水路と考えられる溝が伴っている。大区画内を細かく区画する小畦の状況は、極めて悪く、僅かに痕跡程度に残存する。１・２大区画内と同様の極小区画水田が存在したものと考えられるが、残存する小畦の痕跡からは判然としない。本大区画が調査区の北側に区画範囲を広げることは明らかであるが、関越自動車道の上滝遺跡で調査された古墳時代前期以降の遺構群を

有する微高地の存在から、微高地に接近した大区画となることが予測される。

溝

検出された溝は5条であるが、この内の3条については水田を区画する大畦上に存在している。特に、1・2大区画を区画する大畦上の溝は、大区画内へ流入するような水口状の切れ間を有している点から、水田への用水路と考えられる。他の大畦上の溝も、同様な水路と考えられる。2大区画の西側を区画する大畦上の溝は21号溝、2・3大区画を画する大畦上の溝は22号溝として調査した。一方、2大区画内の南北方向に延びる2条の溝は、共に区画内の極小区画を壊すように存在し、その溝の両側には若干の畦状の高まりをもつ。田面に畦状の高まりを有する点では、水田に伴う溝とも考えられるが、最も新しい時期の溝であろう。また、この溝と大畦および大畦上の水路との関係が不明であり、その性格的な部分も判然としない。

第5節　第4面の遺構（古墳時代II、Hr－FA下面）

6世紀初頭とされるHr－FA（榛名―二ッ岳火山灰）に伴う降灰層下面を、遺構確認面として検出された遺構である。その結果、部分的ではあるが古墳時代の水田跡と、溝6条を検出することができた。

先述したことではあるが、9層としたHr－FP下水田（第3面）耕作土下面で、部分的に僅かに堆積する10層とした砂質な黄褐色土をHr－FA泥流と考えた下面の遺構であり、19層としたAs－C軽石を混在する褐灰色土の上面がHr－FA下水田とした面である。

以下、検出された遺構について説明する。

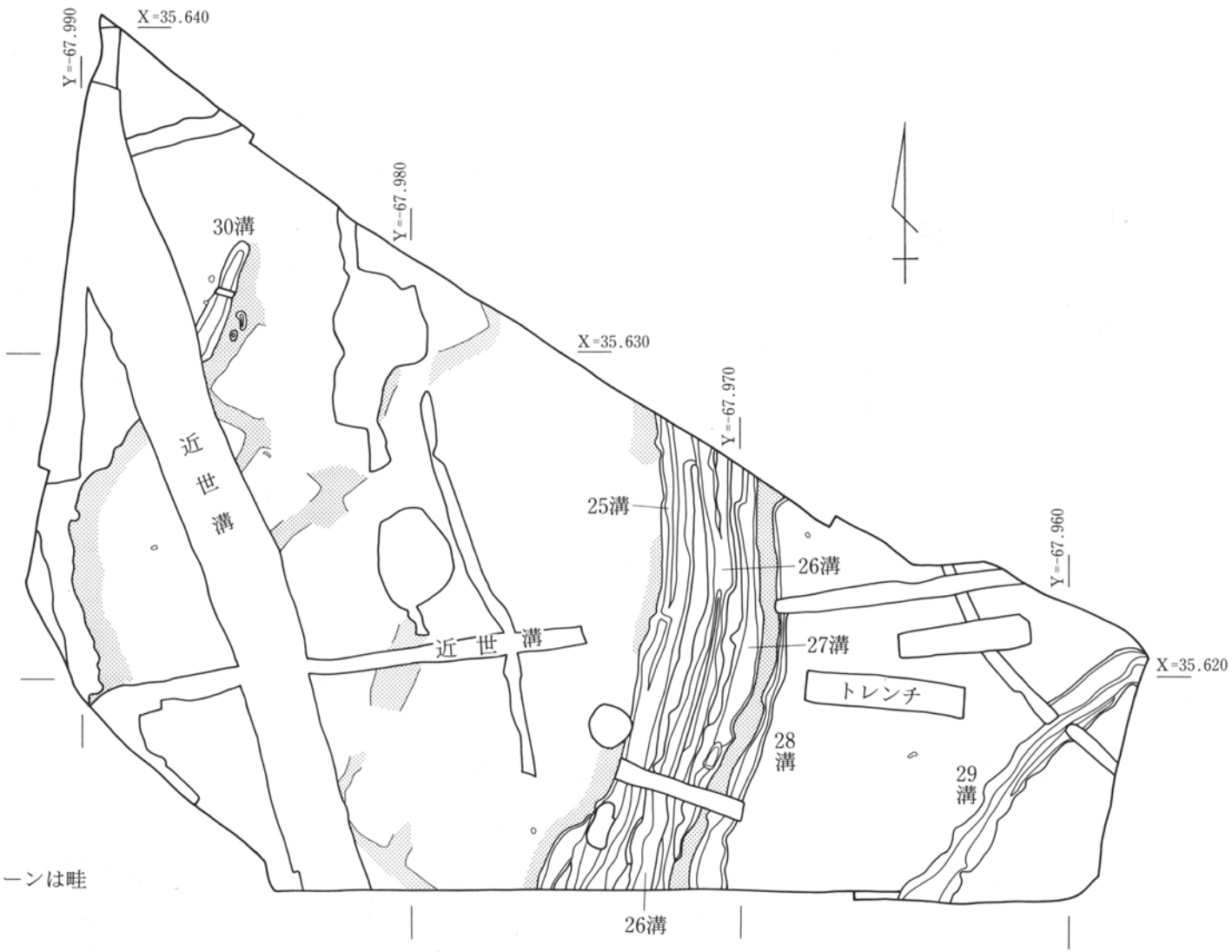
水田

検出された水田は、調査区の中央から西側にかけての範囲に、依存状態の余り良くない状態で広がりをもつ。全体に小畦の状態も悪く、水田面との高低差は余りない。水田の有り様は、2.5m×1.6m前後に小さく区画された極小区画水田が、長軸方向を北東方向にもつように連続するものと考えられ、先の第3面水田の極小区画方向とはやや異なる方向となる。また、大畦状の高まりは、調査区の西壁付近と、調査区中央で検出された南北方向の併走する溝群脇に存在する。前者の西壁付近の大畦状の高まりは、第3面の2大区画西側を区画する大畦と同じ位置にあり、本水田期から第3面水田期まで踏襲された可能性をもつ。後者の併走する溝群西脇に存在する大畦状の高まりは、第3面水田では検出されていない位置であり、むしろ溝群を含めた一連の水田遺構に伴うものと考えられる。よって、この両者の畦状の高まりの間が、極小区画水田を区画する大区画とも考えられよう。

南北方向の併走する溝群の東側については、極めて残存状態が悪いことから水田の痕跡も検出できなかったが、西側の状況からすれば水田が存在した可能性は高い。

溝

検出された溝には、調査区の西側に位置する30号溝、中央に位置する25～28号溝、東側に位置する29号溝の6条がある。30号溝は畦状の高まりの西脇に、僅かに検出された溝である。25～28号溝は、南北方向にやや蛇行気味に湾曲して延びる溝が併走する溝群である。この溝群の西側に位置する25号溝の西脇には、僅か



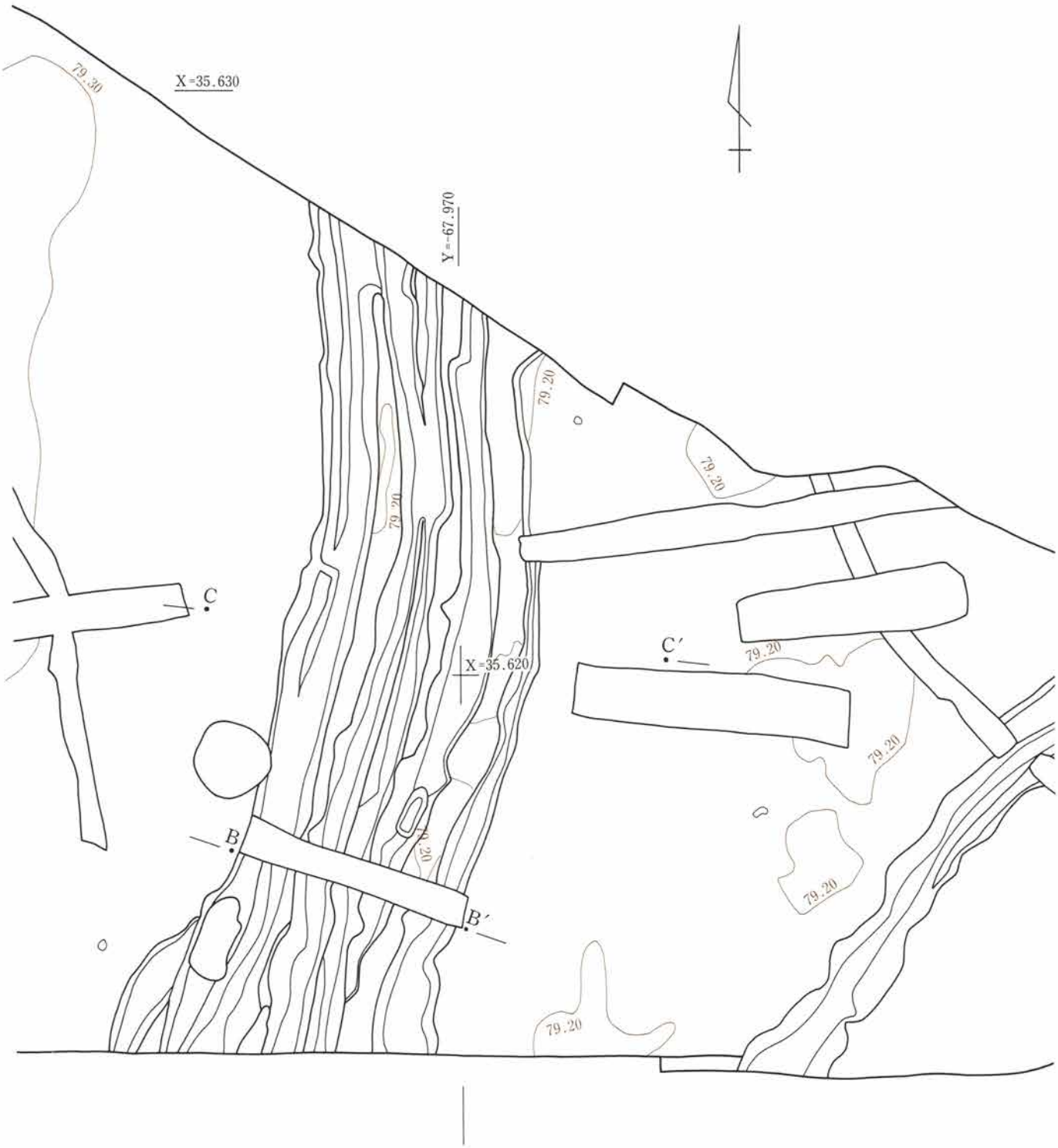
※スクリーントーンは畦

S=1/200

第245図　第4面の遺構配置図

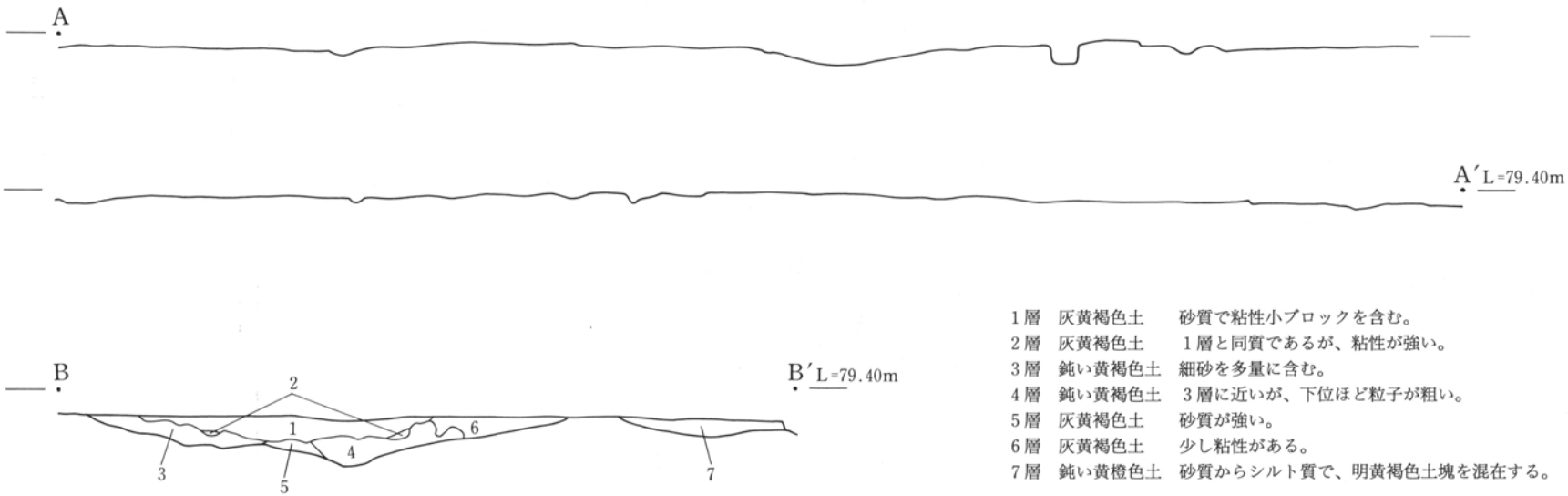
S=1/100

第246図　検出された畦



S=1/100

第247図　25～28号溝



1層　灰黄褐色土　　砂質で粘性小ブロックを含む。
2層　灰黄褐色土　　1層と同質であるが、粘性が強い。
3層　鈍い黄褐色土　細砂を多量に含む。
4層　鈍い黄褐色土　3層に近いが、下位ほど粒子が粗い。
5層　灰黄褐色土　　砂質が強い。
6層　灰黄褐色土　　少し粘性がある。
7層　鈍い黄橙色土　砂質からシルト質で、明黄褐色土塊を混在する。

第249図　土層説明

1層　褐色土　　As－B軽石の混土層である。
2層　褐灰色土　　As－B軽石を多量に含む。
3層　褐灰色土　　As－B軽石とHr－FP泥流ブロックを含む。
4層　鈍い黄褐色土　Hr－FP粒を含む。
5層　鈍い黄橙色土　Hr－FP粒を含み、砂質土との互層を成す。水性堆積。
6層　黄褐灰色土　　2層と7層の混在土。
7層　鈍い黄橙色土　粘性の強いシルトで、水性堆積。
8層　明黄褐色土　　黄色土ブロックと7層が混在し、粘性が強い。
9層　褐灰色土　　第3面の水田耕作土で、還元味あり。
10層　黄褐色土　　砂質で、水性堆積。Hr－FA泥流と考えられる。
11層　褐灰色土　　第4面の水田耕作土で、上位が黒く、下位が褐灰色。粘性強い。
12層　褐灰色土　　粘質で、全体に黒い。
13層　鈍い黄褐色土　10層の砂質土と同様。
14層　灰黄褐色土　　砂質である。
15層　灰黄褐色土　　砂質で、畦状に高まる。
16層　褐灰色土　　粘質で黒い。
17層　灰黄褐色土　　粘質で、部分的に砂質。
18層　褐灰色土　　粘性からシルト質。
19層　褐灰色土　　As－C軽石を含み、粘質でシルト質。
20層　黒褐色土　　粘質で黒い。
21層　褐灰色土　　シルト質で、地山に近い。
22層　灰黄色土　　基盤のシルト層。
23層　灰黄色土　　シルト層。

第248図　水田と溝の断面

な畦状の高まりが沿う。同様の高まりは、27号溝と28号溝との間にも存在する。また、25～27号溝の新旧関係については、調査時の所見として25号溝が最も古い溝と考えられる。第251図に示した遺物は、25号溝から出土した外面に縦位の櫛目を施す壺や台付甕の底部である。29号溝は北東隅から南西方向に延びる溝で、その方向性から溝群に合流する可能性をもつ。

なお、これらの溝の流路方向は、微地形等から第３面水田と同様の南方向にある。

第６節　第５面の遺構（最終面、シルト層上面）

調査の最終遺構確認として、基盤層となるシルト層上面での遺構確認を行った。その結果、人為的な遺構として溝２条が検出され、その他に風倒木痕が４カ所、第４面水田の耕土とも思われる範囲が調査区の西側に確認されている。

まず、第４面水田の耕土とも思われる範囲であるが、調査区の西側で検出された第４面水田の畦の痕跡が検出された範囲に位置する。周囲のシルト面よりやや黒ずんだ土の範囲が広がった状態で、層としては明瞭ではない。また、この範囲内に風倒木痕が存在することから、水田の耕土ではない可能性も含む。

人為的な溝と認められるのは、31・32号溝である。第４面で検出された25～28号溝の位置とほぼ同じ位置にあるが、南北方向にやや蛇行気味に湾曲して延びる25～28号溝に対し、31・32号溝は直線的に北北東方向に延びる点で、溝の走向が異なっている。また、第249図に示した南壁の土層断面図を見ても、明らかに25～28号溝よりも古い溝であることが理解できよう。

第７節　出土遺物

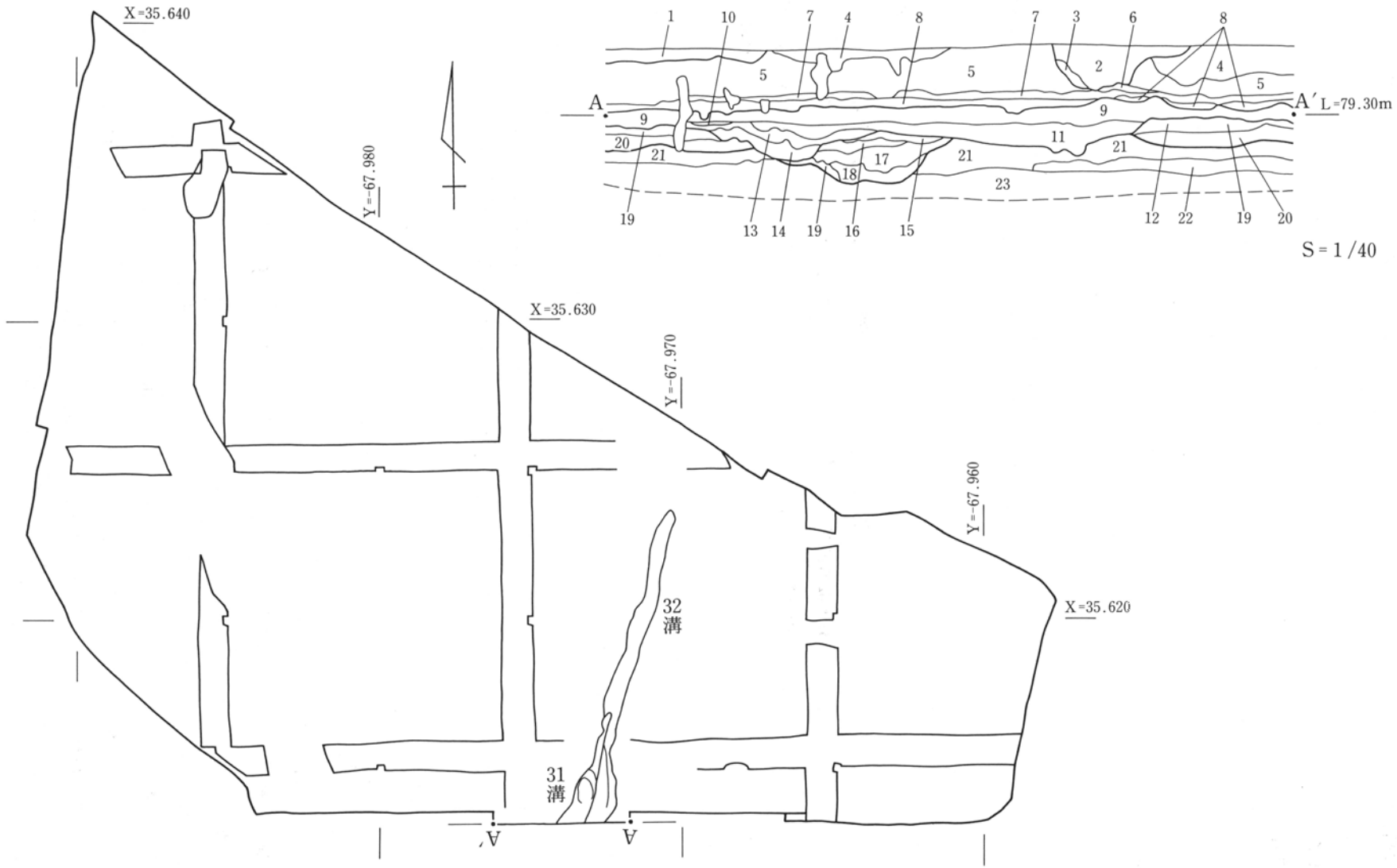
本調査で出土した遺物は、検出された遺構の性格から、各時期を通して少ない状況である。出土した多くは、第１面に関連する遺構出土資料が主体を占める。以下に各調査区・遺構ごとに説明していく。

１号溝　（第250図１）

１は須恵器の大甕の胴部で、外面は平行叩き目をもつ。

２号溝　（第250図２～10）

２は土師器の高坏の脚部で、脚端部は屈曲しながら開くものと思われる。外面には縦位の篦磨きをもち、内面には篦撫でがみられる。３は埴輪片で、外面には突帯が巡り、内面には僅かに刷毛目がみられる。４は灯明皿で、口径7.6cm、底径5.4cm、器高2.0cmを測る。ロクロ成形によるもので、底面に回転糸切り痕が残る。口舌部には油煙が付着している。５は口舌部が平坦で、内面頸部の有段部が緩い内耳鍋である。底部は平底となると思われるが、不明。全体に撫でを施すが、口縁部および内面が丁寧。６は土師質のもので、器種は不明。両端部を僅かに欠き、長軸の中央に孔が貫通する。７は須恵器の大甕の胴部片で、外面に平行叩き目を、内面に同心円状あて目をもつ。８～10は中世における在地産軟質陶器の擂り鉢で、内面に掻き目をもつ10や、８・９の底面には糸切り痕が僅かに残る。



第249図　第5面の遺構配置と土層断面

6号溝　(第250図11・12)

11は灯明皿の底部であるが、底面に僅かに回転糸切り痕が残り、底部中央に径3㎜ほどの穿孔を有する。12は12世紀後半から13世紀中頃にかけての竜泉窯系の青磁碗で、内面に片彫りによる文様をもつ。

14号溝　(第250図13)

13は須恵器の大甕の胴部片で、外面に格子状の叩き目がついている。

18号溝　(第251図14～17)

14・15は埴輪片で、14の外面には突帯が巡り、縦位の刷毛目が施されている。15の外面にも縦位の刷毛目が施される。16・17は同一個体と思われる須恵器の大甕の胴部片で、胎土に黒色鉱物を多く含み、外面には平行叩き目、内面に同心円状あて目をもつ。

21号溝　(第251図18)

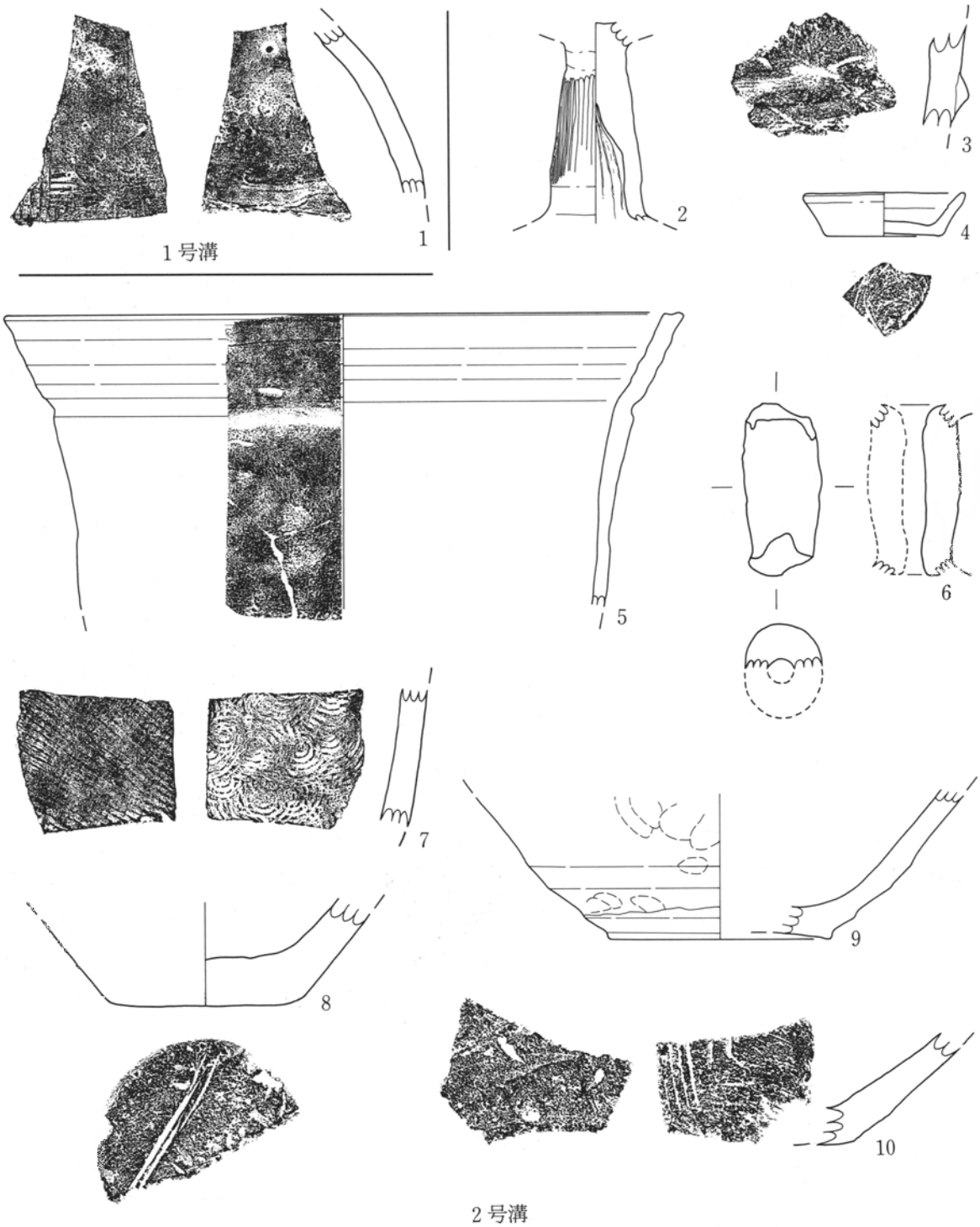
18は、先の18号溝出土の16・17と同一個体と思われる須恵器の大甕の胴部片で、胎土に黒色鉱物を多く含み、外面には平行叩き目、内面に同心円状あて目をもつ。

25号溝　(第251図19～21)

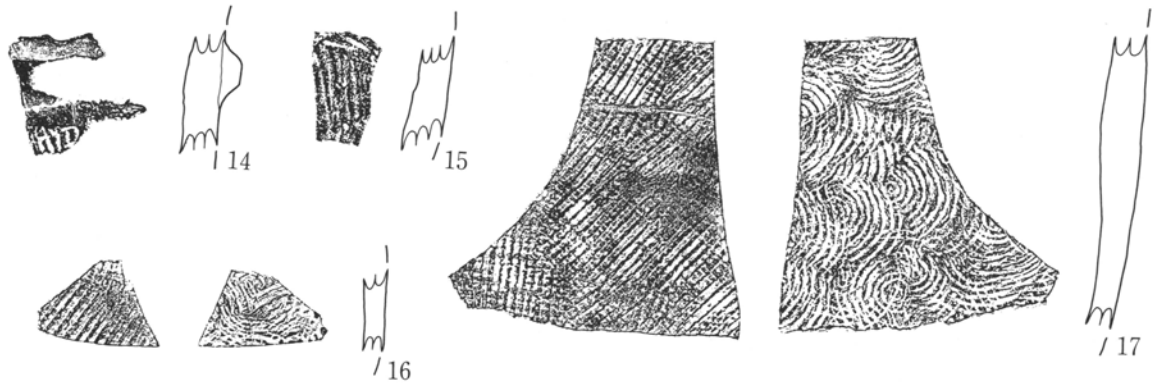
19は土師器の壺で、口縁部が大きく外反し、外面に縦位の櫛目を施した後に撫でるが櫛目の痕跡を残す。内面は撫でによる。20・21は台付甕の底部で、外面には縦位の刷毛目をもち、脚部にも斜位の櫛目が施される。内面には撫で痕がみられる。

遺構外出土遺物　(第251図22～25)

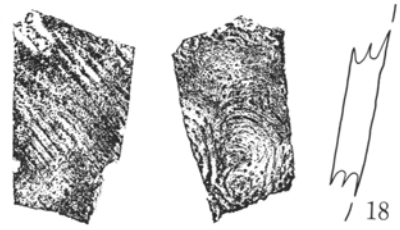
22は須恵器の大甕の胴部片で、外面に平行叩き目、内面に同心円状あて目を有する。外面には自然釉が付着する。23は須恵器の大甕の口縁部片で、口縁部を数段の横位線で区画し、区画内に櫛歯工具による波状文を描く。内外面に自然釉が薄く付着する。24は土師器の甕であり、口縁部は横撫でで、球胴状となる胴部は篦削りおよび撫でによる。内面は篦撫でとなる。25は雲母石英片岩を石材とした縄文時代の打製石斧である。



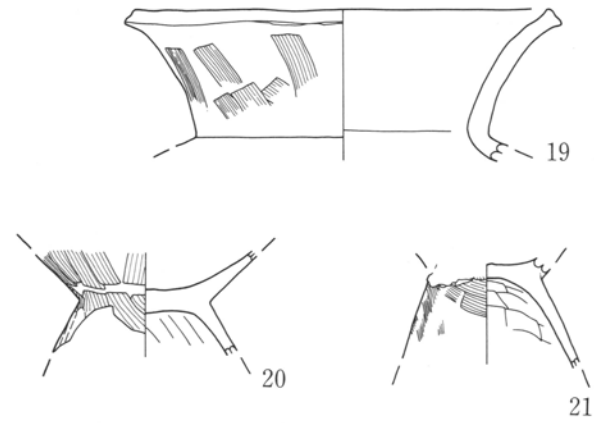
第250図　出土遺物（1）



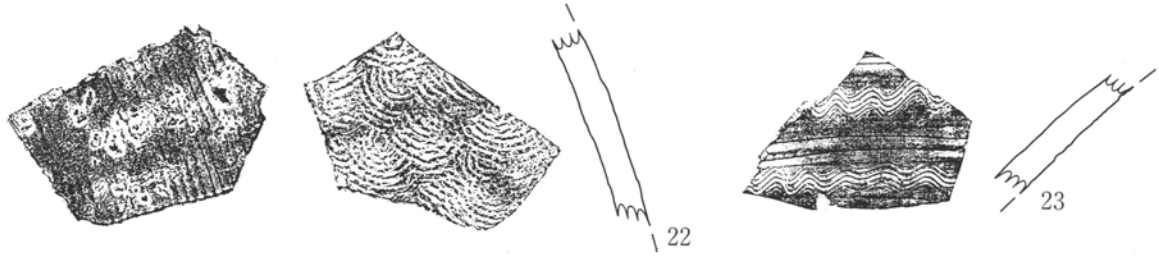
18号溝

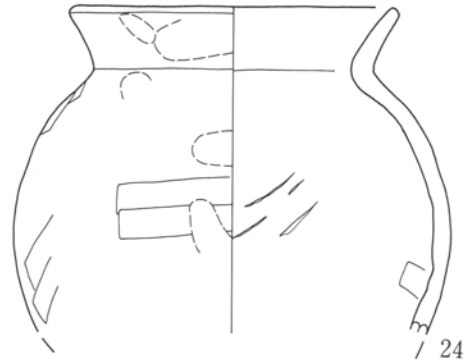


21号溝



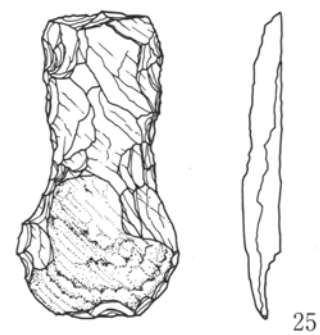
25号溝





遺構外

S=1/3



S=1/3

第251図　出土遺物(2)

第5章　自然科学分析

本遺跡の発掘調査では、火山灰層や火山性泥流層・洪水層等を鍵層として、調査区全体にわたって複数面の遺構調査が行われた。このため、各調査区での鍵層とした火山灰層等の土壌分析を行うことで、火山灰層の特定と降下年代、火山性泥流層・洪水層等の堆積年代、さらには調査区間での鍵層の同一性を確認することを目的とした。なお、植物珪酸体分析も併せて行っているが、本報告では土壌分析について掲載する。

分析資料については、調査範囲の南端に位置するA区と、北端に位置するF区から資料採取した。調査の進行にしたがい、A区の分析は平成9年2月に、F区の分析は平成11年9月に行われた。A・F区両者の分析は、株式会社古環境研究所に委託して行われた。その分析結果を、以下に掲載する。

上滝榎町北遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

Ⅰ　A区の分析

1．はじめに

群馬県域の完新世に形成された堆積物中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで年代の不明な土層が検出された長瀞線上滝榎町北遺跡において、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定により示標テフラの層位を把握して、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、A区北壁、西壁A、A区南部4号セクション、A区北壁の4地点である。

2．土層の層序

（1）A区北壁

この地点では、下位より灰白色細粒軽石混じり暗灰色土（層厚7cm以上，軽石の最大径2㎜）、灰色砂質土（層厚3cm）、灰白色軽石に富む灰色砂層（層厚8cm，軽石の最大径4㎜）、黄灰色砂層（層厚14cm）、灰色土（層厚3cm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚2cm）、灰色土（層厚10cm）、黒灰色粘質土（層厚3cm）、成層したテフラ層（層厚2.5cm）、若干色調の暗い灰色砂質土（層厚15cm）、灰色砂質土（層厚11cm）、灰白色軽石混じり灰色土（層厚21cm）が認められる（図1）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より褐色粗粒軽石混じり暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm，軽石の最大径7㎜）、桃褐色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）からなる。このテフラ

層は、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，新井，1979）に同定される。この地点では、このテフラ層の直下から水田遺構が検出されている。

また、最上位の土層中に含まれる灰白色軽石は、その層位や岩相から1783（天明３）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）に由来すると考えられる。なお、黄色細粒火山灰層のすぐ上位の灰色土からは、９世紀と推定される土器が検出されている。

（２）西壁A

ここでは、下位より黄灰色砂層（層厚20cm以上）、暗褐色土（層厚５cm）、黒褐色土（層厚10cm）、灰色砂質土（層厚９cm）、暗灰色土（層厚９cm）、褐色粗粒軽石混じり褐灰色粗粒火山灰層（層厚２cm，軽石の最大径７mm）が認められる（図２）。これらのうち、褐色粗粒軽石混じり褐灰色粗粒火山灰層は、層相からAs-Bに同定される。

（３）A区南部４号セクション

ここでは、下位より黒灰色土（層厚８cm）、灰色砂質土（層厚５cm）、灰色砂質土（層厚４cm）、黄灰色砂層（最大層厚３cm）、灰色砂質土（層厚５cm）、淘汰の良い黄灰色砂層（層厚２cm）が認められる（図３）。ここでは、２層準の黄灰色砂層の直下からウシの蹄跡が検出されている。

（４）A区南壁

この地点では、下位より褐色軽石混じり灰色土（層厚７cm，最大径３mm）、白色軽石層（層厚５cm，軽石の最大径12mm，石質岩片の最大径２mm）、白色軽石混じりで褐色がかった灰色土（層厚６cm）、白色軽石混じり灰色土（層厚９cm）、白色軽石を少量含む灰色土（層厚４cm）、灰色作土（層厚16cm）が認められる（図４）。

これらの土層のうち、最下位の灰色土中に含まれる褐色軽石は、その岩相からAs-Bに由来すると考えられる。またその上位の白色軽石層は、層相からAs－Aに同定される。その上位の土層中に含まれる白色軽石も、As－Aに由来するものである。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

洪水に由来する砂層などの土層の堆積年代を知るために、テフラ層あるいは土層について基本的に厚さ５cmごとに採取された土壌試料についてテフラ検出分析を行い、テフラ粒子の量や特徴などから示標テフラの検出同定を試みた。分析の対象となった地点は、A区北壁、西壁A、A区南部４号セクションの３地点である。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

１）試料10ｇを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表３に示す。A区北壁の試料番号３には、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石

(最大径1.7㎜) が比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As－C，新井，1979) に由来すると考えられる。試料番号1には、あまり発泡の良くない白色軽石 (最大径1.4㎜) が比較的多く含まれている。斑晶鉱物としては、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相からHr－FAに由来すると考えられる。したがって、層相から試料番号1のテフラ層は、Hr－FAに同定される。

西壁Aでは、試料番号3以上の試料にAs－Cに由来する灰白色軽石 (最大径2.0㎜) が少量ずつ認められた。また試料番号2には、Hr－FAに由来する白色軽石 (最大径1.2㎜) も認められた。したがって産出状況から、試料番号3にAs－Cの、また試料番号2にHr－FAの降灰層準があると推定される。

A区南部4号セクションでは、試料番号4以上にAs－CおよびHr－FA起源の軽石が認められた。各々の最大径は、2.2㎜および1.8㎜である。その産状から、試料番号4付近にAs－CおよびHr－FAの降灰層準があると考えられる。なおAs－Bに由来する軽石は検出されなかったことから、本地点で記載された土層はAs－Bより下位にあると考えて良い。

4．屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

A区北壁で認められた砂層 (試料番号2) 中に含まれる軽石の起源を明らかにするために、位相差法 (新井，1972) により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

試料中には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められた。火山ガラスの屈折率 (n) は1.514-1.520、斜方輝石の屈折率 (γ) は1.707-1.710である。これらの特徴から、試料番号2に含まれる軽石はAs－Cに由来すると考えられる。このことは、さらに下位の土層中からAs－C起源の軽石が検出されていることと矛盾しない。

5．考察－水田遺構・ウシの蹄跡・洪水層の層位について

本遺跡の発掘調査で検出された水田遺構は、Hr－FAおよびAs－Bの直下から検出されている。A区南部4号セクションにおいて2層準の洪水砂層直下から検出されたウシの蹄跡は、Hr－FAの上位でAs－Bの下位にあると推定される。さらに本遺跡では、複数の層準から洪水層が検出された。それらの層位は、As－Cの上位でHr－FAの下位、Hr－FAの上位でAs－Bの下位の3層準にある。Hr－FAの上位でAs－Bの下位にある洪水層のうち、最下位のものはHr－FA直上にあり、Hr－FAの堆積に伴って発生したもの (早田，1989) と考えられる。またその上位の2層の洪水層については、これらの堆積に伴って形成されたと推定される灰色土中から、9世紀と推定される土器が検出されている。したがってこれらの洪水層の中には、9世紀以降に堆積したものがあると考えられる。

6．小結

長瀞線上滝榎町北遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石 (As－C，4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr－FA，6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As

－B，1108年)、浅間A軽石（As－A，1783年）のテフラ層あるいはテフラ粒子を検出することができた。発掘調査によって検出された水田遺構は、Hr－FA直下およびAs－B直下に層位がある。またHr－FAの上位でAs－Bの下位の2層準から、洪水砂層により覆われたウシの蹄跡が検出されている。さらにAs－Cの上位でHr－FAの下位、Hr－FAの直上、Hr－FAの上位でAs－Bの間の2層準に洪水砂層が検出された。Hr－FAの直上の洪水層は、Hr－FAの堆積に伴って発生したもの、またHr－FAの上位でAs－Bの間の2層準のうち、1層は9世紀以降に堆積したものと考えられた。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナルno.53，p.41-52.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.

早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究27，p.297-312.

表3　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
A区北壁	1	＋＋	白	1.4
	3	＋＋	灰白	1.7
西壁A	1	＋	灰白	2.0
	2	＋	灰白＞白	1.4,1.2
	3	＋	灰白	1.3
	4	－	－	－
A区南部	1	＋	白＞灰白	1.2,0.7
	2	＋＋	白	1.6
	3	＋＋	灰白＞白	2.1,1.8
	4	＋＋	灰白＞白	2.2,1.3
	5	－	－	－
	6	－	－	－

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm.

表4　屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス（n）	斜方輝石（γ）
A区北壁	2	opx,cpx	1.514-1.520	1.707-1.710

opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．屈折率の測定は，位相差法（新井，1972）による．

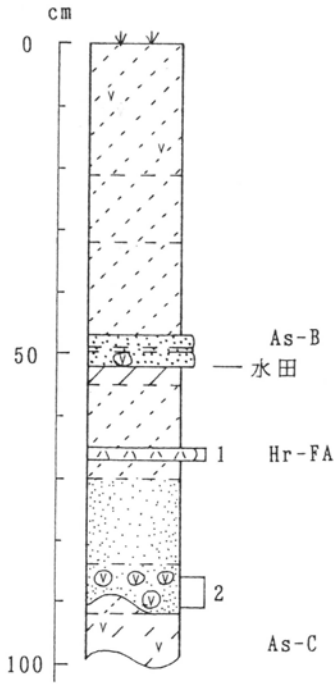
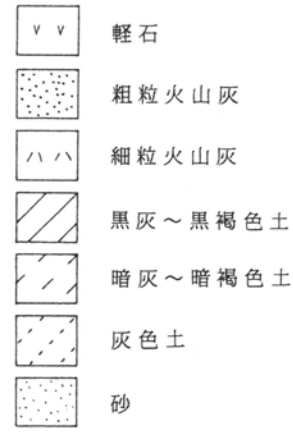


図１　Ａ区北壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



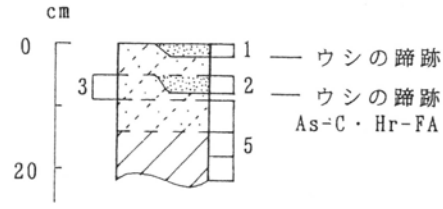


図３　Ａ区南部４号セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

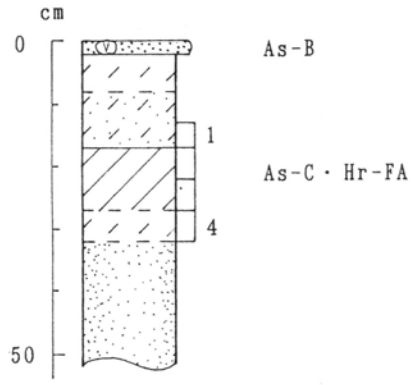


図２　西壁Ａの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

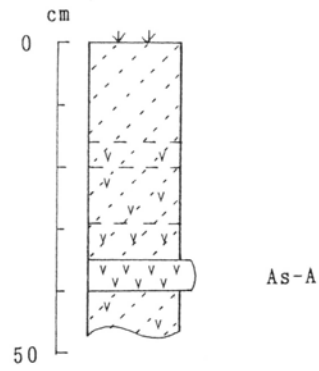


図４　Ａ区南壁の土層柱状図

第252図　Ａ区の土壌分析図

II　F区の分析

1．はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、榛名、赤城など北関東地方とその周辺の火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を求めることで、地層の堆積年代や地形の形成年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な畦畔状遺構や溝が認められた上滝榎町北遺跡においても、地質調査を行い土層の層序を記載するとともに、テフラについての肉眼観察を合わせて行うことになった。また、合わせて微化石分析用の試料採取を行った。調査分析の対象となった地点は、西壁および最下面の自然流路セクションの2地点である。

2．地質層序

（1）西壁

上滝榎町北遺跡の基本的な土層断面が認められた西壁では、下位より暗灰色土（層厚4cm以上，XII層）、灰色軽石混じり暗灰色土（層厚7cm，軽石の最大径5㎜，XI層）、灰色砂層（層厚6cm，X”層）、若干色調の暗い灰色砂層（層厚4cm，X'層）、砂混じり灰色土（層厚11cm，X層）、黄色シルト層（層厚0.2cm）、成層したテフラ層（層厚5cm）、灰色砂質シルト層（層厚1cm）、灰色シルト層（層厚0.3cm）、灰色砂質シルト層（層厚1cm）、桃色シルト層（層厚4cm，以上IX層）、灰色砂層（層厚4cm）、黄色シルト質砂層（層厚3cm，以上VIII層）、白色軽石混で若干色調の暗い灰色土（層厚8cm，軽石の最大径3㎜，VII'層）、暗灰色土（層厚4cm，VII層）、成層したテフラ層（層厚8.2cm，VI層）、暗灰褐色砂質土（層厚4cm，V層）、黄色がかった灰色砂質土（層厚7cm，IV層）、灰白色軽石を多く含む黄灰色土（層厚8cm，軽石の最大径5㎜，III層）、灰白色軽石混じりで黄色がかった灰色土（層厚15cm，軽石の最大径4㎜，II層）、灰色作土（層厚14cm，I層）が認められる（図1）。発掘調査では、2層の成層したテフラの直下の2層準から畦畔状遺構が検出されている。

X”層の下位にある暗灰色土中に含まれる灰色軽石は、比較的良く発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から4世紀中葉＊1に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As－C，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。2層の成層したテフラ層のうち下位のテフラ層は、下部の成層した灰色火山灰層（層厚3cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚2cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に同定される。本遺跡の周辺では、Hr－FAの上位に6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr－FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）の最上部の細粒火山灰層（早田，1993）が検出され、ごく薄い土層を挟んでさらに上位にHr－FPの噴火に伴って発生した火山泥流堆積物（早田，1989）が認められている（早田，未公表資料）。層相から、IX層最上部の桃色シルト層がこれに対比される可能性が考えられる。

上位のテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、橙褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As－B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。以上のことから、2層準の畦畔状遺構の層位は、Hr－FAとAs－Bの直下にあると考えられる。

（2）最下面の自然流路セクション

21号溝Cセクションでは、下位より灰色土（層厚4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚23cm）、灰白色細粒軽石混じり黄灰色土（層厚12cm，軽石の最大径2mm）が認められる（図2）。これらの土層を切って、21号溝が作られている。21号溝は、下位より灰白色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚10cm）、黒灰色泥層（層厚4cm）、灰色土（層厚4cm）により埋没している。

これらのうち、灰色粗粒火山灰層については、層相から約1.3～1.4万年前*2に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石層（As－YP，新井，1962，町田・新井，1992）に同定される。また、その上位の黄灰色土中に含まれる灰白色軽石については、層位からAs－YPのほか、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（As-Sj，早田，1990，1996）に由来する可能性が考えられる。

3．小結

上滝榎町北遺跡において地質調査を行った。その結果、下位より浅間板鼻黄色軽石（As－YP，約1.3～1.4万年前*1）、浅間総社軽石（As-Sj，約1.1万年前*1）、浅間C軽石（As－C，4世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr－FA，6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As－B，1108年）などを検出することができた。発掘調査で検出された2層準の畦畔状遺構については、Hr－FAとAs－Bの直下に層位があると考えられる。

＊1　西暦300年前後とする見方もある（友廣，1987など）．＊2　放射性炭素（14C）年代．

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編10，p.1-79．

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナルno.53，p.41-52．

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報no.14，p.1-45．

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p．

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119．

早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究27，p.297-312．

早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編1，p.37-129．

早田　勉（1993）古墳時代におこった榛名山二ツ岳の噴火．新井房夫編「火山灰考古学」，古今書院，p.12　8-150．

早田　勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴―とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて―．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書7，p.256-267．

友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336．

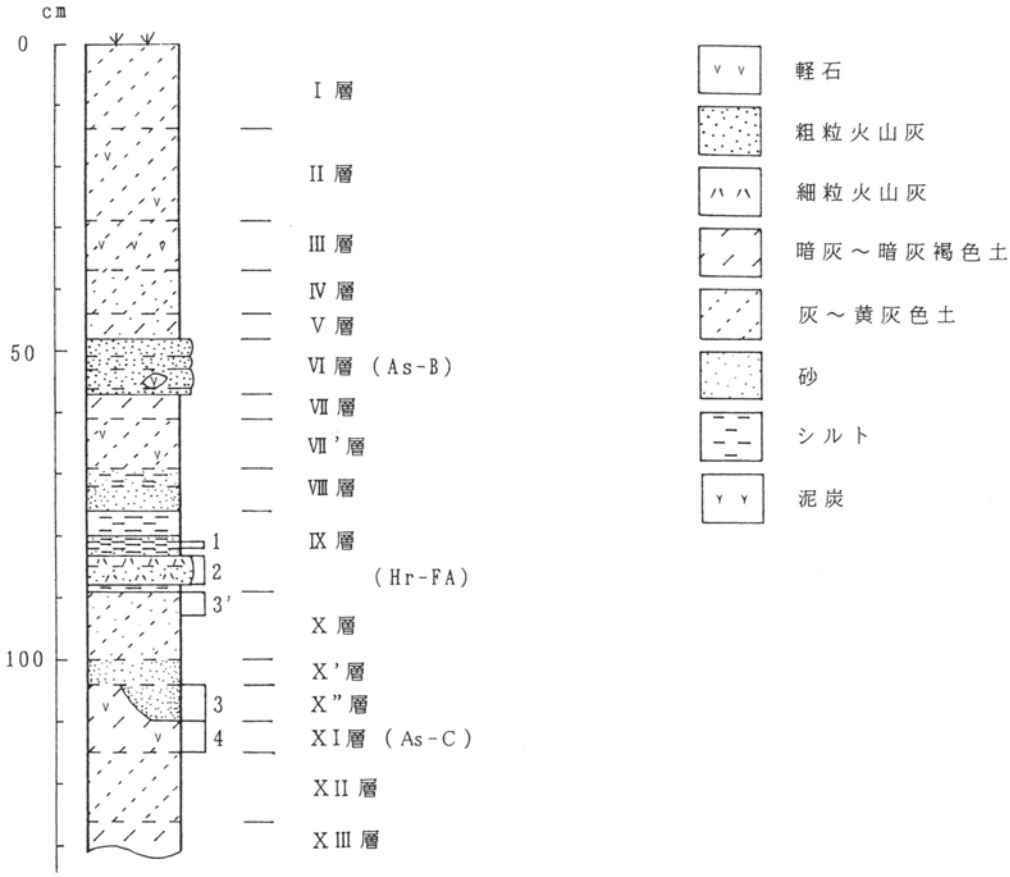


図１　西壁基本土層セクションの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

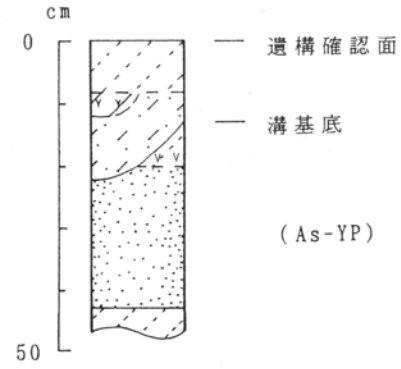


図２　21号溝Ｃセクションの土層柱状図

第253図　Ｆ区の土壌分析図

第6章　まとめ

本調査で検出された遺構・遺物については、先の第３・４章で述べてきた通りである。ここでは、調査の結果得られた注目する点、所見、問題点と課題を述べることで、調査のまとめとしたい。

1　天明三年の浅間山噴火の降灰で覆われた耕作面について（近世面）

第１面で検出された溝（水路）、水田を区画する畦、田面に残された耕作痕といった遺構が、天明三年の大噴火による軽石降下後の作業による遺構であることは、本調査を始め隣接する宿横手三波川遺跡や上滝五反畑遺跡等の多くの遺跡でも確認されていることである。その作業が、１回限り（その後の耕作痕が重複していない）のものであることも共通の認識にある。しかし、先に刊行された報告書『上滝五反畑遺跡』（金井1999）、『宿横手三波川遺跡』（岩崎2001）では、金井氏の軽石降下後の水田復旧の耕作痕とする見解と、岩崎氏の水田から畑への転化による耕作痕とする見解の相違がみられる。この検出された区画および耕作痕が、軽石の処理の場、水田や畑に関わる耕作の跡とすれば、軽石降下後の耕作地の復旧の姿であることは大勢が認めるところであろうが、それぞれの区画内の痕跡が、いかなる目的（耕作地の種類）による作業であるのかについては、意見が異なる点であるのと同時に大きな問題となる。また、１回限りの作業による痕跡という点にも疑問がある。復旧作業としての深耕のという理解で済むのだろうか。その後の毎年の農作業（耕作）により、各遺跡で検出された耕作痕は残らないと思われるが、明瞭に残存している。こうした幾つかの問題点が指摘でき、今後の検討課題となる。

2　水田に残る馬蹄痕について（平安面）

As－Ｂ軽石に覆われた水田面からは、馬蹄痕および馬蹄痕列が検出されている。馬蹄痕列の各列の方向はいずれも北東方向に延び、水田区画を斜めに貫く様に続き、区画畦上にも馬蹄痕が乗る。こうした水田面に残された馬蹄痕列が、畦の上にまで乗る状況は、正に畦を踏み潰している状況であり、どのような作業の結果の痕跡なのか疑問を残す。畦を踏み潰すということは、少なくとも馬耕（馬を使って水田を耕す）による痕跡とは異なるものと考えられよう。また、『中右記』によれば、浅間山の爆発は７月21日からであるとされている。これらの馬蹄痕が残された時期が問題であり、一方では軽石の降下時期にも関わっている。つまり、馬蹄痕が残された時期が田植え前、或いは後であるのか疑問となる。遺跡の状況からは、田植え後に付けられた痕跡とは考え難く、田植え前の可能性が高いと推測される。さらに、田植え前とした場合、田植え直前の農作業時に関わる痕跡なのか、農作業以前に付けられたのか。水田を耕すための馬耕では、田面に明瞭な馬蹄痕が残らないはずであり、農作業に関わる痕跡としては可能性が少ない。では、農作業以前、所謂水田に関わる農作業とは異なる時期に、異なる結果として残された痕跡であるのだろうか。推測ではあるが、二毛作が行われていた結果、水田作業の開始以前の段階で馬が使用されたとは考えられないだろうか。稲作とは異なる作物の収穫に関わり、馬が使用された可能性を考えてみたい。二毛作の可能性を裏付ける意味でも、稲作以外に、例えば麦作をも含め併せて他種のプラントオパール等の分析を行ってみる必要性もあろう。一方、こうした考え以外にも、水田作業以前の時期を利用した、馬の「放牧」ということも考えられるが、水田地を放牧の場とすることは考え難い。さらに多くの事例から、検討する必要がある。

3　牛蹄痕と平行溝について（奈良・平安面）

Ａ区で検出された水田区画内に残る平行溝は、走向方向が区画の長軸方向に延びるという共通点がある。

また、溝幅が10cm前後であることも、ほぼ共通している。溝の間隔は、一部で重なる部分もみられるが、広いところでは30cm前後と、その幅はまちまちである。また、これらの平行溝は区画を画する畦には掛からず、全て区画内に収まる状況がある。断面観察からは、比較的浅く、その覆土は黄橙色味を帯びた色調の淡い褐灰色土であり、水田耕土の褐灰色土に近い土である。こうした状況から、水田耕作に関わる耕作痕と考えられ、その耕具に馬鍬ないし犂が可能性として考えられる。しかも、溝幅や溝間隔からすれば、馬鍬の可能性は少なく、犂による各一筋ごとの耕作による可能性が高いものと考えられる。同様な痕跡は、C区でも検出されている。因みに、犂の出土例として最も古い例は、香川県下川津遺跡（大久保 他　1990）出土の7世紀初頭から後葉にかけてとされる木製の「枠型長床犂」あるいは「江東犂」とされる形態のもので、日本における犂の使用が7世紀代には行われていたことを示す資料がある。このA区の水田区画からは、平行溝と共に牛蹄痕も数多く検出されており、その牛蹄痕の状況をも考え合わせれば、牛耕を想定できる。

4　水田面に残る新しい畦と古い畦について（Hr－FA下面）

D・E区からは、大区画内を区画する極小区画水田の明瞭な小畦と、それとは異なる潰れたような小畦が検出されている。この状況は、プリントされた（擬似）畦畔、或いは耕作（荒起し等）による田面の残存といったことを想定し難く、新規の水田耕作時（埋もれる直前段階）に、田起し（荒起し）という耕作行為が成されず、古い小畦をそのまま踏襲する形で新しい（明瞭な）小畦が作られ、その結果、古い小畦と新しい小畦がずれた部分では、古い小畦が潰れたような形で残存してしまったのではないかと考えた。つまり、明瞭な小畦は埋もれる直前段階の小畦であり、潰れたような小畦はそれ以前の小畦がそのまま残存した姿と考え、便宜上ではあるが、前者の小畦を通称「今年の小畦」、後者の潰れたような小畦を通称「去年の小畦」として扱った。このような検出例は、他の遺跡ではほとんど見られない。耕作方法も含めた、地域的な様相の一つとも考えられよう。なお、東隣の北関東自動車道調査分でも複数の大区画から確認されている。

5　祭祀遺構の可能性について（As－C混土下面）

C区取り付け道とE区取り付け道からは、遺物が集中して出土する箇所が検出されている。両地点の出土遺物をみると、共にS字状口縁台付甕をはじめとする壺、坩、高坏、器台等から構成されている。また、特異な器形を呈する、底部に孔を有する皿状の土器は、両地点からの接合資料でもある。さらに、管玉の出土もある。一方、遺物の出土位置をみると、C区取り付け道では畦の交差する広い高まり部であり、この場所がS字状口縁台付甕期以降、第6面水田期まで大畦の交差部として踏襲されている。E区取り付け道では、水田と微高地の境となる平坦部付近に位置し、その場所は第5・6面水田期でも水田化していない様子がある。この時期の祭祀遺構は明確な調査例が無く、その実体は不明な状況にあるが、本遺跡の例が水田農耕に関わる祭祀の場であり、出土した遺物が祭祀遺物である可能性を考えられないだろうか。今後の類例の増加を待ちたい。

6　水田の開削時期について

本遺跡の調査では、古墳時代から近世に至る8面もの遺構確認面を有し、多くの水田遺構が検出されるに至った。こうした水田稲作の歴史が、この遺跡でいつから始まったのか興味深い点である。調査の中で最も古く位置づけられる第8面の水田痕跡は、区画する畦を弄らずに定位置を確保しながら、区画内部の作付け面だけを耕作した極めて水田開削初期の耕作の姿と考えられ、S字状口縁台付甕を伴う祭祀遺構と共存する。こうした本遺跡の結果や、弥生時代の遺構遺物が存在しないこと、元島名将軍塚古墳を始めとする4世紀初頭の頃の周辺遺跡の状況からすれば、このS字状口縁台付甕期の頃に、この地の水田開削が行われた可能性が高いものと考えられよう。

発掘報告書抄録

フリガナ	カミタキエノキマチキタイセキ・カミタキIIイセキ
書名	上滝榎町北遺跡・上滝II遺跡
副書名	(主)前橋長瀞線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第289集
編著者名	谷藤保彦
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377－8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784－2
発行年月日	西暦2002年3月26日

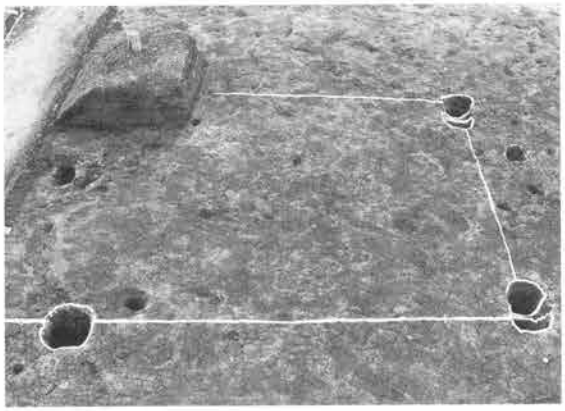
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
カミタキエノキマチキタ 上滝榎町北(イセキ)遺跡	タカサキシカミタキ 高崎市上滝(マチ)町	10202	10005-00450	36°19′13″	139°04′45″	19960701-19991031	15,000	道路建設
カミタキII イセキ 上滝II遺跡	タカサキシカミタキ 高崎市上滝(マチ)町	10202	10005-00646	36°19′07″	139°04′34″	19990405-19990630	700	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上滝榎町北遺跡	集落 生産	古墳時代4面 奈良時代1面 平安時代1面 中世　1面 近世　1面	竪穴住居跡 掘立柱建物 土坑、井戸 溝、館跡、 水田・畠	古墳時代初頭の 土器多数 土師器・須恵器 陶磁器、石製品 金属製品、木器	4世紀以降の古墳時代の水田4面を含め、計8面の水田を検出。4世紀の農耕祭祀跡や、6世紀の大用水路、奈良・平安期の牛耕が確認される。
上滝II遺跡	生産	古墳時代3面 中・近世1面	水田 竪穴、土坑、 井戸、溝	土師器甕・坏 須恵器坏 石製品	古墳時代の水田跡が2面、中・近世の遺構を多数検出。

遺跡地垂直写真（上方は利根川、下方は関越自動車道）

A区　1号住居（掘り方）

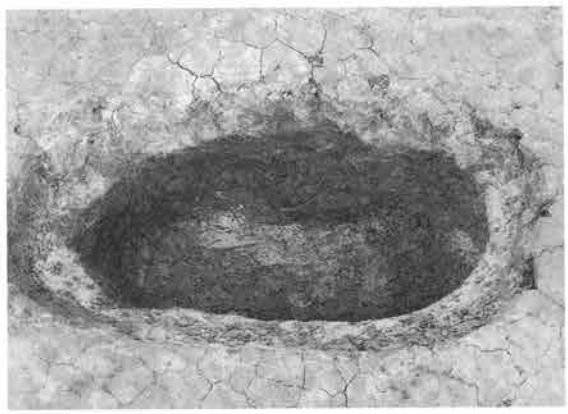
A区　1号住居カマド（掘り方）



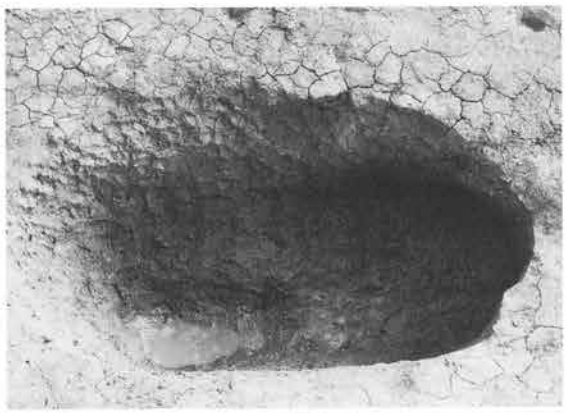
A区　1号掘立柱建物

A区　ピット群

A区　1号土坑



A区　2号土坑



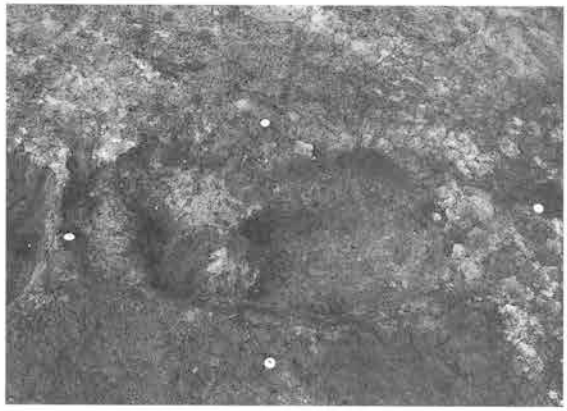
A区　5号土坑

A区　7号土坑

A区 8号土坑

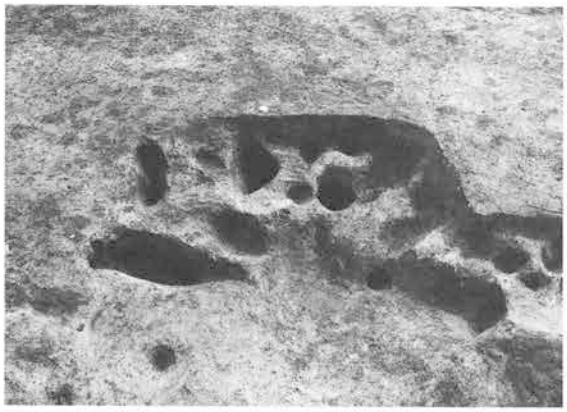
A区 9号土坑

A区 10号土坑

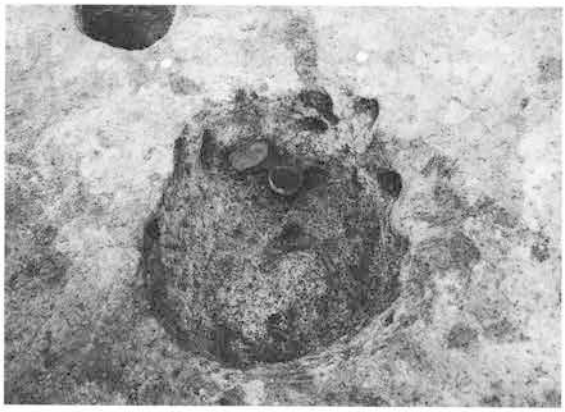


A区 11号土坑

A区 13号土坑



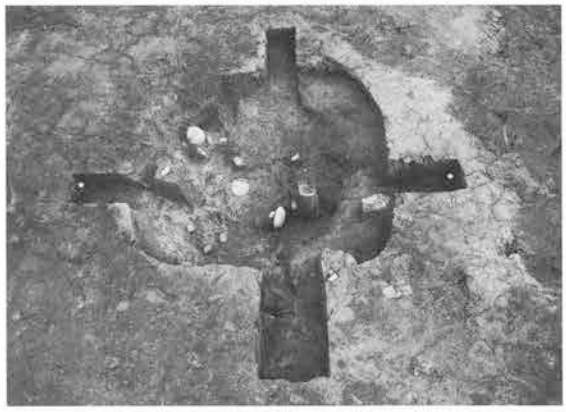
A区 14号土坑



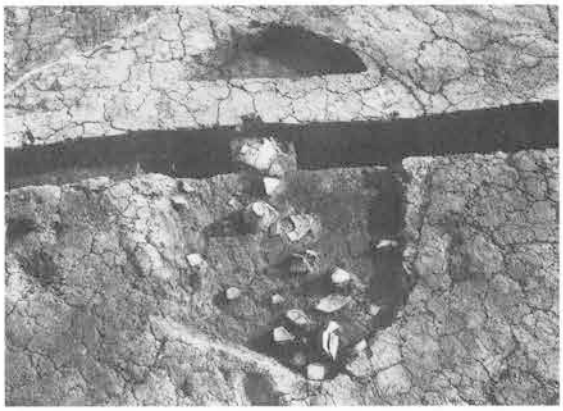
A区 25号土坑

A区 29号土坑

A区 30・31号土坑

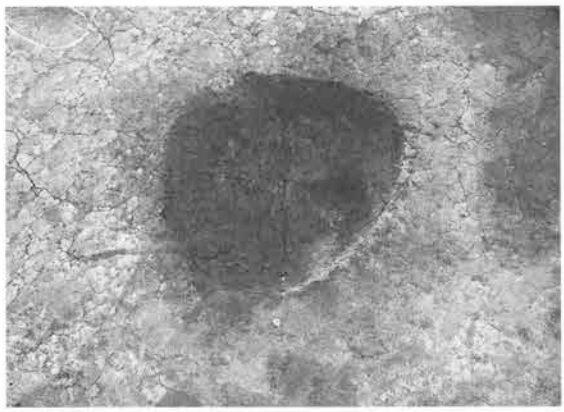


A区 34号土坑



A区 35号土坑

A区 36号土坑

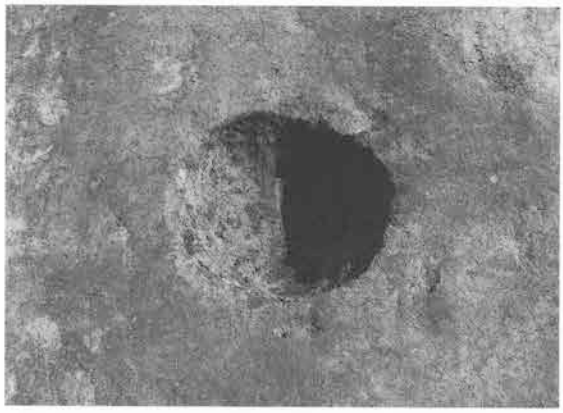


A区 40号土坑

A区 41号土坑

A区 43号土坑

A区 48号土坑



A区 50号土坑

A区 51号土坑

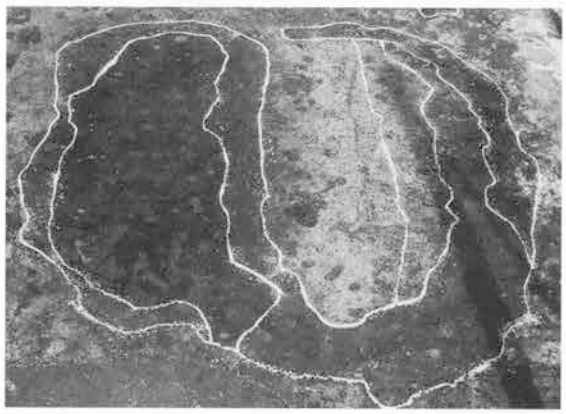
A区 52号土坑

A区 58号土坑

A区 59号土坑

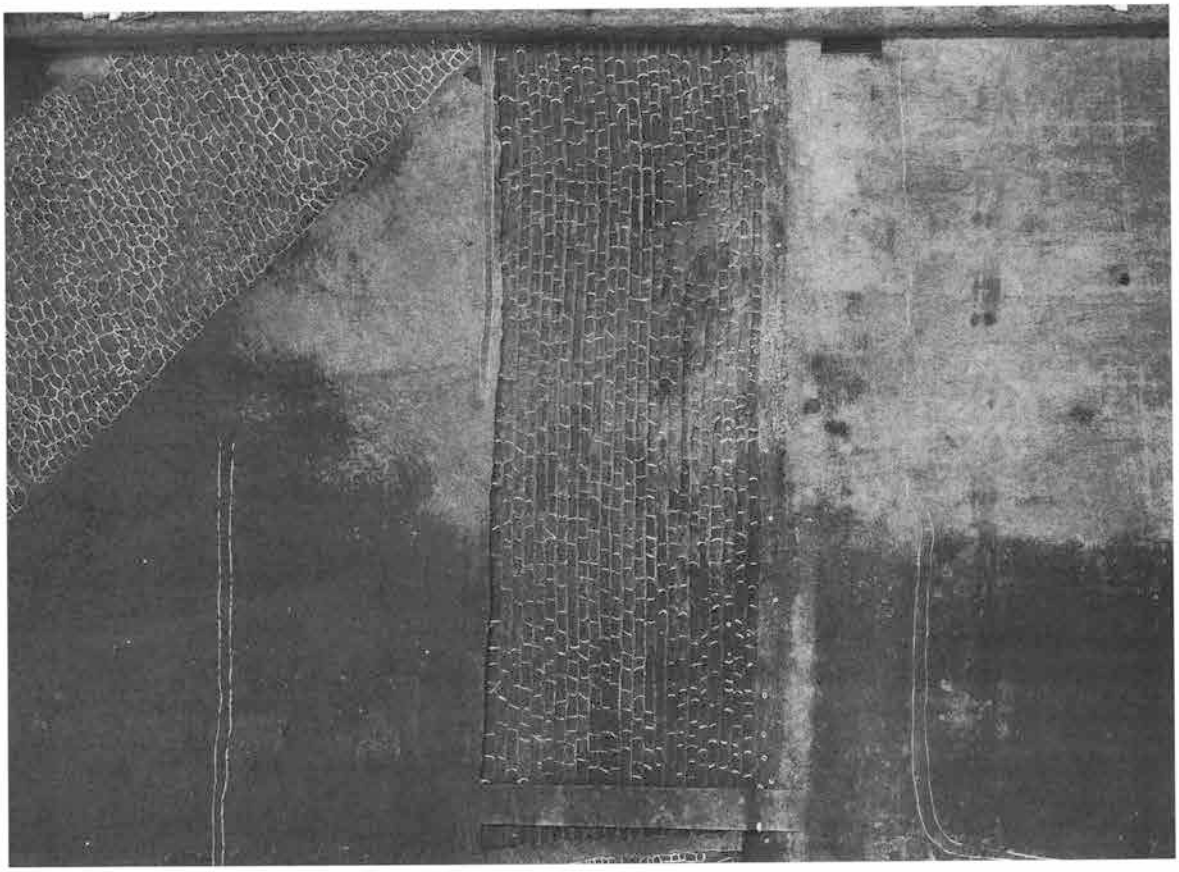
A区 60号土坑

A区 62号土坑

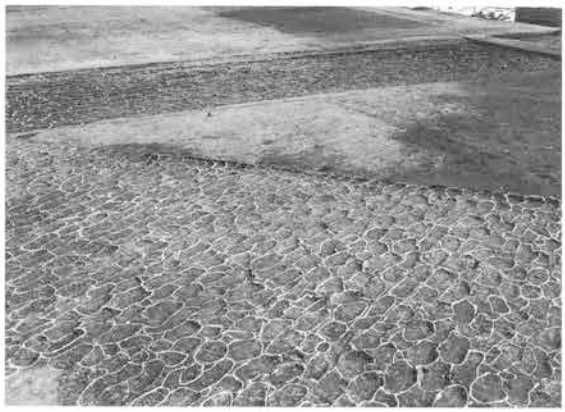


A区 微高地より検出された風倒木痕

A区 第1面 全景



A区 第1面 区画の状況

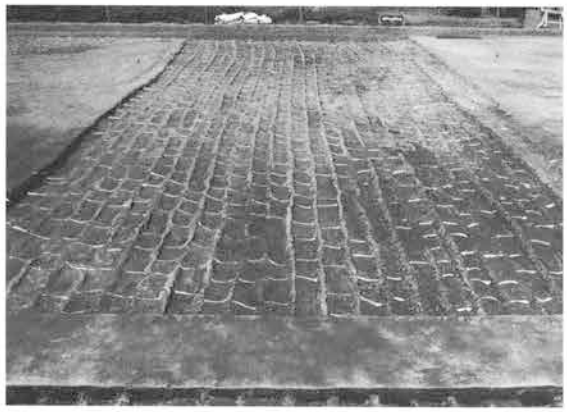


A区 第1面 区画の状況

A区 第1面 1・2区画の耕作痕

A区 第1面 1・2区画の耕作痕

A区 第1面 1・2区画の区画畦



A区 第1面 3区画の耕作痕

A区 第1面 4区画の耕作痕

A区 第1面 5区画の耕作痕

A区 第1面 6区画の耕作痕

A区 第1面 7区画の耕作痕

A区 第1面 8区画の耕作痕

A区 第1面 3区画の耕作痕土層断面

A区 第1面 1号溝

A区 第2・3面 全景

A区 第４面 遺構面の検出状況

A区 第４面 遺構面に残された動物足跡

A区 第４面 動物足跡と平行溝

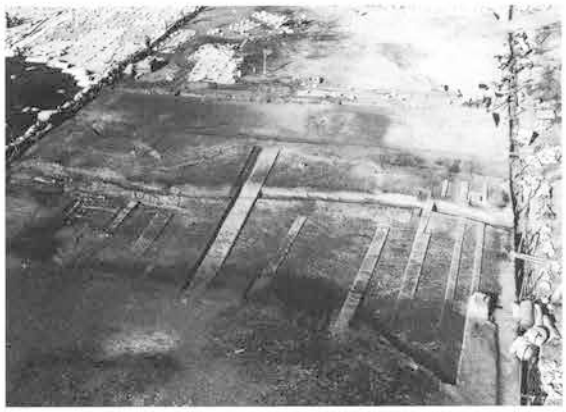
A区 第４面 動物足跡と平行溝

A区 第４面 １区画の牛蹄痕

A区 第４面 １区画の牛蹄痕

A区 第４面 １区画の牛蹄痕

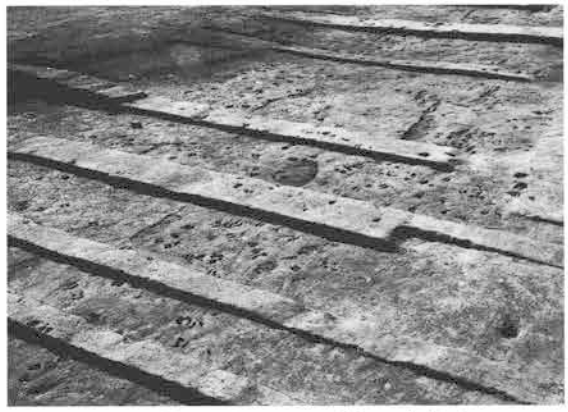
A区 第４面 １区画の牛蹄痕



A区 第４面 牛蹄痕範囲全景

A区 第４面 遺構面下位での確認状況

A区 第４面 21号溝と１・２区画



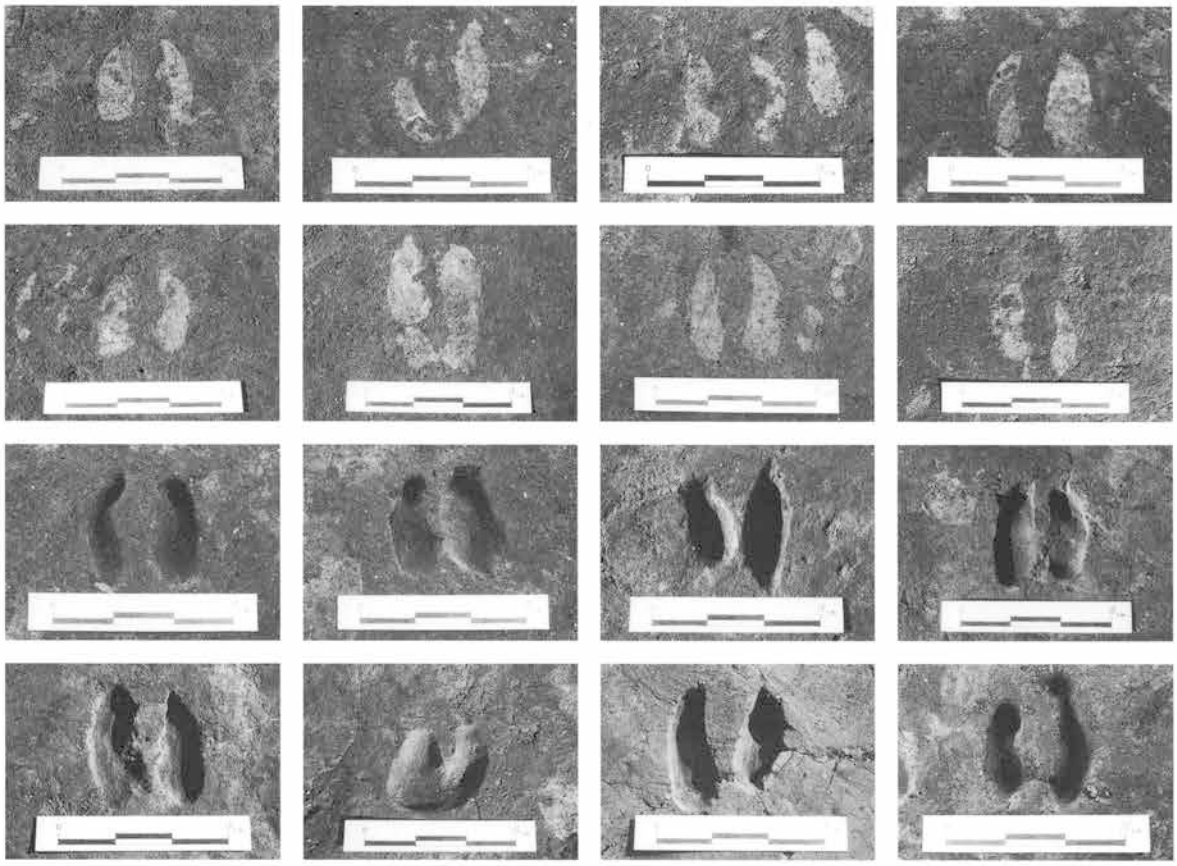
A区 第４面 １区画下位の牛蹄痕

A区 第４面 １区画下位の牛蹄痕

A区 第４面 ２区画下位の牛蹄痕

A区 第４面 ２区画の平行溝

A区 第４面 ７区画の平行溝と断面



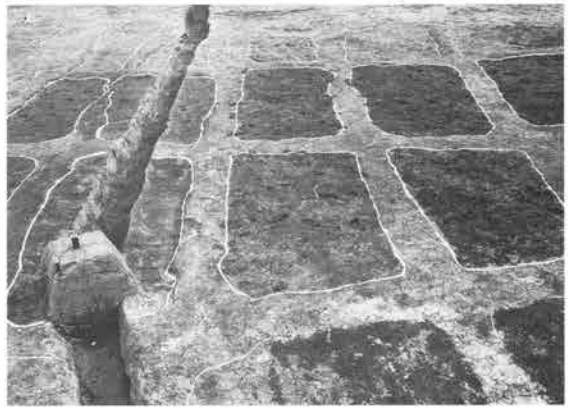
A区 第4面 牛蹄痕

A区 第6面 全景

A区 第6面 北側での区画状況

A区 第6面 中央での区画状況

A区 第6面 南側での区画と微高地



A区 第6面 極小区画水田の検出状況

A区 第7面 全景

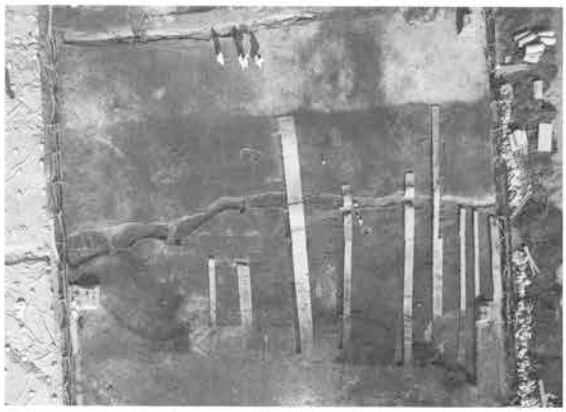
A区 第7面 北側での検出状況

A区 第7面 中央での検出状況

A区 第7面 南側での検出状況

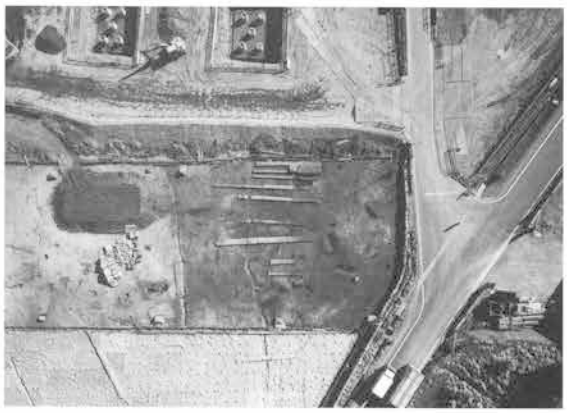
A区 第7面 北側での水田面の凹凸状況

A区 第7面 25～28号溝

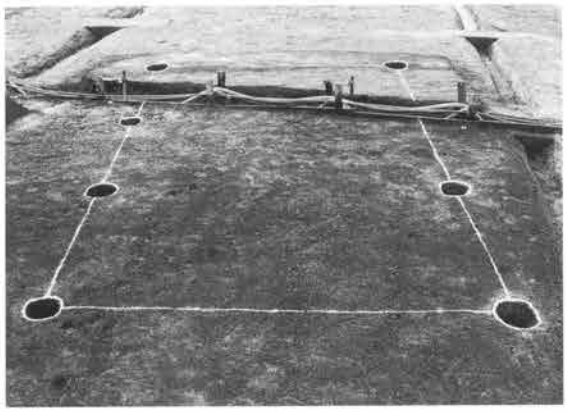


A区 第8面 南側での検出状況

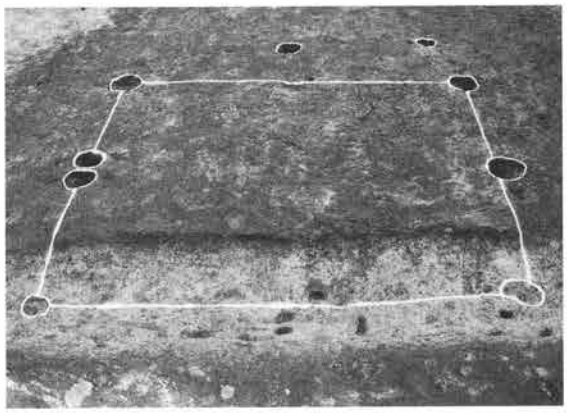
A区 第8面 北半での検出状況



A区 第8面 南半での検出状況



B区　1号掘立柱建物



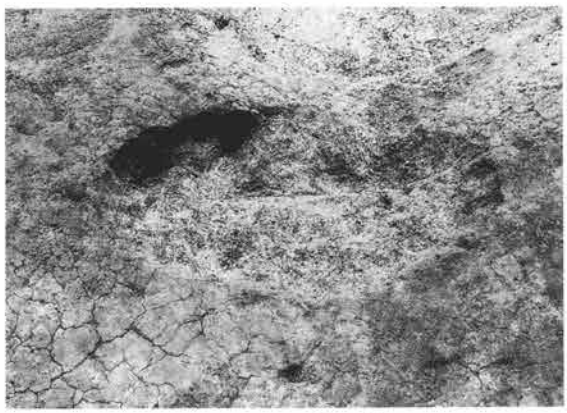
B区　2号掘立柱建物

B区　1・2号土坑

B区　3号土坑

B区　5号土坑

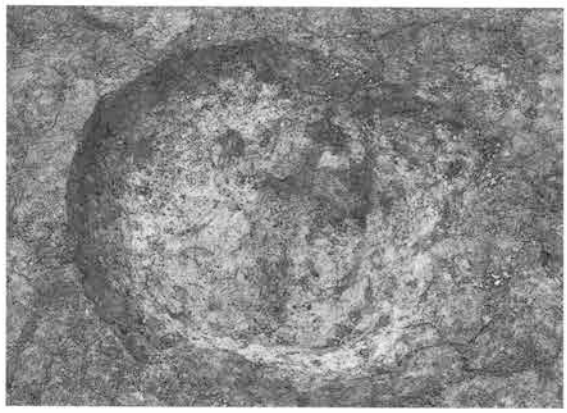
B区　6号土坑



B区　7・8号土坑

B区　9号土坑

B区 10号土坑

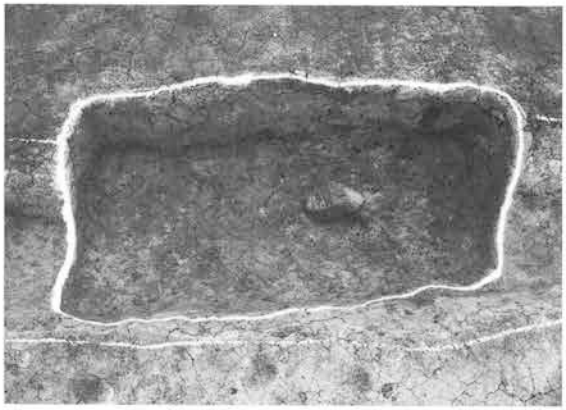


B区 12号土坑

B区 13号土坑

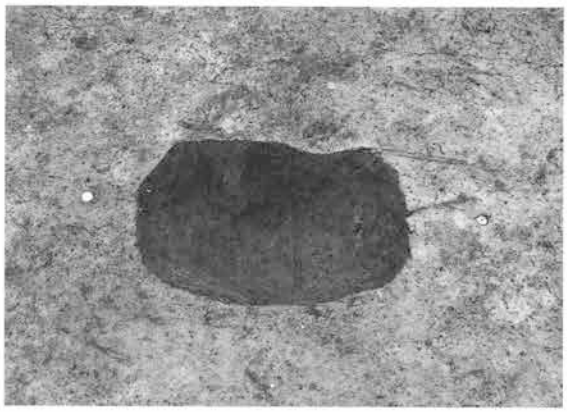
B区 14号土坑

B区 15号土坑

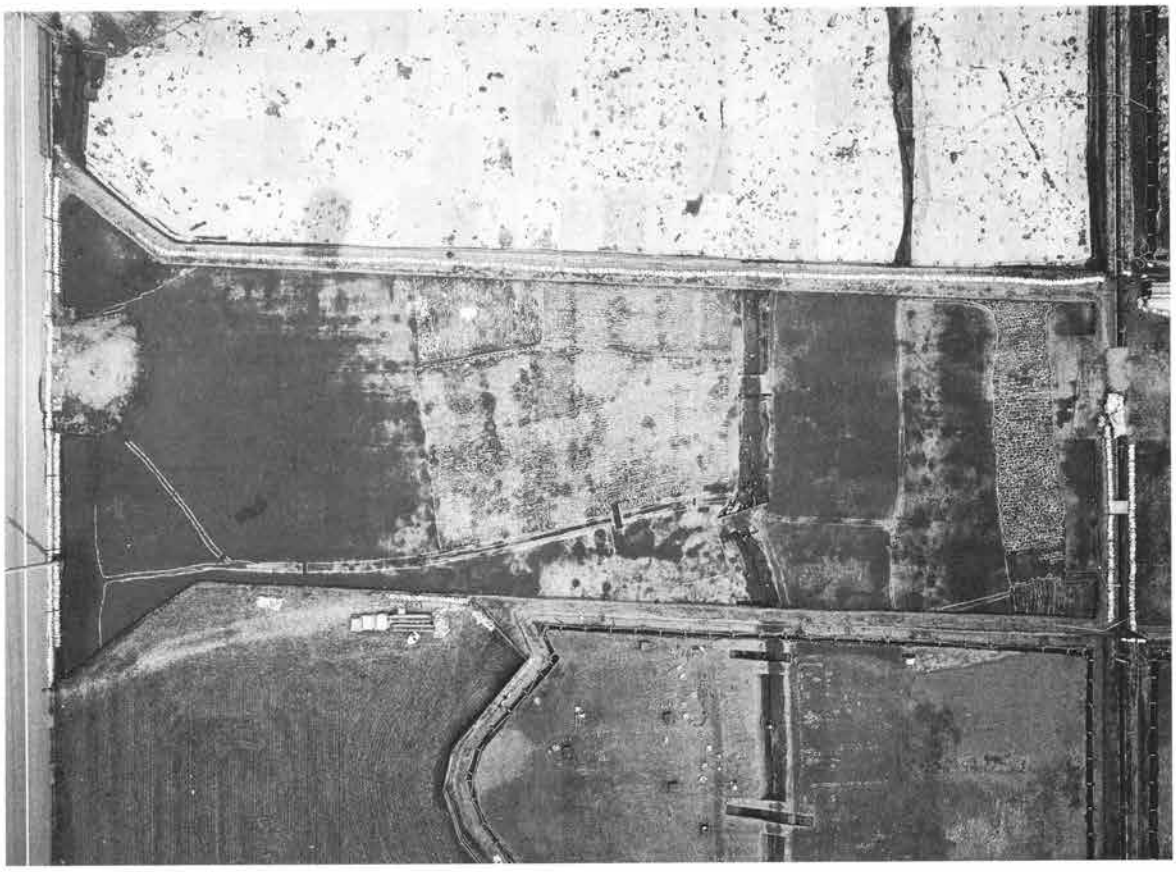


B区 19号土坑

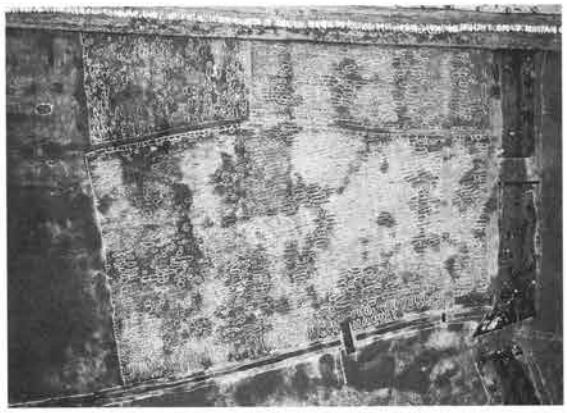
B区 21号土坑



B区 22号土坑

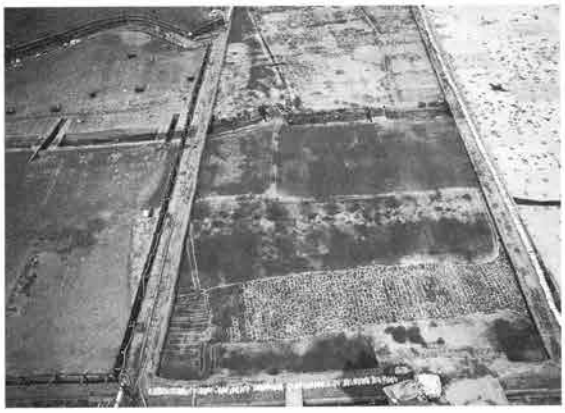


B区 第1面 全景



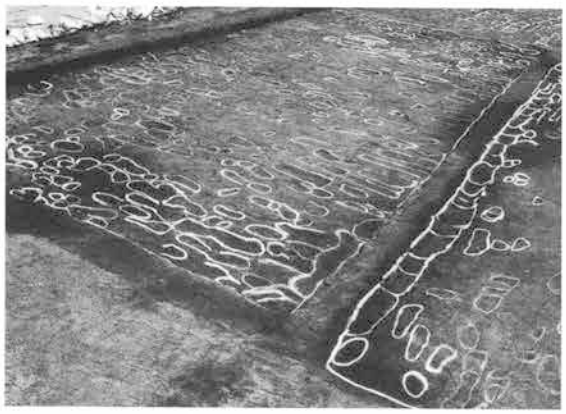
B区 第1面 中央での検出状況

B区 第1面 南側での検出状況



B区 第1面 全景（南から）

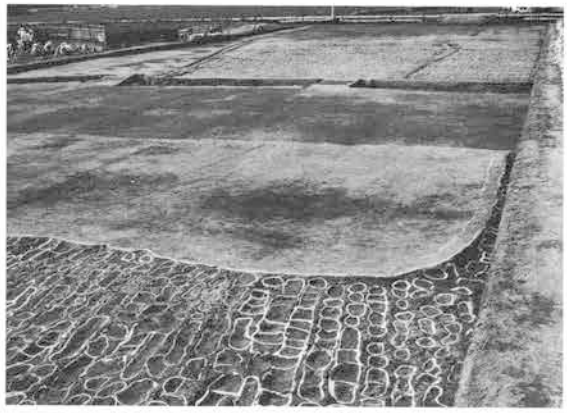
B区 第1面 1区画の耕作痕



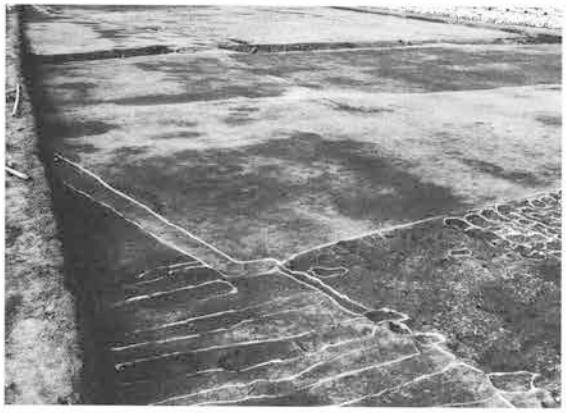
B区 第1面 2区画の耕作痕

B区 第1面 3区画の耕作痕

B区 第1面 4区画の耕作痕



B区 第1面 4区画（手前）と7・8区画



B区 第1面 5区画（手前）と7～9区画

B区 第1面 1・3区画を画する畦

B区 第1面 2号溝を挟む区画畦（南から）

B区 第1面 2号溝を挟む区画畦（北から）

B区 第1面 1号溝杭の出土状況

B区 第1面 1号溝全景

B区 第2面 全景

B区 第2面 道路状遺構全景

B区 第2面 道路状遺構と溝群

B区 第2面 4号溝全景（南から）

B区 第2面 4号溝と館跡内部

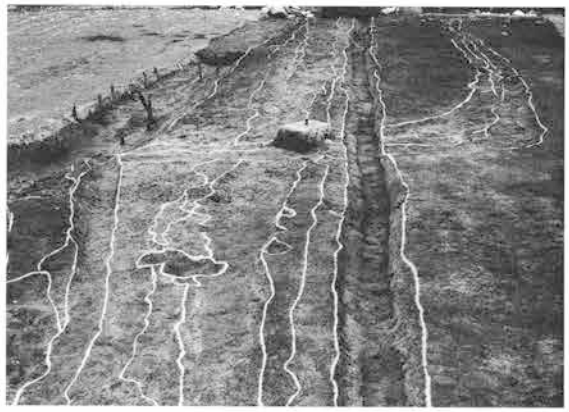
B区 第2面 4号溝

B区 第2面 4号溝北東角

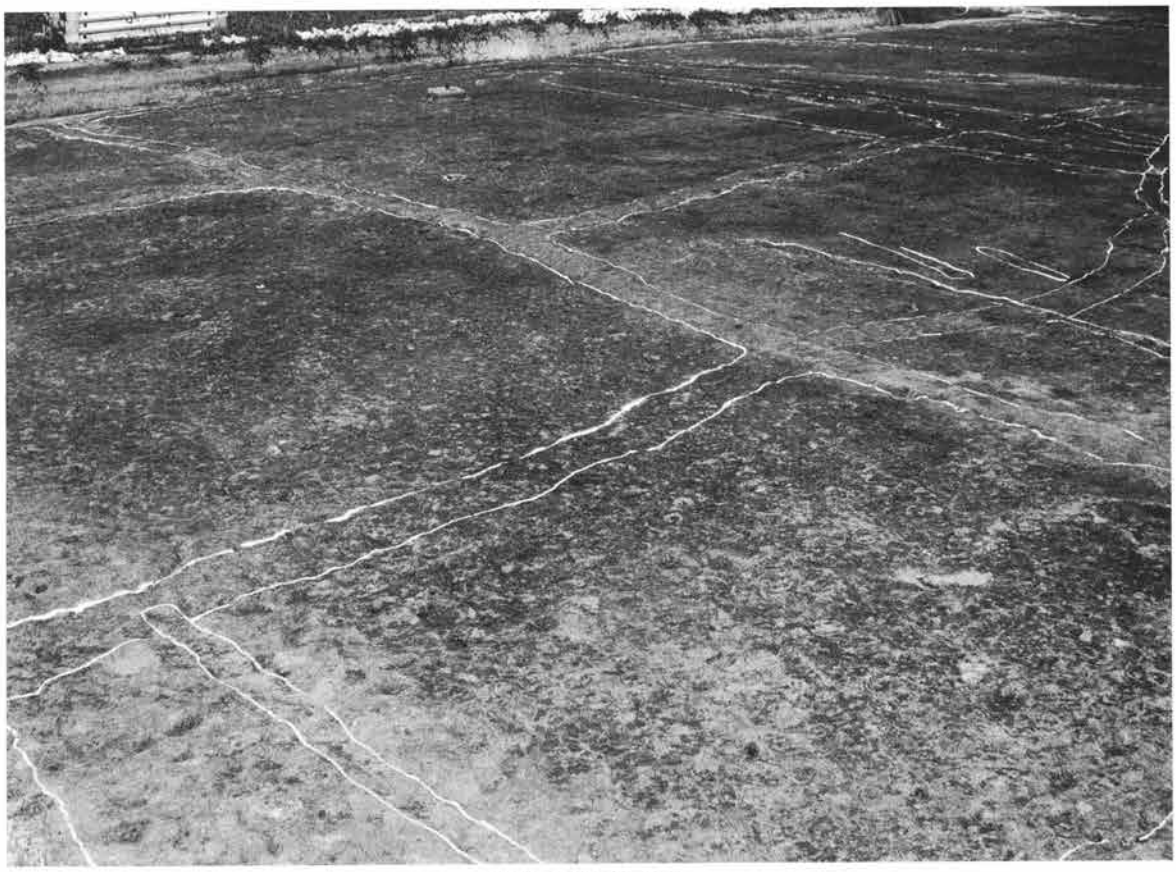
B区 第2面 45号溝

B区 第2面 46号溝と土層断面

B区 第2面 20・30・31号溝

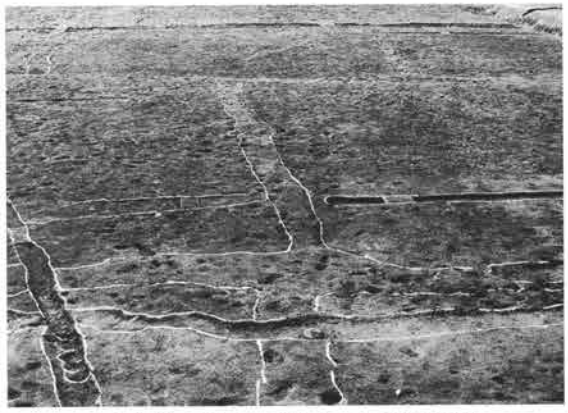


B区 第2面 36～41号溝

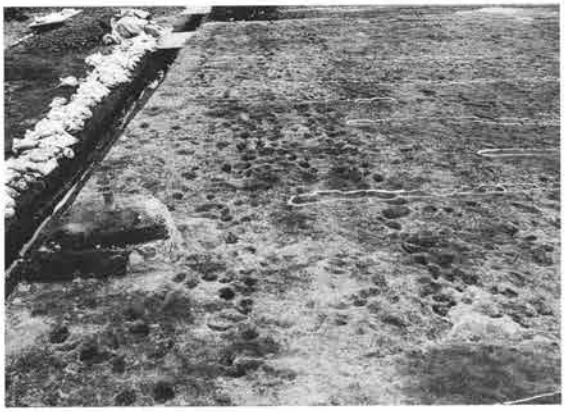


B区 第3面 全景

B区 第3面 区画畦と水田面の状況



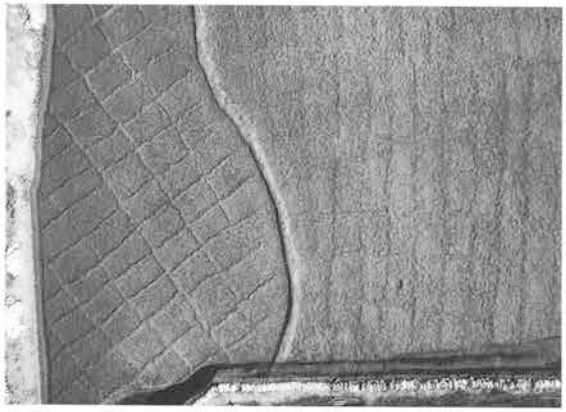
B区 第3面 区画畦と水田面の状況



B区 第3面 馬蹄痕群

B区 第3面 馬蹄痕列

B区 第6面 全景



B区 第6面 北側の検出状況

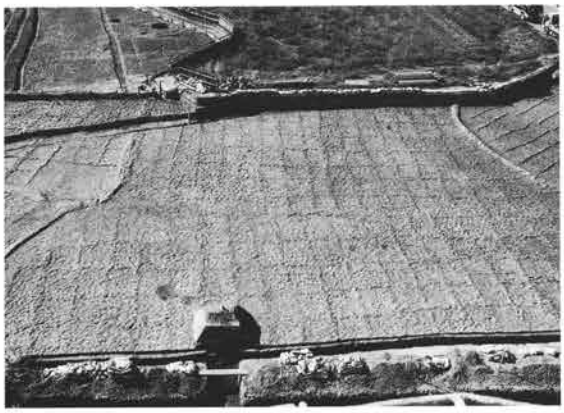
B区 第6面 中央の検出状況

B区 第6面 中央の検出状況

B区 第6面 南半の検出状況

B区 第6面 全景（北から）

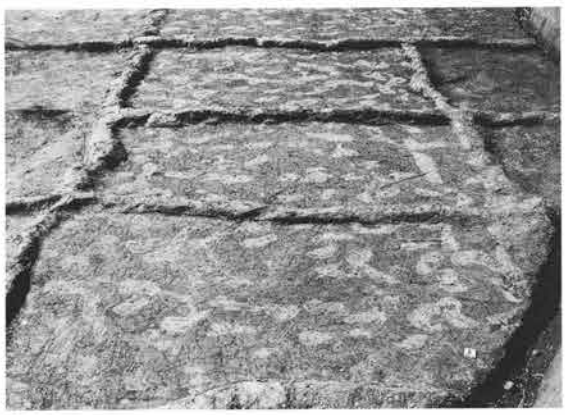
B区 第6面 4・5大区画の極小区画水田


B区 第6面 4大区画の極小区画水田

B区 第6面 2～4大区画の極小区画水田

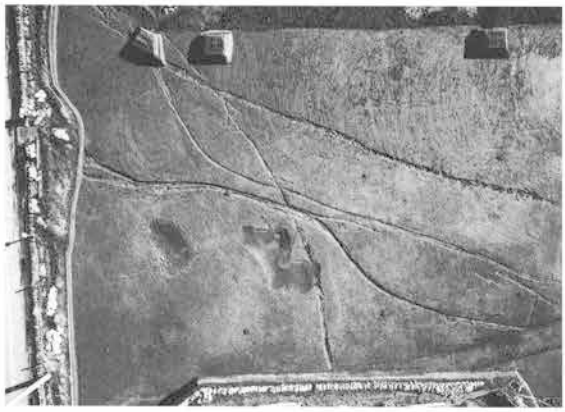
B区 第6面 極小区画水田の状況

B区 第6面 極小区画水田の状況


B区 第6面 極小区画水田面の検出状況

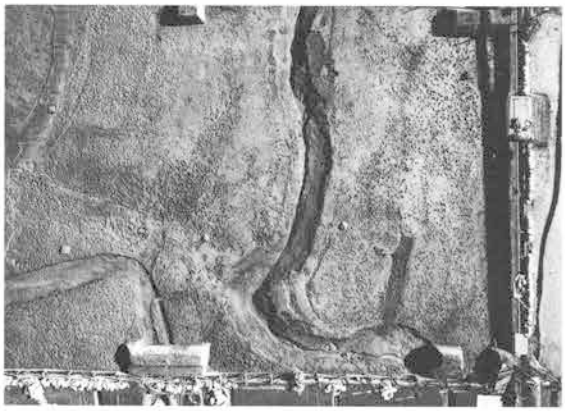
B区 第6面 極小区画水田面の検出状況

B区 第7面 全景



B区 第7面 北側の検出状況

B区 第7面 中央の検出状況



B区 第7面 南側の検出状況

B区 第7面 52号溝と水田面の凹凸状況

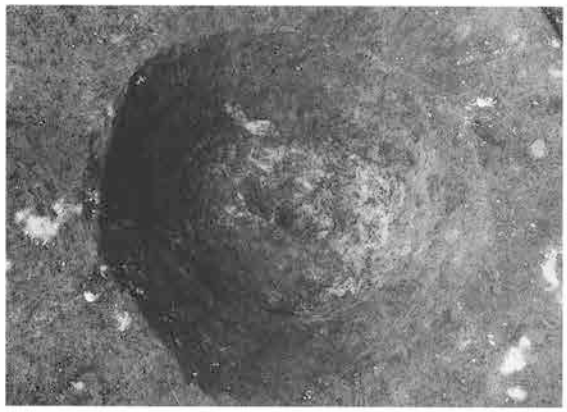
B区 第7面 54～62号溝と1・2号窪地

B区 第7面 52号溝の土層断面

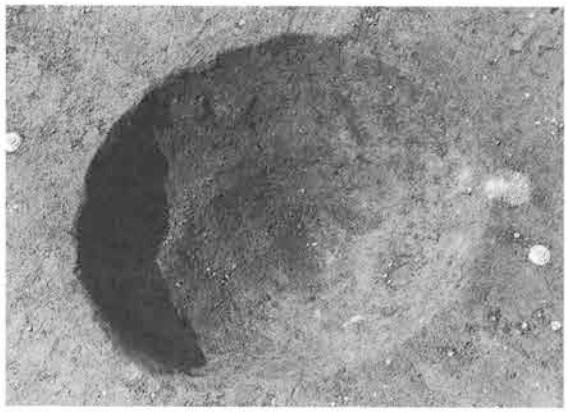
B区 第8面 全景

B区 第8面 南半の検出状況

B区 第8面 南半の検出状況



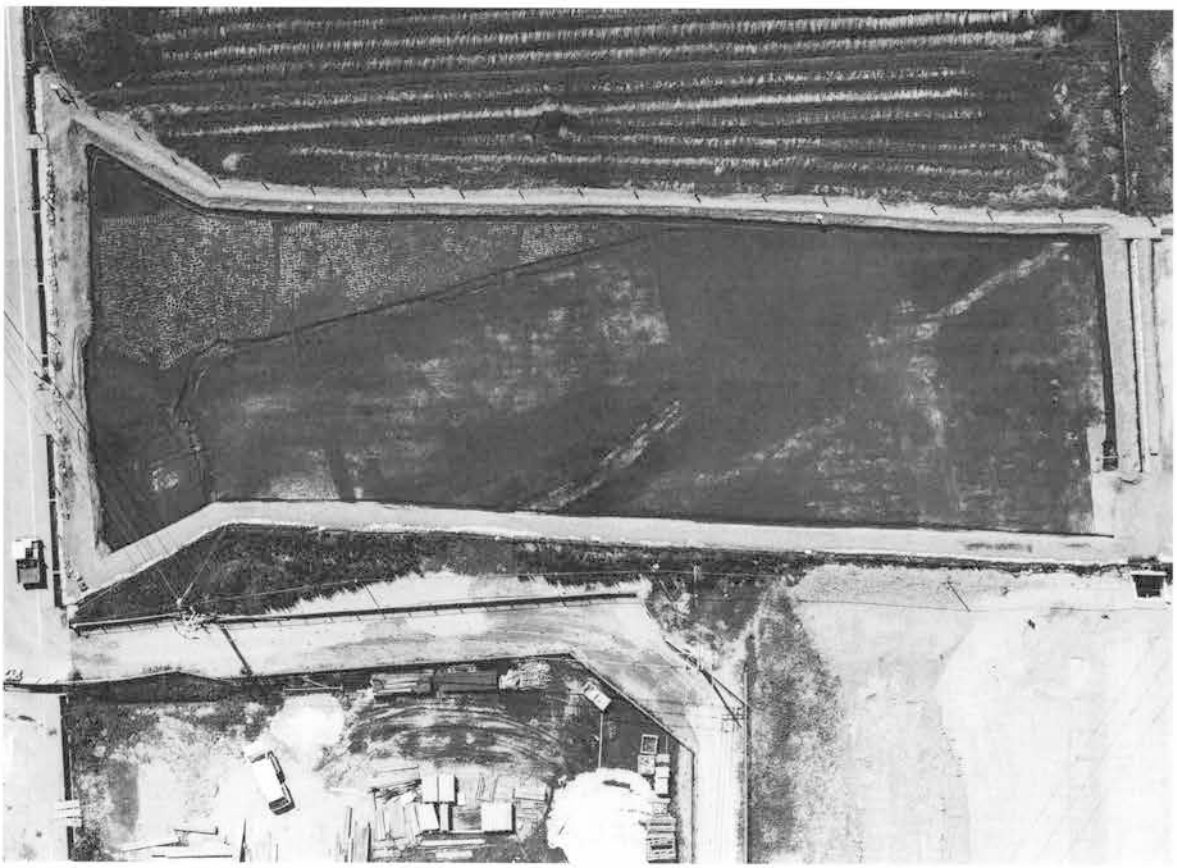
C区 1号土坑



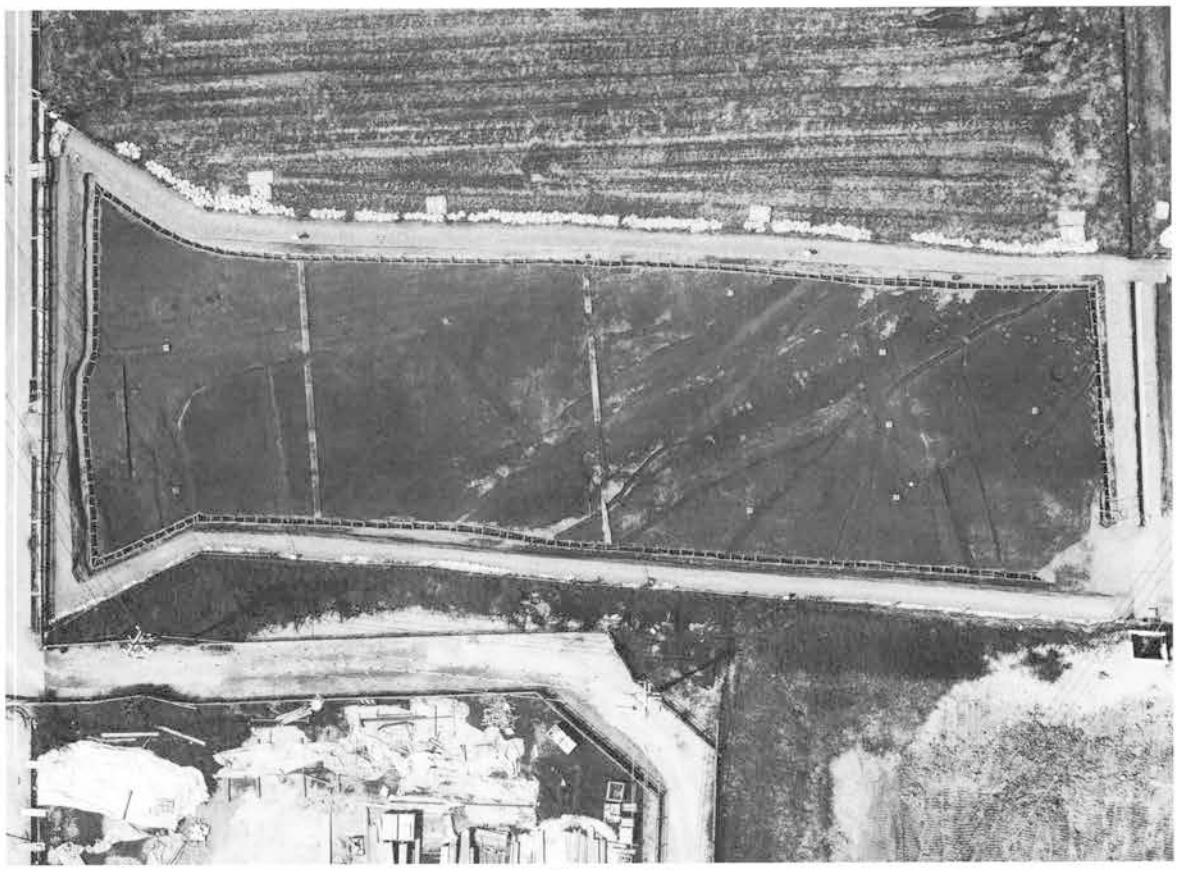
C区 2号土坑

C区 3号土坑

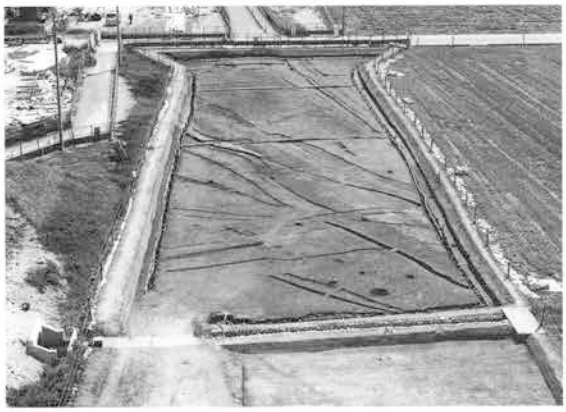
C区 4号土坑



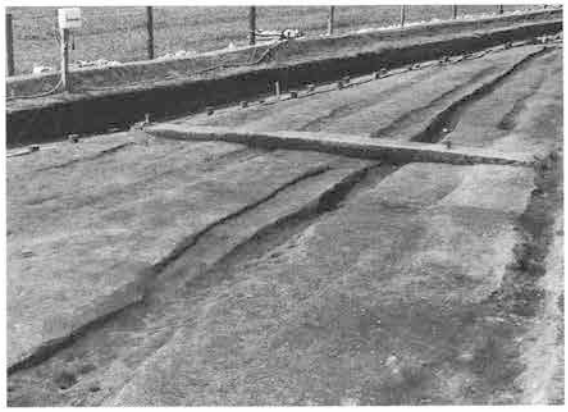
C区 第1面 全景



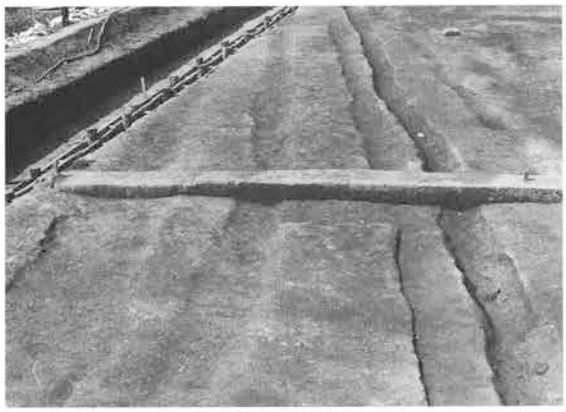
C区 第3面 全景



C区 第3面 全景（北から）

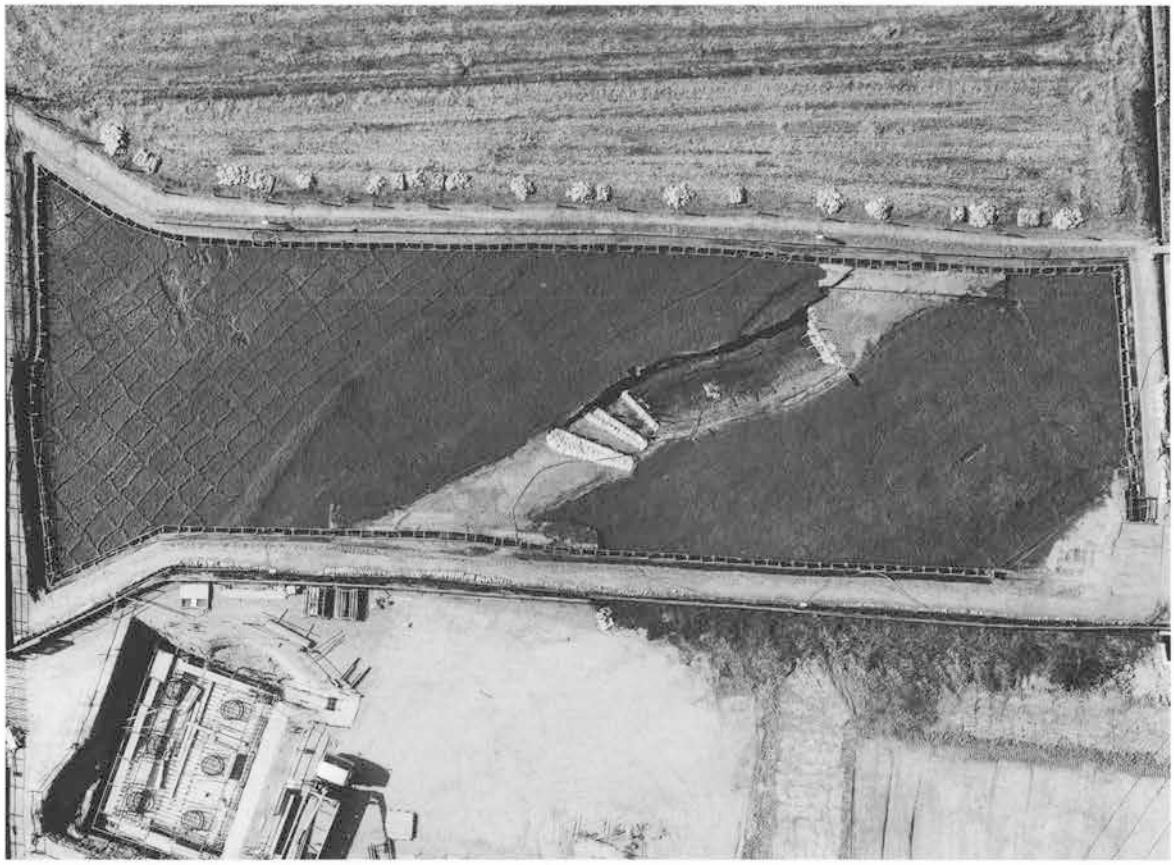


C区 第3面 21号溝と畠状遺構



C区 第3面 畠状遺構の畝と畝間

C区 第4面 全景



C区 第6面 全景

C区 第6面 1大区画の極小区画水田

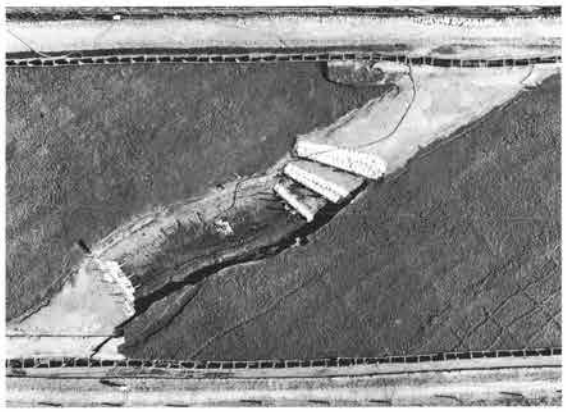
C区 第6面 1・2大区画を画する大畦

C区 第6面 2大区画と大溝

C区 第6面 1・2大区画の極小区画水田

C区 第6面 3・4大区画を画する大畦

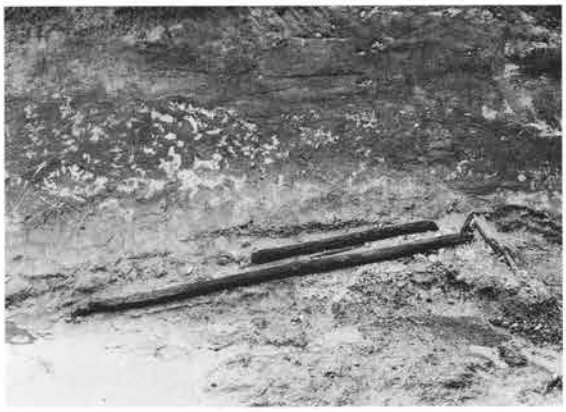
C区 第6面 2・3大区画と大溝



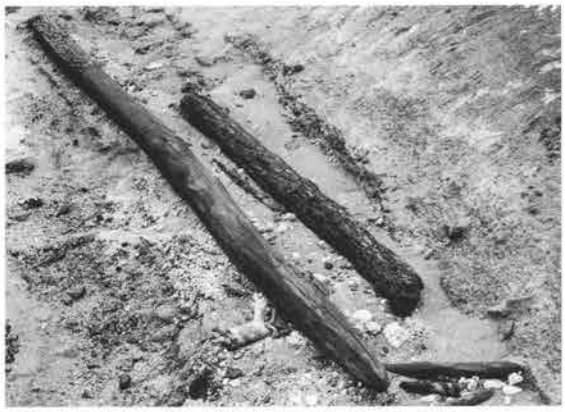
C区 第6面 大溝全景

C区 第6面 大溝内の土層断面

C区 第6面 大溝の底面

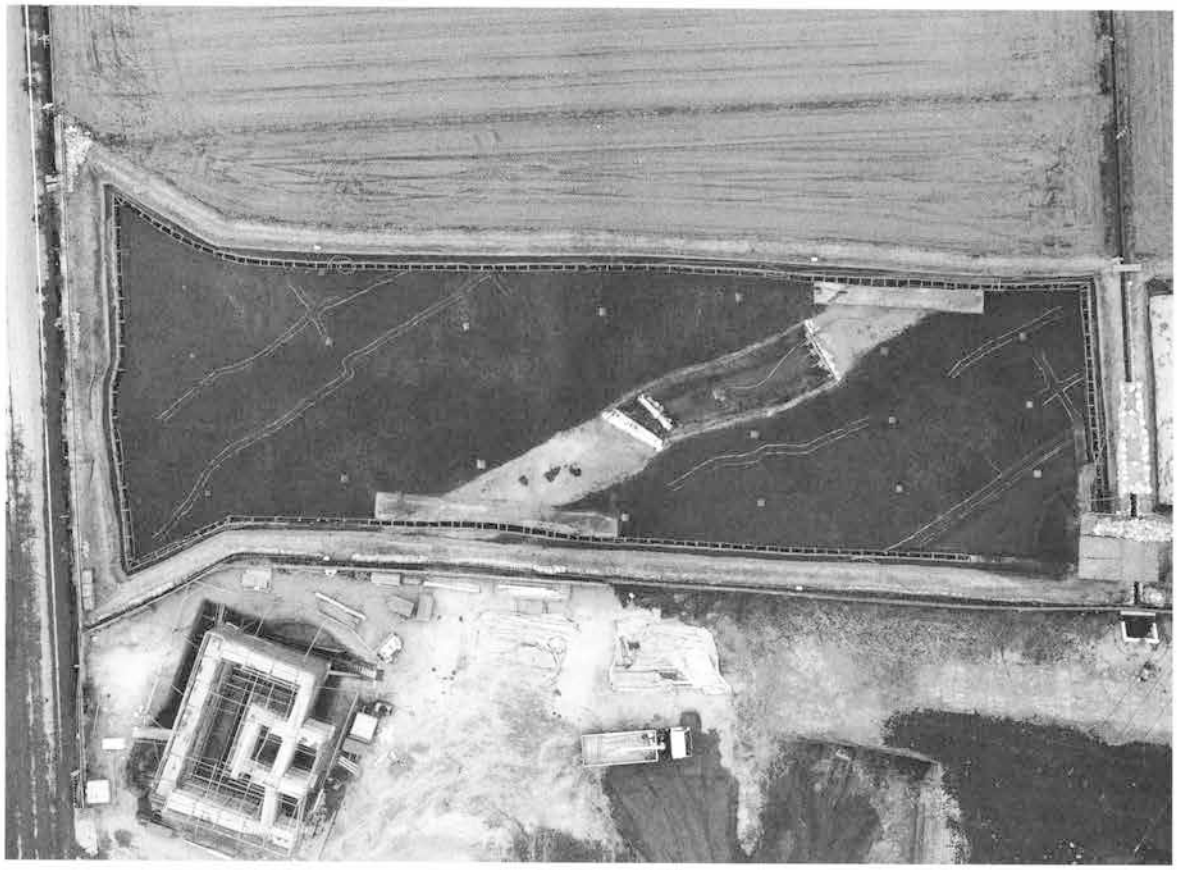


C区 第6面 大溝から出土した杭



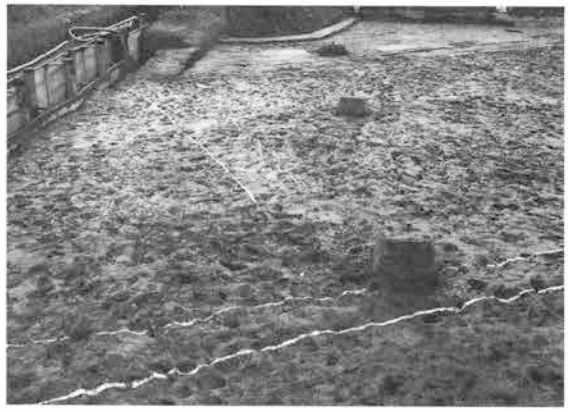
C区 第6面 大溝から出土した杭

C区 第6面 大溝から出土した木製品類



C区 第7面 全景

C区 第7面 北半での検出状況



C区 第7面 検出された小畦と水田面

C区 第7面 検出された大畦と溝

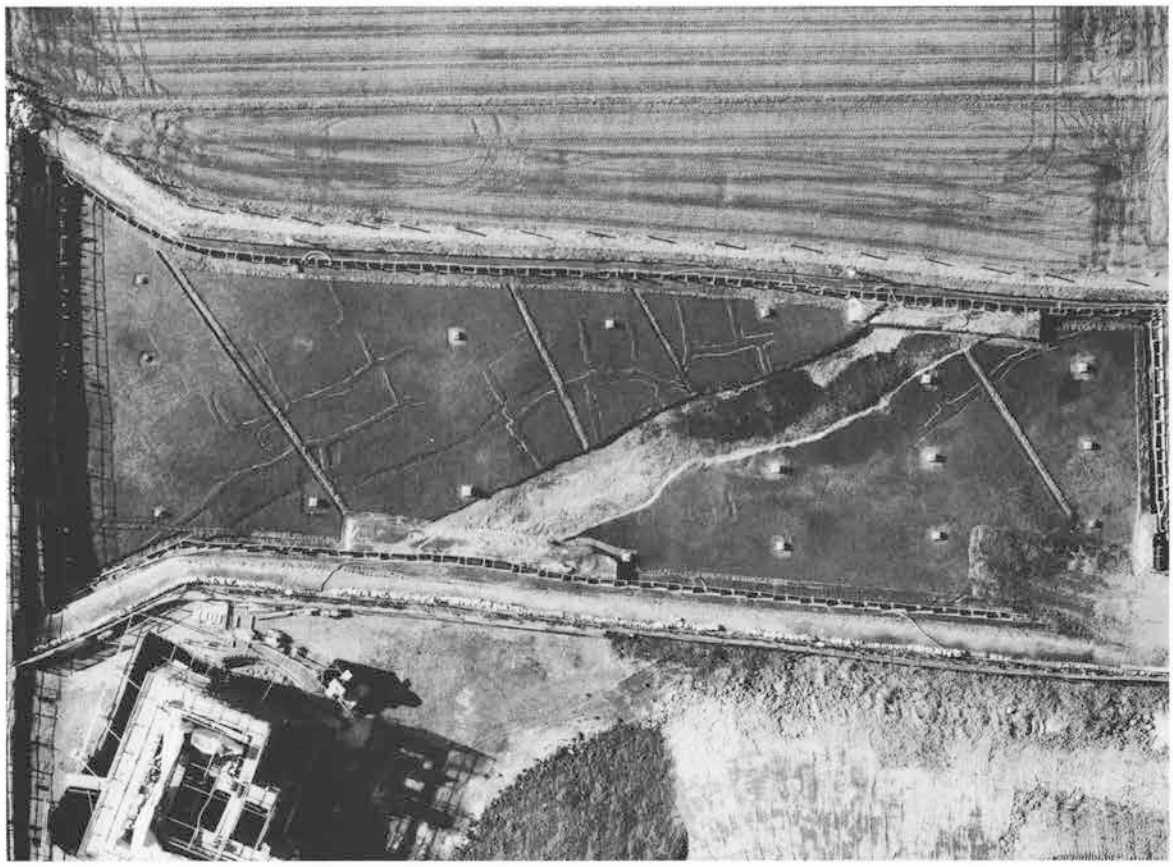
C区 第7面 大畦を覆う土層断面

C区 第7面 南半での検出状況

C区 第7面 南半での検出状況

C区 第7面 検出された小畦と水田面

C区 第7面 検出された小畦と水田面



C区 第8面 全景

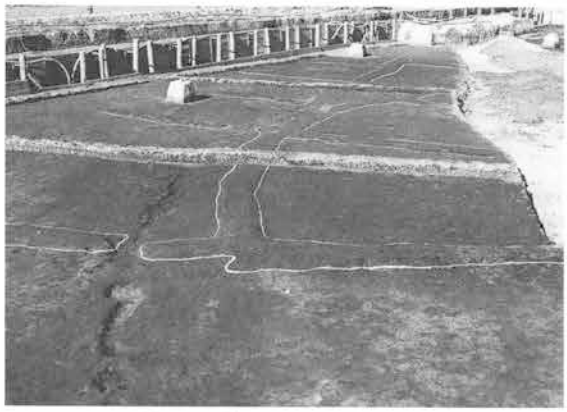
C区 第8面 北半での検出状況

C区 第8面 中央での検出状況

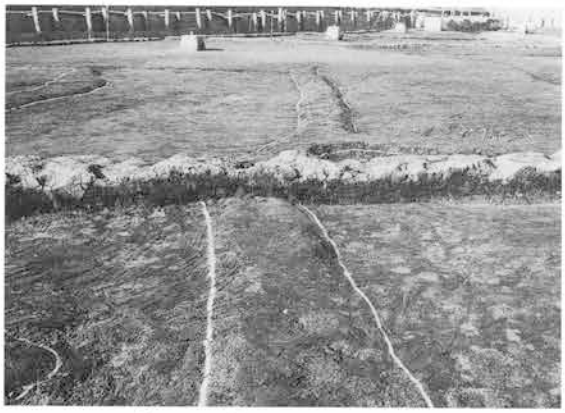
C区 第8面 南半での検出状況

C区 第8面 南半での検出状況

C区 第8面 検出された畦の痕跡状況

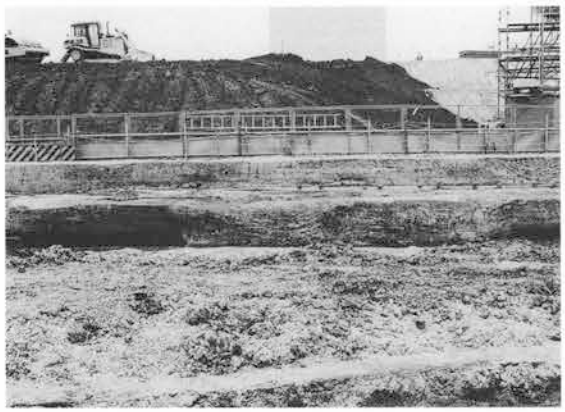


C区 第8面 検出された畦の痕跡状況

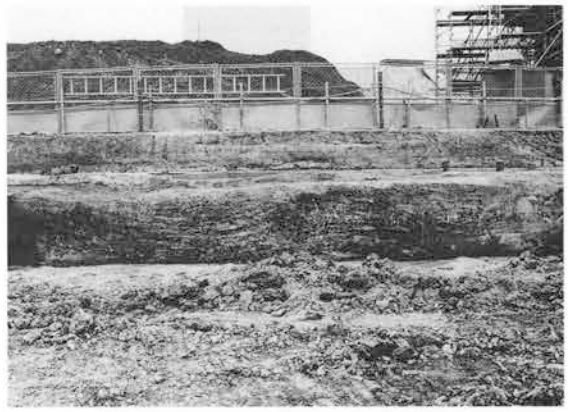


C区 第8面 検出された畦の痕跡状況

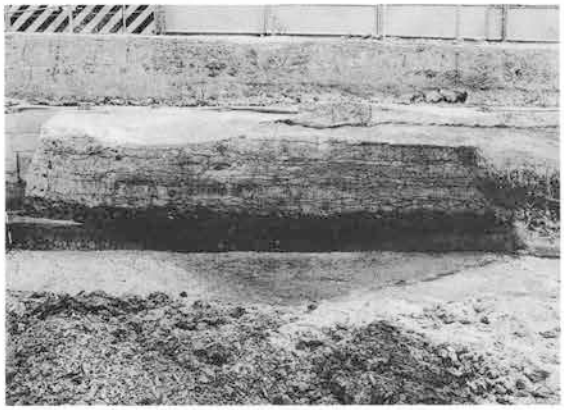
C区 第8面 検出された畦の痕跡状況



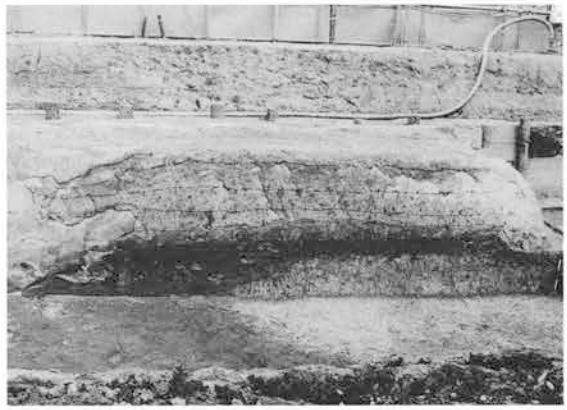
C区 東壁土層断面 大溝付近



C区 東壁土層断面 大溝上部



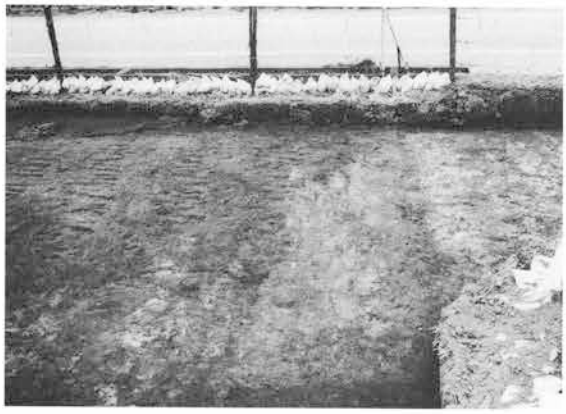
C区 東壁土層断面 大溝の北側



C区 東壁土層断面 大溝の南側

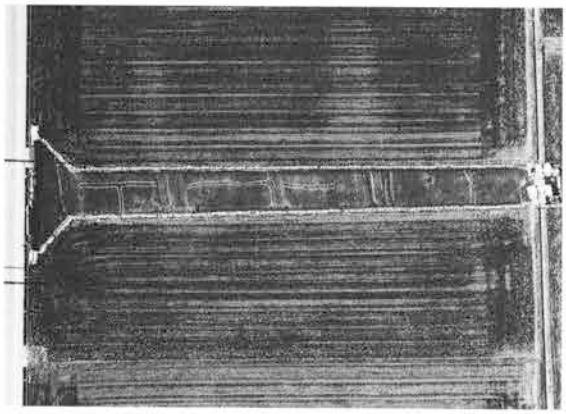
C区 東壁土層断面 大溝の北側

C区 東壁土層断面 大溝の南側



C区取り付道 第1面 耕作痕

C区取り付道 東壁土層断面



C区取り付道 第2・3面 全景

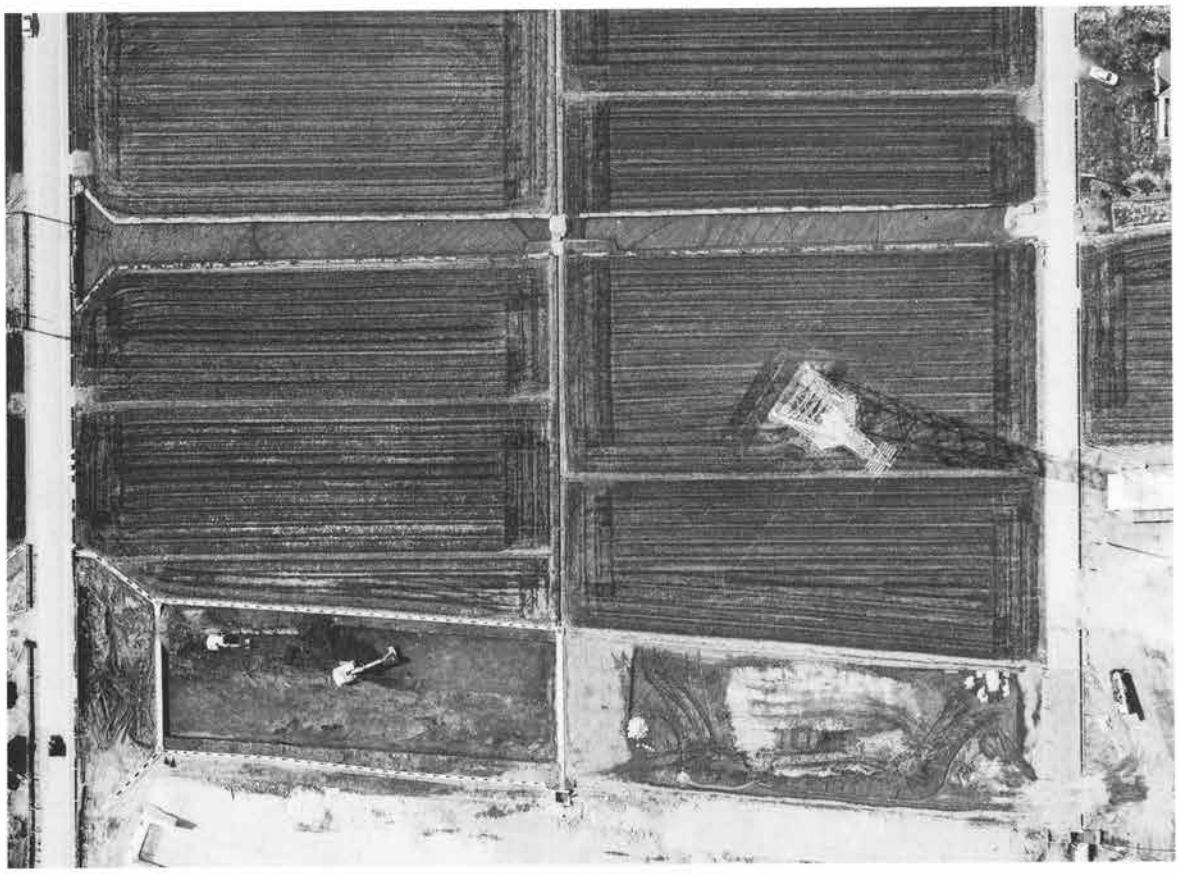
C区取り付道 第2面 1～4号溝

C区取り付道 第3面 水田全景

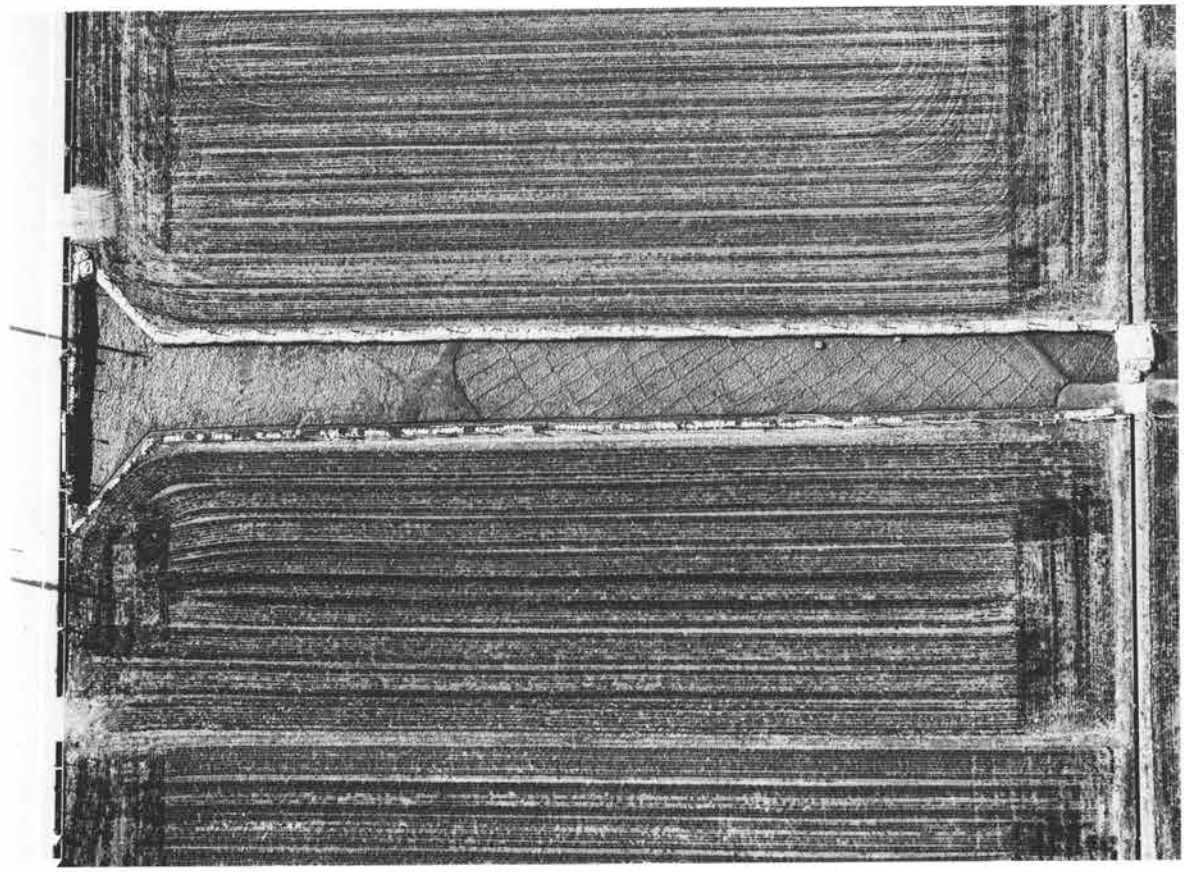
C区取り付道 第3面 水田全景

C区取り付道 第3面 畦と水田面

C区取り付道 第3面 畦の水口部



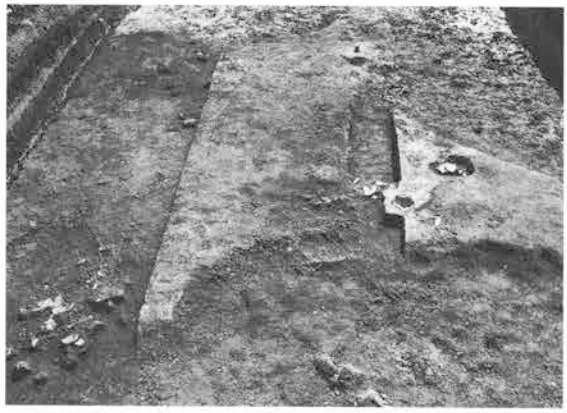
C・D区取り付道 第6面 全景



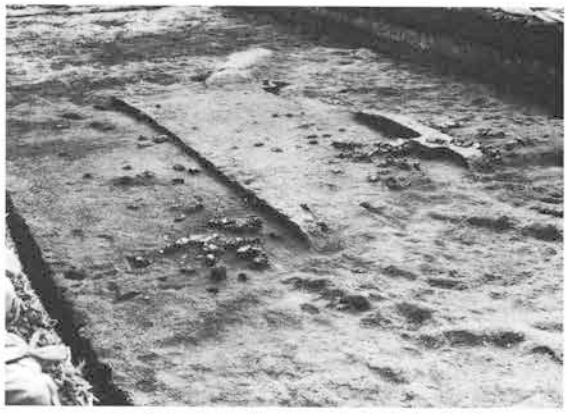
C区取り付道 第6面 全景

C区取り付道 第6面 大畦と小畦

C区取り付道 第6面 大畦の交差部

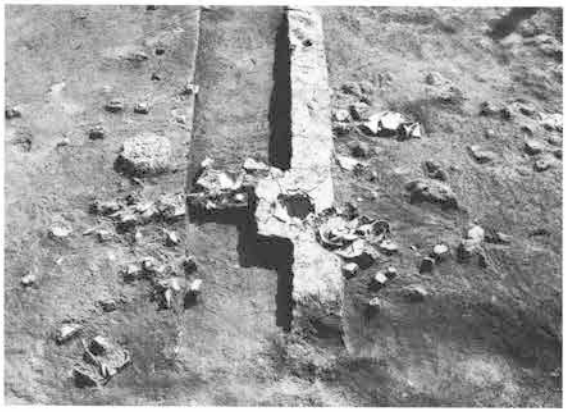


C区取り付道 第8面 遺物集中箇所

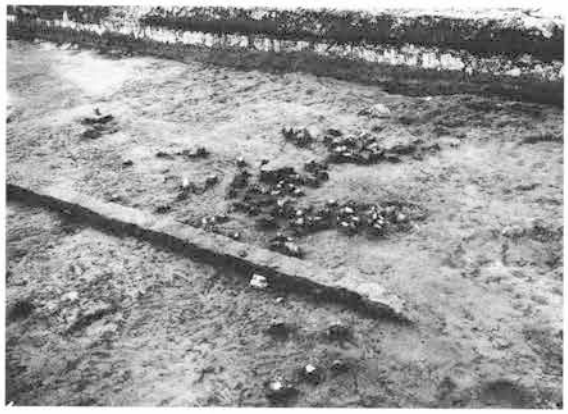


C区取り付道 第8面 遺物集中箇所

C区取り付道 第8面 遺物出土状態



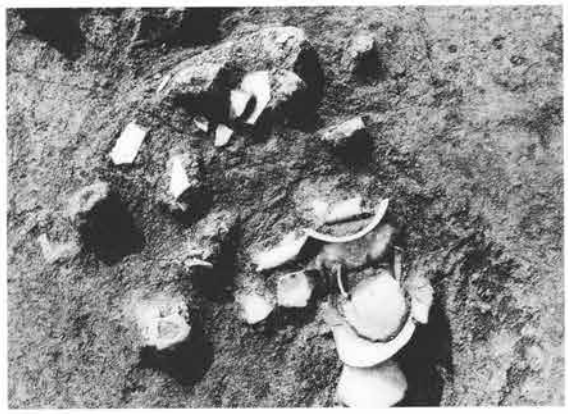
C区取り付道 第8面 遺物出土状態



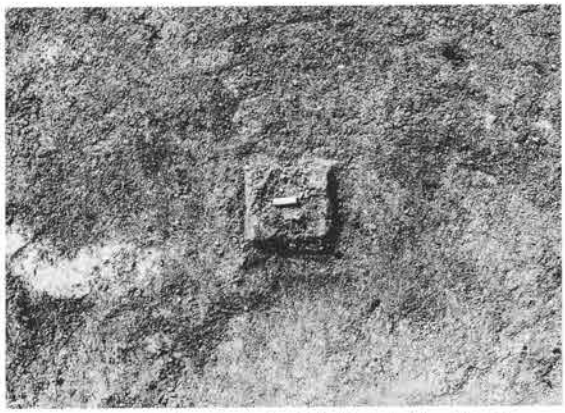
C区取り付道 第8面 遺物出土状態

C区取り付道 第8面 遺物出土状態

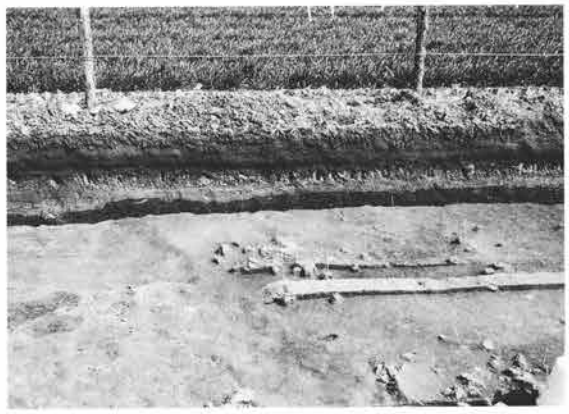
C区取り付道 第8面 遺物出土状態



C区取り付道 第8面 遺物出土状態

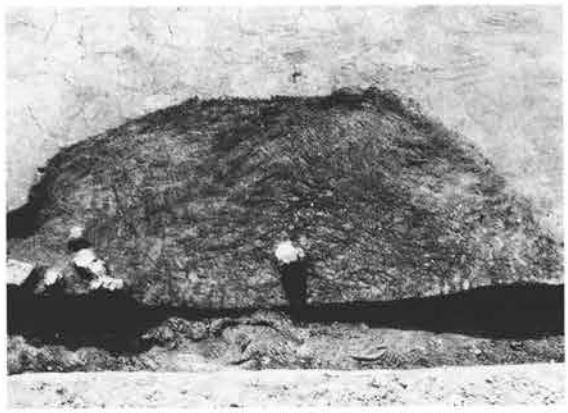


C区取り付道 第8面 遺物出土状態（管玉）



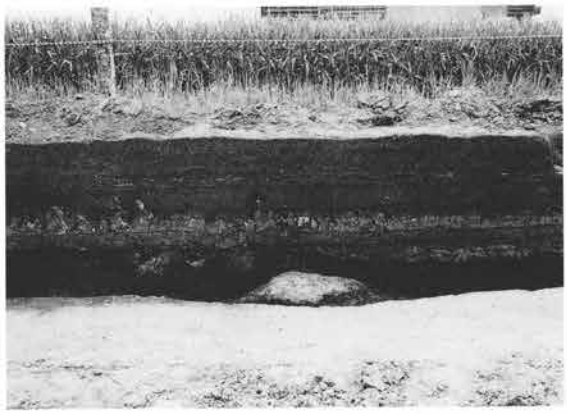
C区取り付道 第8面 遺物出土状態

C区取り付道 第8面 4号土坑



C区取り付道 第8面 5号土坑

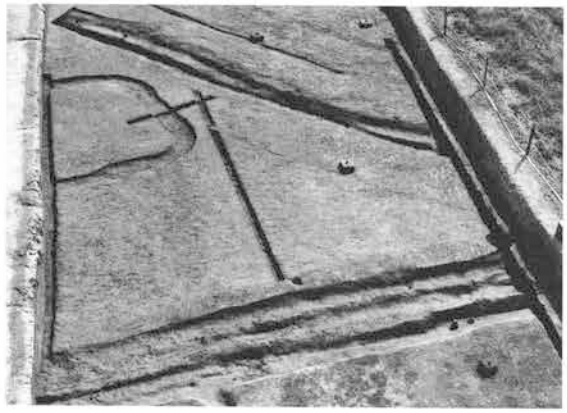
C区取り付道 東壁土層断面



C区取り付道 東壁土層断面

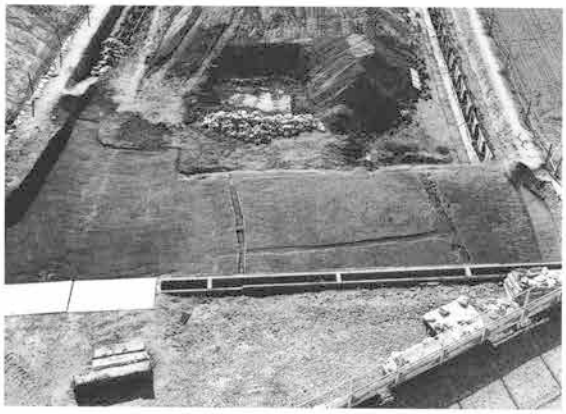
D区 第1面 全景

D区 第2面 全景

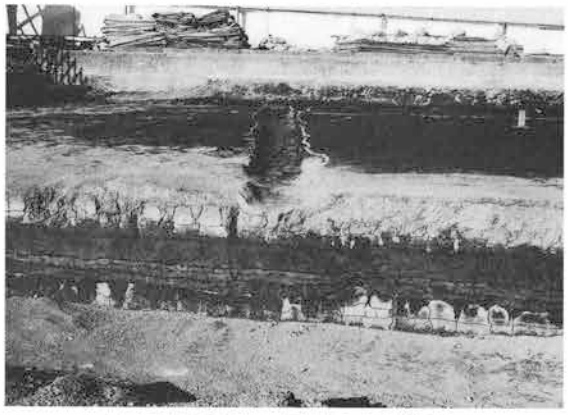


D区 第2面 8～12号溝

D区 第2面 11号溝



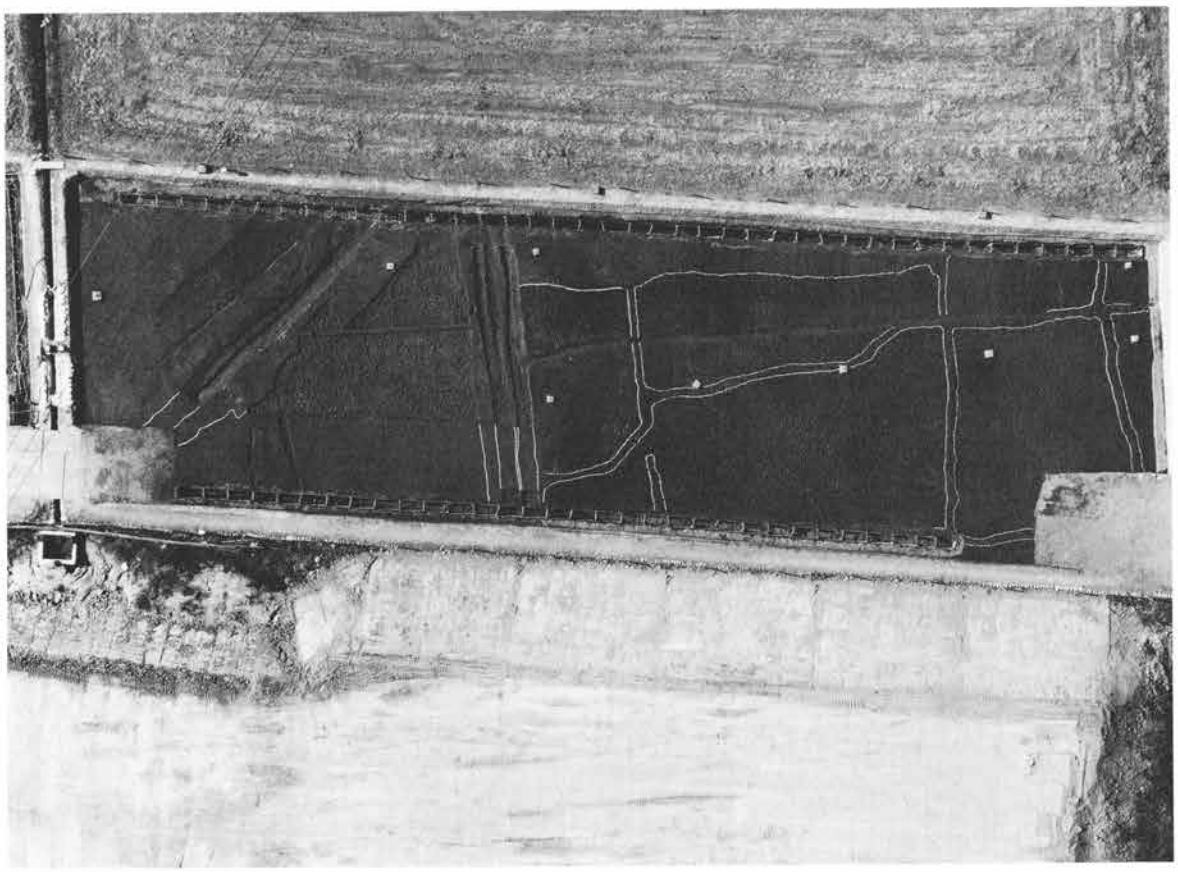
D区 第2面 1号溝



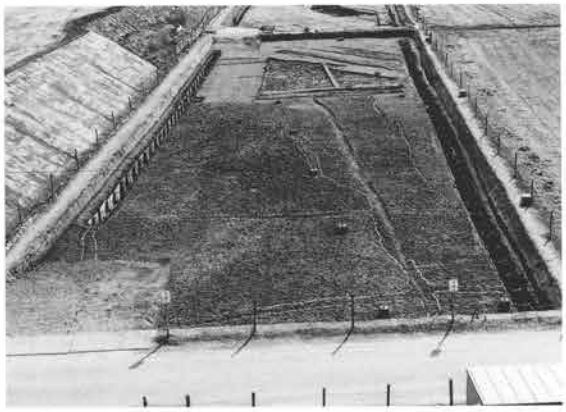
D区 第2面 1号溝と土層断面

D区 第3面 耕作痕

D区 第3面 荒れ地

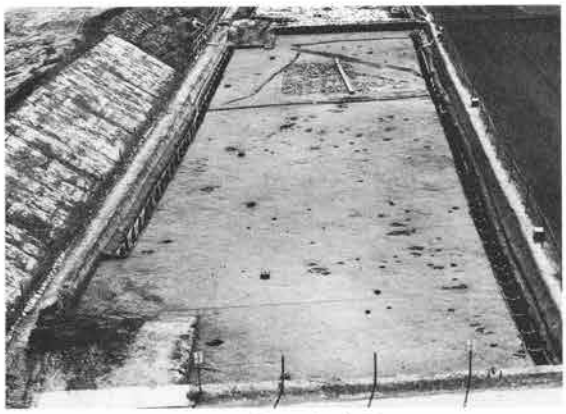


D区 第3面 全景



D区 第3面 水田全景

D区 第3面 畦と水田面



D区 第4面 全景

D区 第4面 16号溝

D区 第6面 全景

D区 第6面 全景

D区 第6面 全景

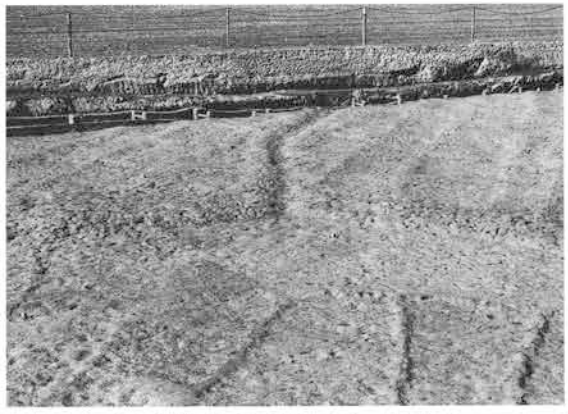
D区 第6面 南半の大区画

D区 第6面 2・3大区画の大畦

D区 第6面 4大区画の極小区画水田

D区 第6面 大畦の水口

D区 第6面 2・4大区画の大畦

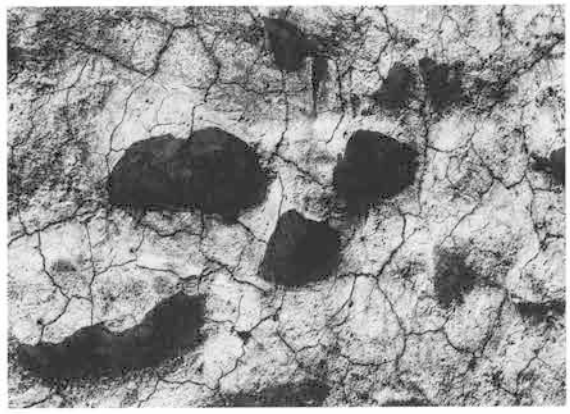


D区 第6面 2大区画への水路

D区 第6面 3・4大区画と水路

D区 第6面 4・5大区画の大畦

D区 第6面 大畦際の馬足跡



D区 第6面 大畦際の馬足跡

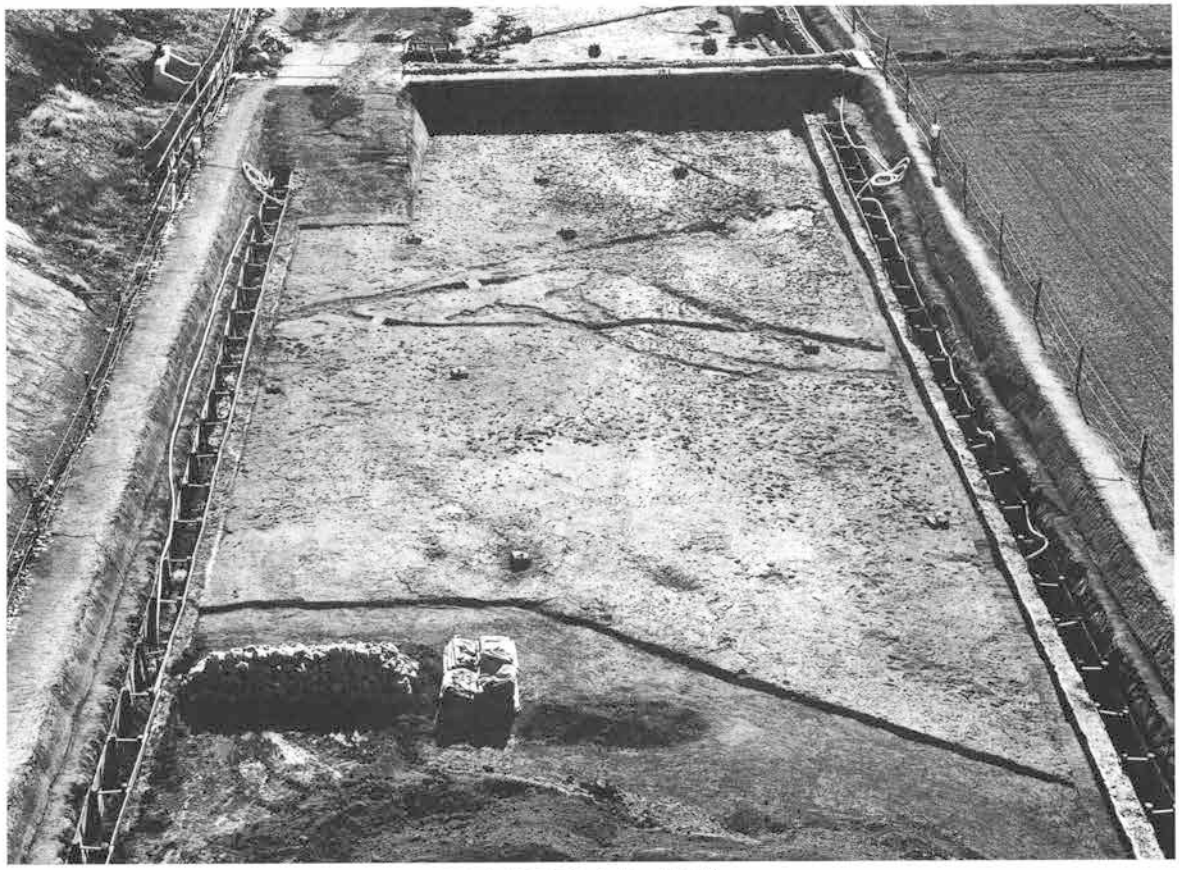
D区 第6面 新しい小畦と古い小畦

D区 第6面 新しい小畦と古い小畦

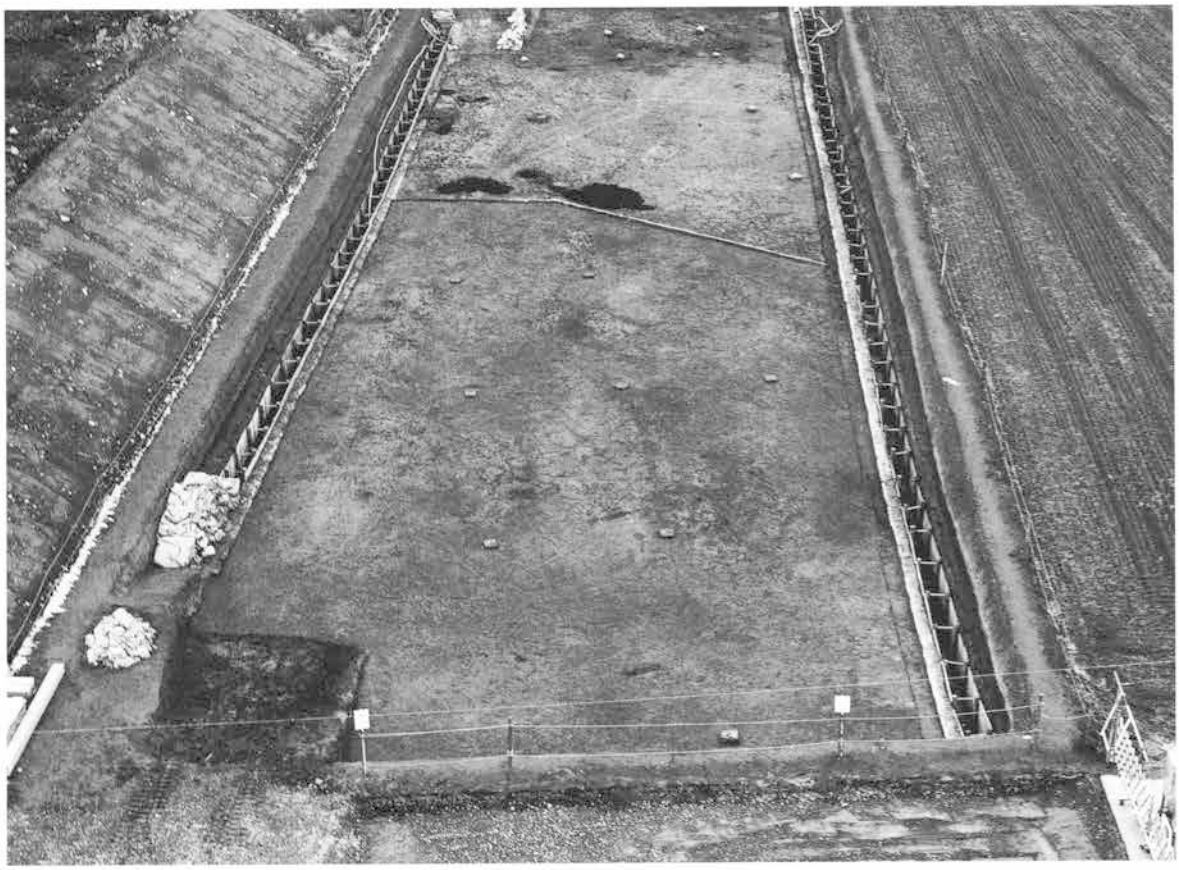
D区 第6面 新しい小畦と古い小畦

D区 第7面 検出された溝

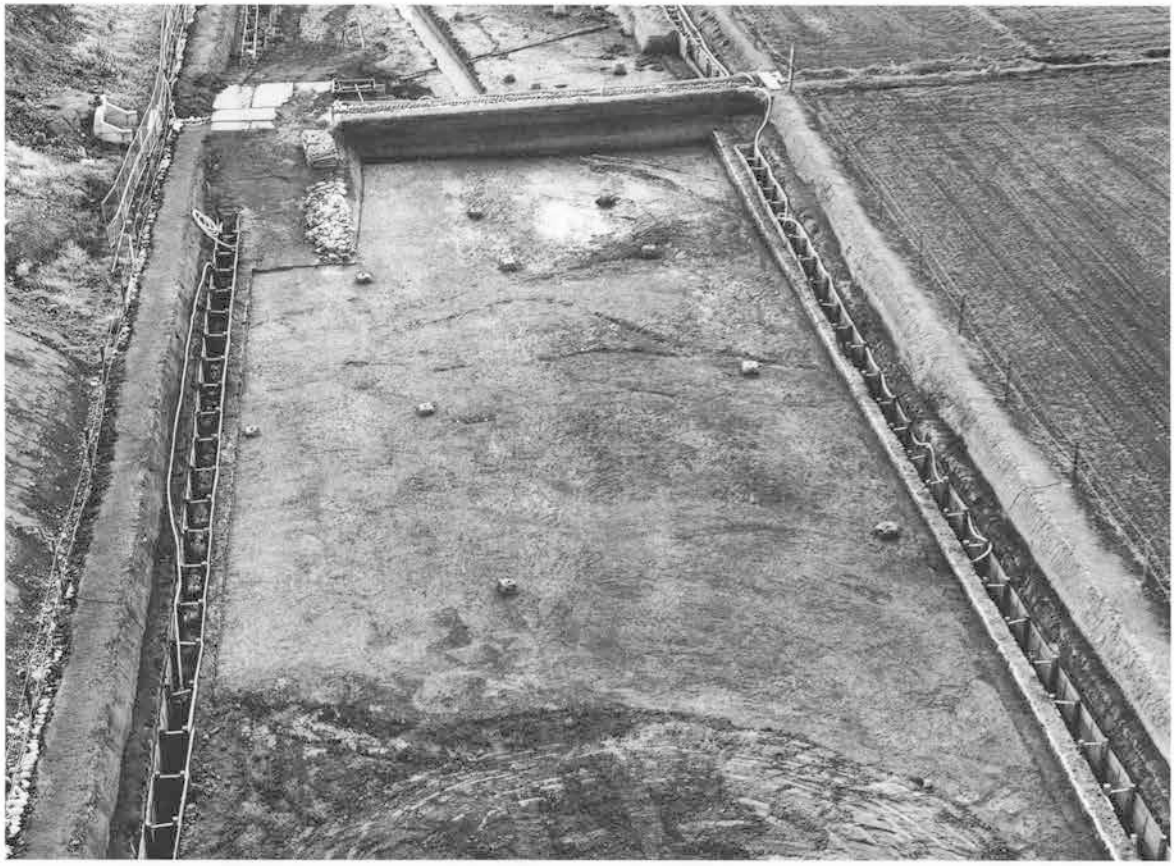
D区 第7面 溝と水田面



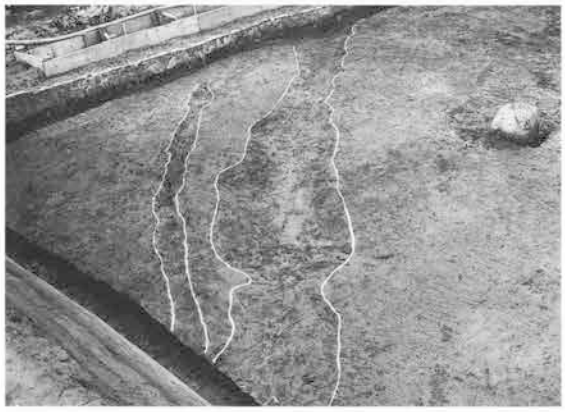
D区 第7面 全景（南半）



D区 第7面 全景（北半）

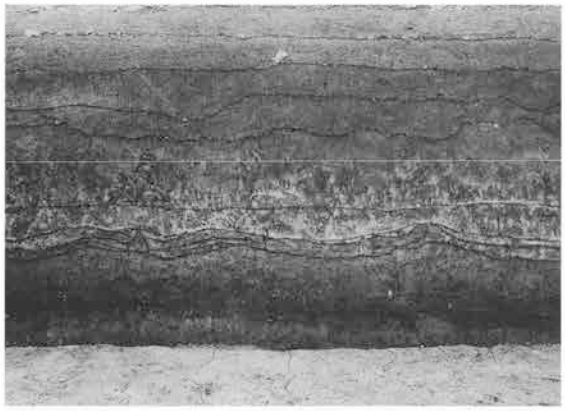


D区 第8面 全景（南半）

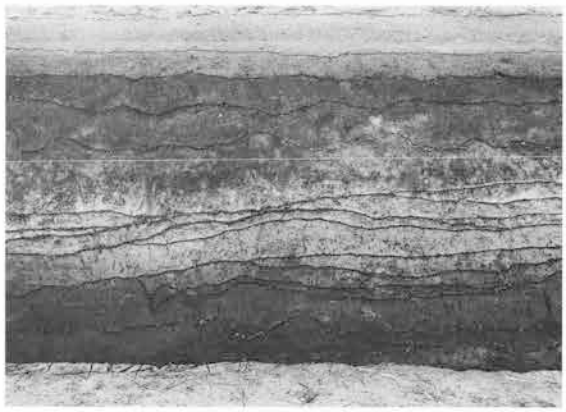


D区 第8面 検出された溝

D区 第8面 検出された溝



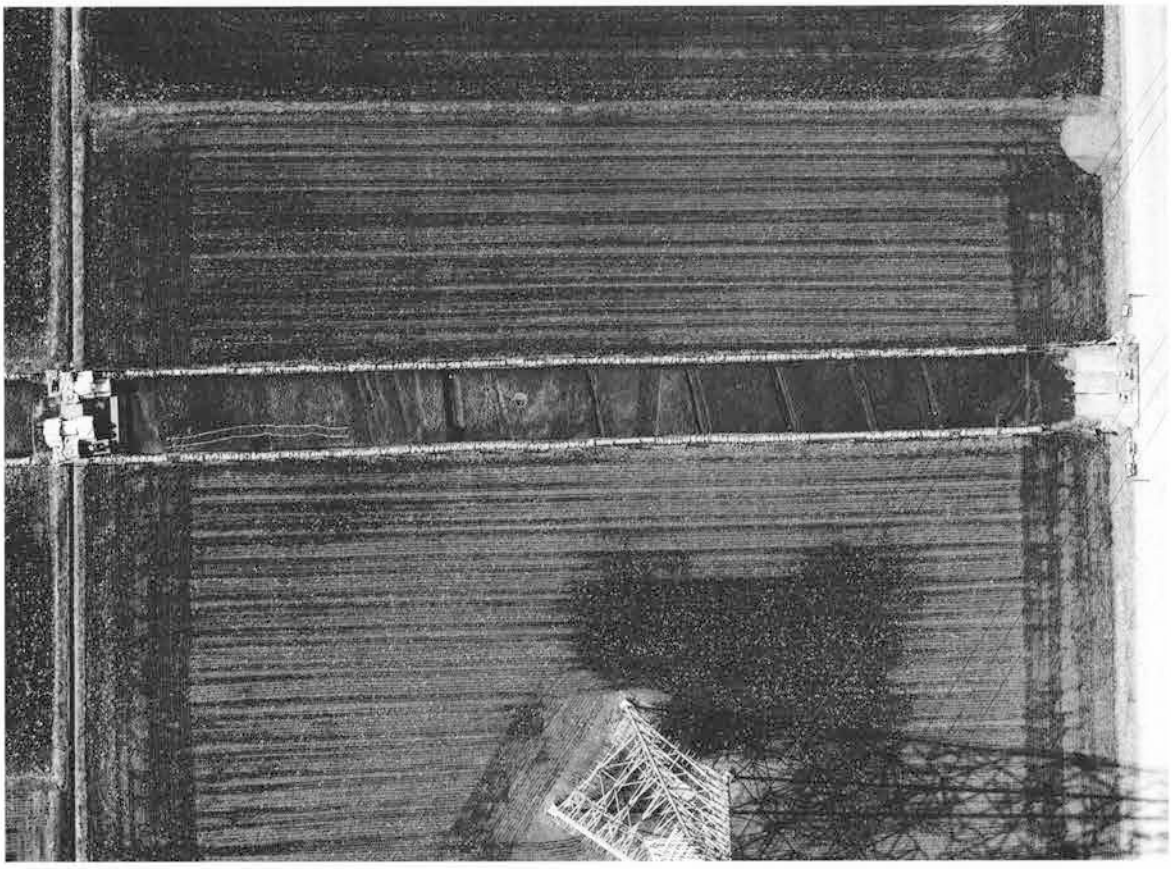
D区 南壁土層断面



D区 南壁土層断面

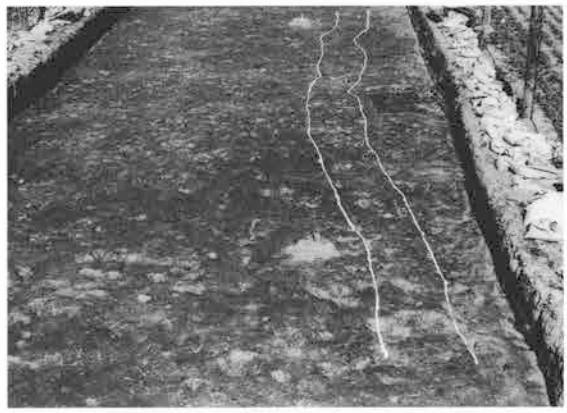
D区取り付道 第1面 3区画の耕作痕

D区取り付道 第1面 1・2区画の耕作痕

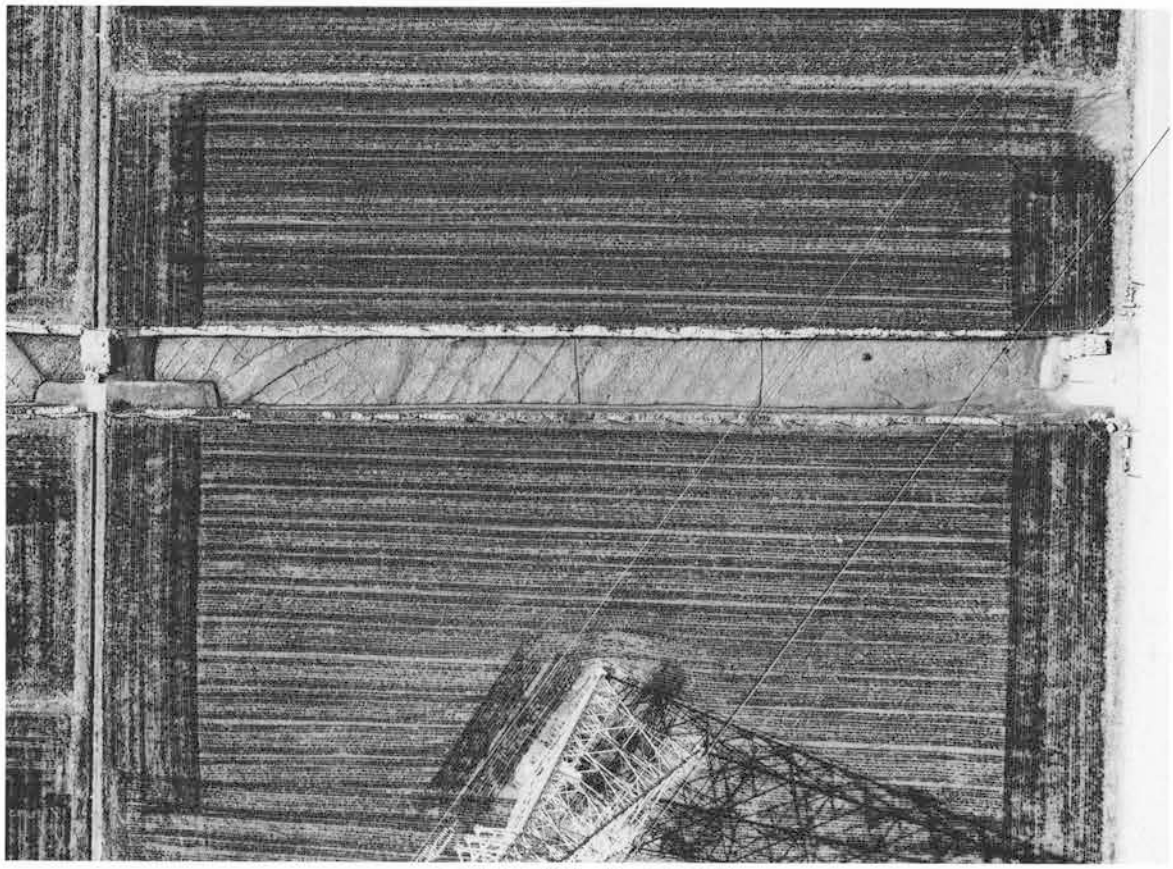


D区取り付道 第3面 全景

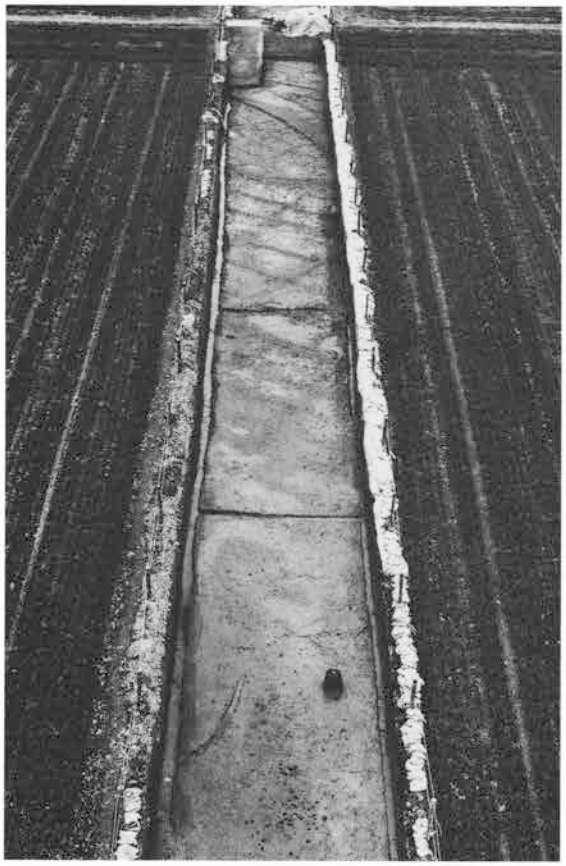
D区取り付道 第3面 北半の検出状況



D区取り付道 第3面 水田面と畦

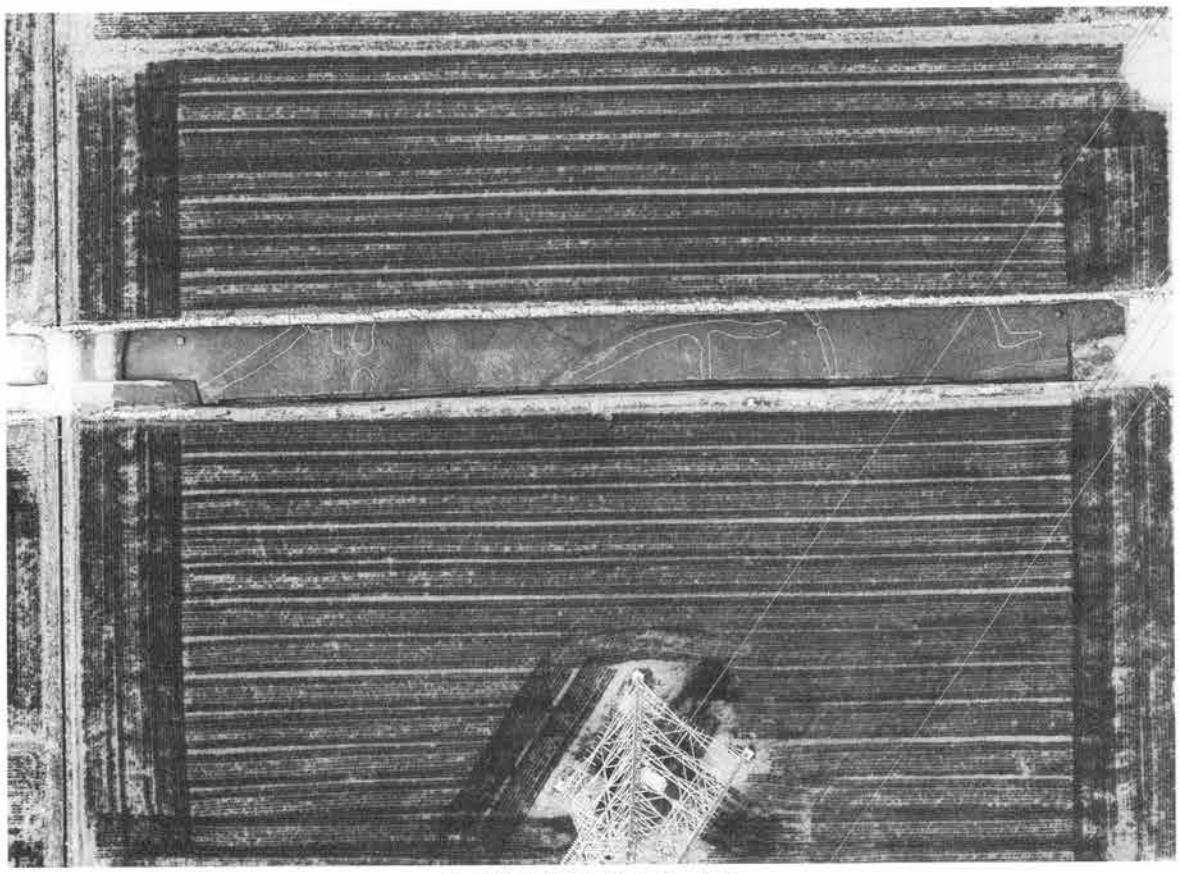


D区取り付道 第6面 全景

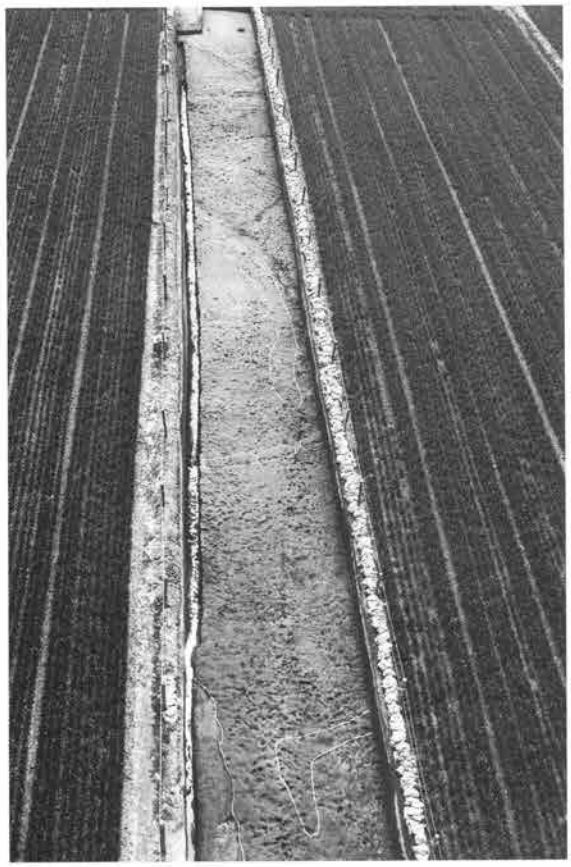


D区取り付道 第6面 全景（南半）

D区取り付道 第6面 極小区画水田の状況



D区取り付道 第7面 全景



D区取り付道 第7面 全景

D区取り付道 第7面 大畦と水口

D区取り付道 第7面 畦と水路

D区取り付道 第8面 全景

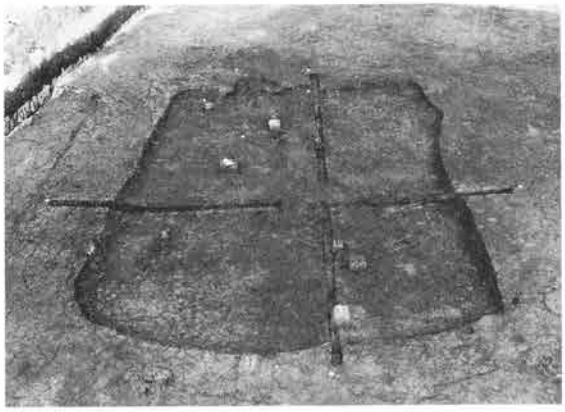
D区取り付道 東壁土層断面

D区取り付道 第8面 畦と水田面

D区取り付道 東壁土層断面（南側）

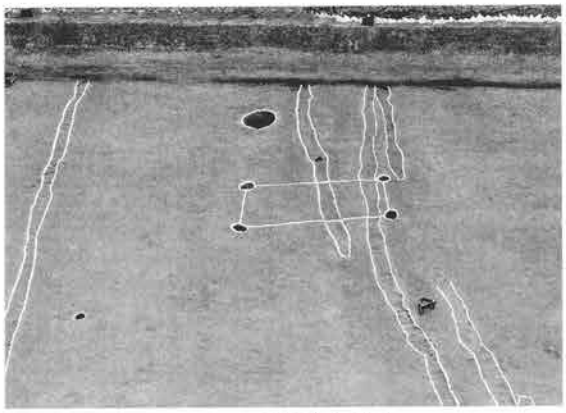
D区取り付道 東壁土層断面（中央）

D区取り付道 東壁土層断面（北側）



E区　1号住居

E区　1号住居カマド



E区　1号掘立柱建物

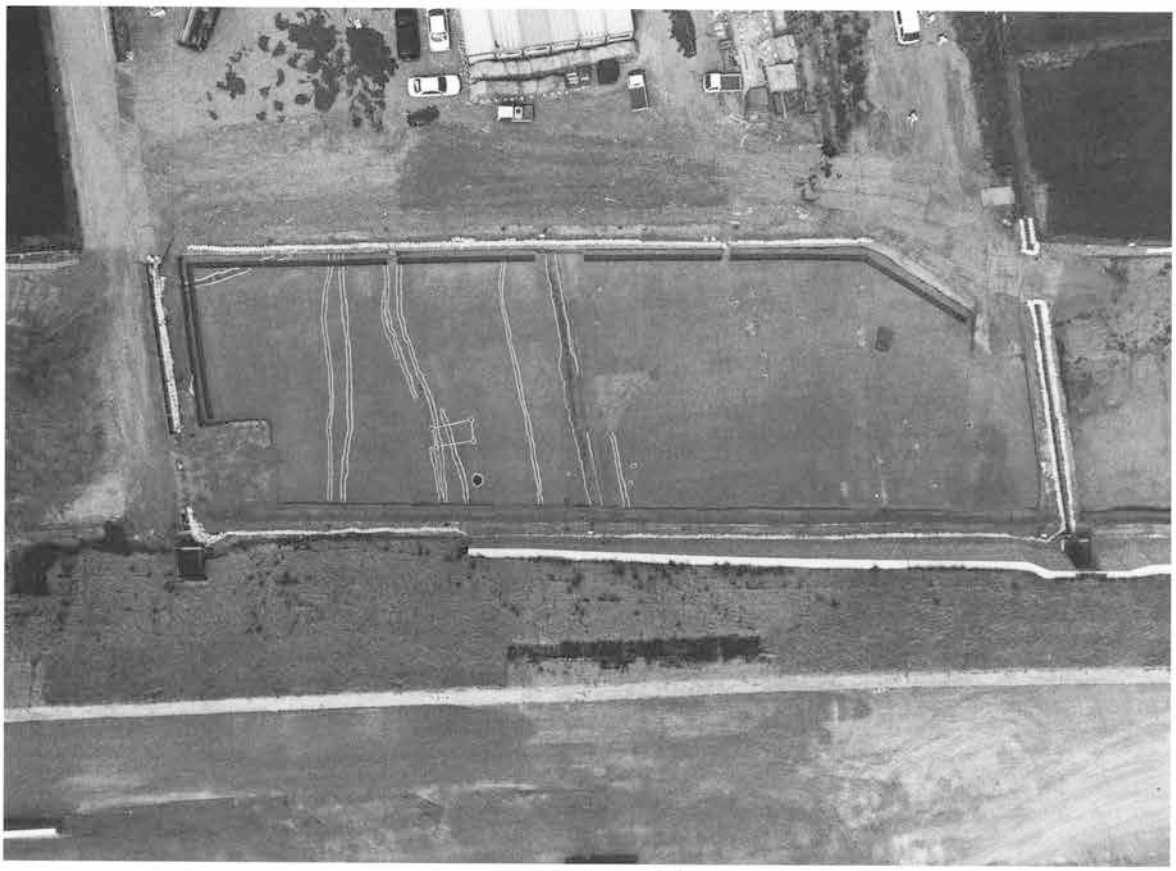
E区　1号土坑

E区　3号土坑

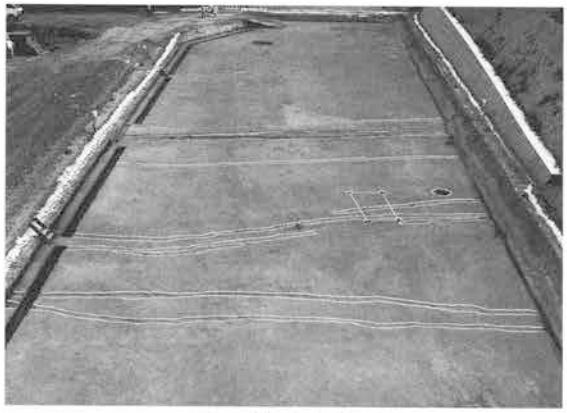
E区　5号土坑

E区　7号土坑

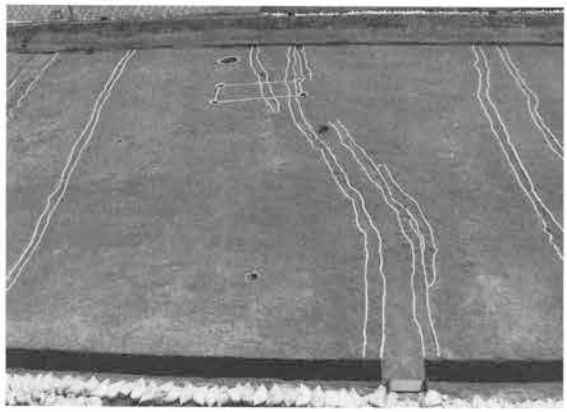
E区　1号井戸



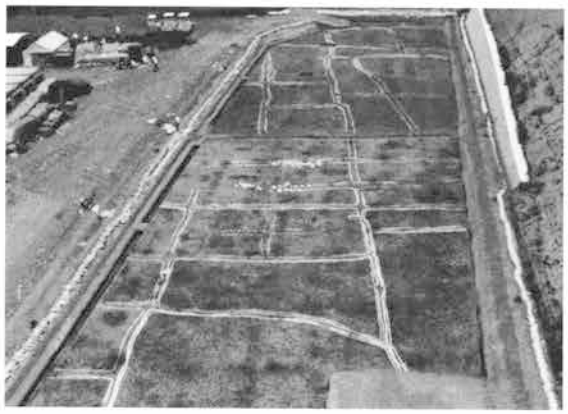
E区 第2面 全景



E区 第2面 全景

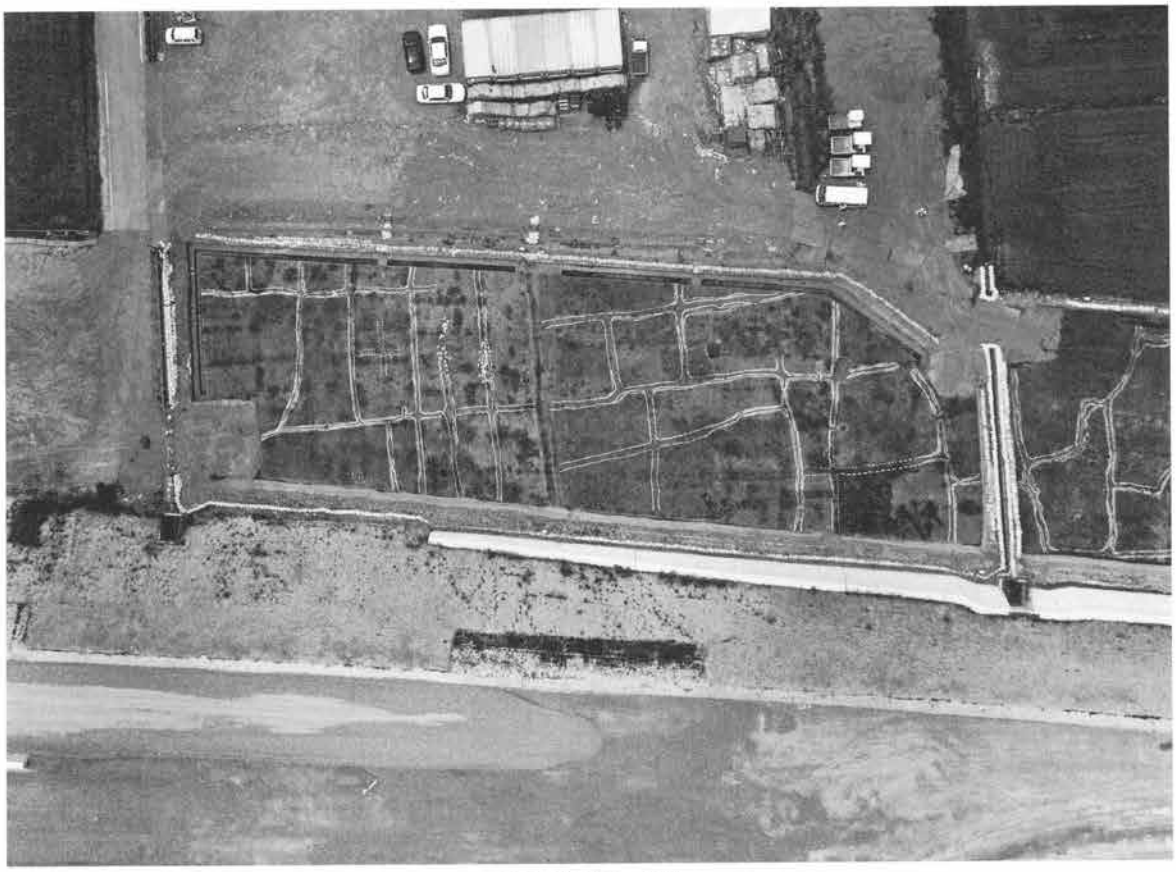


E区 第2面 2～8号溝



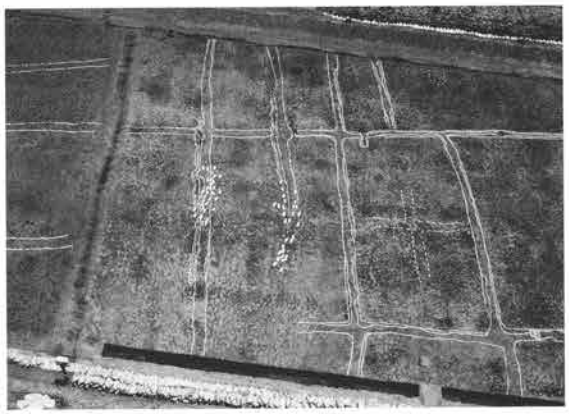
E区 第3面 全景

E区 第3面 全景（北半）

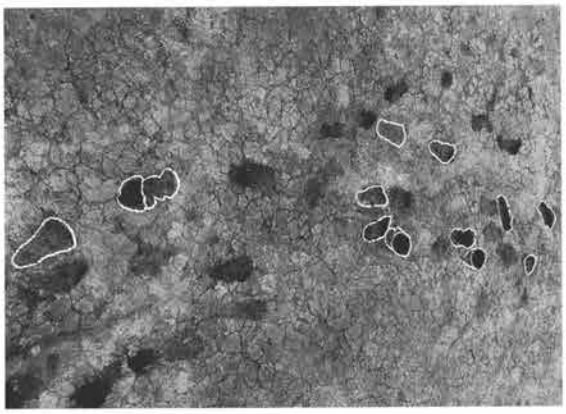


E区 第3面 全景

E区 第3面 全景（南半）



E区 第3面 水田面と人足跡



E区 第3面 人の足跡

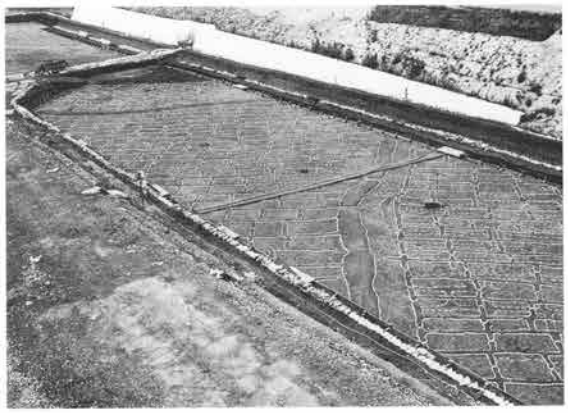
E区 第3面 人の足跡

E区 第4面 ピット列A・B

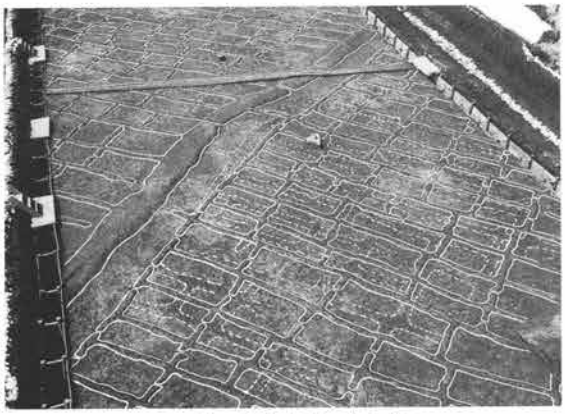
E区 第4面 ピット列C

E区 第6面 全景

E区 第6面 全景

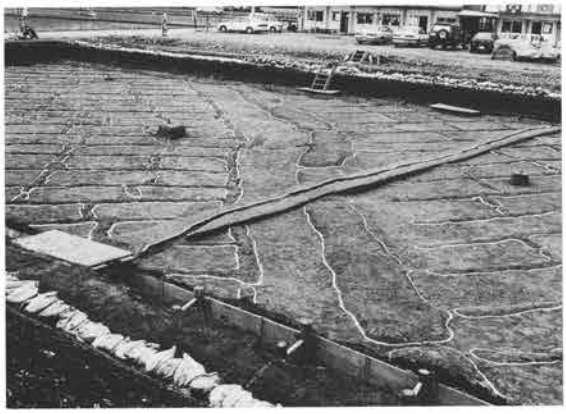


E区 第6面 全景（北側）

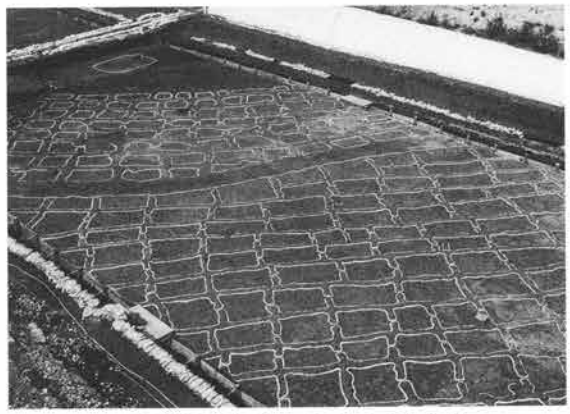


E区 第6面 全景（中央）

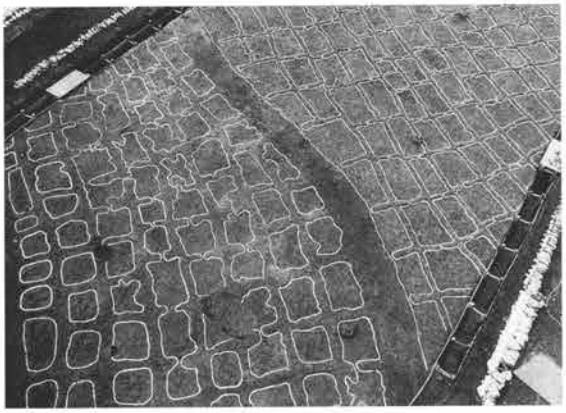
E区 第6面 全景（南側）



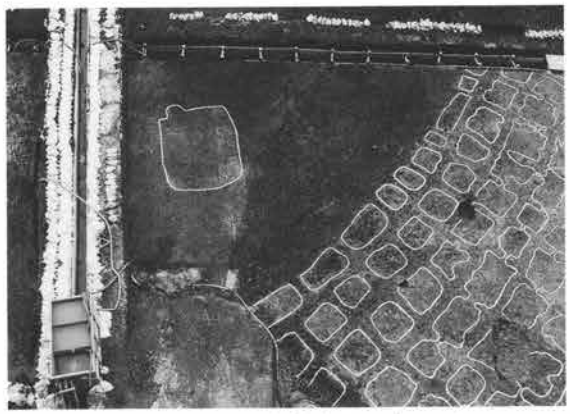
E区 第6面 1・2大区画と大畦



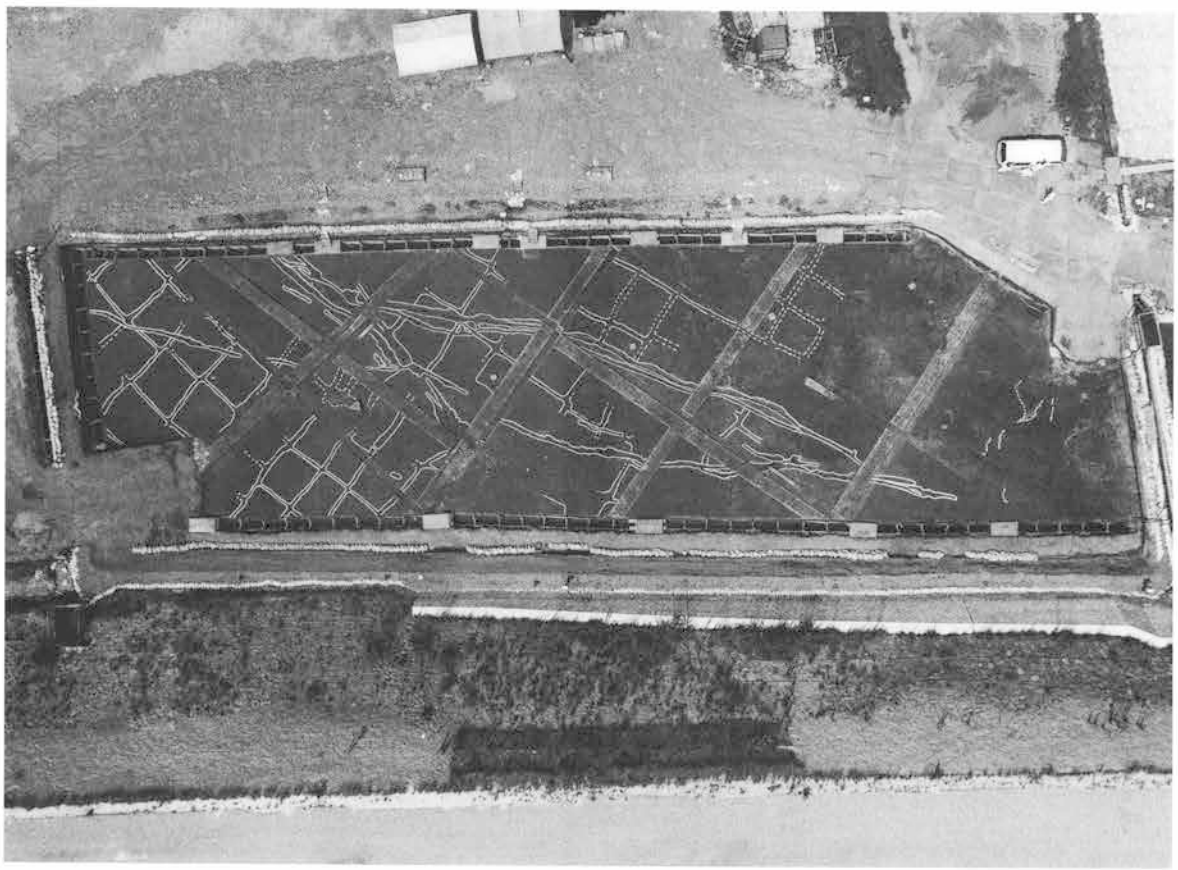
E区 第6面 2・3大区画と大畦



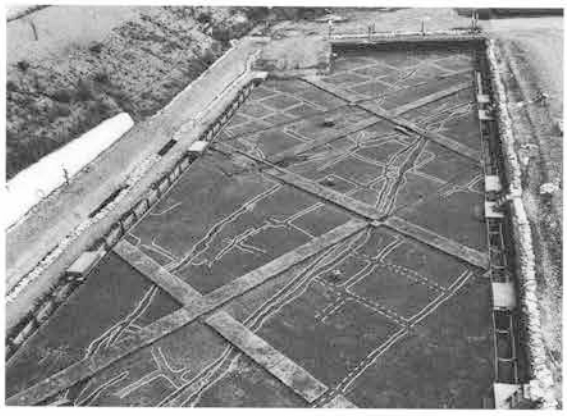
E区 第6面 2・3大区画と大畦



E区 第6面 微高地と3大区画

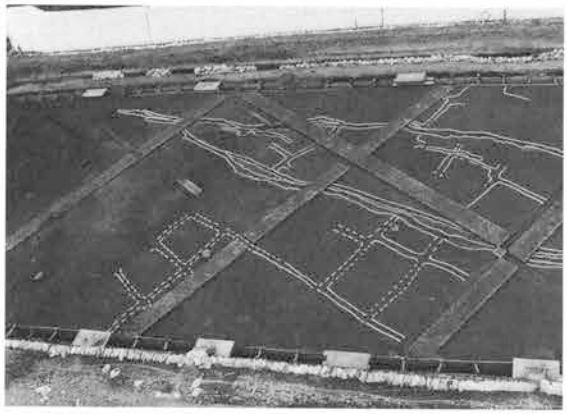


E区 第7・8面 全景

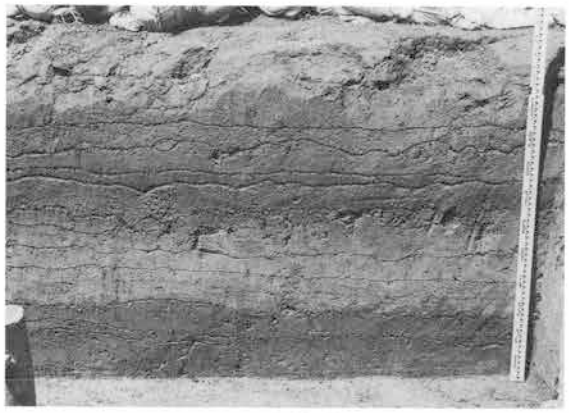


E区 第8面 検出された畦の痕跡状況

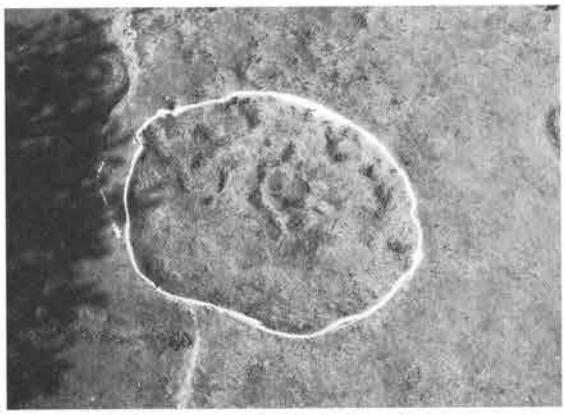
E区 第8面 検出された畦の痕跡状況



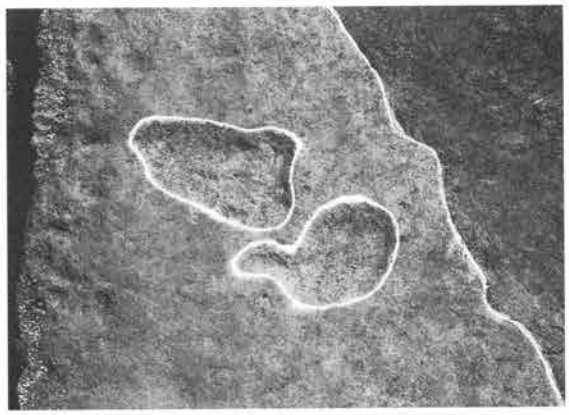
E区 第8面 検出された畦の痕跡状況



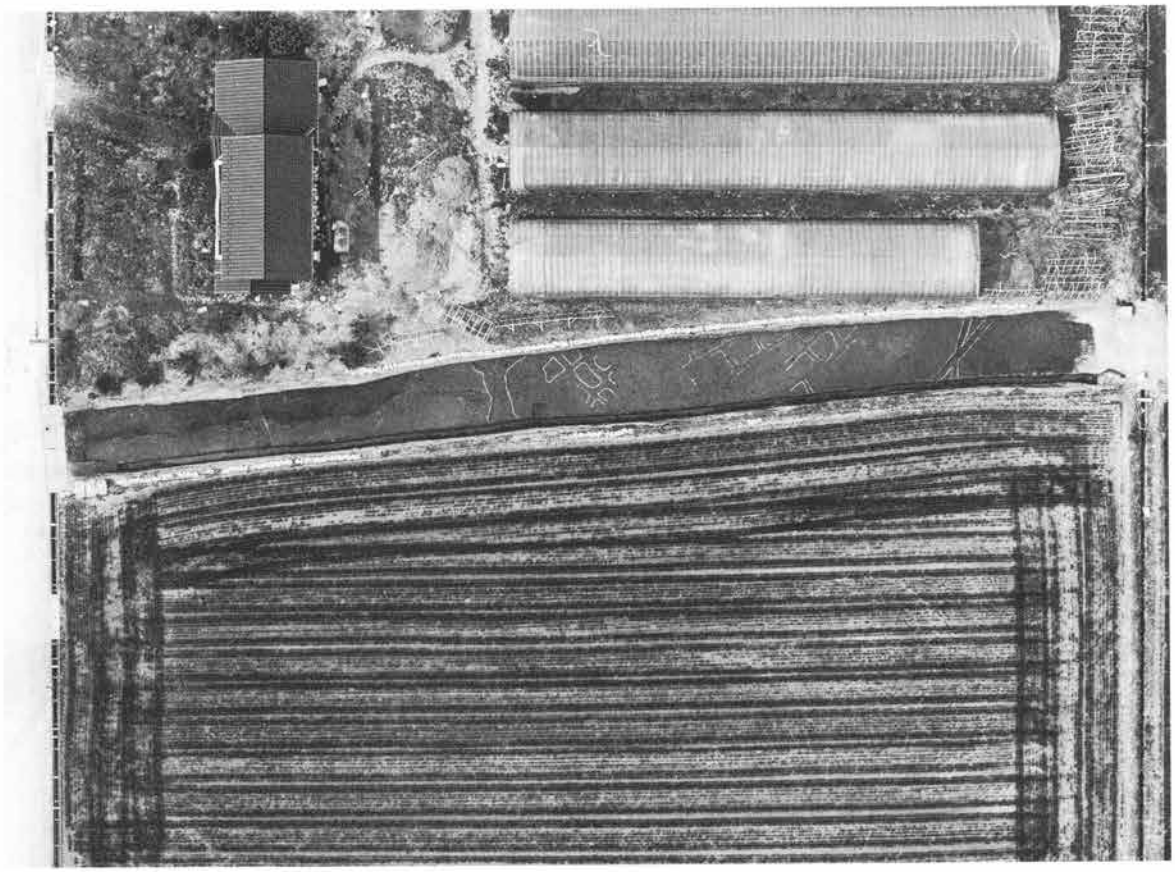
E区 土層断面



E区取り付道　1号土坑

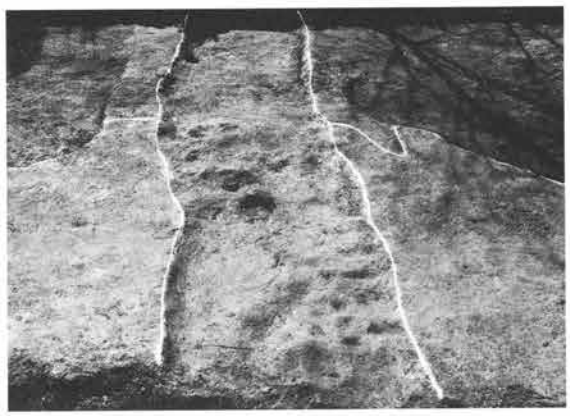


E区取り付道　2・3号土坑

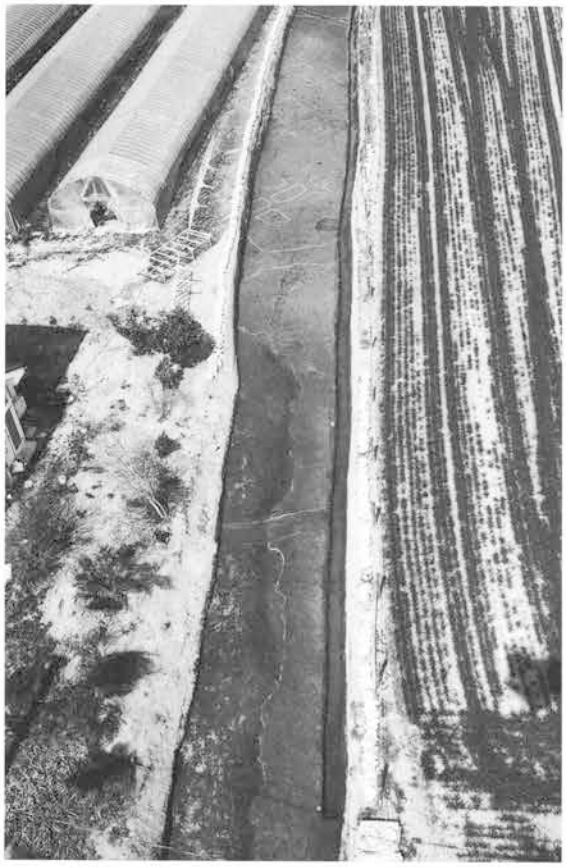


E区取り付道 第5面 全景

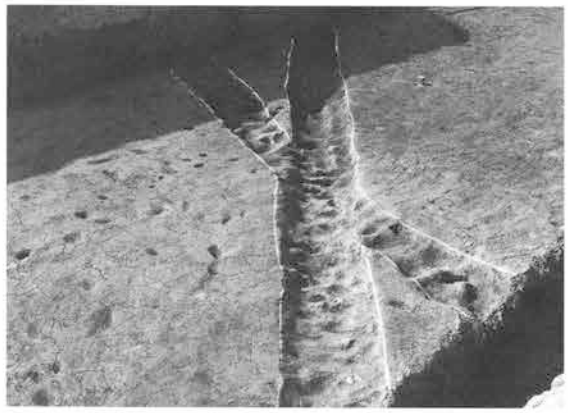
E区取り付道 第5面 3号溝



E区取り付道 第5面 4号溝



E区取り付道 第5面 全景



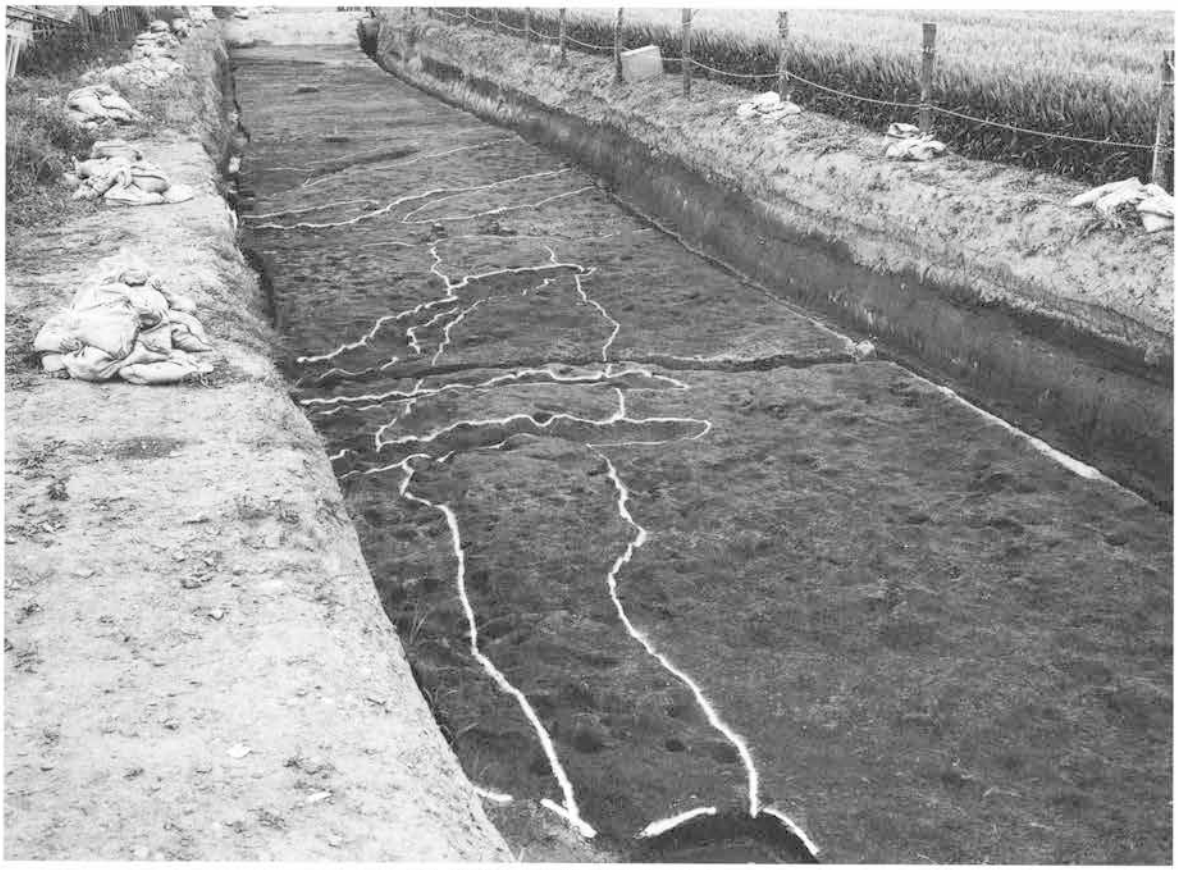
E区取り付道 第5面 1・2号溝

E区取り付道 第5面 検出された水田

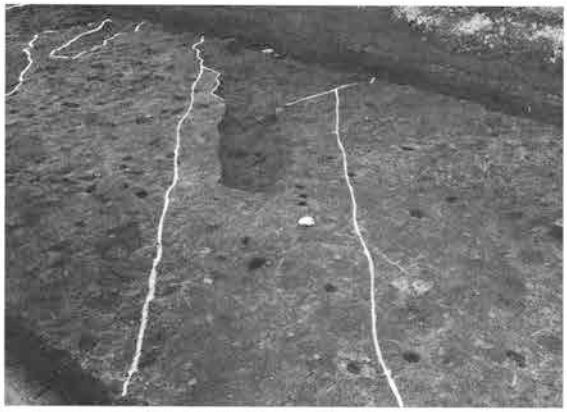
E・F区取り付道 全景

E区取り付道 第6面 全景

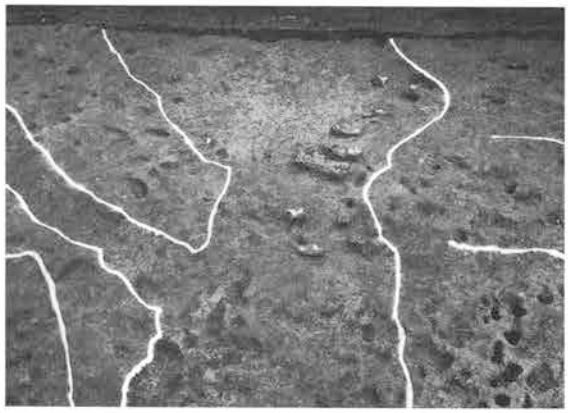
E区取り付道 第7面 全景



E区取り付道 第7面 畦と水田面



E区取り付道 第7面 大畦と水田面



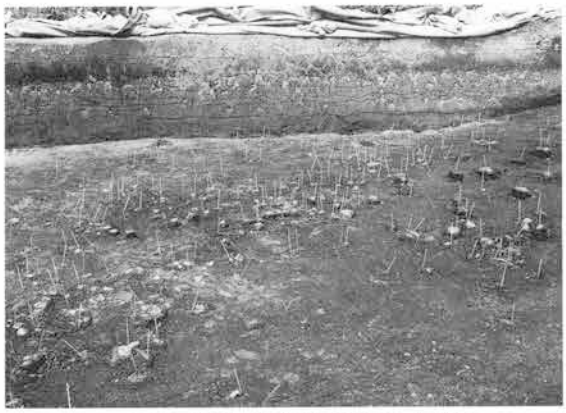
E区取り付道 第7面 9号溝

E区取り付道 第8面 15号溝

E区取り付道 第8面 15号溝と土層断面

E区取り付道 微高地 遺物集中箇所

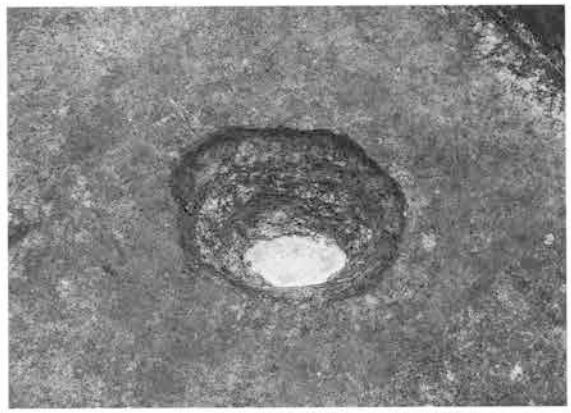
E区取り付道 微高地 遺物集中箇所



E区取り付道 微高地 遺物出土状態

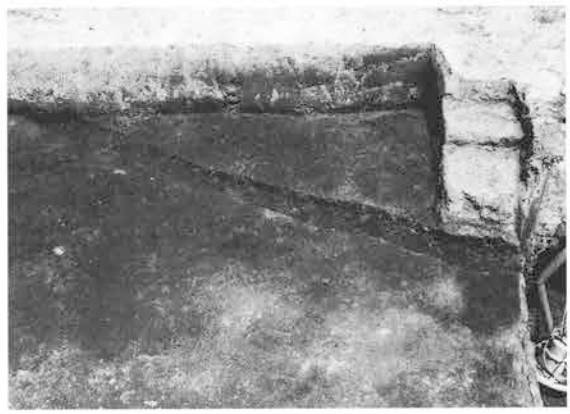
E区取り付道 微高地 遺物出土状態

E区取り付道 微高地 4号土坑

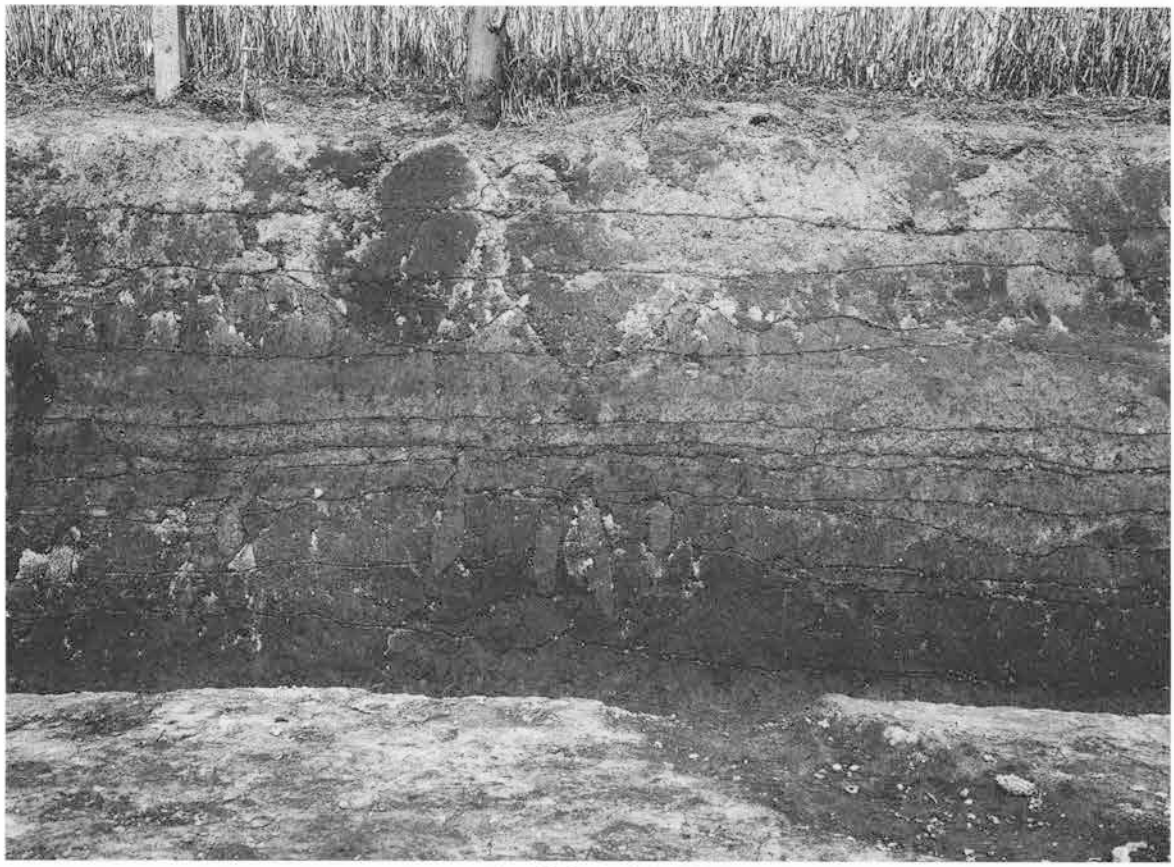


E区取り付道 微高地 5号土坑

E区取り付道 微高地 2号溝



E区取り付道 微高地 1号溝

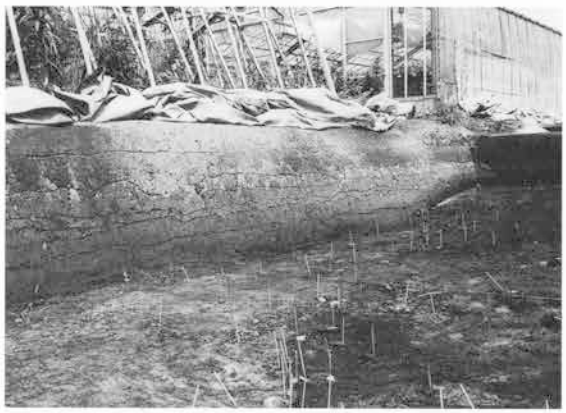


E区取り付道 東壁土層断面

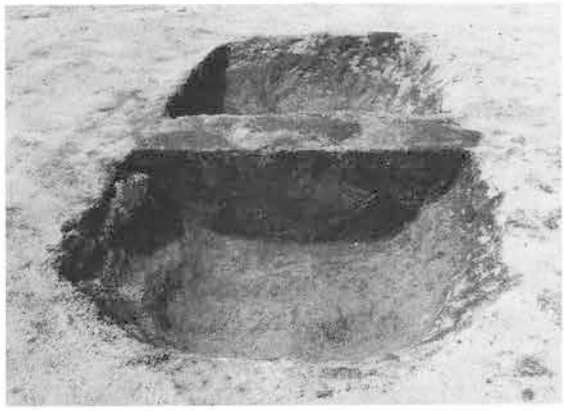
E区取り付道 東壁土層断面（南半）

E区取り付道 東壁土層断面

E区取り付道 西壁土層断面（南側）

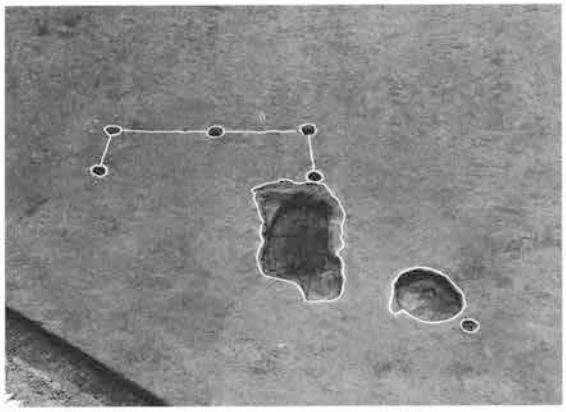


E区取り付道 西壁土層断面（北側）



F区 1号土坑

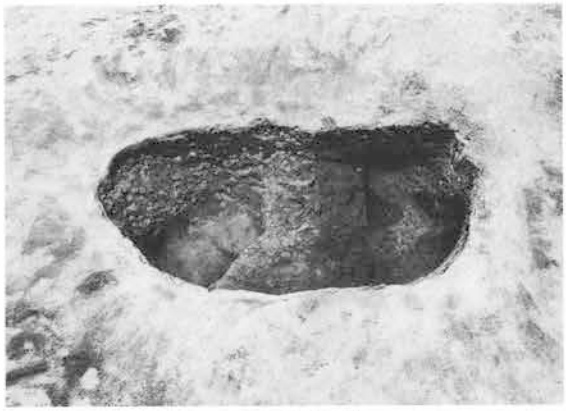
F区 2号土坑



F区 1号掘立柱建物と3・4号土坑

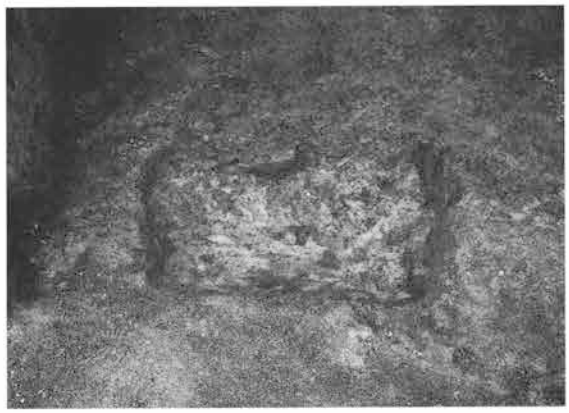
F区 4号土坑

F区 6号土坑

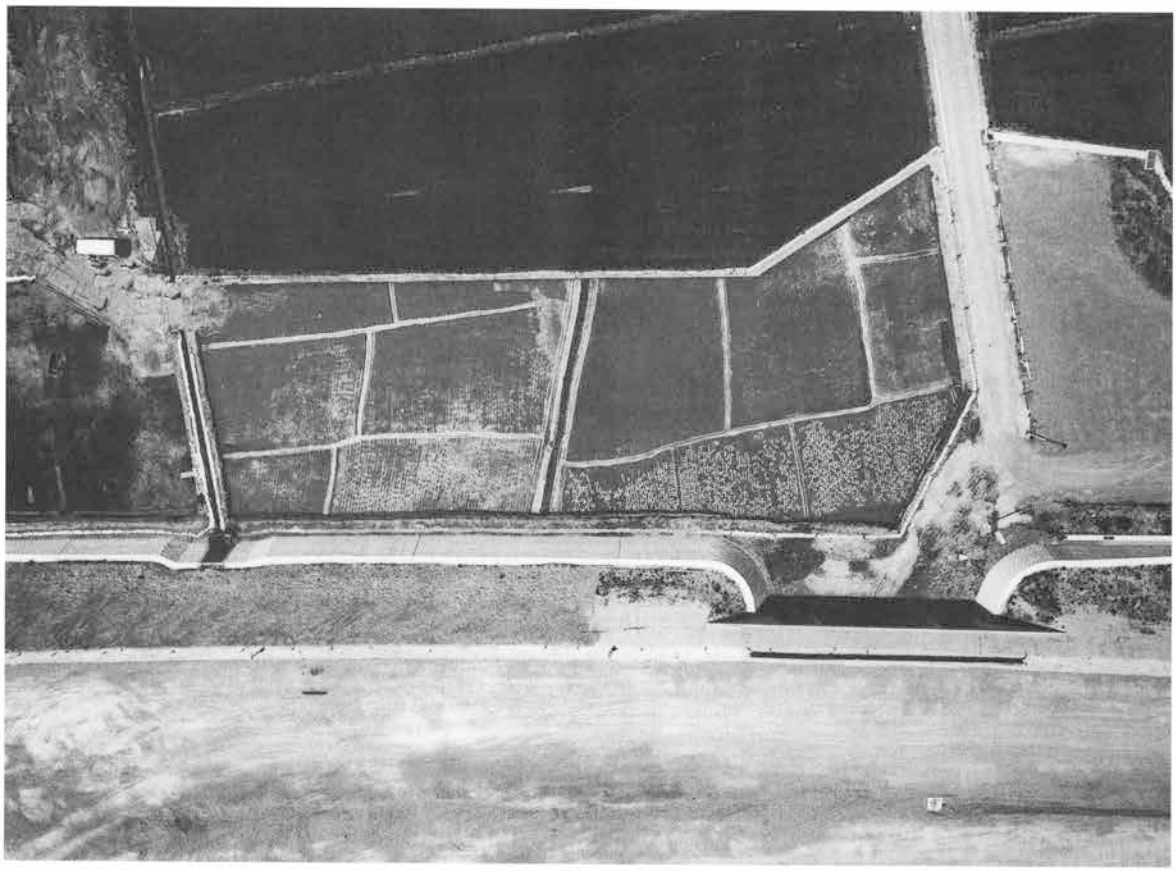


F区 12号土坑

F区 13号土坑



F区 14号土坑

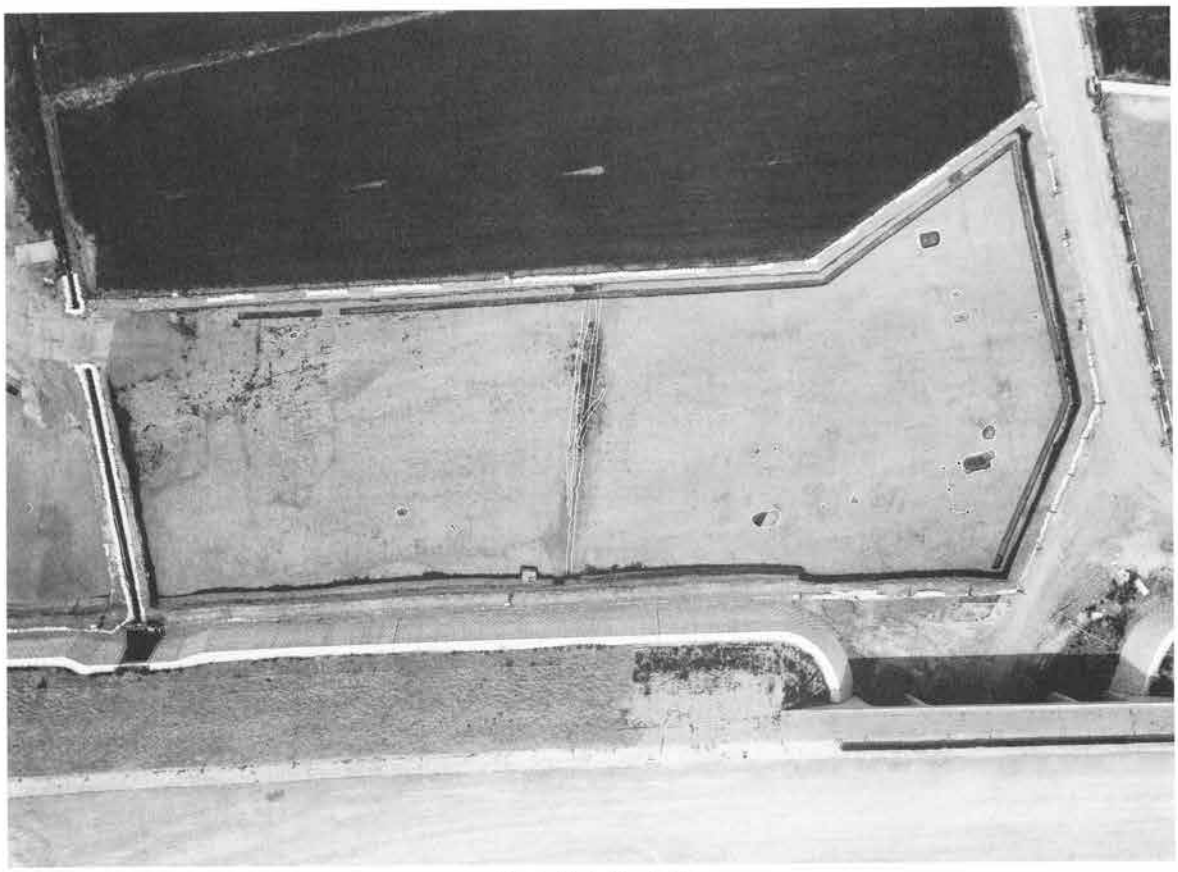


F区 第1面 全景

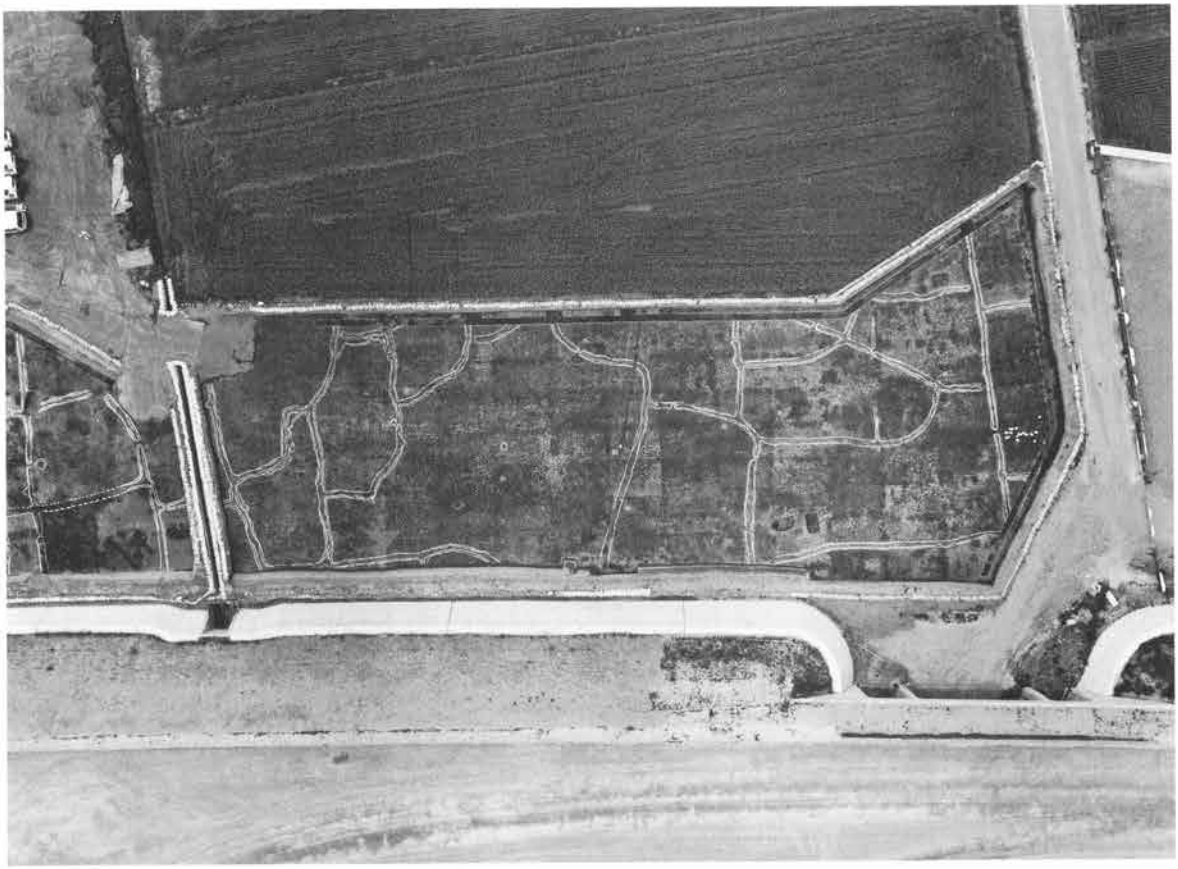
F区 第1面 北半の区画と耕作痕

F区 第1面 9区面の耕作痕

F区 第1面 7・8区画の耕作痕



F区 第2面 全景



F区 第3面 全景

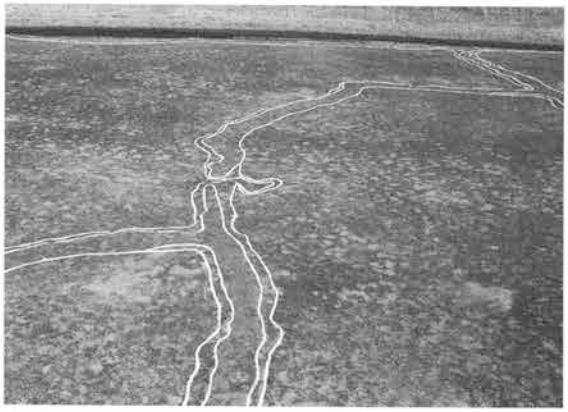
F区 第3面 全景

F区 第3面 北半の水田区画

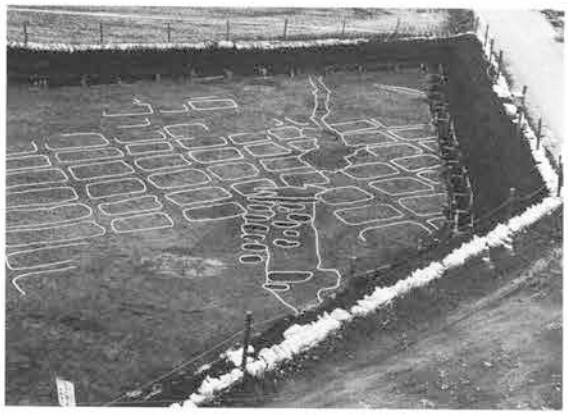
F区 第3面 南半の水田区画

F区 第3面 畦の水口

F区 第3面 畦と水田面

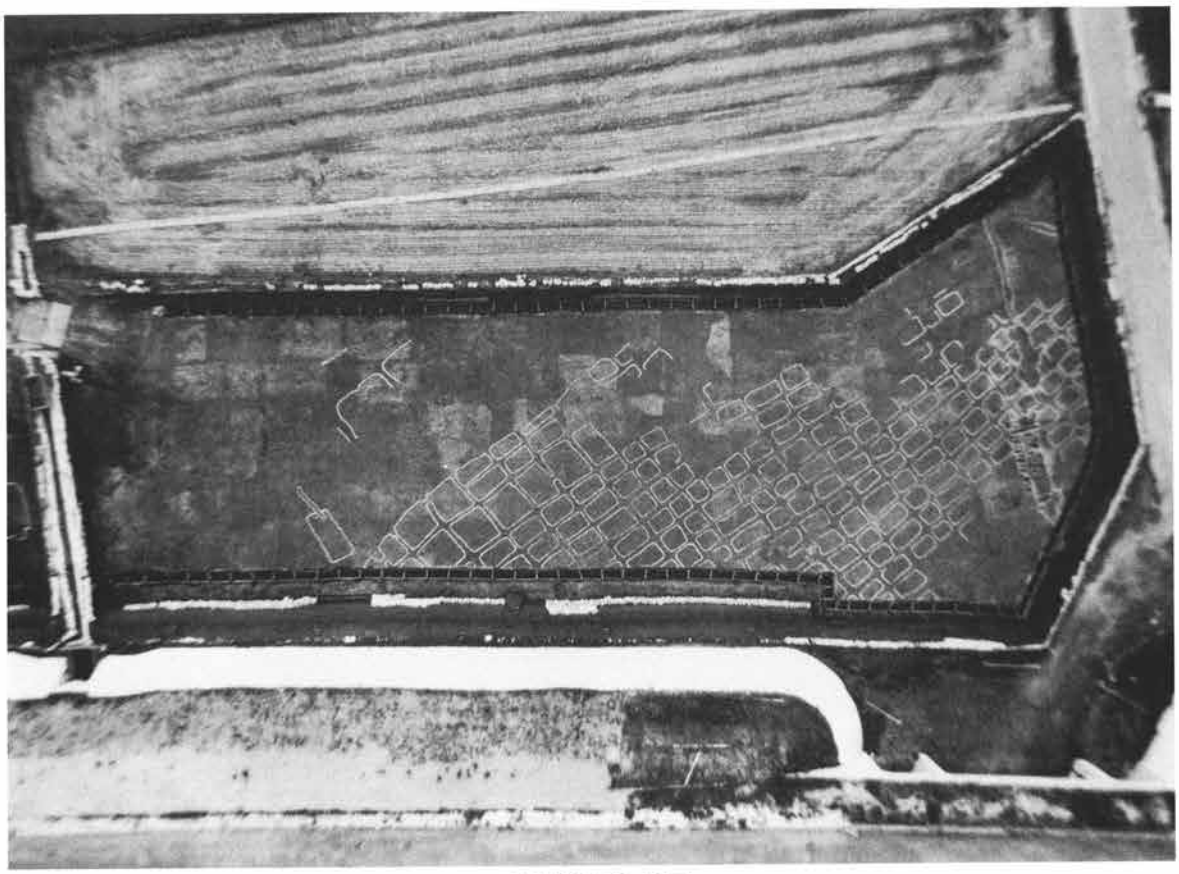


F区 第3面 畦と水田面

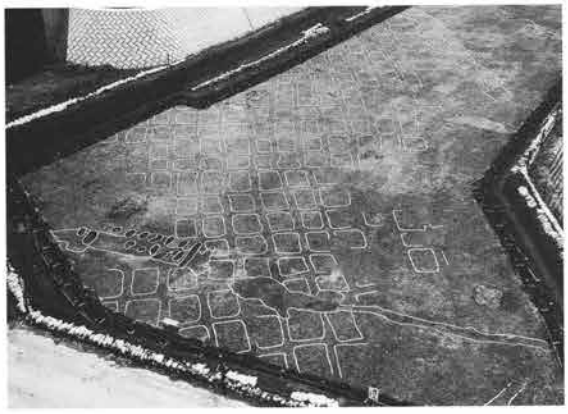


F区 第4面 道路状遺構

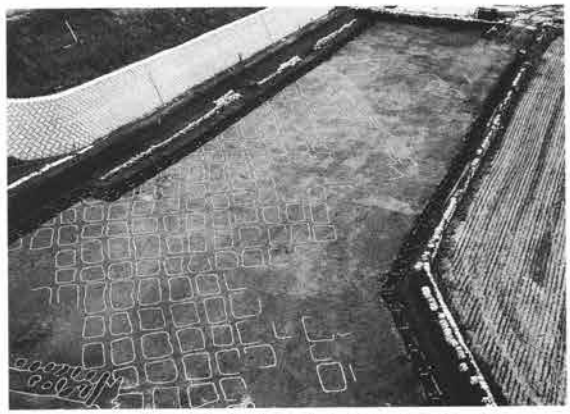
F区 第4面 道路状遺構



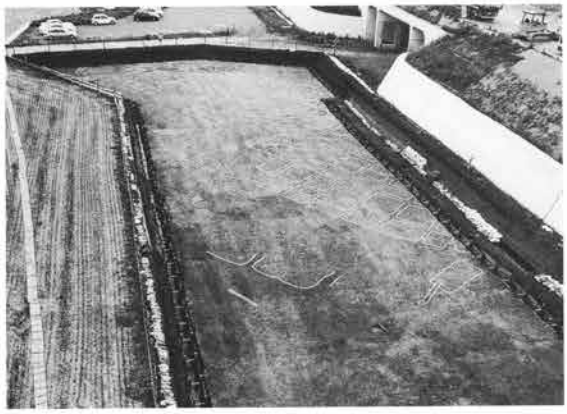
F区 第6面 全景



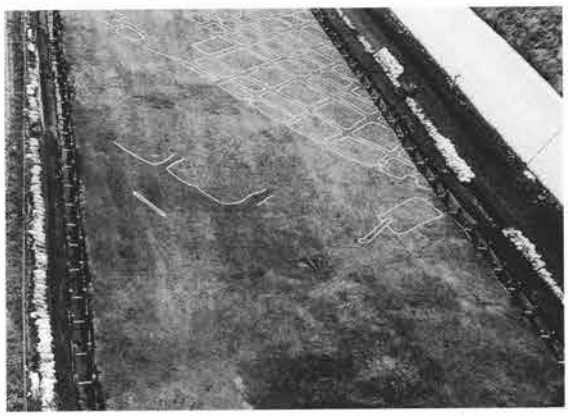
F区 第6面 検出された極小区画水田



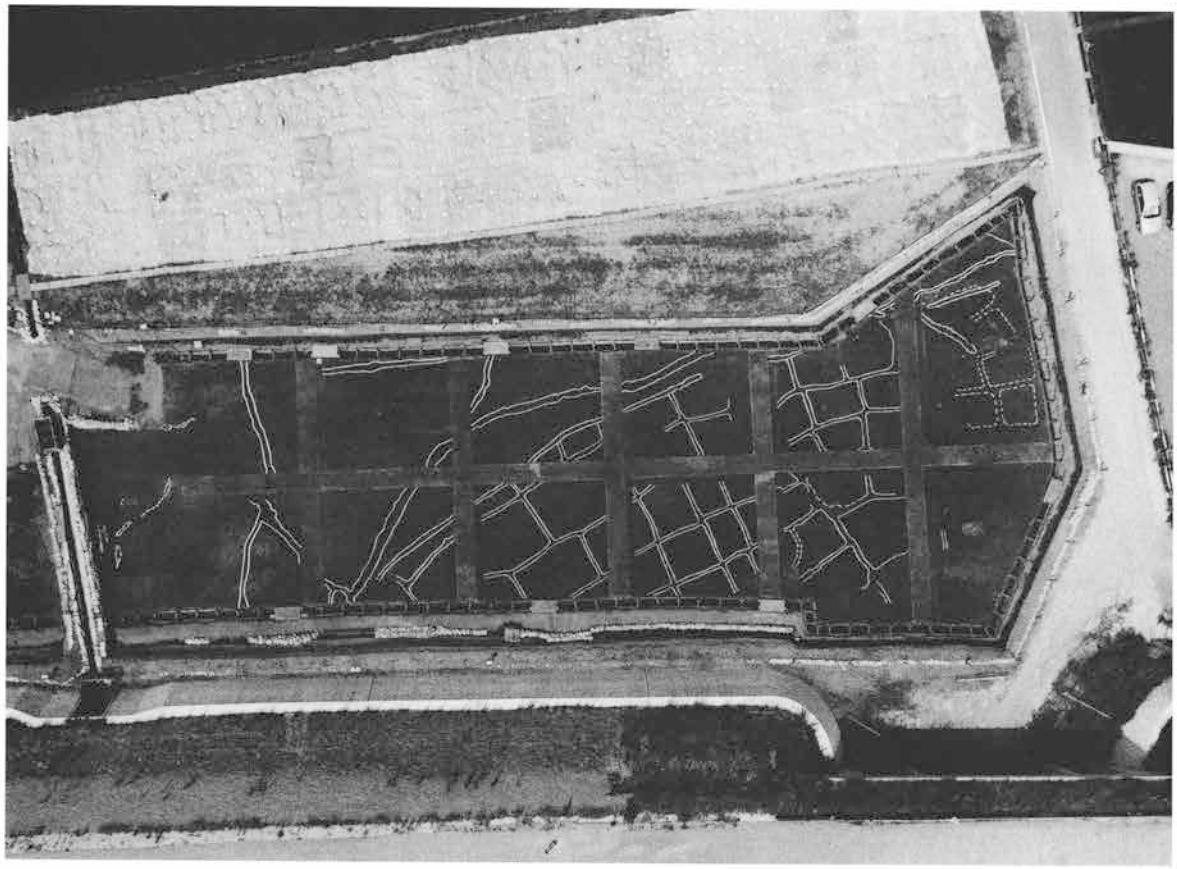
F区 第6面 検出された極小区画水田



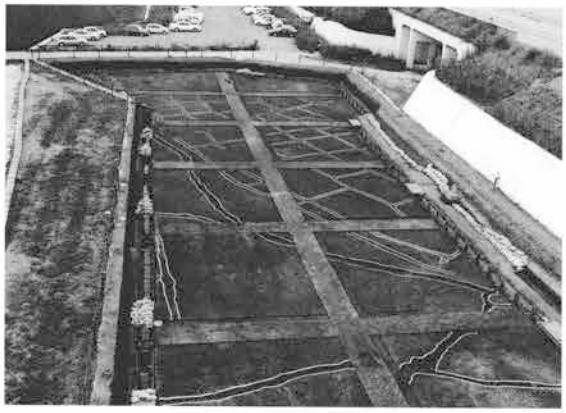
F区 第6面 検出された極小区画水田



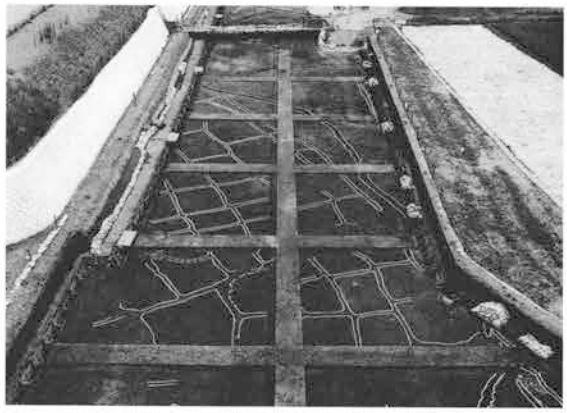
F区 第6面 微高地際の極小区画水田



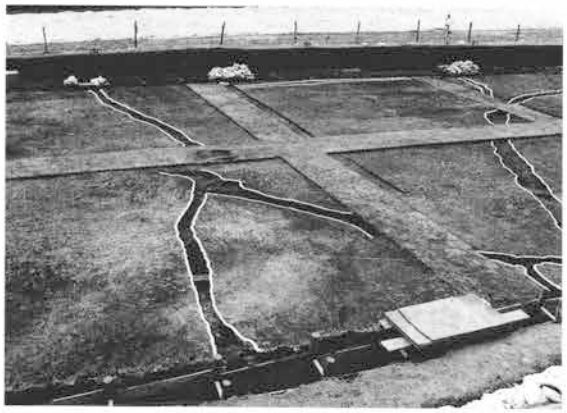
F区 第7・8面 全景



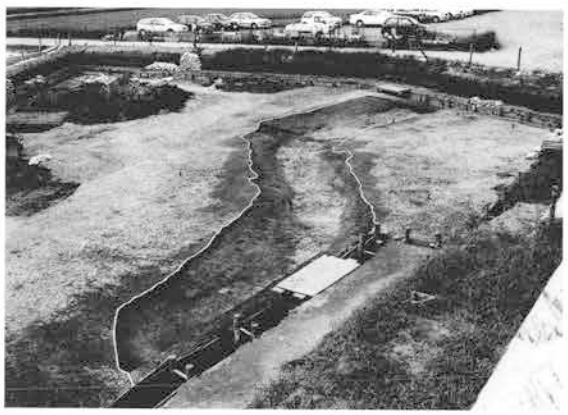
F区 第8面 検出された畦の痕跡状況



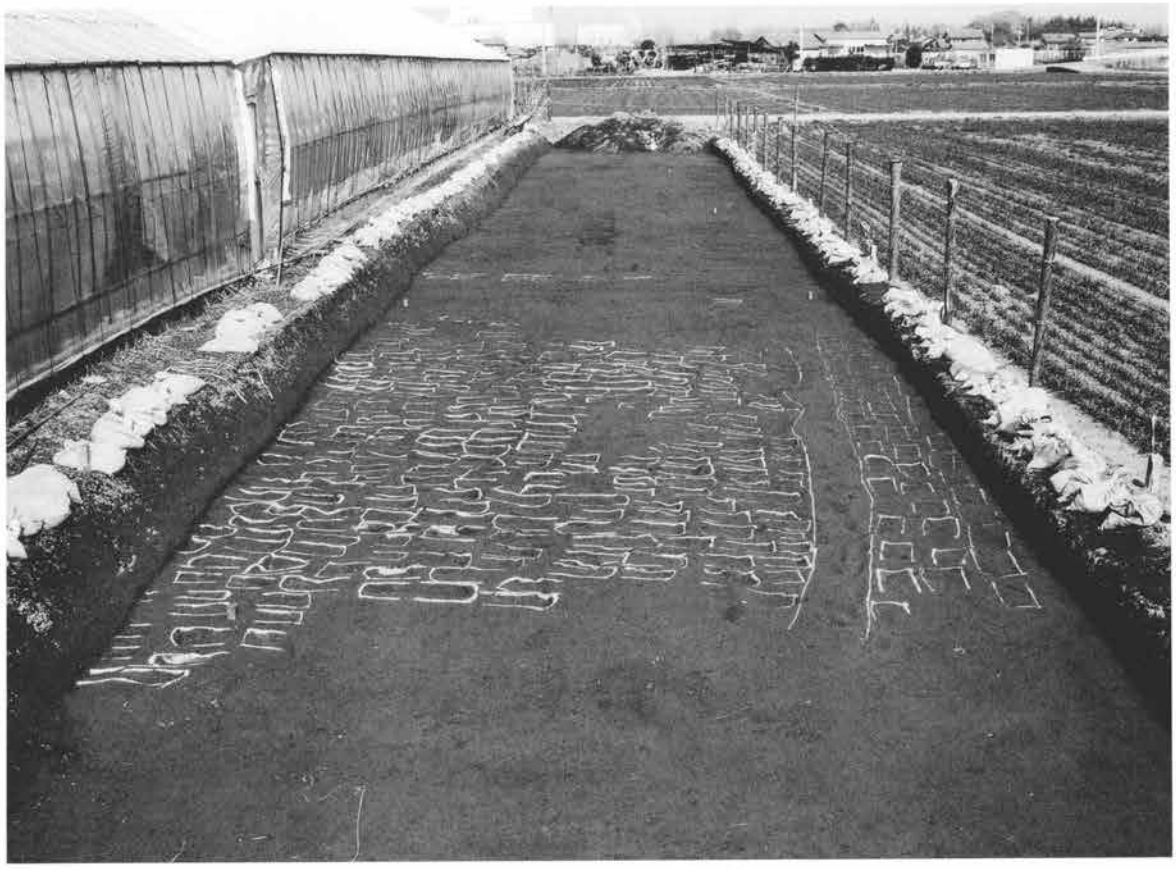
F区 第8面 検出された畦の痕跡状況



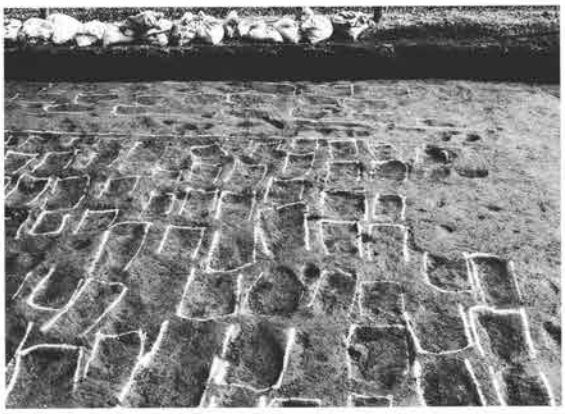
F区 第8面 微高地



F区 シルト面 自然流路

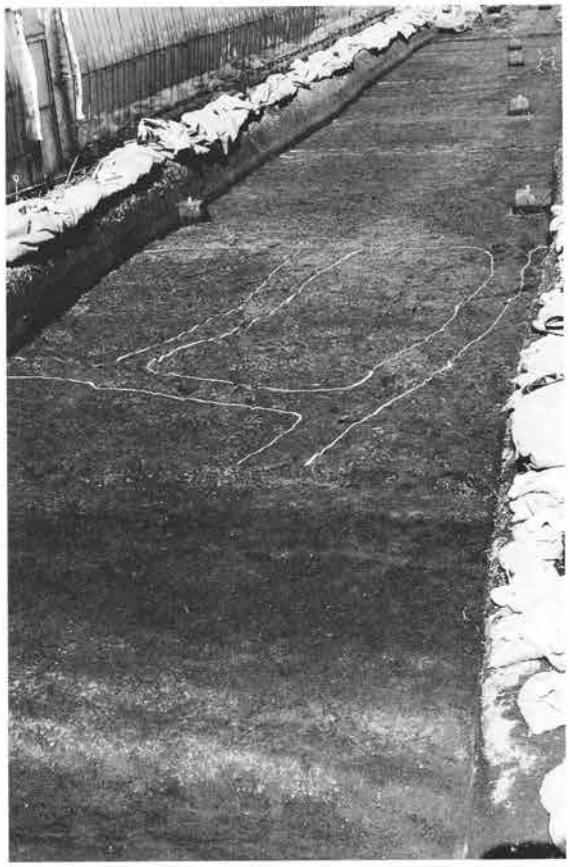


F区取り付道 第1面 耕作痕

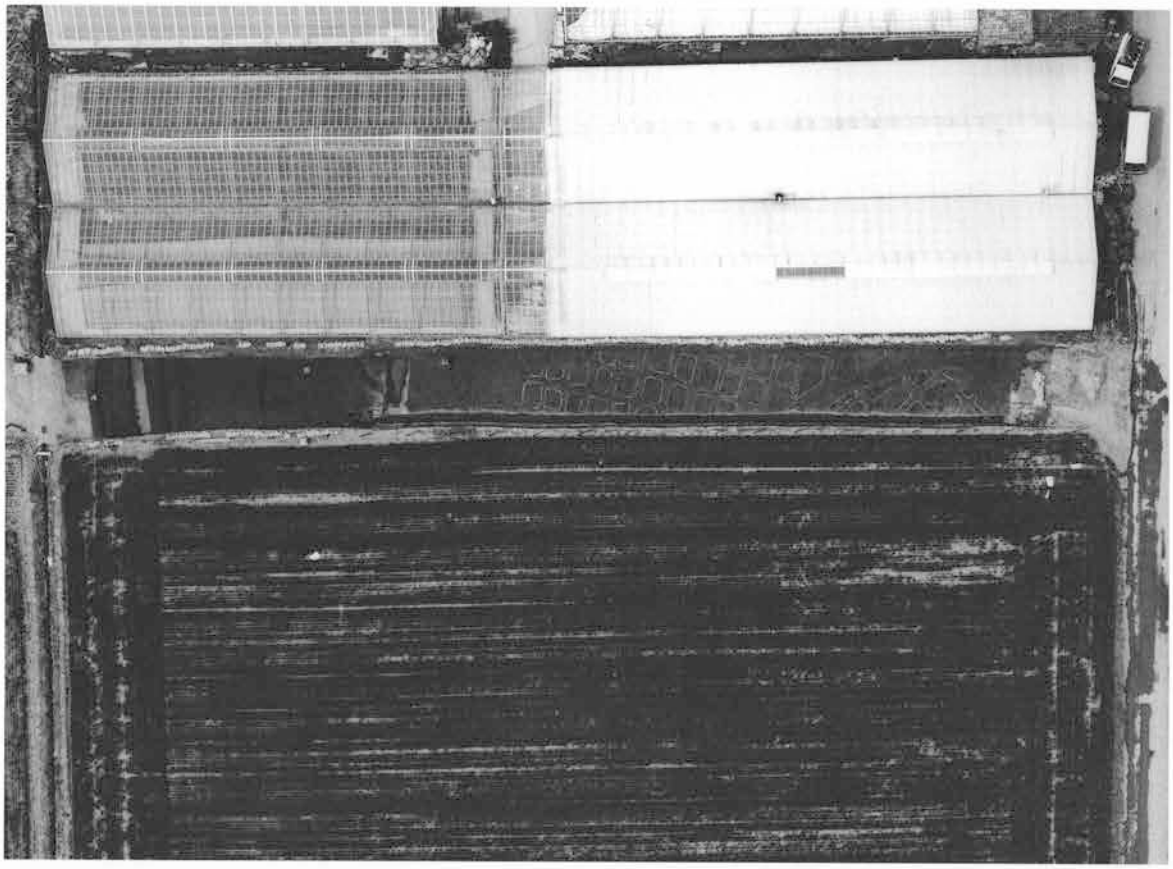


F区取り付道 第1面 耕作痕

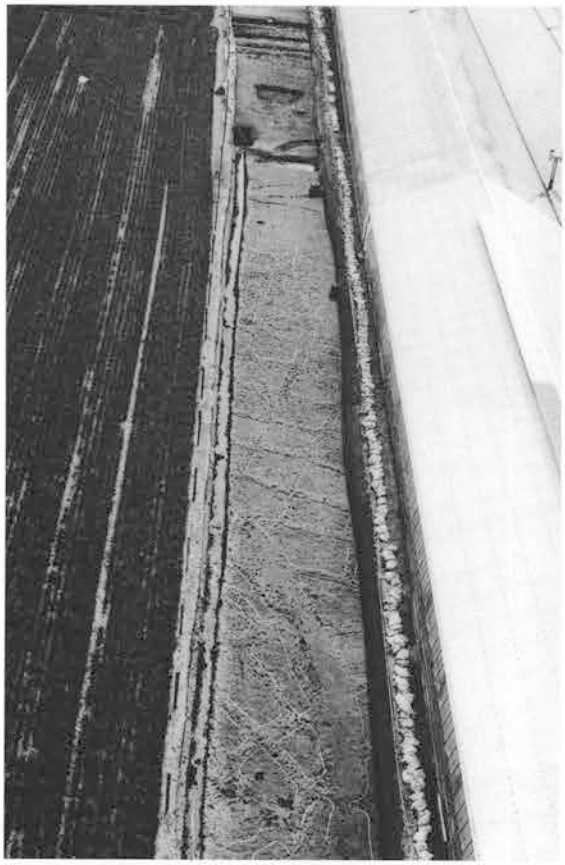
F区取り付道 第2面 全景



F区取り付道 第3面 全景



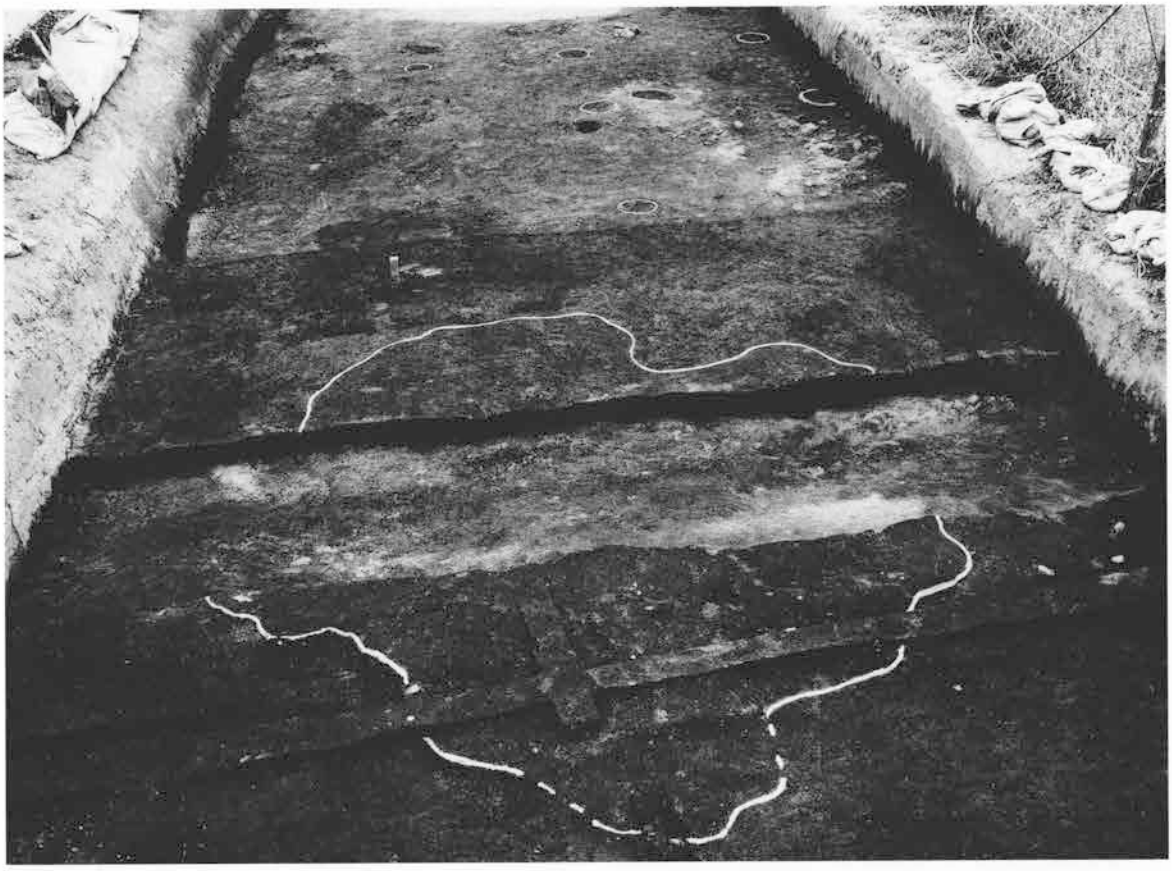
F区取り付道 第6面 全景



F区取り付道 第6面 全景

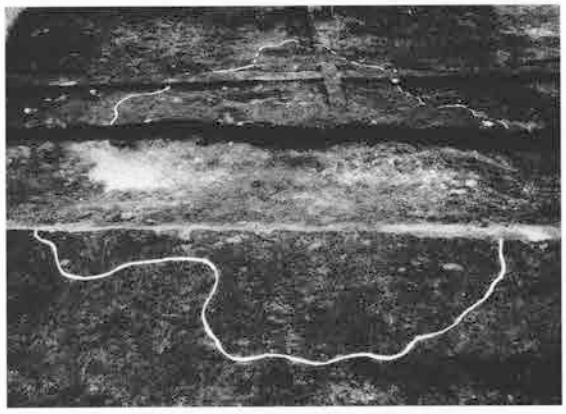
F区取り付道 第6面 極小区画水田

F区取り付道 東壁土層断面



F区取り付道 微高地硬化面と掘立柱建物

F区取り付道 微高地 全景



F区取り付道 微高地 硬化面検出状況

F区取り付道 微高地 5号溝

F区取り付道 微高地部土層断面

A区 25号土坑 1

A区 34号土坑 3

A区 34号土坑 4

A区 34号土坑 5

A区 34号土坑 7

A区 34号土坑 6

A区 34号土坑 8

A区 34号土坑 10

A区 34号土坑 9

A区 35号土坑 11

A区 35号土坑 12

A区 35号土坑 13

A区 35号土坑 14

A区 35号土坑 15

A区 58号土坑 16

A区 59号土坑 17

A区 59号土坑 18

A区 59号土坑 19

A区 59号土坑 20

A区 59号土坑 21

A区 59号土坑 22

A区　59号土坑　23

A区　59号土坑　24

A区　59号土坑　25

A区　59号土坑　26

A区　59号土坑　27

A区　59号土坑　28

A区　59号土坑　30

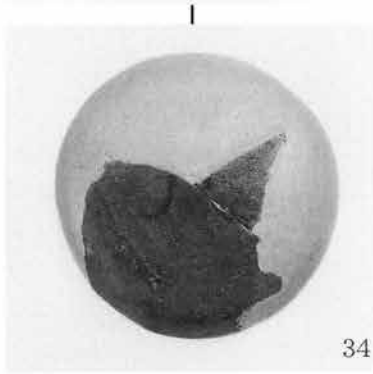
A区　59号土坑　31

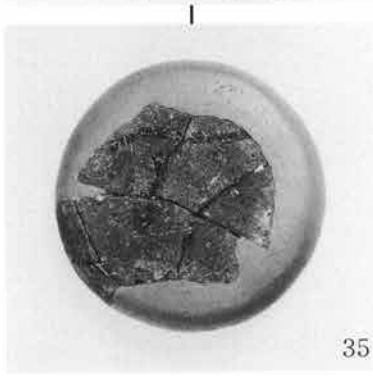
A区　59号土坑　33

A区　59号土坑　34

A区　59号土坑　35

A区　59号土坑　36


34


35

36

A区　59号土坑　37

37

A区　59号土坑　42

A区
59号土坑　38

A区
59号土坑　39

A区
59号土坑　40

A区
59号土坑　41

A区 59号土坑 43

A区 59号土坑 44

A区 29号溝 52

A区 遺構外 58

B区 1号溝 65

A区 60号土坑 45

A区 60号土坑 46

A区 60号土坑 47

A区 21号溝 50

A区 29号溝 53

A区 遺構外 59

B区 1号土坑 63

B区 1号溝 71

B区 1号土坑 62

B区 1号溝 67

B区 1号溝 70

A区 16号溝 48

A区 遺構外 54

A区 遺構外 60

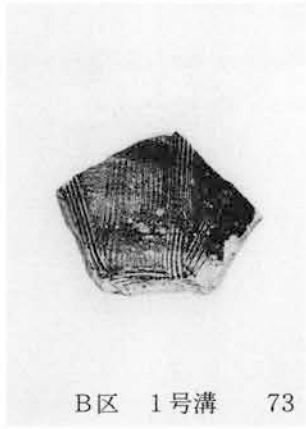
B区 1号溝 66

B区 1号溝 69

A区 16号溝 49

B区　1号溝　72

B区　1号溝　74

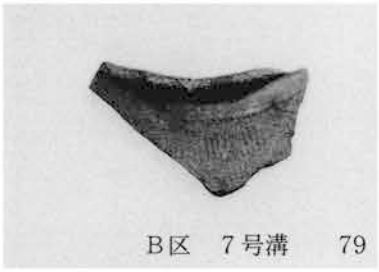

B区　1号溝　73

B区　2号溝　77

B区　2号溝　75

B区　7号溝　78

B区
7号溝　81


B区　7号溝　79

B区　42号溝　86

B区　52号溝　88

B区　12号溝　83

83

B区　52号溝　91

B区　63号溝　93

B区　遺構外　94

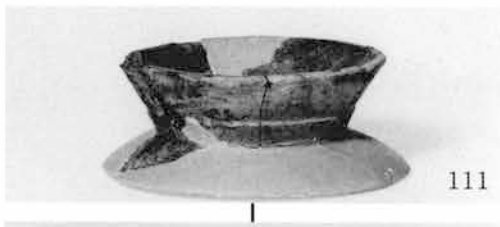
B区　遺構外　96

B区　遺構外　97

B区　遺構外　95

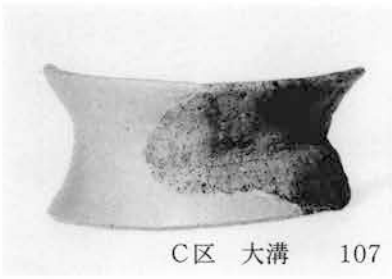
C区 29号溝 98

C区 遺構外 109


111

C区 遺構外 111

C区 大溝 106


C区 大溝 107

C区 遺構外 110

C区 大溝 100

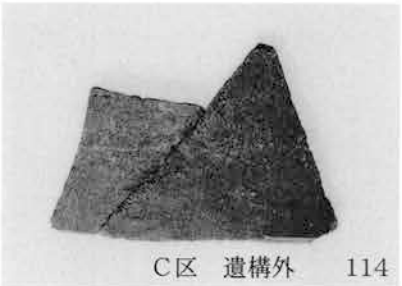
C区 大溝 101

C区 大溝 102

C区 大溝 108

C区 大溝 103

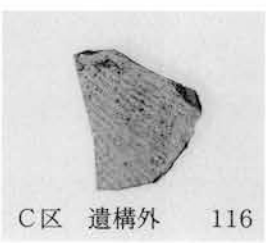
C区 大溝 104

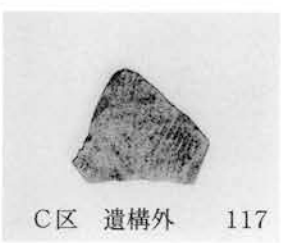

C区 遺構外 114

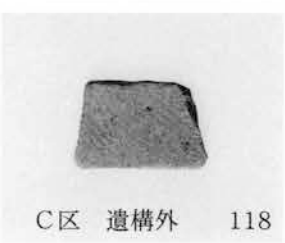
C区 遺構外 112

C区 遺構外 113

C区 遺構外 115


C区 遺構外 116


C区 遺構外 117


C区 遺構外 118

C区　遺構外　122

C区 遺構外

120

C区　遺構外　125

C区　遺構外　121

C区　遺構外　119

125

C区　遺構外　123

C区　遺構外　124

D区　遺構外　151

E区　1号住　153

E区　1号住　154

E区　1号住　156

E区　1号住　158

E区
1号住　159

E区　遺構外　163

E区
5号土坑　160

E区　遺構外　167

E区 遺構外　162

E区　遺構外　161

E区 遺構外 168

E区 遺構外 169

E区 遺構外 170

E区 遺構外 172

E区 遺構外 166

F区 4号溝 232

F区 5号溝 233

F区 遺構外 237

F区 遺構外 234

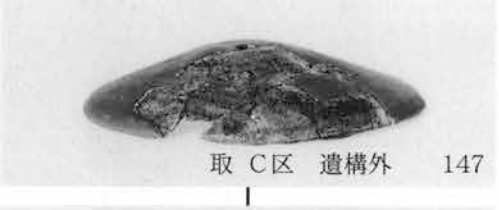
F区 遺構外 235

F区 遺構外 236

取 C区 3号土坑 126

取 C区 遺構外 145

取 C区 遺構外 146


取 C区 遺構外 147

147

取 C区 遺構外 144

取 C区 遺構外 143

取 C区　遺構外　129

取 C区　遺構外　130

取 C区　4号土坑　128

取 C区　遺構外　131

取 C区　遺構外　134

取 C区　遺構外　135

取 C区　遺構外　133

取 C区　遺構外　138

取 C区　遺構外　136

取 C区　遺構外　137

取 C区 遺構外 140

取 C区 遺構外 142

取 C区 遺構外 139

取 C区 遺構外 141

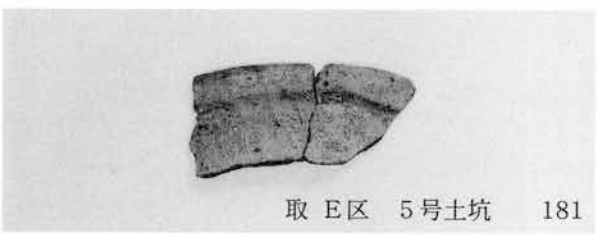
取 C区 遺構外 148

取 E区 4号土坑 177

取 E区 4号土坑 178

取 E区 4号土坑 176

取 E区 5号土坑 179


取 E区 5号土坑 181

取 E区 5号土坑 180

取 E区　2号溝　183

取 E区　4号溝　184

取 E区　遺構外　188

取 E区　遺構外　185

取 E区　遺構外　186

取 E区　遺構外　187

取 E区　遺構外　190

取 E区　遺構外　191

取 E区　遺構外　192

取 E区　遺構外　193

取 E区　遺構外　198

取 E区　遺構外　200

取 E区　遺構外　203

取 E区　遺構外　205

取 E区　遺構外　204

取 E区　遺構外　207

取 E区　遺構外　212

取 E区　遺構外　214

取 E区 遺構外 216

取 E区 遺構外 217

取 E区 遺構外 218

取 E区 遺構外 219

取 E区 遺構外 226

取 E区 遺構外 222

取 E区 遺構外 231

取 F区 遺構外 241

取 F区 遺構外 248

取 F区 遺構外 240

取 F区 遺構外 239

239

239

取 F区 遺構外 243

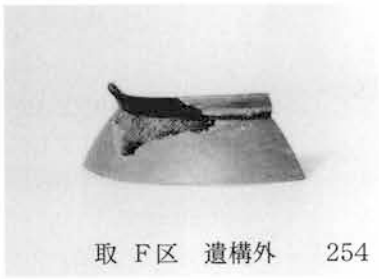
取 F区 遺構外 242

取 F区 遺構外 247

取 F区　遺構外　249

取 F区　遺構外　250

取 F区　遺構外　251


取 F区　遺構外　254

取 F区　遺構外　253

取 F区　5号溝　238

取 F区　遺構外　259

取 F区　遺構外　260

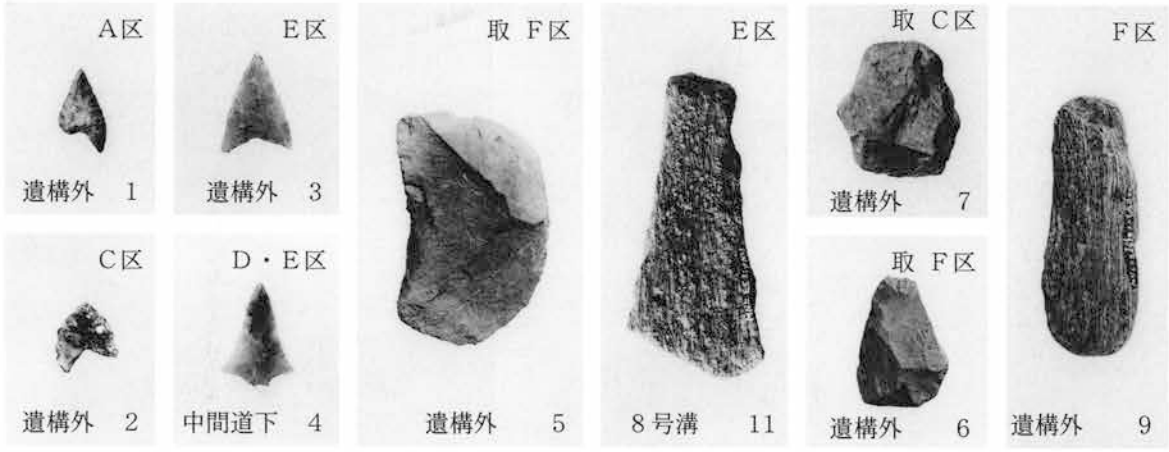
取 F区　遺構外　261

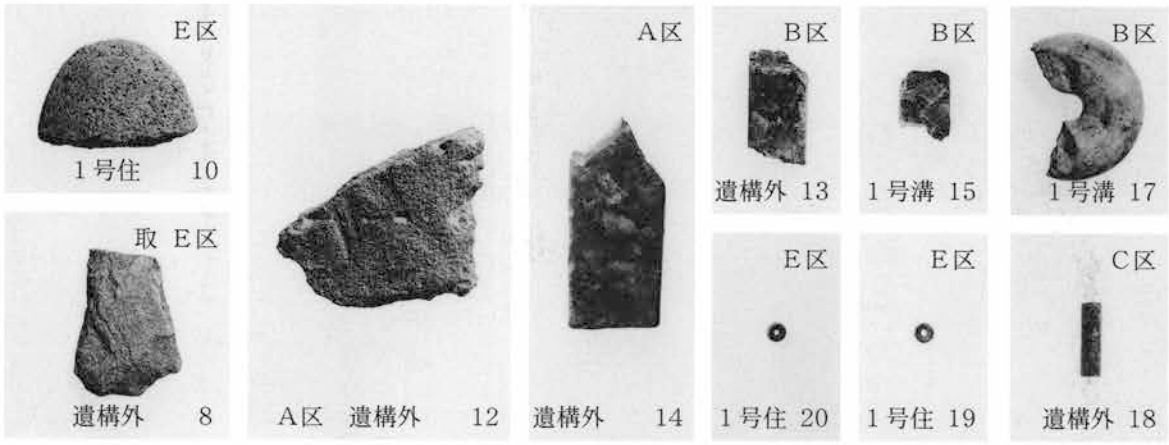
取 F区　遺構外　265

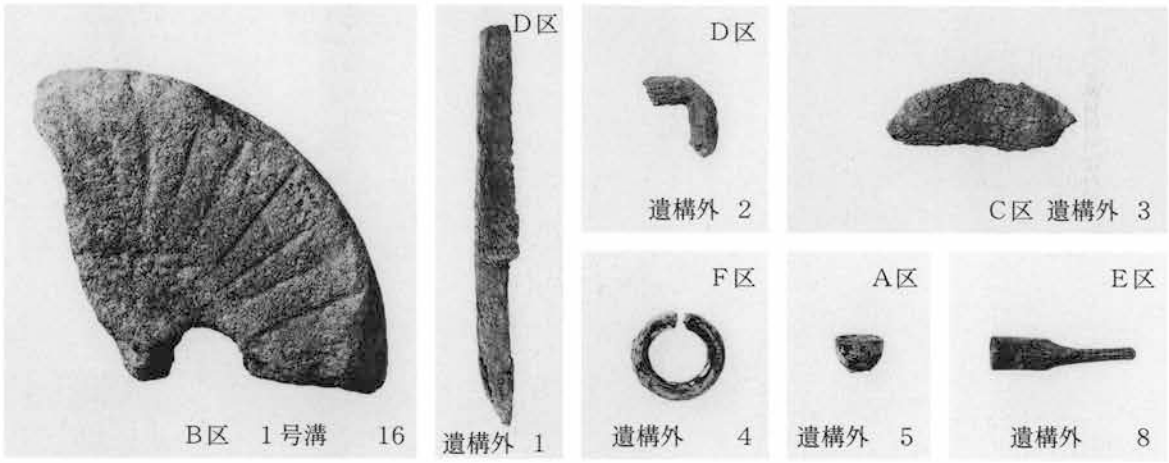
取 F区　遺構外　263

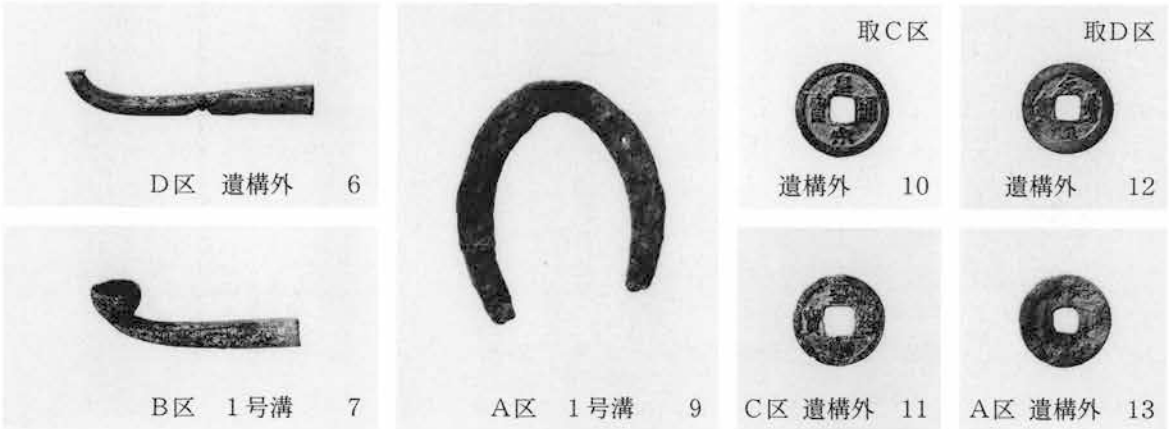
取 F区　遺構外　269

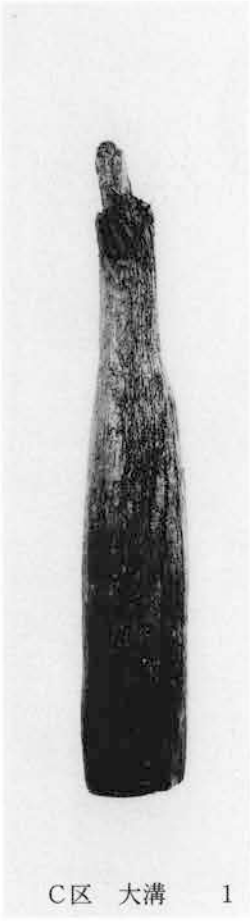
取 F区　遺構外　267


A区
遺構外 1
E区
遺構外 3
取 F区
遺構外 5
E区
8号溝 11
取 C区
遺構外 7
F区
遺構外 9
C区
遺構外 2
D・E区
中間道下 4
取 F区
遺構外 6


E区
1号住 10
取 E区
遺構外 8
A区 遺構外 12
A区
遺構外 14
B区
遺構外 13
B区
1号溝 15
B区
1号溝 17
E区
1号住 20
E区
1号住 19
C区
遺構外 18


B区 1号溝 16
D区
遺構外 1
D区
遺構外 2
C区 遺構外 3
F区
遺構外 4
A区
遺構外 5
E区
遺構外 8


D区 遺構外 6
A区 1号溝 9
取C区
遺構外 10
取D区
遺構外 12
B区 1号溝 7
C区 遺構外 11
A区 遺構外 13


C区　大溝　1

C区　大溝　12

C区　大溝　15

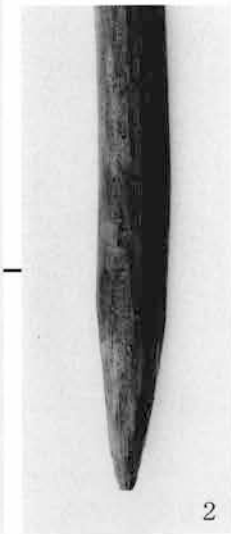
C区　大溝　13

C区　大溝　14

C区　大溝　16

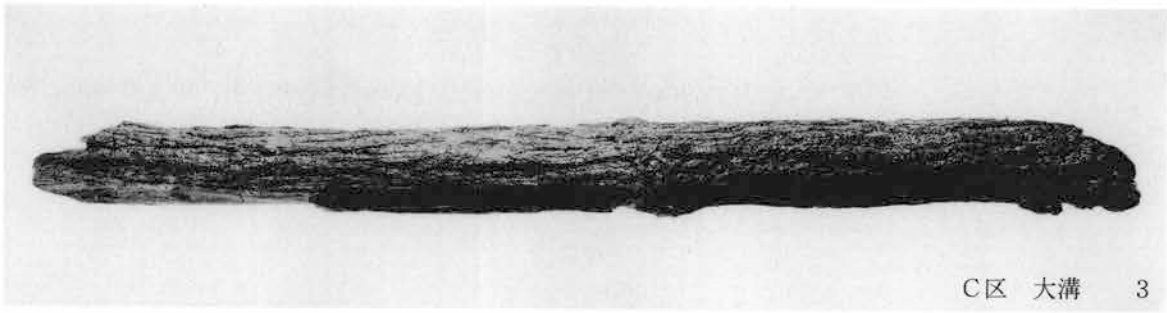
C区　大溝　6

C区　大溝　2

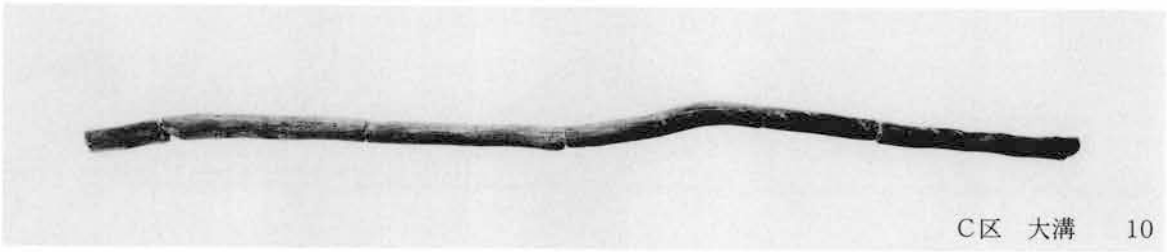

2

C区　大溝　4

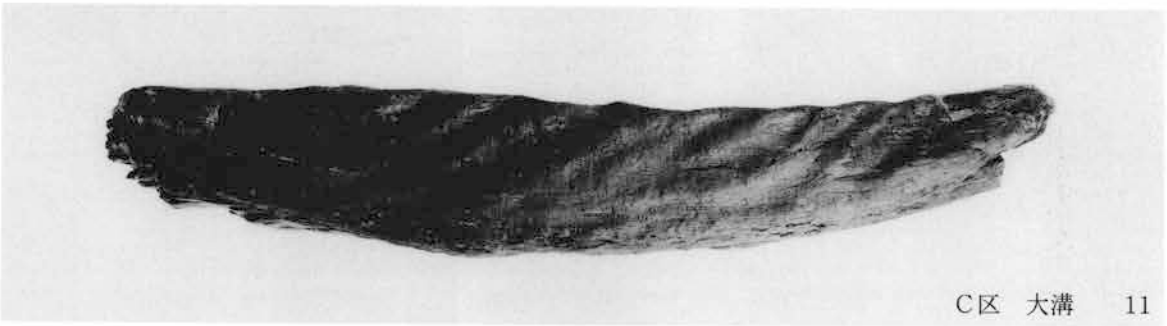
4



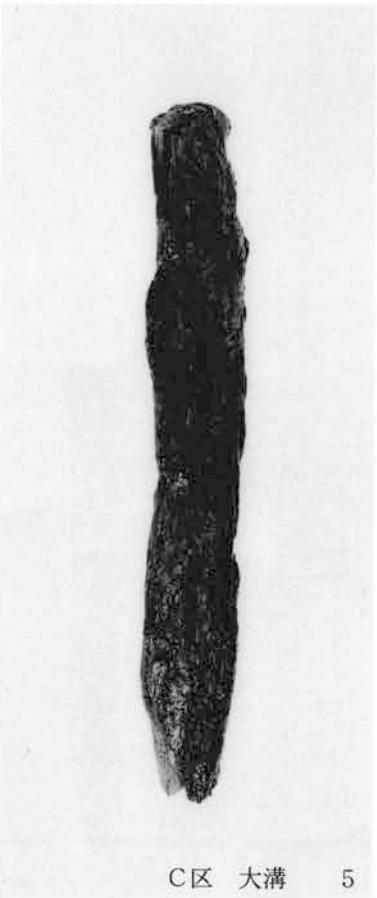
C区 大溝 3



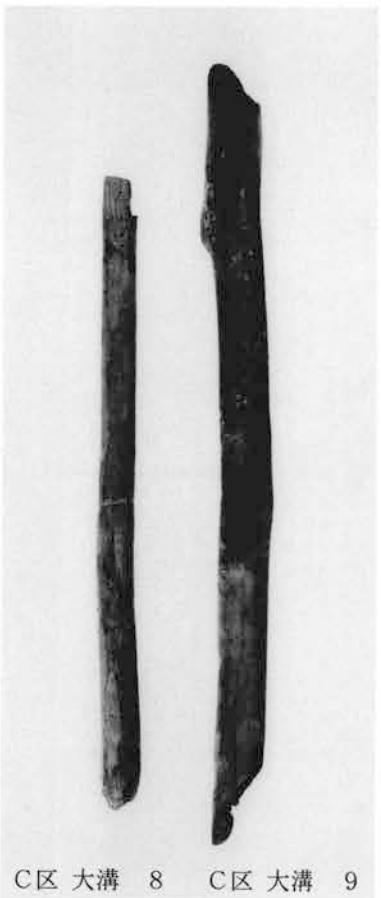
C区 大溝 10



C区 大溝 11



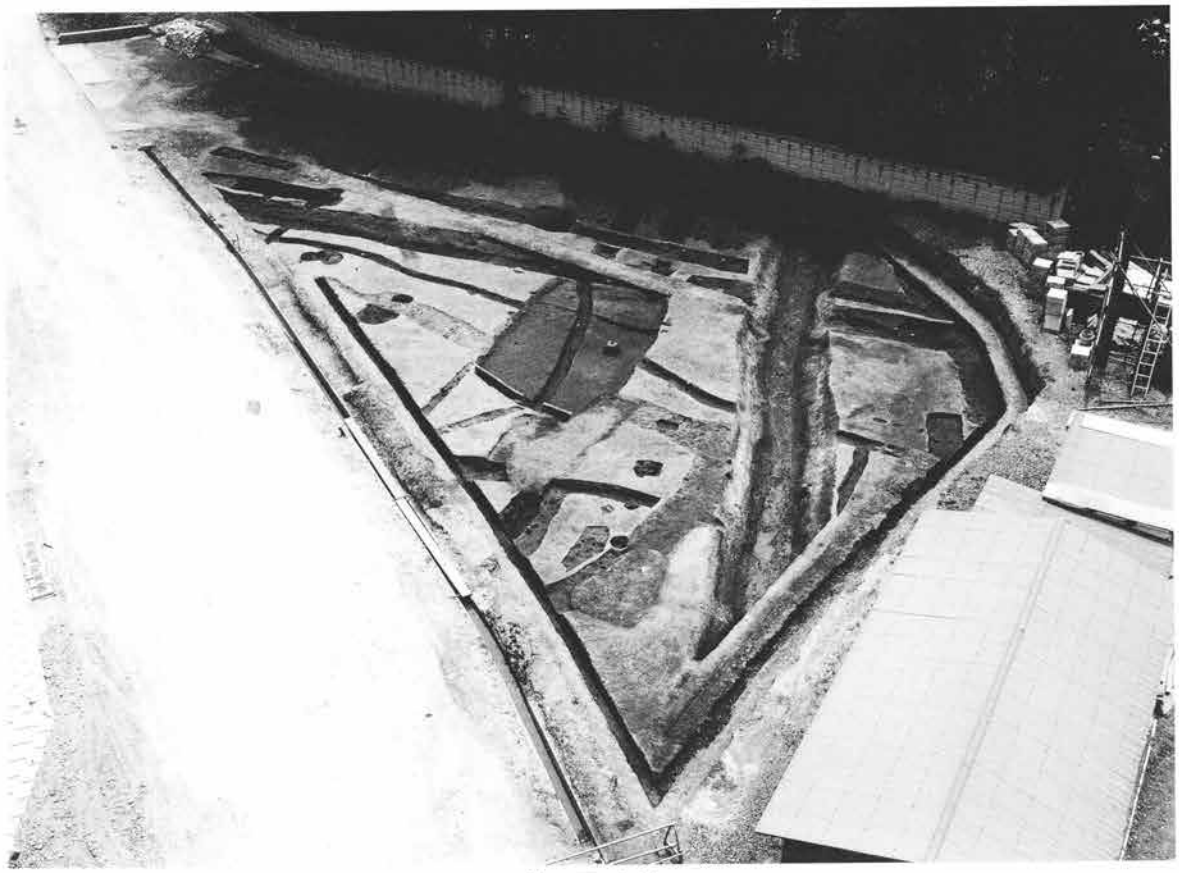
C区 大溝 5



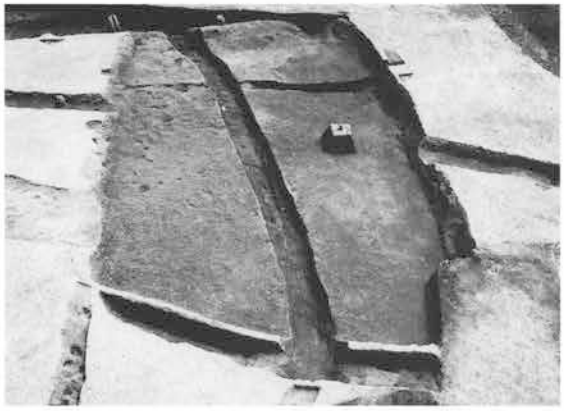
C区 大溝 8 C区 大溝 9

B区 52号溝 7

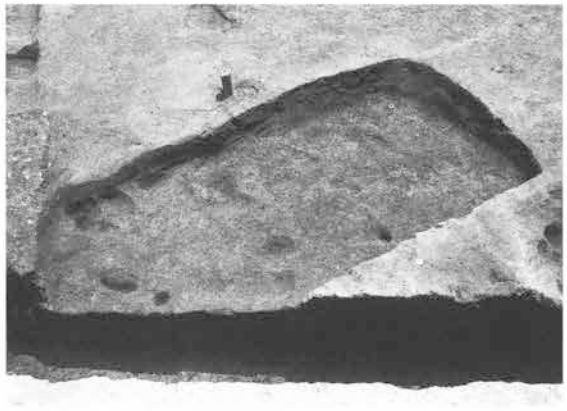
第1面 全景



第1面 全景



第1面 1号竪穴



第1面 1号土坑

第1面 2号土坑

第1面 3・4号土坑

第1面 5号土坑

第1面 6号土坑

第1面 7号土坑

第1面 8号土坑

第1面　1号井戸

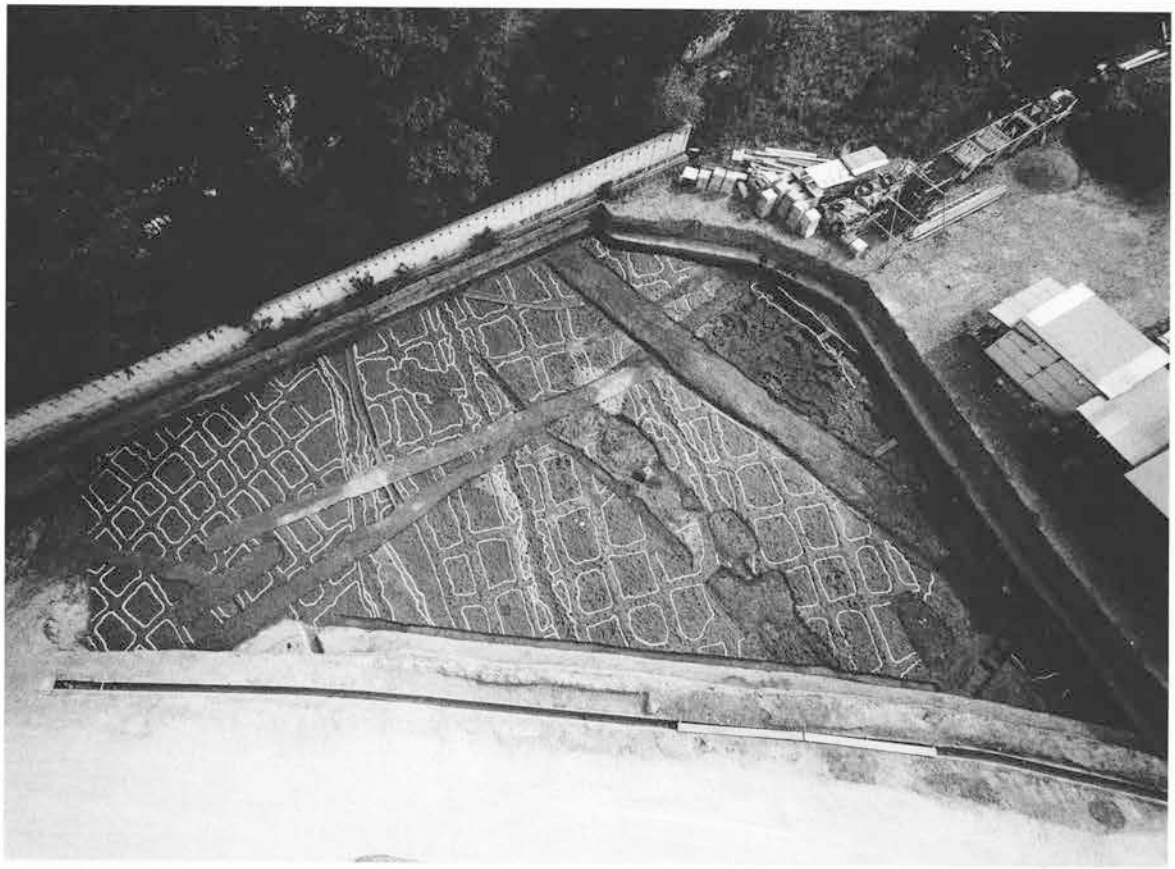
第1面　2号井戸

第1面　1号溝

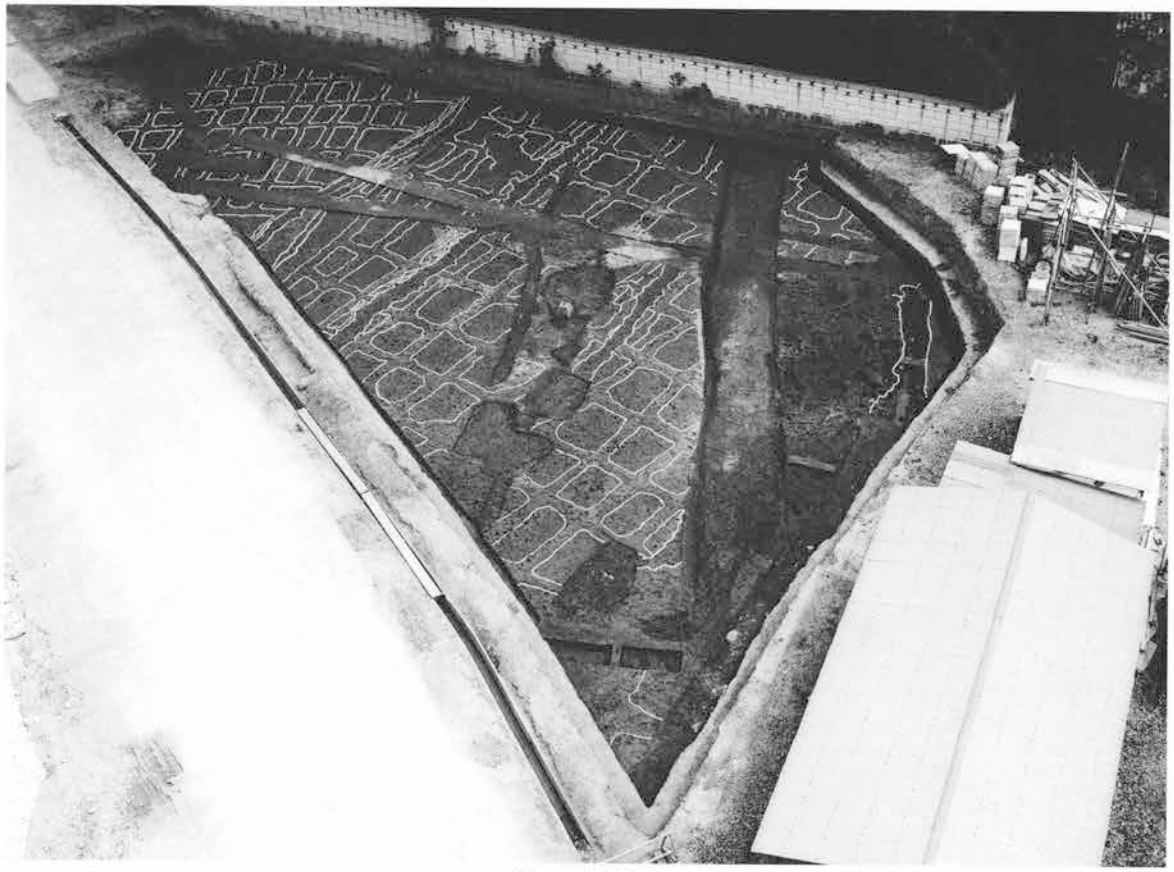
第1面　2号溝

第1面　3号溝

第1面　17号溝



第3面 全景



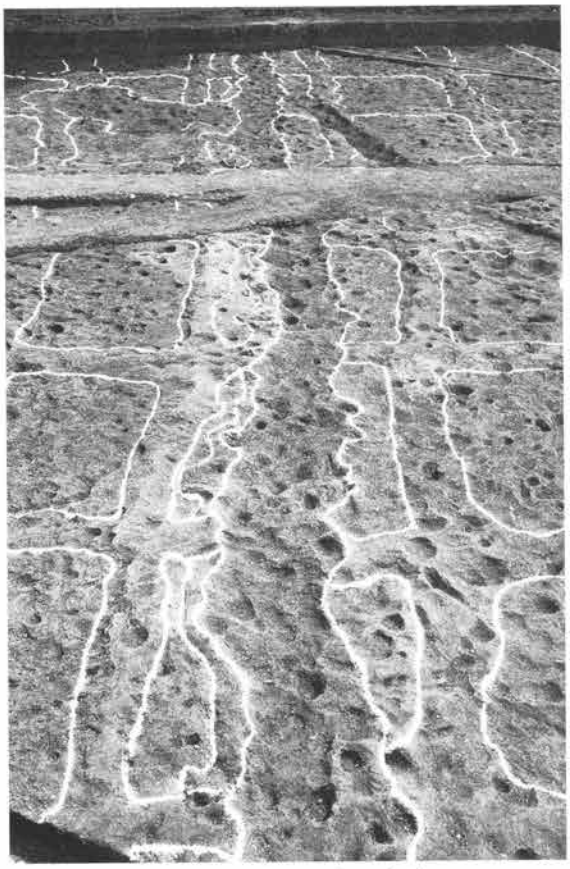
第3面 全景

第３面　１大区画の極小区画水田

第３面　２大区画の極小区画水田

第３面　23号溝と極小区画水田

第３面　１・２大区画境の大畦と水路



第３面　２大区画内の水路

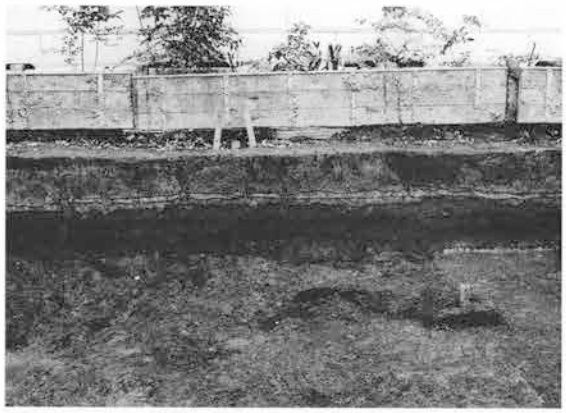
第３面　21号溝と大畦

第4面 全景

第4面 全景

第5面 全景

第5面 31・32号溝



第5面 南壁土層断面

A区　1号溝　1

A区　2号溝　3

A区　2号溝　10

A区　2号溝　7

A区　2号溝　5

A区　6号溝　11

A区　6号溝　12

A区　14号溝　13

A区　18号溝　14

A区　18号溝　15

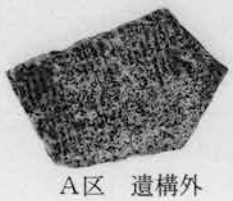
A区　18号溝　17

A区　25号溝　19

A区　25号溝　20

A区　遺構外　23

A区　25号溝　21


A区　遺構外　22

A区　遺構外　24

A区　9号溝　25

財群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第289集

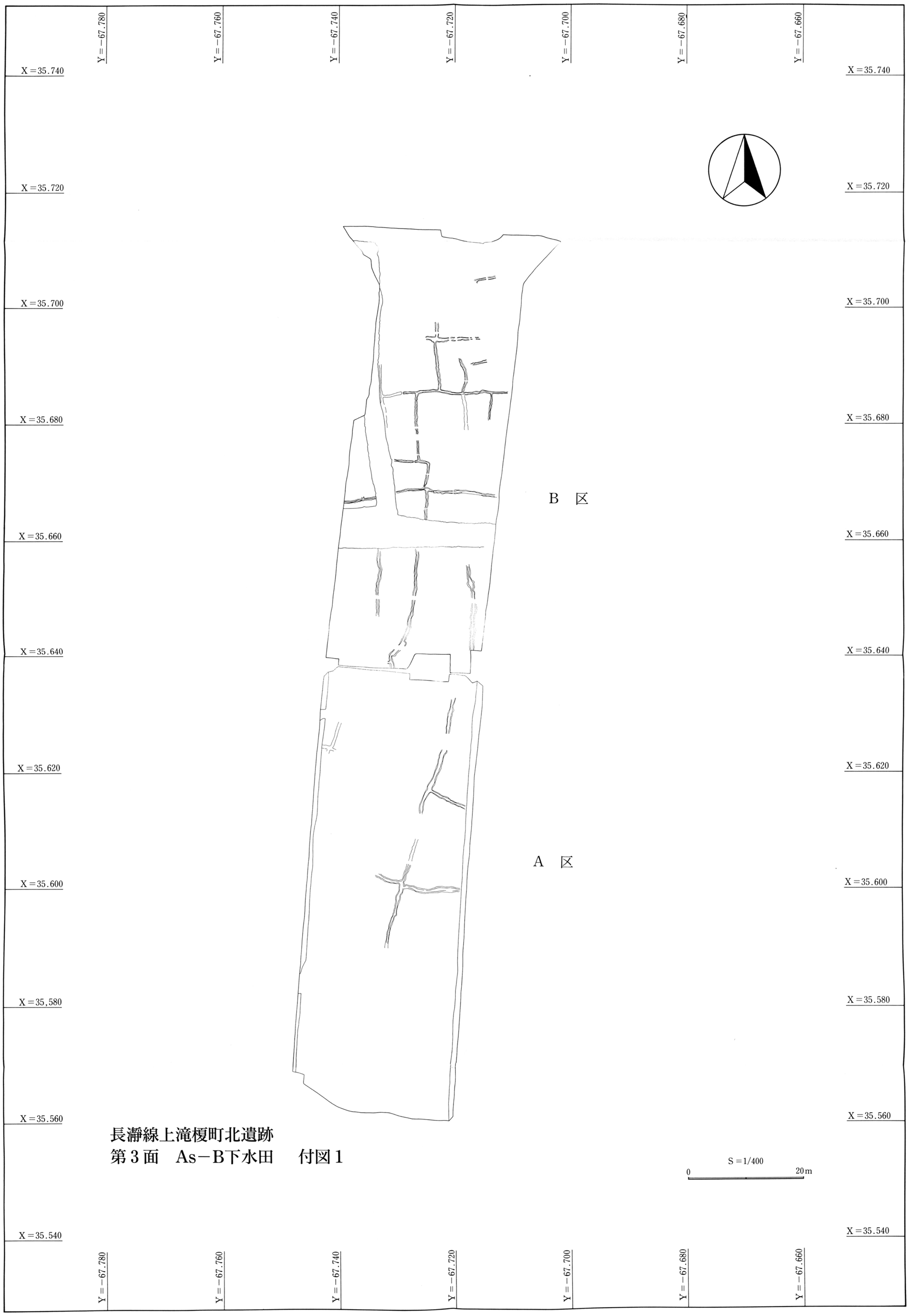
上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡

平成14年（2002年）３月20日　印刷
平成14年（2002年）３月26日　発行

編集／財群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電　話　（０２７９）５２－２５１１（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／上毎印刷工業株式会社



長瀞線上滝榎町北遺跡
第3面　As−B下水田　付図1

Y＝−67.800　Y＝−67.780　Y＝−67.760　Y＝−67.740　Y＝−67.720　Y＝−67.700　Y＝−67.680

X＝35.900

X＝35.880

X＝35.860

X＝35.840

X＝35.820

X＝35.800

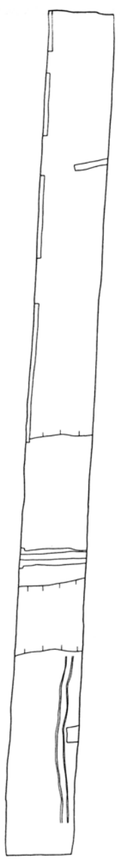
X＝35.780

X＝35.760

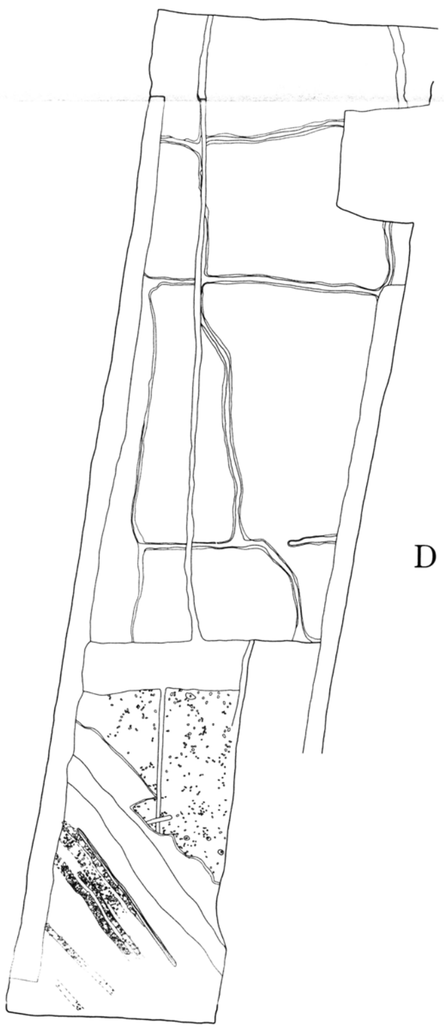
X＝35.740

X＝35.720

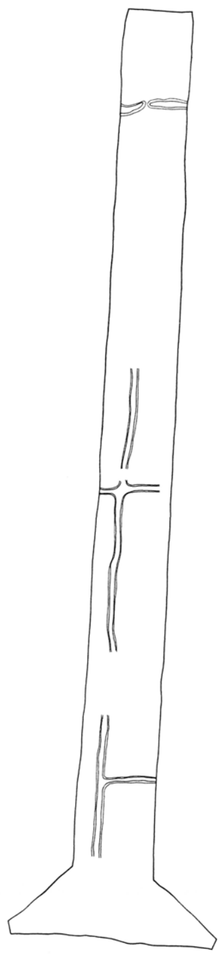
X＝35.700



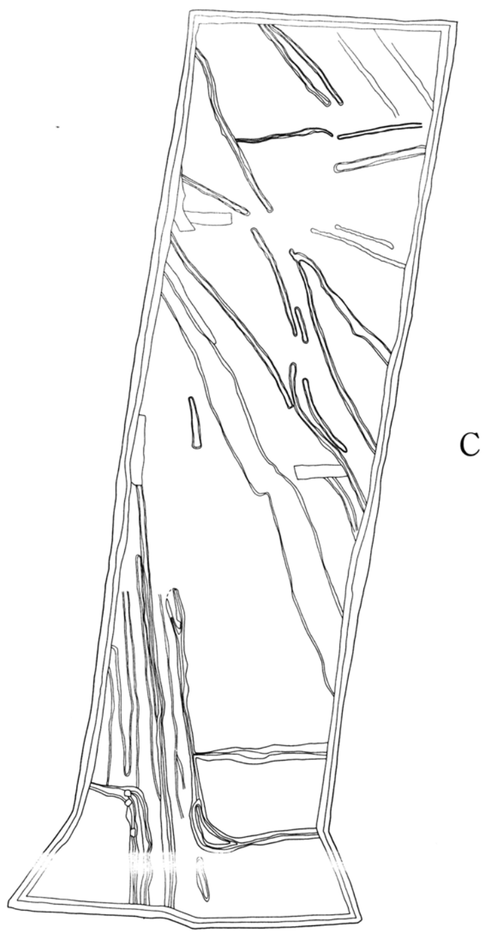
取り付け道
D　区



D　区



取り付け道
C　区



C　区

長瀞線上滝榎町北遺跡
第３面　As－B下水田　　付図２

S＝1/400
0　20m

Y＝−67.800　Y＝−67.780　Y＝−67.760　Y＝−67.740　Y＝−67.720　Y＝−67.700　Y＝−67.680

Y=−67.780　Y=−67.760　Y=−67.740　Y=−67.720　Y=−67.700　Y=−67.680　Y=−67.660

X=36.060

X=36.040

X=36.020

X=36.000

X=35.980

X=35.960

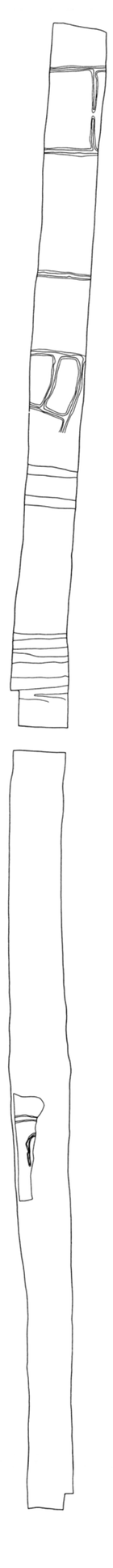
X=35.940

X=35.920

X=35.900

X=35.880

X=35.860



取り付け道
F　区

取り付け道
E　区

F　区

E　区

長瀞線上滝榎町北遺跡
第3面　As－B下水田　　付図3

S=1/400
0　20m

Y＝−67.780　Y＝−67.760　Y＝−67.740　Y＝−67.720　Y＝−67.700　Y＝−67.680　Y＝−67.660

X＝35.740

X＝35.720

X＝35.700

X＝35.680

X＝35.660

X＝35.640

X＝35.620

X＝35.600

X＝35.580

X＝35.560

X＝35.540

B 区

A 区

長瀞線上滝榎町北遺跡
第6面　Hr−FA下水田　付図4

S＝1/400
0　20m

Y＝−67.800　Y＝−67.780　Y＝−67.760　Y＝−67.740　Y＝−67.720　Y＝−67.700　Y＝−67.680

X＝35.900

X＝35.880

X＝35.860

X＝35.840

X＝35.820

X＝35.800

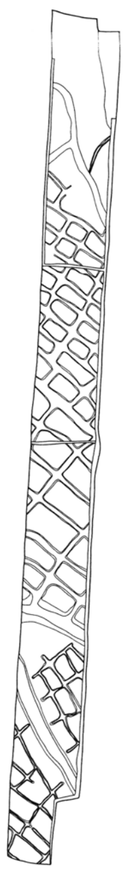
X＝35.780

X＝35.760

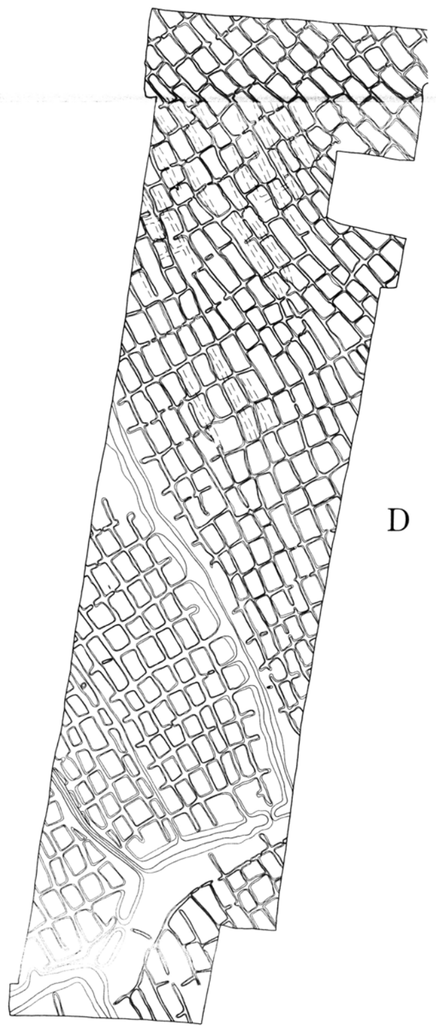
X＝35.740

X＝35.720

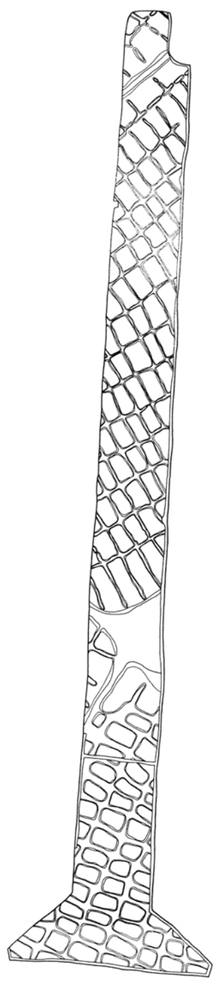
X＝35.700



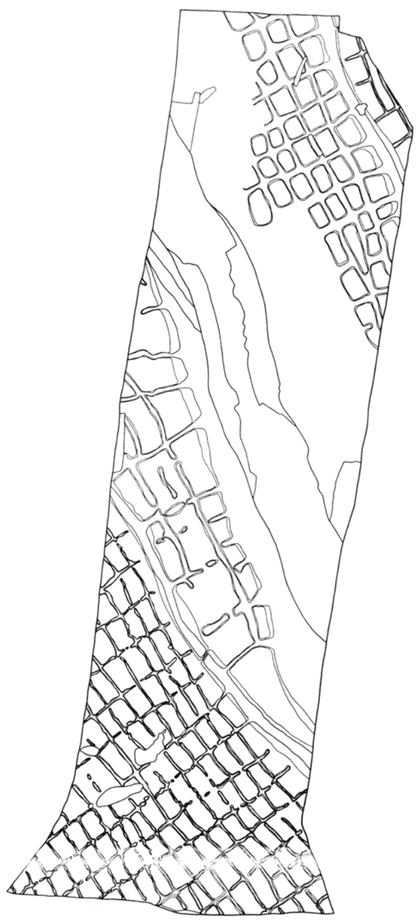
取り付け道
D　区



D　区



取り付け道
C　区



C　区

長瀞線上滝榎町北遺跡
第6面　Hr－FA下水田　付図5

S＝1/400
0　20m

Y＝−67.800　Y＝−67.780　Y＝−67.760　Y＝−67.740　Y＝−67.720　Y＝−67.700　Y＝−67.680

Y=−67.780　Y=−67.760　Y=−67.740　Y=−67.720　Y=−67.700　Y=−67.680　Y=−67.660

X=36.060

X=36.040

X=36.020

X=36.000

X=35.980

X=35.960

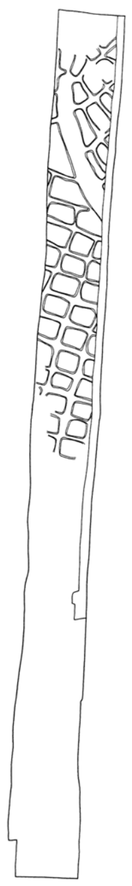
X=35.940

X=35.920

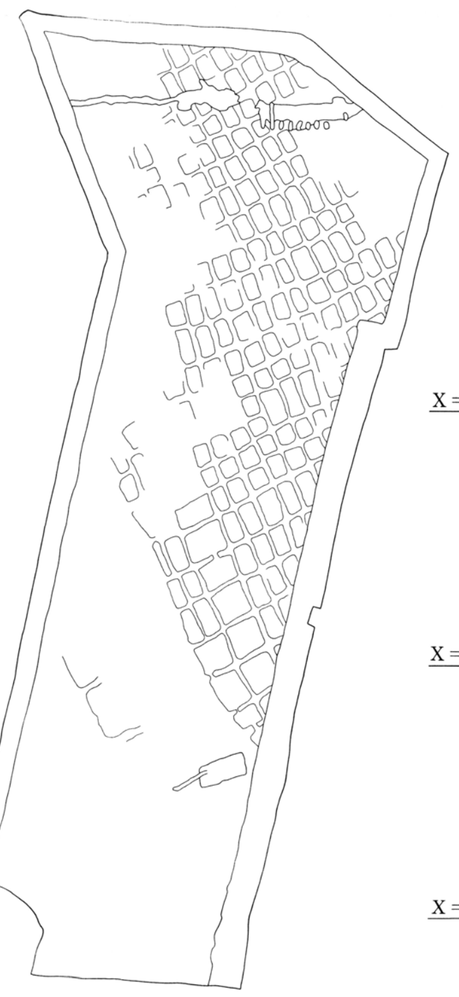
X=35.900

X=35.880

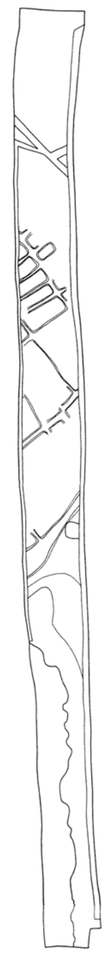
X=35.860



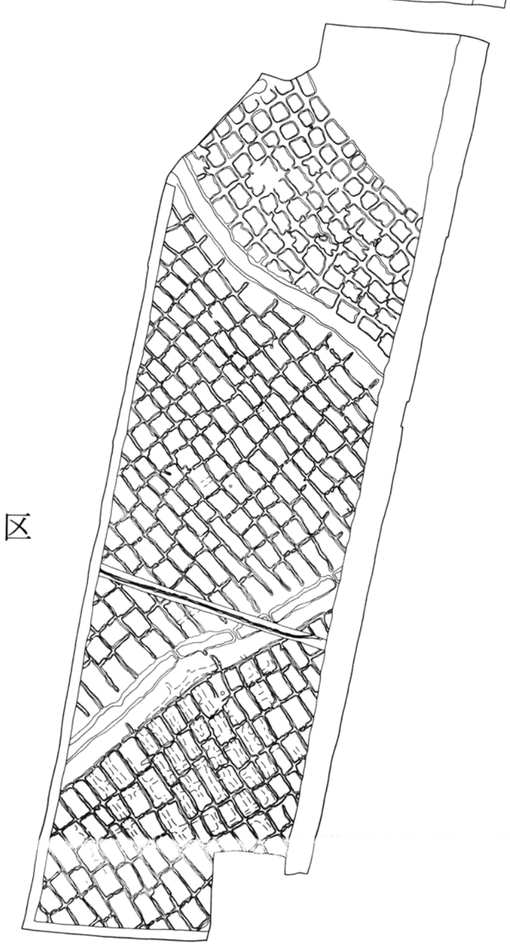
取り付け道
F　区



F　区



取り付け道
E　区



E　区

長瀞線上滝榎町北遺跡
第6面　Hr−FA下水田　付図6

S=1/400
0　20m